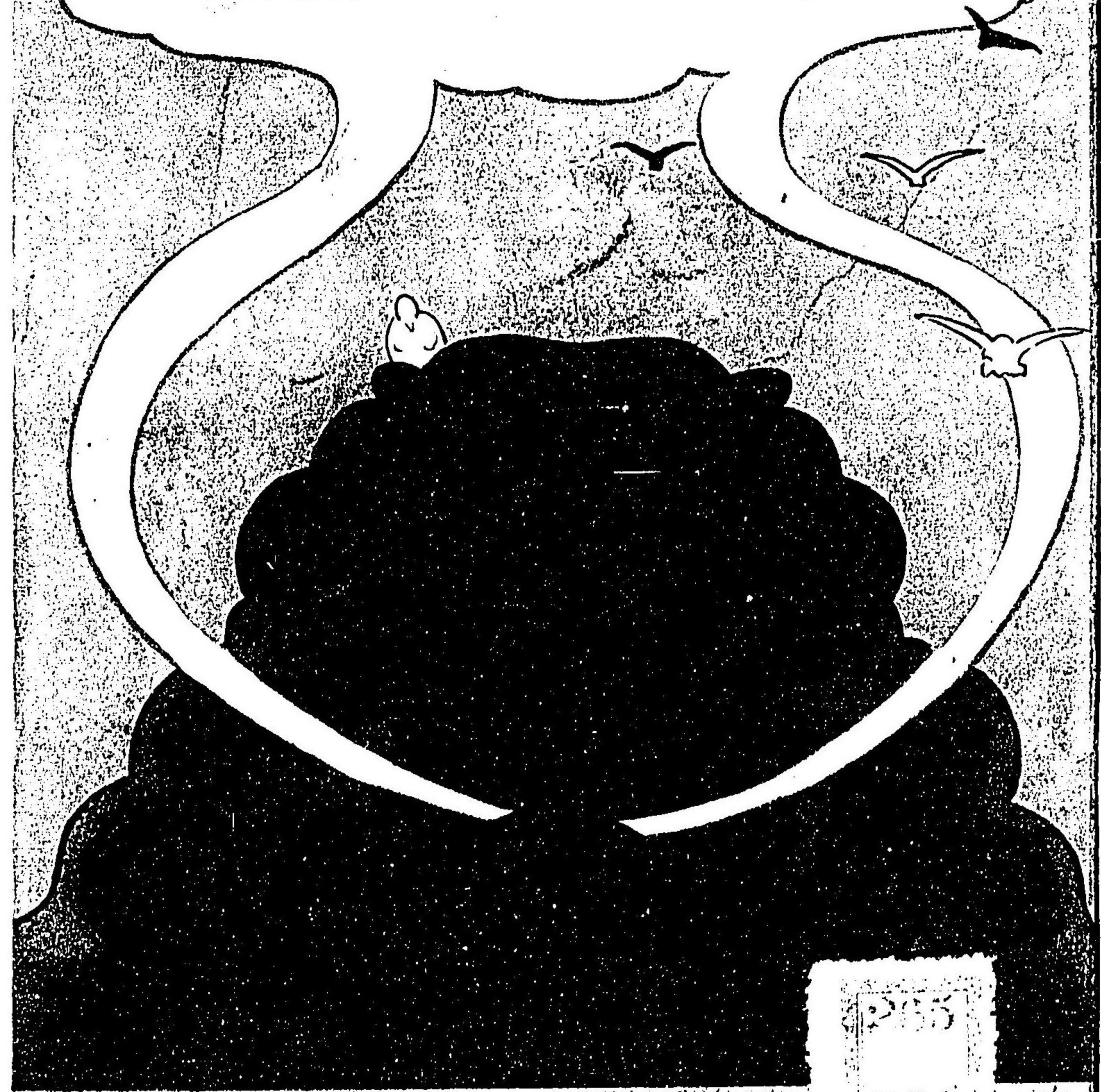
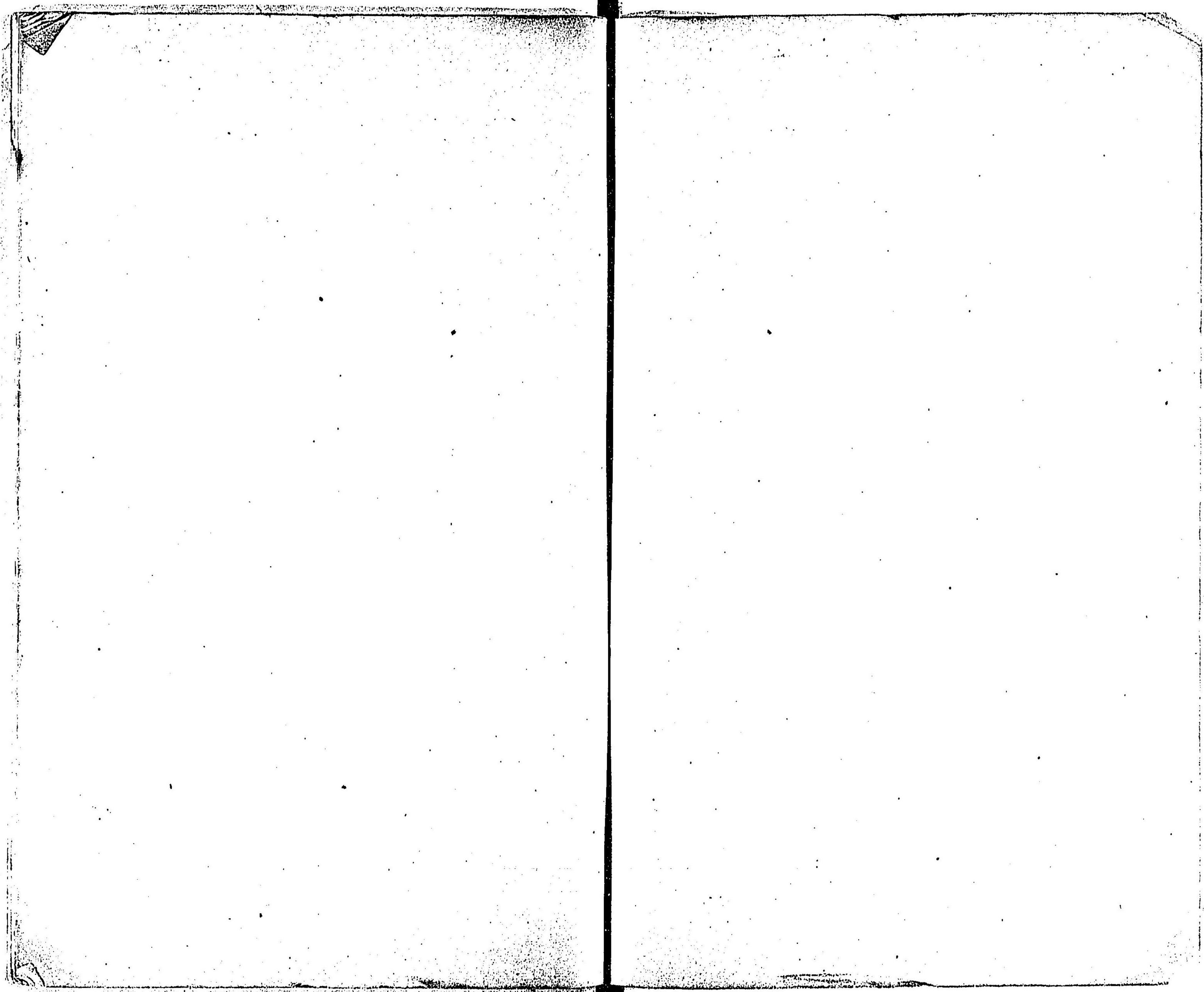


抱腹百話



廣東省出版集團公司





はしがき

道化たるものは放屁の如し。欠伸千里の長きも、
 良の大佛の世界無比なるに鹿ざらんや。されば欠伸は
 飽日なり。放屁はお奈良なり。彼地に春日の社あり。春日
 はハルとと讀まハルとは腹の張る事なり。腹張れば屁
 を發す。屁を發すれば人笑ふ。人笑へば腮をはずす。腮を
 はづせばお臍を稍變す。されど本書は之を以て満足せ
 ず。更に一步を進めて、まさに尻より欠伸を發し、口より

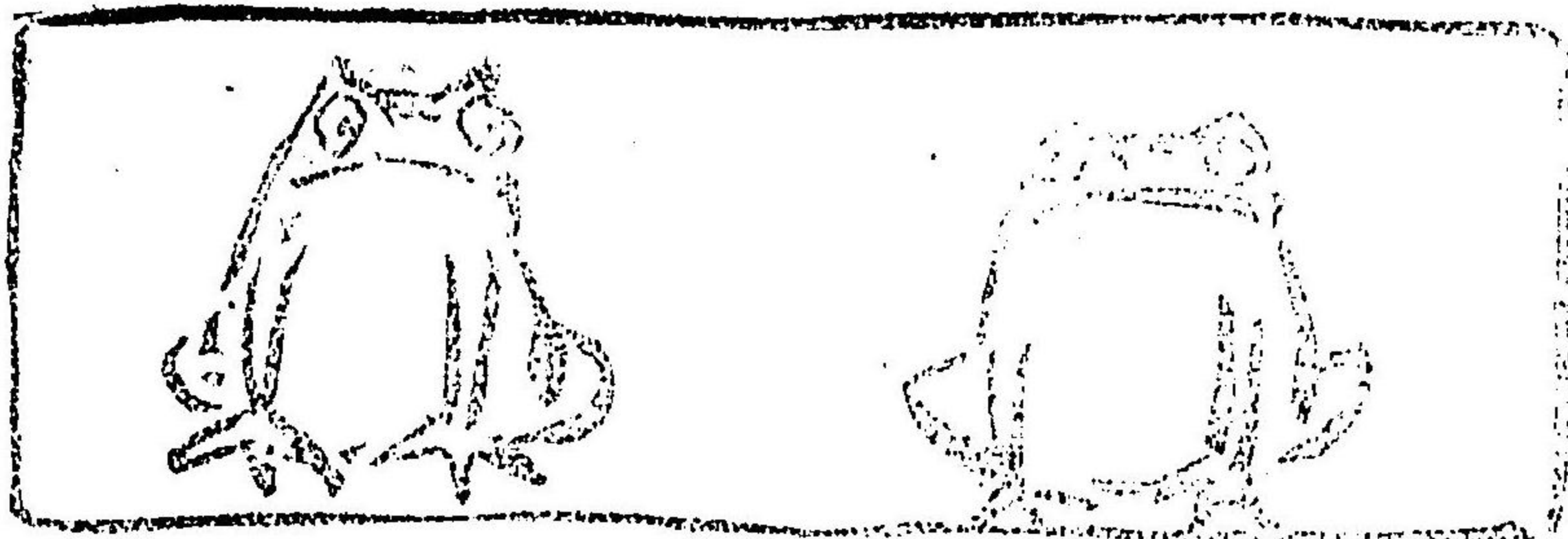
明治
 43. 9. 26
 於



抱腹百話

放屁を發するの妙境に到らんと欲す、乞ふ眼玉をハツ
 ナリと開いて見よ、鬼が出るか佛が出るか。
 迷痴嘘八百念某月某日

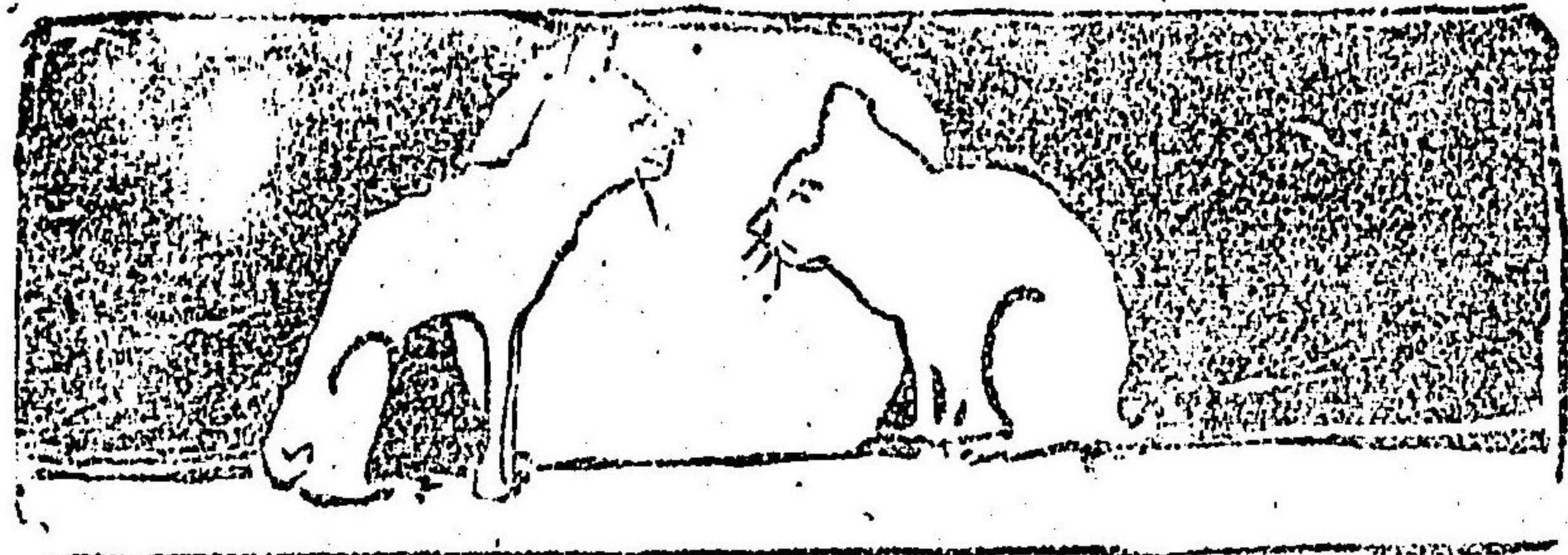
著者識



抱腹百話

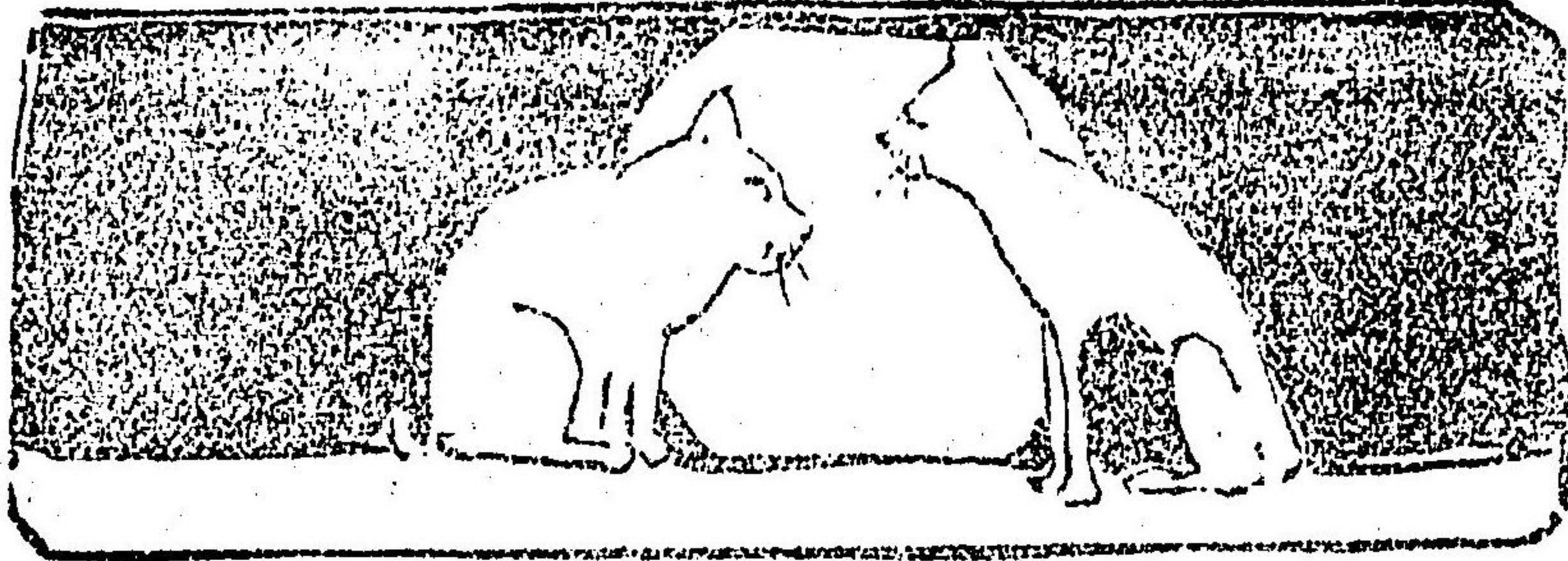
抱腹百話目録

○ 狐の目撃	一
○ 時式の脱却	二
○ 磁板を脱却	三
○ 羅子の目撃	四
○ 大根料理	五
○ 女の習性	六
○ 鶴子が好む	七
○ 金上の腹みどり	八
○ あんまりこころもろ	九
○ 化け屋敷	一〇
○ 子笑屋敷	一一
○ 定規の目撃	一二
○ 小娘の目撃	一三
○ 岩屋目撃	一四
○ 虫齋料理	一五
○ 飛んだ目撃	一六
○ 風	一七
○ 雨	一八



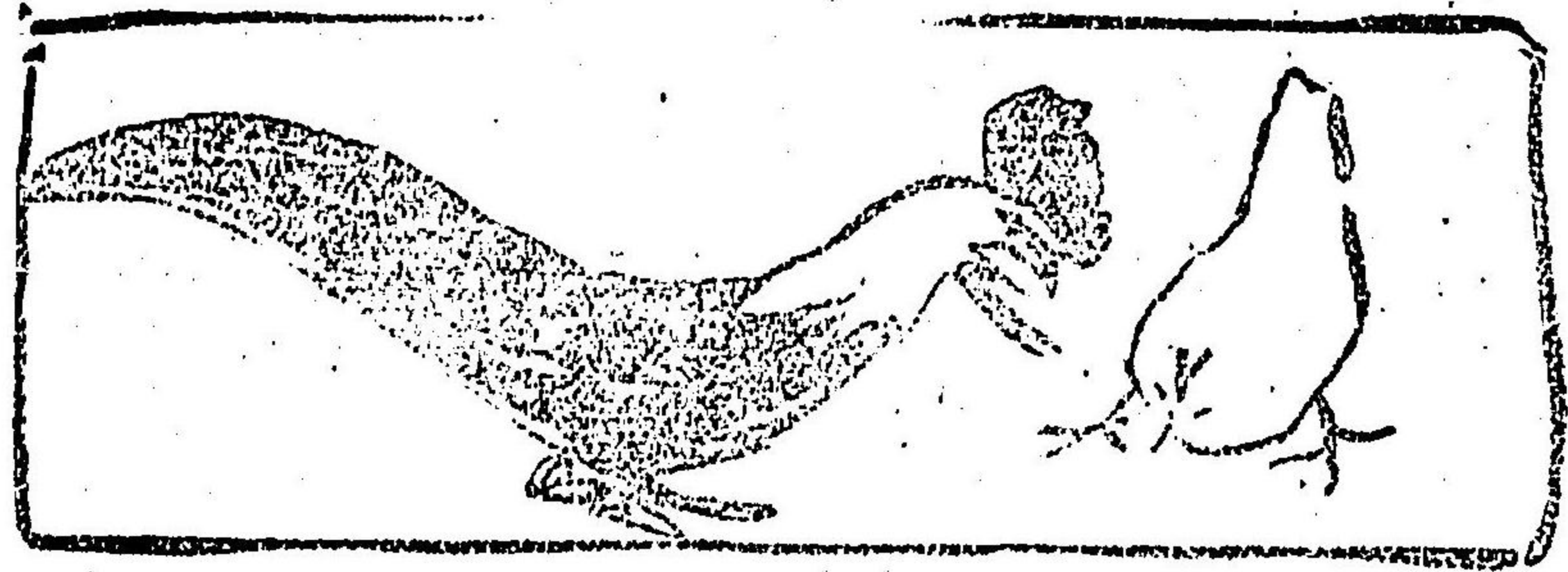
抱 腹 百 話

- 女小計策……………四八
- 論語讀みの論語知らず……………五〇
- 汗と誤……………五一
- 昏馬の乗倒し……………五二
- 狸の愛玩家……………五三
- ただは起きぬ……………五三
- 茶屋の病氣……………五三
- 銅貨三貫四……………五四
- 誤って小便を吞む……………五五
- 鳥鷲の滑稽……………五六
- 無頼者將軍……………五七
- 御名前御前買……………五八
- 白徳男の大失敗……………五九
- 徳山の夜逃……………六一
- 養生商賣……………六一
- 拙者と賄僧……………六一
- 大目小を解れる……………六二
- 送信博士……………六二
- 落し話……………六四
- 飯を美味しく食ふ法……………六五
- 爪の火……………六五



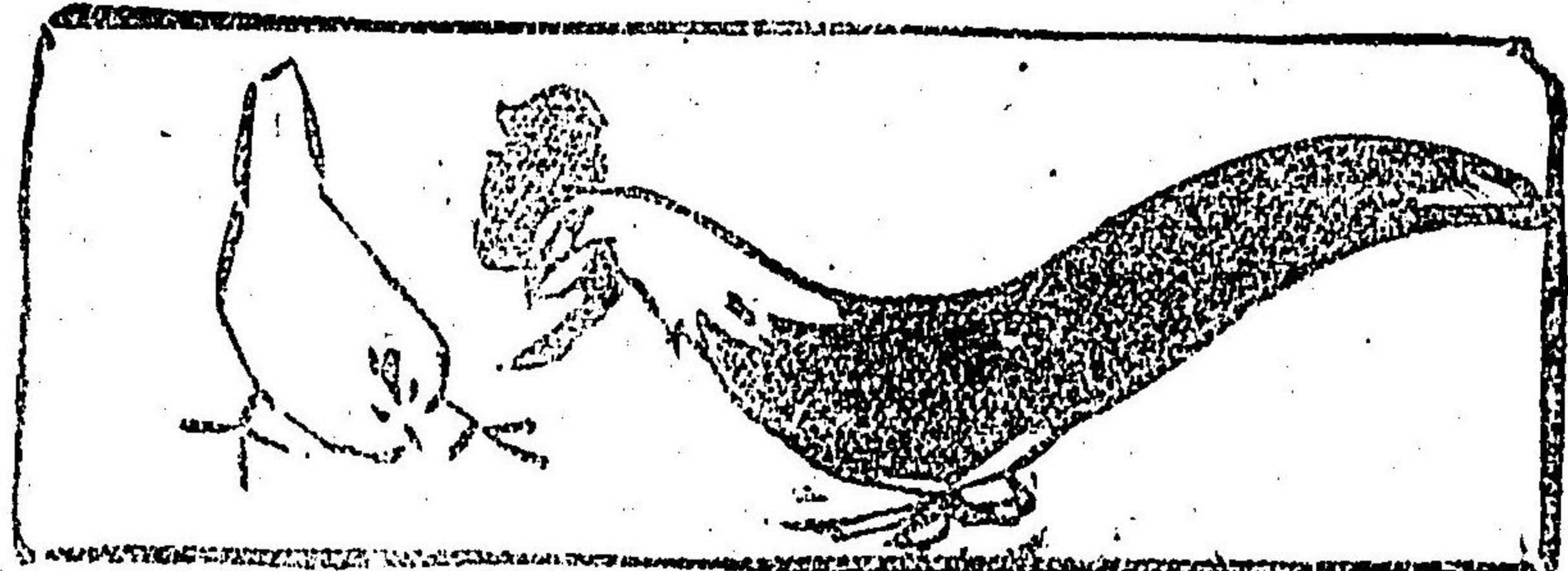
抱 腹 百 話

- 味取と南無阿彌陀……………二四
- 觀音家……………二五
- 大佛と妻の縁九……………二六
- 白目と鳥獸……………二八
- 二人の塚……………二八
- 水店……………三〇
- 桑葉丸……………三〇
- 友國屋……………三二
- 妻の敬智……………三三
- 亭主の宿六……………三四
- 高野山……………三五
- 小僧の遺跡……………三六
- 香瓦と死國の間意……………三七
- 手の麻き通る人……………三八
- 相撲狂……………三九
- 子僧の風呂加減……………四〇
- 婆君の氣盛……………四二
- 旅箱の角……………四三
- 三股飯……………四五
- 澤山の小俠……………四六
- 紅葉の規則……………四七



抱 腹 百 話

- 大山大將に意見.....八四
- 夢判官.....八四
- 高利貸の本尊.....八六
- 悪妓の歌.....八六
- 火災保険.....八九
- 盗賊.....九〇
- 食ひ倒し者.....九一
- 酒の神.....九二
- 人殺し.....九三
- 二世三世.....九三
- 親切な女官.....九四
- 新編 時鐘.....九五
- 行状記.....九五
- 歌.....九六
- 口舌闘争.....九七
- 赤ん坊.....九八
- 目録の失敗.....九八
- のり屋の奇夜.....九九
- 水泳の発生.....〇〇
- 盛に耳.....〇〇
- 仇名.....〇一



抱 腹 百 話

- 放蕩息子.....六六
- 悪僧男.....六六
- 半仙男.....六七
- お六とお七とお八.....六八
- 風流治.....六八
- 忘れ男.....六九
- 小僧男.....七〇
- 雨の水見舞.....七一
- 探し姑.....七二
- 木蘭.....七二
- 妻たれ.....七四
- 郵券粘し.....七五
- 日本芳線.....七五
- 陰謀家の夫婦.....七六
- 三年汗.....七七
- 恥刑.....七八
- 鬼の不景氣.....七九
- 槍刺.....八〇
- 山家の火葬.....八一
- 音さん御存じ.....八二
- 何ても海山.....八三



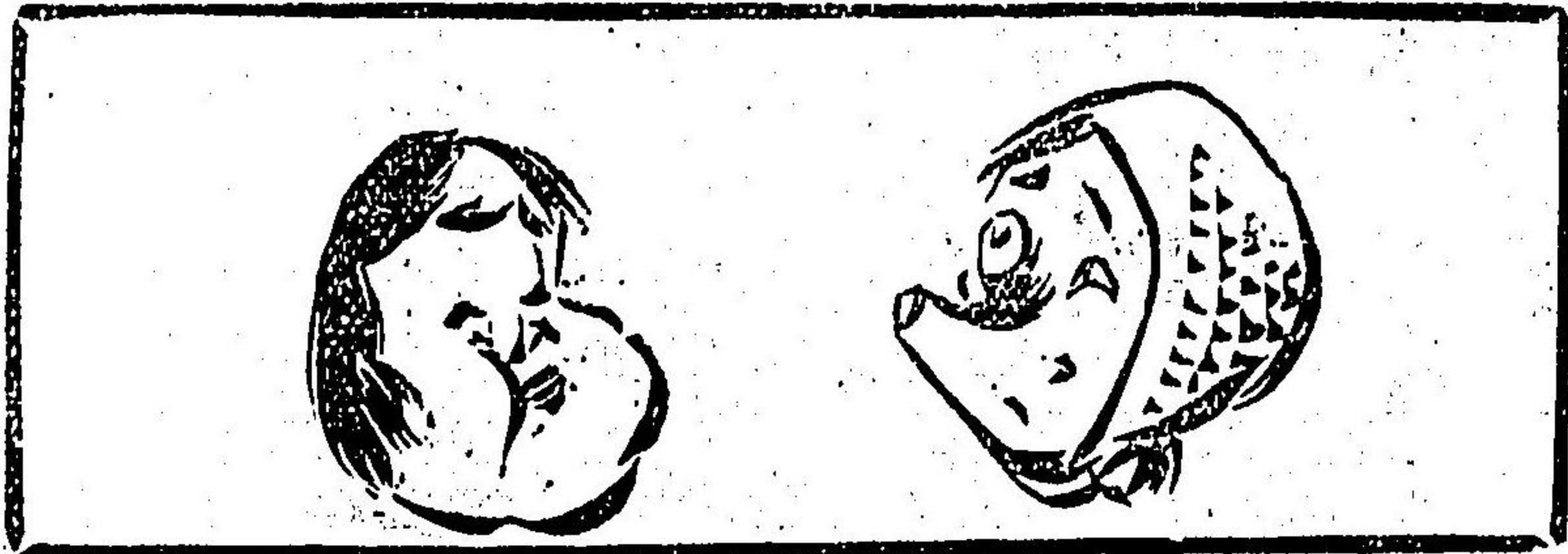
抱腹百話

- 改行……………二〇二
- あはて夫婦……………〇三
- 御上とお神……………〇四
- 馬の糞……………〇五
- ホークアイ……………〇六
- 電燈……………〇七
- 銃殺家の猫尻……………〇八
- 茶の加減……………〇九
- 骨董品の詐欺……………一〇
- 臆病博士……………一一
- 大砲の爆煙……………一二
- 組屋……………一三
- 母ヶ谷風車か乗溜……………一四
- 團扇狂……………一四
- 百圓紙幣……………一六
- 馬力……………一七
- 無業者の滑稽……………一八
- 賢者……………一九
- 桂侯の和歌……………二〇
- 大倉氏の茶……………二二
- 大阪の観世物……………二三

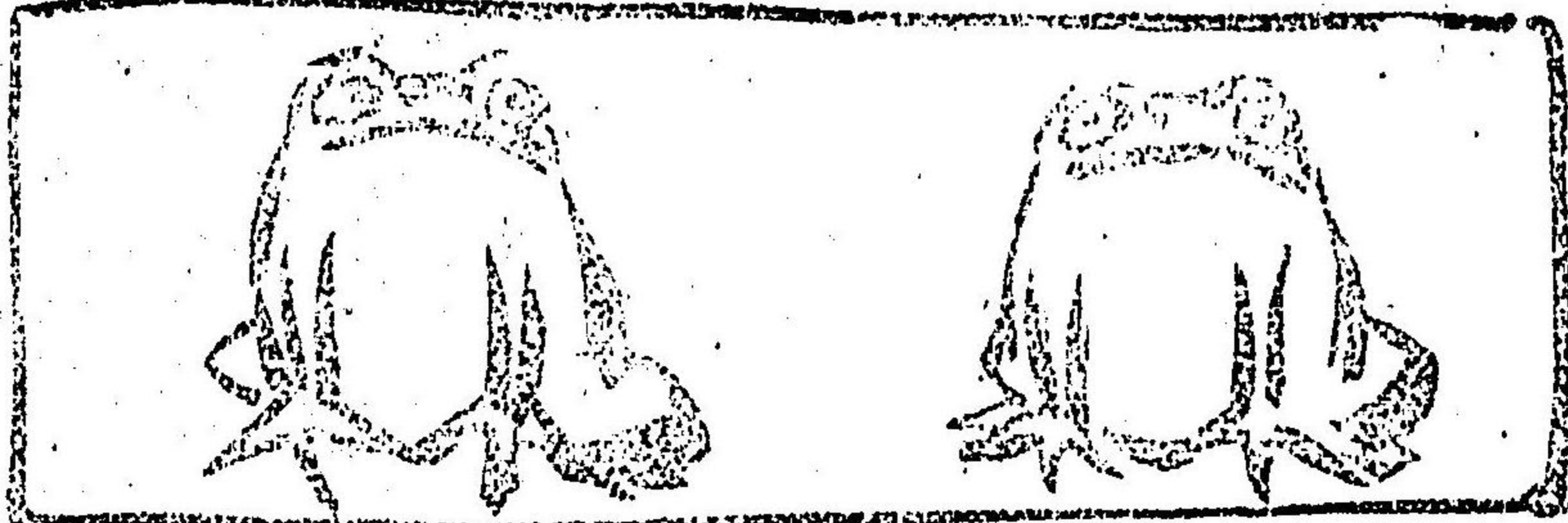


抱腹百話

- 零人謡曲家の失策……………二四
- 山の神……………二六
- 發明家小世に教へらる……………二六
- 投身の見合せ……………二七
- 飛行機の發明……………二八
- 鴉片……………二九
- 理髮鏡……………三〇
- 投身に非ず……………三一
- 貧困……………三一
- 加藤氏の洋行奇談……………三二
- 禁酒……………三三
- 舞の歌……………三九
- 九ヶ一日晴……………四一
- 英和一日晴……………四二
- 手紙の集……………四四
- 千手觀音風問答……………四六
- ABC部々……………四九
- 勝手な願ひ……………五一
- 今様官軍氣負……………五三
- 女の任前……………五六
- 神佛讀込狂言……………五七



抱腹百話



抱腹百話

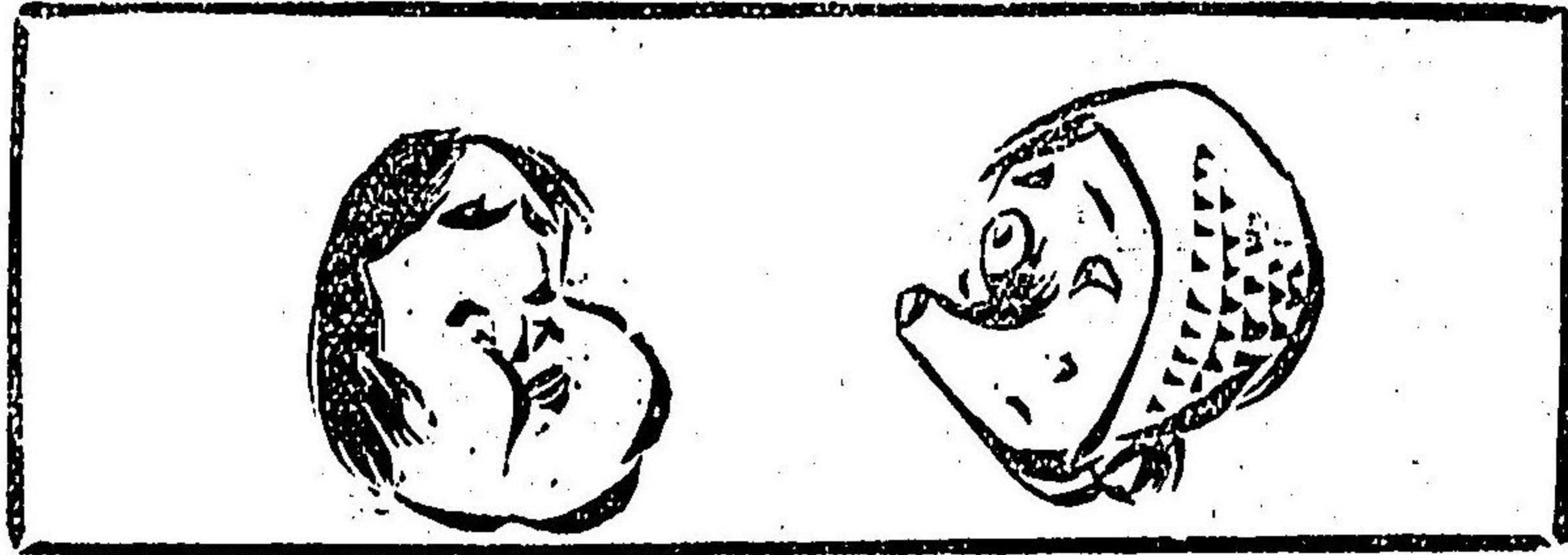
抱腹百話

阿房陀羅經百人こなし

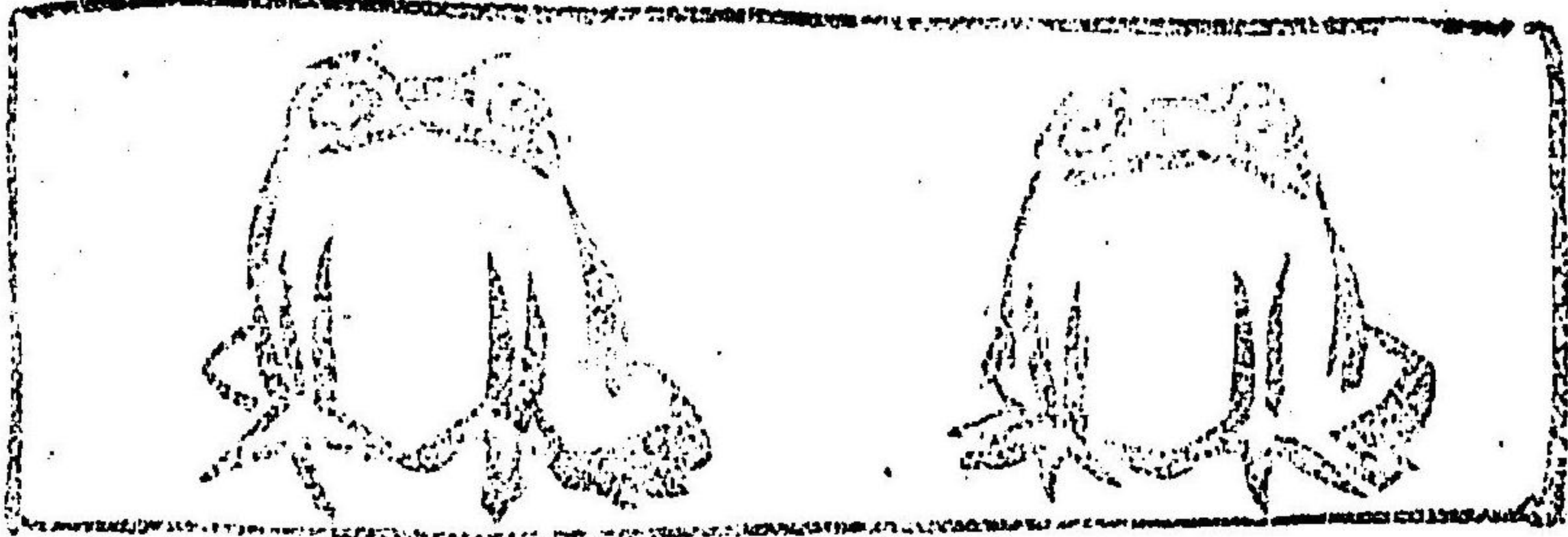
佛説阿房陀羅經、奈滿久良坊主が申上ます御經の文句は、百人こなしの其中で、旦那様段から落轉て、奥様奥の間で尻發いて、次は息子の馬鹿者、娘のお多福、隠居の禿頭、婆々の飯く茶、番頭の不忠、手代の呉魔化し、下女の泣面、小僧の梳白、妾の無心に、本妻嫉妬で困るじや（ボク々々々々）次は坊子の生臭、醫者の人殺し、藝妓の淋病、娼妓の梅毒、淫賣の横皮、巡査のコリヤ、兵士の臆病、官吏の賄賂取り、學者の實地知らず、小説家の風俗亂し、商人の薄情、女郎の嘔吐き、俳優の大根、藝人乞食、新聞記者の惡徳、議員の變節、會社員の不正、銀行員の費ひ込み、社長の我儘、小使の茫然、書記の書き違ひ、役員の勝手最負、職工の其日稼ぎ、紡績女工の安日給、百姓の蛙切り、船頭の小便川流し、上戸の酔ッ拂ひ、下戸の牡丹餅、山師の法

抱腹百話目録

○ 阿房陀羅經	一五九
○ 阿房陀羅經	一六三
○ 阿房陀羅經	一六七
○ 阿房陀羅經	一七一
○ 阿房陀羅經	一七五
○ 阿房陀羅經	一七八
○ 阿房陀羅經	一八一
○ 阿房陀羅經	一八四
○ 阿房陀羅經	一八七
○ 阿房陀羅經	一九二
○ 阿房陀羅經	一九五
○ 阿房陀羅經	二〇二
○ 阿房陀羅經	二〇三



抱腹百話



抱腹百話

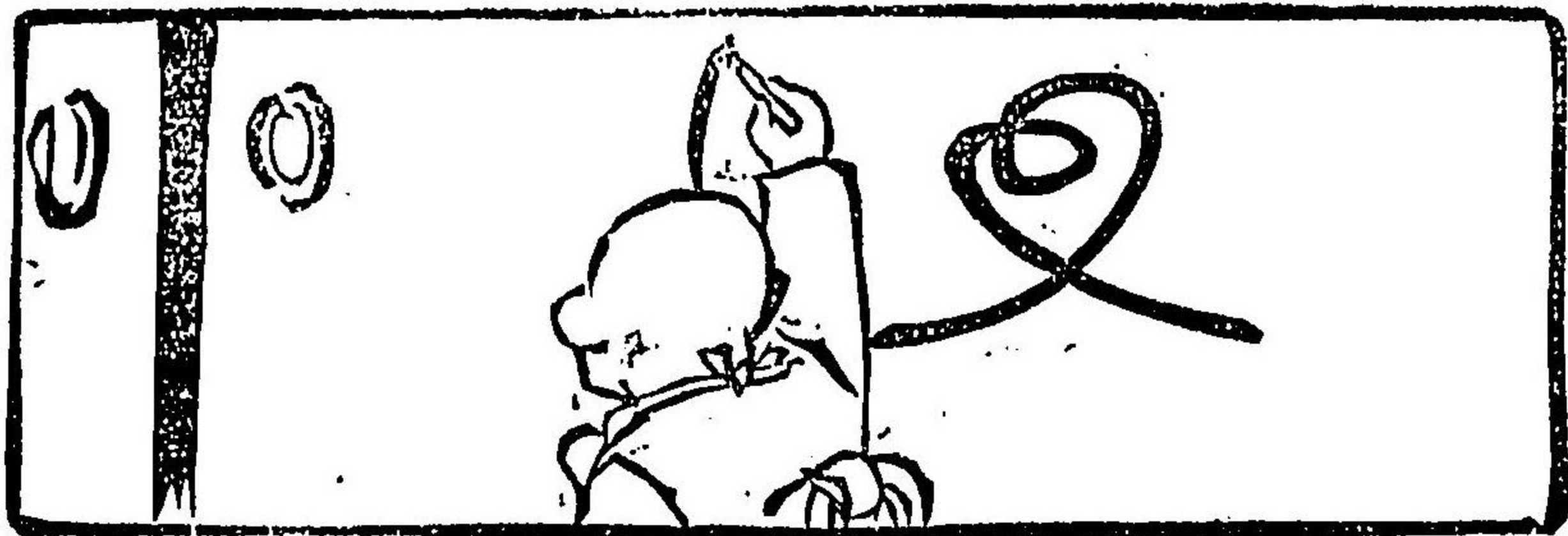
抱腹百話

阿房陀羅經百人こなし

佛説阿房陀羅經、奈滿大尼坊主が申上ます御經の文句は、百人こなしの其中で、旦那様段から落轉て、奥様奥の間で屁發いて、次は息子の馬鹿者、娘のお多福、隠居の禿頭、婆々の鋭く茶番頭の不忠、手代の吳魔化し、下女の泣面、小僧の桃白、妾の無心に、本妻嫉妬て困るげや（ホク々々々々）次は坊子の生臭、醫者の人殺し、藝妓の淋病、娼妓の梅毒、淫賣の横皮、巡査のコリヤ、兵士の臆病、官吏の賄賂取り、學者の實地知らず、小説家の風俗亂し、商人の薄情、女郎の嘔吐き、俳優の大根、藝人乞食、新聞記者の惡徳、議員の變節、會社員の不正、銀行員の費ひ込み、社長の我儘、小使の茫然、番記の書き違ひ、役員の勝手最負、職工の其日稼ぎ、紡績女工の安日給、百姓の蛙切り、船頭の小便川流し、上戸の酔ッ拂ひ、下戸の牡丹餅、山師の法

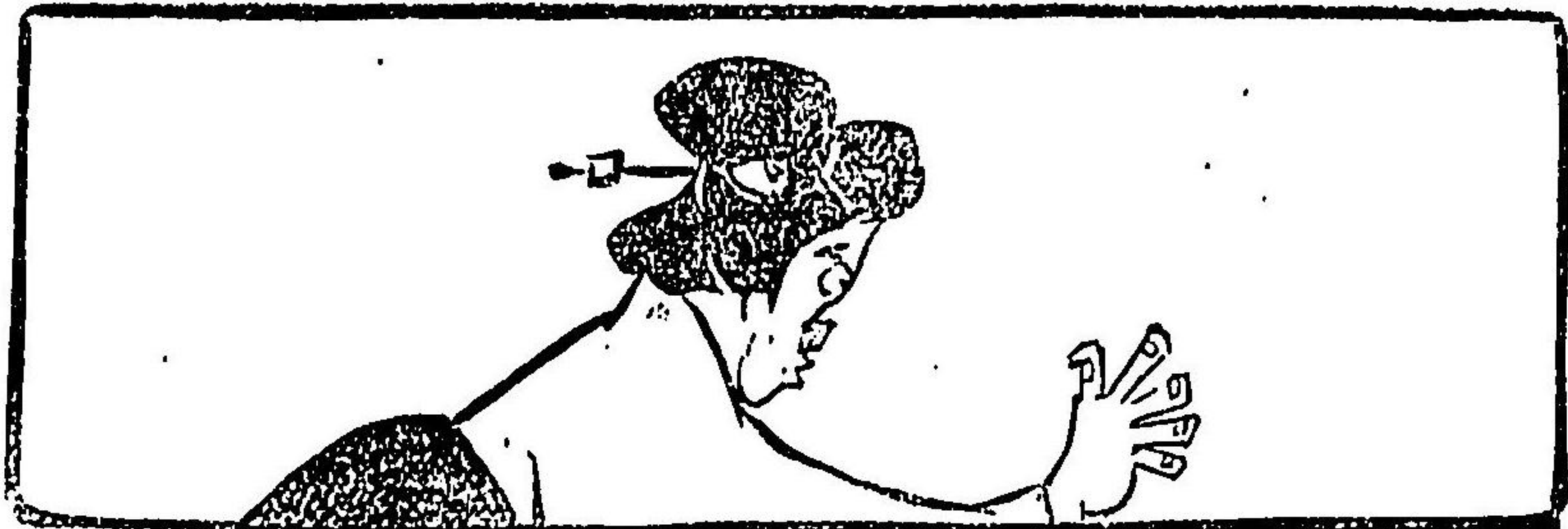
抱腹百話目錄

○ 阿房陀羅經	一五九
○ 奈滿大尼坊主	一六三
○ 息子の馬鹿者	一六七
○ 娘のお多福	一七一
○ 隠居の禿頭	一七五
○ 婆々の鋭く茶番頭	一七九
○ 手代の吳魔化し	一八三
○ 下女の泣面	一八七
○ 小僧の桃白	一九一
○ 妾の無心に	一九五
○ 本妻嫉妬	一九九
○ 藝妓の淋病	二〇三
○ 娼妓の梅毒	二〇七
○ 淫賣の横皮	二一一
○ 巡査のコリヤ	二一五
○ 兵士の臆病	二一九
○ 官吏の賄賂取り	二二三
○ 學者の實地知らず	二二七
○ 小説家の風俗亂し	二三一
○ 商人の薄情	二三五
○ 女郎の嘔吐き	二三九
○ 俳優の大根	二四三
○ 藝人乞食	二四七
○ 新聞記者の惡徳	二五一
○ 議員の變節	二五五
○ 會社員の不正	二五九
○ 銀行員の費ひ込み	二六三
○ 社長の我儘	二六七
○ 小使の茫然	二七一
○ 番記の書き違ひ	二七五
○ 役員の勝手最負	二七九
○ 職工の其日稼ぎ	二八三
○ 紡績女工の安日給	二八七
○ 百姓の蛙切り	二九一
○ 船頭の小便川流し	二九五
○ 上戸の酔ッ拂ひ	二九九
○ 下戸の牡丹餅	三〇三
○ 山師の法	三〇七



抱腹百話

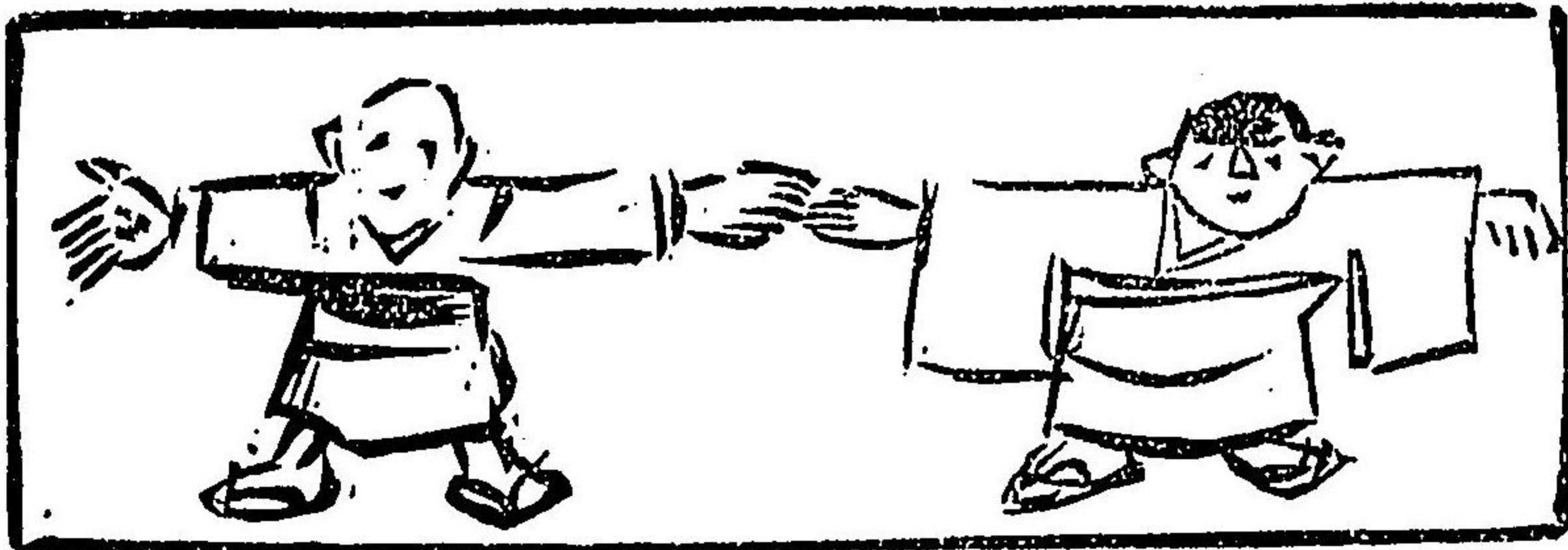
螺吹き、高利貸の泥棒、書生の生意氣、學生の不勉強、女學生の自然主義、淫奔娘の腹ボテ、姑の嫁蒔め、嫁の不纏綴、花婿の腰抜、若後家の男狂ひ、浮氣男の女郎買ひ、情婦の淫奔、間夫の貞操破り、不孝者の親困らせ、不具の厄介、病人の不養生、看護婦の不親切、お客の食ひ逃げ、詐欺師の持逃げ、格商家の義理知らず、慾張者の耻知らず、花魁の空涙、色男の自惚、居候の甲斐性無し、人力車夫の掛値、露店の屑賣り、號外賣の飛歩き、新聞配達の冷飯草履、月給取の腰辨當、役人の空威張、華族の不品行、士族の瘦我慢、紳士の遺繰り、先生の讀み違ひ、生徒の落第、失敗者の不平、厭世家の自殺、貧乏人の泣言、落語家の馬鹿口、講釋師の見臺叩き、義太夫の首振り、報間の頭打ち、傘屋の骨折損、相場師の身代失ひ、賭博師の負け裸か、盜賊の獄監行き、悪人の罰當り、繼親の繼子蒔め、乞食の虱取り、浮氣女の不貞腐れ、盲者の垣覗き、驛者の立聞き、下手大工の家壊し、家相見の家潰し、八卦見の嘘九段、人相見の出放題、會計係の勘定違ひ、興業師の目的外れ、角力取の負け績き、碁打の不孝者親の死目も知らずにバチ／＼やるのじや、可哀そうに死んだ親爺の供養の爲に打いてやるのじや(ボク々々々々々)南無阿彌陀佛々々々々々々。



抱腹百話

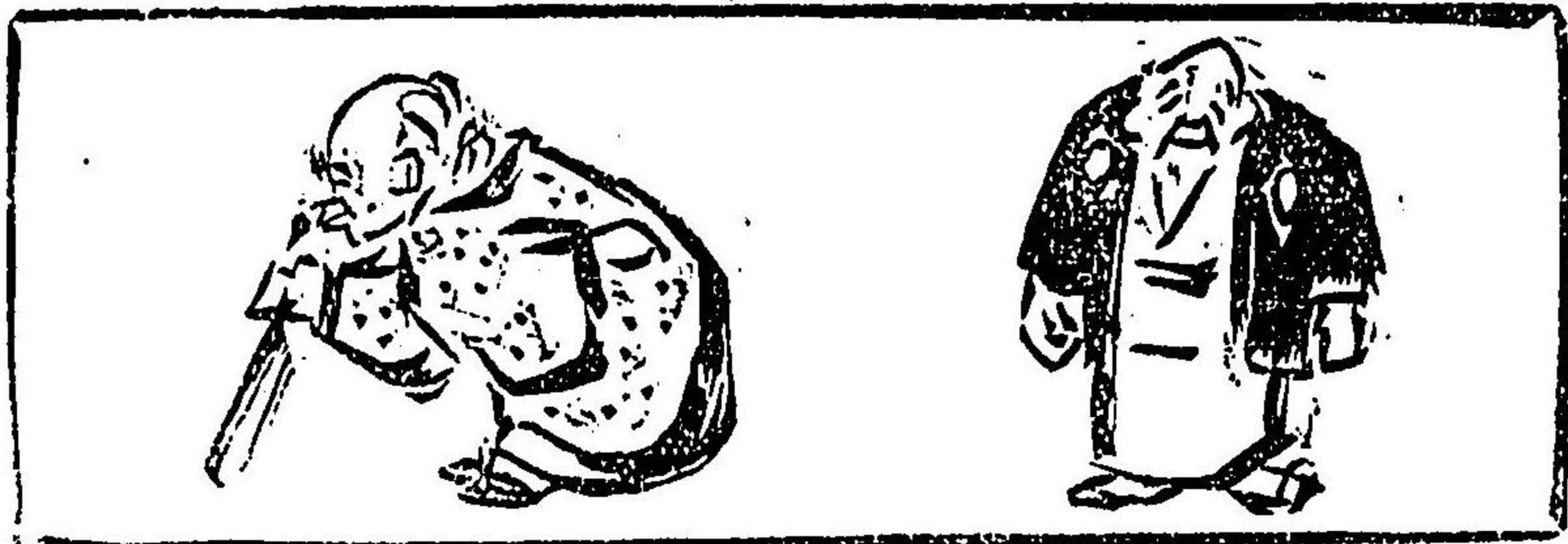
屁を論ず

屁は兵と讀み又平と讀む。兵法に伏兵、突貫あるが如く、すかし屁、握り屁等あり。海に太平洋あれば、韓國に平安道あり。支那に韓信と云ふ兵法家あれば、日本に源平二氏の戰あり。官幣大社に靖國神社ありて兵士の靈を祭り、越前に永平寺と云ふ御寺ありて、南無阿彌陀ブーッと佛の屁帳開帳をなし。能書ばかり立派て屁糞の萬金丹あれば、馬鹿に匂ふ糞の最後屁あり。京都を平安の地と云へば、朝鮮の舊都を平壤と云ふ。年始狀に平素の疎遠を謝すと書けば、平凡投書は没となる。人を拜するに平伏し、人に怒るを不平と稱す。昔徳川家康公天下を取り、諸大將を集めて祝賀の際誤つて屁を發し、人々思はず失笑したるに。島津公進み出て、天下太平に御目出度う御座いますと述べれば、伊豆守も又進み出て、天下の兵權御家に納りて御目出度う御座いますと述べた。そこで諸侯皆感動して、へい々々々と云しより。旦那が番頭と呼へばへいと答へ、番頭が小僧と呼へばへいと答へ、七兵衛八兵衛權兵衛と云ふ名も出来。藝妓娼妓もへい今晚はと云ふに至れり。



抱腹百話

今その屁の製法を述べれば、
 第一法 芋と豆を澤山食ふべし、屁を發すること請合なり。もし三度のお飯の代りにすれば大に經濟となる。
 第二法 麥飯を大に食ふべし、消化するに隨ふて屁となる、頗る衛生に宜しく其上脚氣病の豫防となる。
 第三法 とろろ汁を百杯ほど吸るべし、腹張て後に屁を出し。腹の掃除と屁の穴の掃除を兼ね大に氣分を宜くす。
 次にその發する方法は左の如し。
 第一法 雪隠に入りて發すべし。誰に遠慮も入らずして宜し。
 第二法 成べく人の居らぬ處にて發すべし、然らざれば臭きにへイ口す。
 第三法 もし人にて腹張て辛棒なり難き時は「御免」と斷りて而して後に發すべし。
 但し、無禮とか失敬とか云ふ人あらば、無理に堪ゆるは衛生に害ありと答ふべし、歴々のお嬢様、花嫁などが大勢の人中にて辛棒なり難く、此世に生れ出る



抱腹百話

屁をブーと生聲を揚げさせず、優しい蚤も殺さぬ様な顔をして、無慘にもそのと踵で押殺し、大膽にも何食はぬ顔をして、臭い〜と大騒の末に、とう〜と噴付られて犯罪の願れて一層顔を赤くする事あり。かゝる時は寧ろ始めより斷りて、遠慮なく瓦斯を發散すべし。
 さて又屁の効用如何と云ふに 烏羽僧正の屁合戦の繪巻物には、屁の穴を開いて屁を發し、敵味方入亂れて戦ひ、屁糞玉に楯の破るゝ圖あり、又忠臣の楠正成は千早城に於て、屁糞の熱湯を以て寄手を惱し。昔より兵を以て天下を取り、又兵を以て城を乗取らる。兵に勝ちて太平となり、又兵に破れて平氣で居られぬ騒ぎとなる。日露の戦争には大兵を滿洲に送り、露兵を逐まくり、蓋平を占領す。又海には東郷平八郎氏、旅順に閉塞隊を指揮し、平和に復して後守備兵を置く。兵に近衛兵あり、憲兵あり、歩兵あり、砲兵あり、騎兵あり、工兵あり、輜重兵あり。要塞砲兵あり、屯田兵あり、猶又海軍に水兵あり、機關兵あり、信號兵あり、猶又徴兵令ありて常備兵、豫備兵、後備兵、補充兵、國民兵あり。造兵廠ありて兵器を製造し、兵學校ありて兵を養成す。兵の必要なること斯の如くにして、又何人も無くてならぬは紙幣貨幣であ



抱 腹 百 話

る。諸君奮つて我國をして益々富コク強兵、ブー運長久ならしめよ。まだく屁理窟は澤山に所持すれ共、餘りへタの長談義は反つて御迷惑と存じ、こゝらあたりで御免を蒙る、へい左様なら。

禮式の教授

日本の禮式には小笠原流とか何とか彼とか色々の流派があつて、それには又専門の先生があつて作法を教へる、其先生の中にも又頗る熱心な人があつて、茲處に或先生が田舎の奥の奥まで禮式を携ねばならぬと云つて、態々山の奥の奥まで草鞋がけて教へに行くと、田吾作連が集つて来て作法を習ひに来た、そこで先生が教授を始め出して見た處、何がさて鉄持つより外に何にも知らぬ連中ばかりであるから、何でも彼でも先生のする真似をすればよいと心得、先生が箸を上げれば同じく箸を上げ、又先生が箸を下れば同じく箸を下げ、先生が茶を呑めば同じく茶を呑み、先生が蓋をとれば同じく蓋をとり、すべて先生の爲る様にばかりして居ると、先生が御馳走の中のを拵まうとして誤つて膝の上へ落した、皆なが先生の爲るのを凝と眺めて居る



抱 腹 百 話

から先生はコレハ失策だと冷汗を流して居ると、田吾作連は又それを真似し出して皆芋を落す、先生の芋が膝から膝の上へコロコロと轉ると又、何れも皆態々と膝を揺つてコロコロと膝の上へ轉がすと云ふ風で、次から次へと真似をして彼方でもコロコロと此方でもコロコロ、それから又家へ歸つて子に教へ、妻に教へ、兄弟に教へ、それから又他人に傳授し、終ひには村中盡く芋を食ふ時にはコロコロと轉がす様になつてしまふた。

藝妓を辯護

大坂の某辯護士は飽聞家として頗る名高だけあつて、婦人に關する辯護が實に至り盡せりて少しの遺憾もないとの評判である、處が先生に關係ある藝妓が客と一緒に賭博して居た處を、警官が踏込んで共にフン縛つてしまふた、そこで先生早速辯護にかゝると「藝妓は客の興を添へるのが職務であるから、客の興を添へるために付き合ふのは、之を爲すの意見なきもので、譬へば三味を弾き歌を唄ふの意思なきも、客の興を添ふるために三味を弾き歌を唄ふに異ならず、よつて充分情實を酌量して宜し

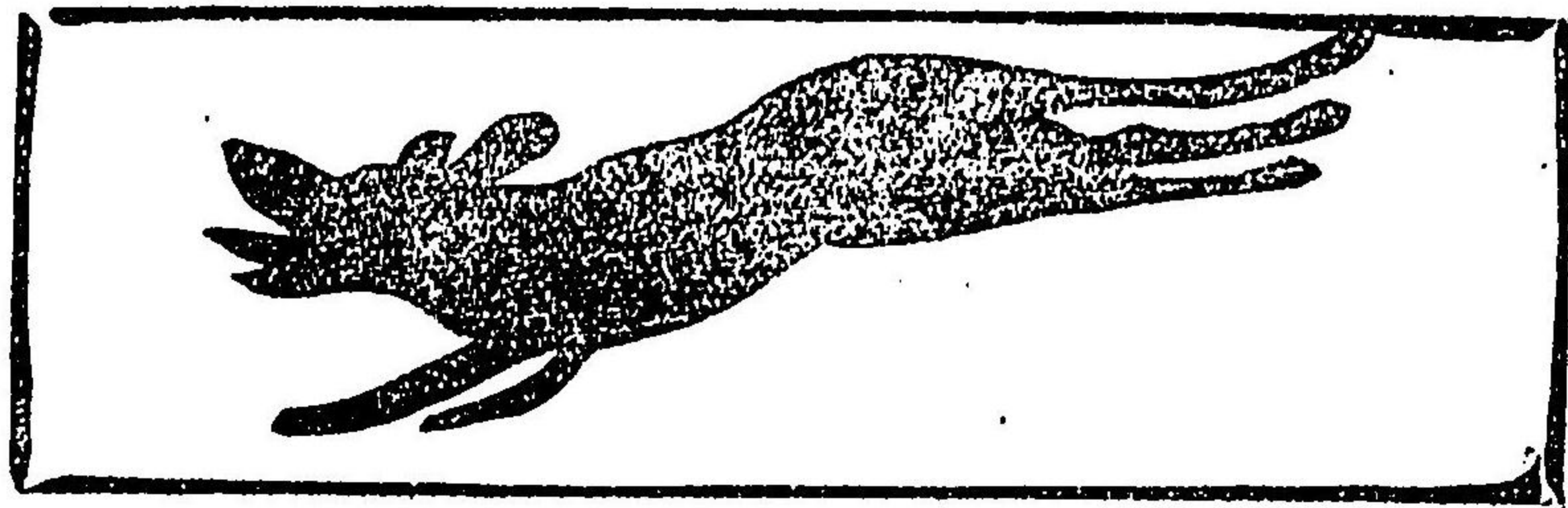


抱腹百話

く無罪とすべし、但し客は自己の勝手に爲したるものなれば宜しく有罪となすべし」と法廷での大氣焔、骨折の中妻あつて藝妓は無罪放免となつたが、憐れや客は皆有罪とは好い面の皮。

繼子の歌

邪見なる女、自分の生んだ子供二人を可愛がり、先妻の生んだ一人の子供を憎み、珍らしい物があつても繼子に與へず、自分の子にばかり遣る様にする、然るに隣から餅を貰つたので、あゝどうかして自分の子にばかり分けてやりたいと又々悪智恵を出し、密と自分の子二人を呼寄せて歌を教へ置き、さて三人を集めて云ふやう「今日は三人の智慧を比較るために歌を作らすから、妾が下の句を作りますから」と筆を取り、切りたうもあり切りたうもなしと認めて見せ、名々これに上の句を付けて一首の和歌にして見なさい、其中でよく出来た者に褒美としてこの餅を遣ります、又歌の出来ないものには餅を遣りませんから」と云ひ渡すと、二人の我子供は母に教へられてあるから、弟が直ぐに、



抱腹百話

満月の面にさわる松の枝

切りたうもあり切りたうもなし

と作つて見せると、又一人の弟が、

珊瑚樹の文箱にあまる筆の軸

切りたうもあり切りたうもなし

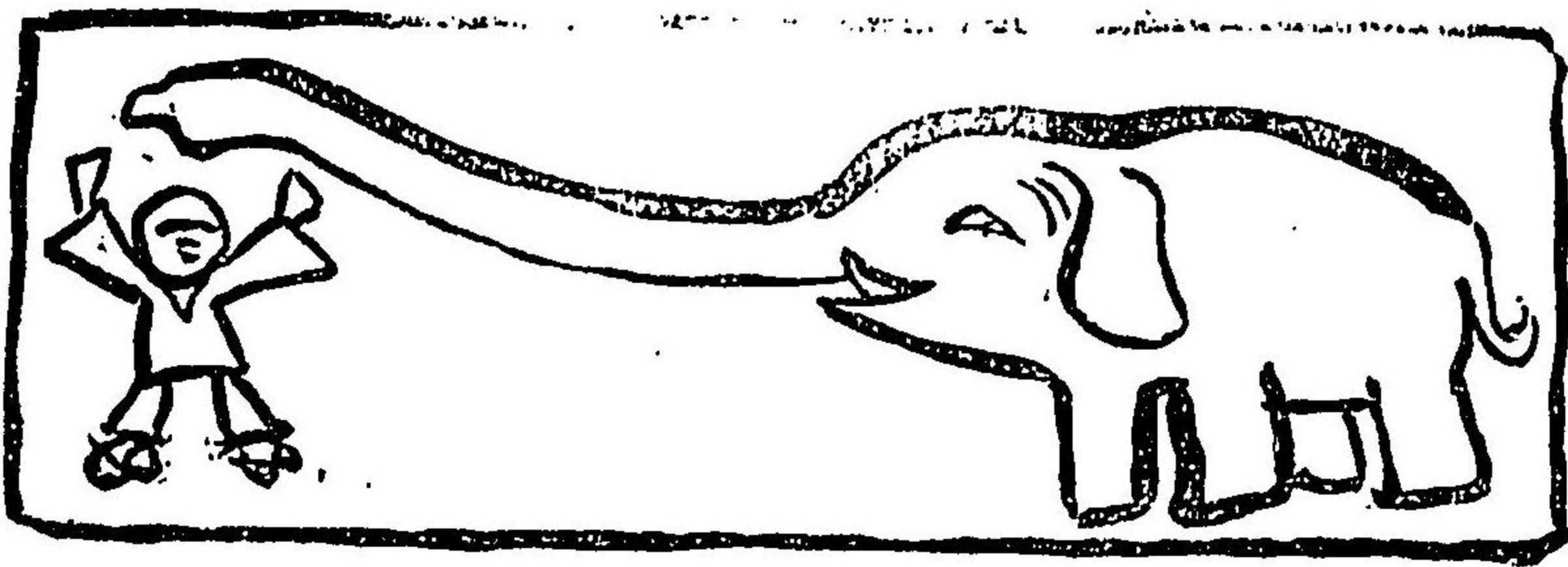
と作つて見せた、其處で女は莞爾と心の裡で笑つて「あゝどちらもよく出来て居る」と褒めて、繼子の方を如何と見れば、一生懸命になつて頭腦を痛めて苦んで居るので、もうめたと嬉んで居ると意外にも繼子も又、

餅一ツ慾張る親の生首を

切りたうもあり切りたうもなし

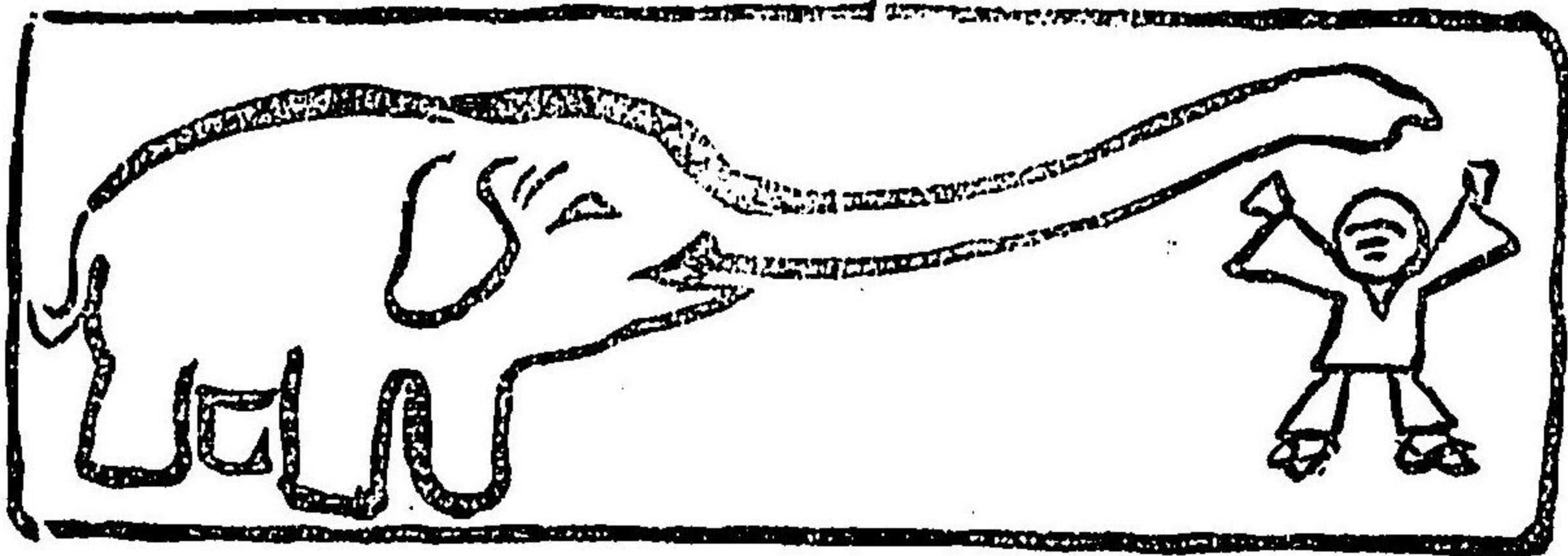
と作つて出したので、流石の邪見な女も大に耻ぢ、それより改心して繼子を我子よりも大切にしたと云ふ。

大根料理



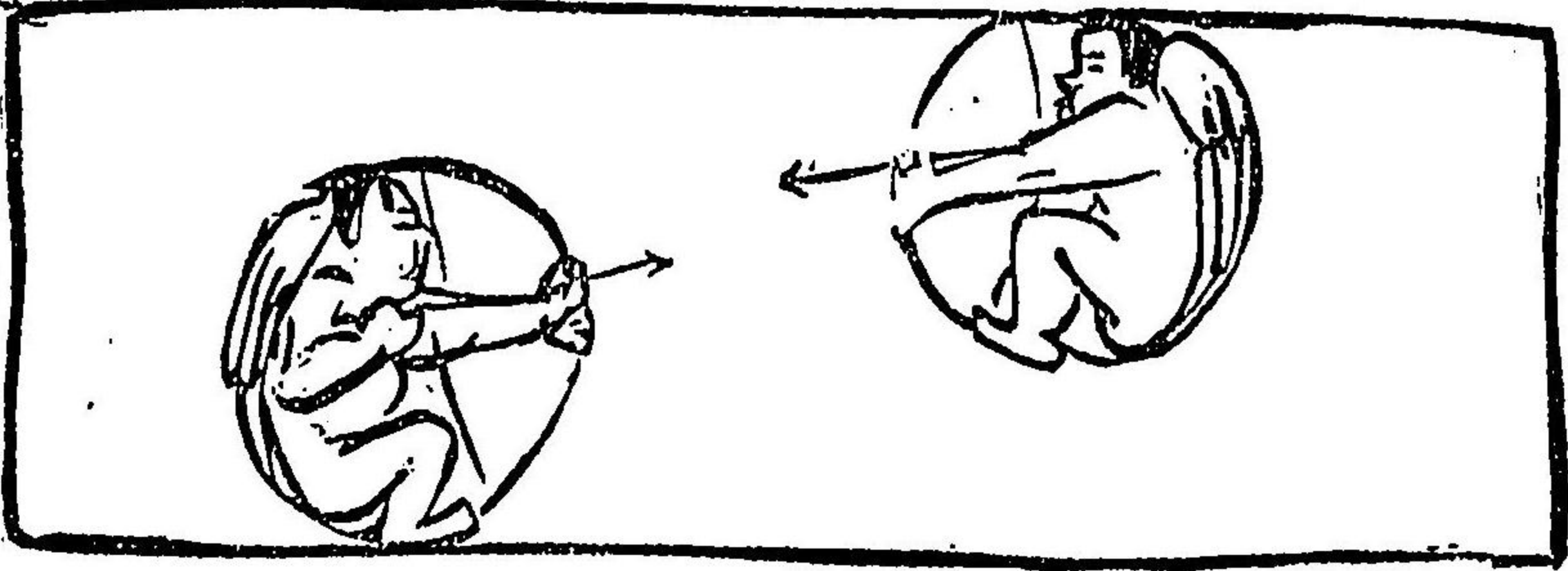
抱腹百話

大坂の食ひ倒れと云つて、ある人の謎に「大坂人とかけて何と解く、それで川流の積算棒と解く、其心は食(杭)にかゝつて離れぬ」と云ふ位で、どんな其日暮しの貧乏人でも、乞食でも、小僧でも、食ひ物だけは實に贅澤を極め込むもので、一寸松島の遊廊へ登樓つても、食ひ物を奢らぬと娼妓に振られると云ふ次第、隨て料理屋が繁盛する、曰く何々の蒲焼、曰く何々の鹽焼、曰く何々の飯、曰く何々の吸物、曰く何々の餅、曰く何々々と、豚の臍とか、蚤の墨丸とか、イヤそんなものは無いが善哉……これは東京で云ふ汁粉のことで、それを何故善哉と云ふかと一寸序手に調べて見ると、佛教の經文にある「善哉々々」と云ふのから起つて來たので、それを始めて出出したのが彼有名な一休和尚である、和尚ある時檀中から餅を貰つたので、まき……庖丁を當て、引導をする時、この餅を如何にして食へば一番美味さや……と今ならば新聞へ廣告を出して懸賞問題であるが、流石は一休和尚だけあつて速坐に考へ、小豆を煮て砂糖を附けて食つて見た處がナカ／＼美味かつたので、思はず「善哉々々」と叫んだから、それで善哉と云ふことが始まつたので、矢張り善哉と云ふのが眞實であるらしい、それはさて置き、ある時田舎の爺さんが大坂へ始めて來た時、大相腹が



抱腹百話

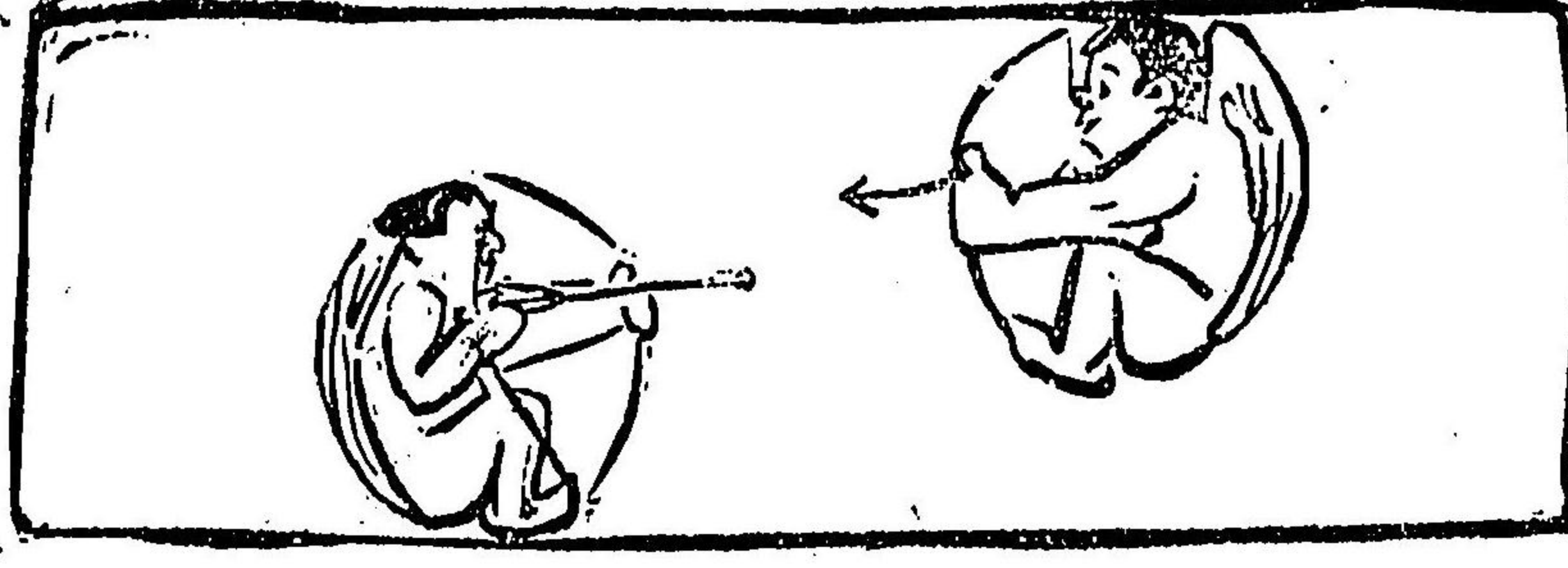
減つて何か食はうと思つて、彼處に美味そうなものがあるから這入らうかしらん、イヤ待て／＼ウツかりして高い錢を取られても堪らん、彼方に蒲焼の匂ひがある、此方に壽司屋がある、其隣に又餅屋がある、蕎麥屋もある、好いた物があるが高價いかも知れぬら怖くて入られぬ、と飢腹を抱へてウロツイて居ると漸く「大根料理」ど云ふ看板を見付けたので、ヤン嬉しやコソならば大丈夫安いに決つて居ると飛込んで、食つて見ると其美味いことは實に驚くばかりで流石は大坂の料理だと感心をして、一皿、二皿、最一皿、又一皿、又々一皿と皆で二十五皿ばかりも食つてしまい、さて勘定となつて見ると一皿が二十錢で、二十五皿で五圓と云ふ金高、爺は眼の玉の飛び出る程驚き「何程食つても大根でないか、田舎者と思つて馬鹿にすると承知がならない」と騒ぐを店の主人が押詰めて「イヤ高價いと思ふのも御尤もなれど、これは大根のダシニ上等舶來の鯛……イヤ鯛に舶來も何もありませんが、兎に角大根一本に鯛一疋をダシに使ひ、其ダシ殼は仕方がないから皆あの通り座箱へ捨て、あります」と聞て又吃驚し、それがために折角出て來た見物も出來ず、土産を買ふ錢もなくなつてしまふたので、そのダシ殼の捨て、ある鯛を貰つて土産物にしたと云ふことである。



抱腹百話

京の着倒れ

京の着倒れとは誰も知つて居る通り、極々貧乏人でも、屑屋でも、人足でも、一寸外へ出る時には絹布を纏ひ、一體何處の紳士か、奥様か、若旦那か御令嬢かと見違へる位で、それ故年中着物の爲に苦勞をして、寄ると觸ると衣服の評定、衣服の競へ合ひ、衣服の品定めに涎を流し、歩くと衣服が損ひからと云つて車に乗り、雨が三粒程降ても衣服が濡れると云つて外へ出ず、塵の上に塵半本あつても衣服が汚れると云つて坐らず、盜賊に金を取られて惜しくもないが、衣服は情しいと云つて要心をする、火事がある時と衣服を第一番に持ち出すと云ふ位、その京の御客様が田舎へ行つて泊つた時、有合した豆を副食にして飯を食はずと、飯ばかり食つて豆はチツとも食はないので、宿の主人は大に心配をして尋ねて見ると、イヤ豆は大の好物であるが、それを一粒づゝ箸で挟んで食べて居ると、大事の衣服の袖口が摺れて壞れるから、それで壁へ咽喉の奥から手が出て来るやうになつても、凝と辛抱して食はぬのじやと云つたさうな。

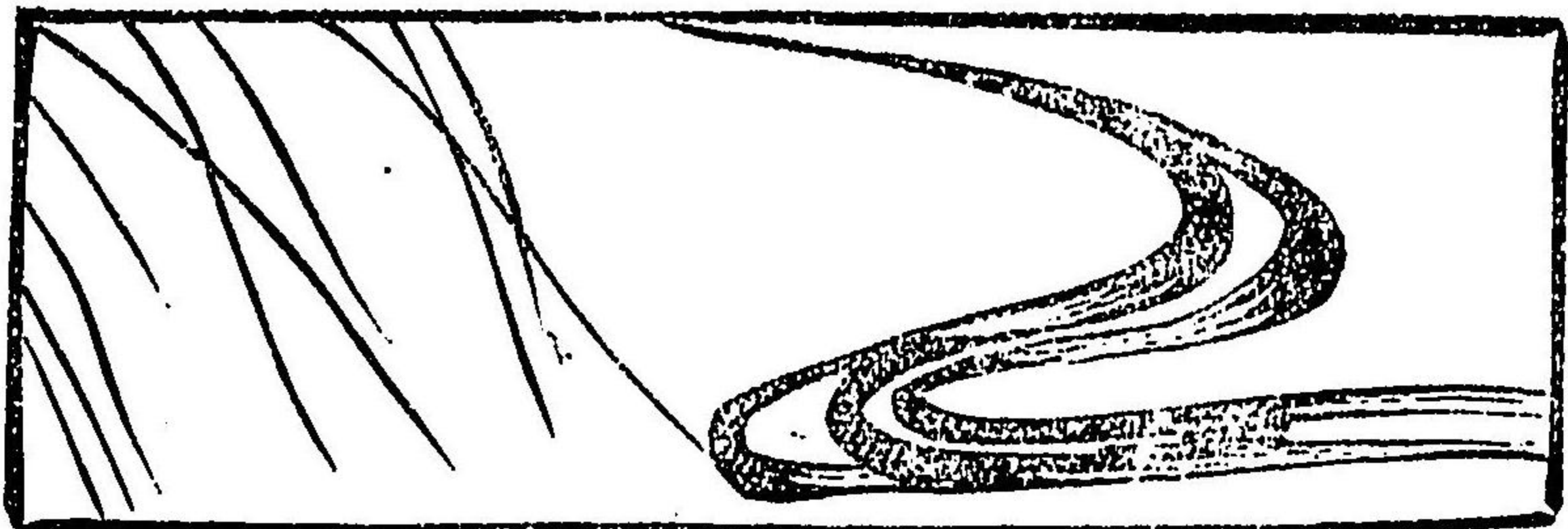


抱腹百話

孰らが好いか

或人最愛の娘の縁談を四方八方より受け、長し短しと種々思案の後、これは一ツ娘の料見も聞いて見ねばならぬと心付き、早速娘を一間に呼込んでさて「お前の縁談につき、處々方々から申込が澤山にあるが、困つた事には金があるかと思へば肝心の婿殿の男前は悪るし、又男前が好いかと思へば貧乏で金の無いのが玉に瑕じや、私は孰らでもお前の好く方へ嫁にやるから、お前は孰らが宜いのじや」と問はれて娘は顔を眞赤に火のやうにし「は……」と云つた切り、餘りの耻しさに返事も出ぬので、親は一策を案し出し「云ひ悪くければ手を揚げて見るがよい、金満家が好ければ右の手を揚げ、美男子が好ければ左の手を揚げよ」と云つたが、娘は矢張り耻しさに俯首して居るのみで分らぬから大に困り、早くくと催促をすると、娘は漸く手を揚げたかと思ふと、右も左も半分づゝ一緒に揚げて居た。

名士の讀み違ひ



抱腹百話

世の中には文字の読み違ひから飛んだ滑稽を引出す事がある、郵便をユツペンと讀み、募集をホツシウと讀み、又募集と書くのである、しかし無學文盲の連中は仕方ないが、随分と歴々株でこんな滑稽談がある、某大臣が爲替をタメカへと讀んだなどは振つて居るが、前大坂の名知事と歌はれた菊地侃二君が、議會に於て黨派の軋轢をキラクと幾度も繰返して演説し、又臺灣の高等法院長高野孟規が免職事件の際、静觀樓に招待會を開いた席上で、憲法を蹂躪するをジュラン／＼と之は又頗る熱心に遣付け、其次に皇孫殿下降誕祝賀會を中之島大坂クラブに於て催したる時、恭しく祝文を讀んだ中に、皇孫殿下の長へに御成育とあるのを、ナガへに御成育あらせられと最も莊重に朗讀したと云ふ事、又松方正義君が枚擧をボクキヨ、禁出をヤキゲンなどは随分有名なものである、澁谷史春君が歐洲に遊んでその發達に驚き、歐洲の發立と書いたそうなる。

あんまころすもちや

これは其當時新聞にも出て居た事實談であるから、今でもまだ有るかも知れぬが、東



抱腹百話

海道は小田原であつたと思ふが、餅屋の障子に書いてある文字が頗る妙である、則ち、

あ	ん	ま
こ	ろ	す
も	ち	や

と書いてあるから、大抵の者は皆這入らうとして「あんまころすもちや」と讀み、度臆を抜かれて呆然と眺めて居る相であるが、よく聞けば「あんころもち。ますや」と讀むのであつた、とは見て来た友人の談話。

化物屋敷

拙者が或人の家へ泊つた時、最初に茶を持って来た女が跛足で、次に夕飯の給仕に出て来た女が痘瘰で、又次に床を敷きに来た女も矢張り不具の眇眼で、翌朝になつて朝飯を運んで来た女までが齒抜で、この次はどんな者が出て来るのであらうとビク／＼して待つて居ると、化物でないかと驚いたのも道理……梅毒で鼻の腐つた女であつた



抱腹百話

から仰天すると、又々願われたのが禿頭病で髪の一毛一本もない禿茶瓶の女であつたから二度吃驚して度膽を抜かれ、餘りの不審に主人に其理由を尋ねて「こんな不具者ばかり出して拙者を驚かすのは、一體全體何の遺恨があつて態とせらるゝのであるか、恨を受くる様な事をした覚えは無き等なるに」と皆まで云はさす主人忙て、「イヤ誠に飛んだ失禮を致しました」と頻りに頭を掻き掻き云ひ悪くそうに「實は家の妻は非常に猛烈なる嫉妬屋に御座いまして、それ故美しい女……イヤ美しい女でなくとも女と名の付くものを置けば烈しい嫉妬で、と云つて男の奉公人ばかりでは飯炊にも洗濯にも掃除にも困るから、止むを得ず御覽の通りの女中のみを集めて使ふて居ります、少しく御察しを願ひます」と云はれたので始めて譯が分ると共に、可笑しさ極つて又主人に同情したのである。

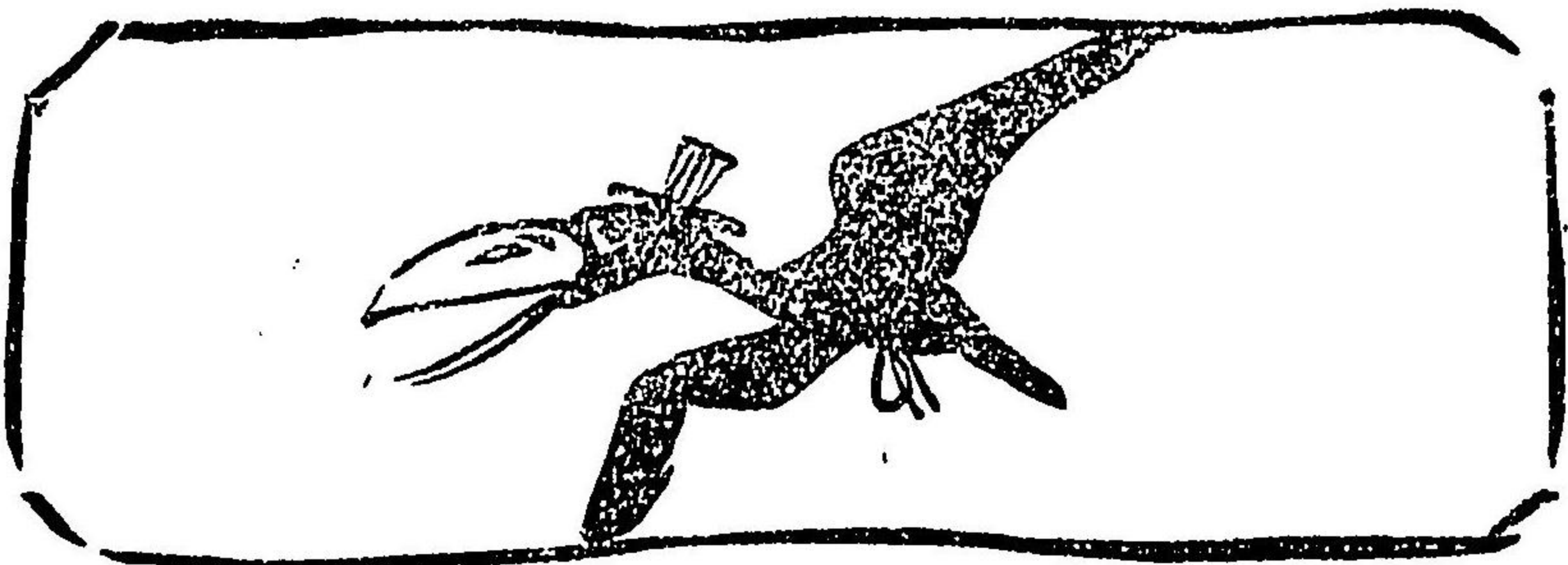
子安地藏

ある破れ寺の住持何かよい金儲けの法はないかと坊主頭を振り立て、見ると、世間に愚夫愚婦の迷信家が多いのを幸ひに「厄除観世音」と云ふ看板を掲げて見たがお客



抱腹百話

が一人も来ぬので閉口し、今度は「盗難火難除不動尊」と張札をなし、又一人も来ぬので忽ち「眼病専門薬師如来」と廣告し、其次に「開運之毘沙門」其又次は「腰痛を癒す如来」「腹痛の大師」「頭痛によい佛」「足に利く何々」「尻に利く何々」と取替へ引替へしたがトント繁昌せぬので、今度は一生の智慧を絞り集めて「子安地藏、子の出来る特別請合御祈禱」と思ひ切つた大きな札を出し、住持は毎日々々朝から晩まで祈禱に凝り固つて居ると、梵妻が心配相な顔をして「和尚さん、貴様が餘まり子の出来る御祈禱ばかりして居るから、これこの通り妾の腹が段々大きくなつて来ました、サアこれを如何しなさる」と突付られて和尚大に迷惑をなし「こりや大變じや、拙僧は他の家に子が出るやうに拜んで居るのに、地藏様が拙僧のと間違ひをしたのじや、しかしこの儘にして置いては檀家へ知れたら大騒動じや、いつそ今の内に……無いものでもせよ……イヤこの頭に對してもそんな殺生な事は出来まいテ、ハアテサテ困つたもの」と大頭痛、其處へ又弟子坊主が来て「和尚さん貴様が餘り子の出来る御祈禱をするから、私の大黒も布袋になつて困りましたから、子の出来ない御祈禱をして下



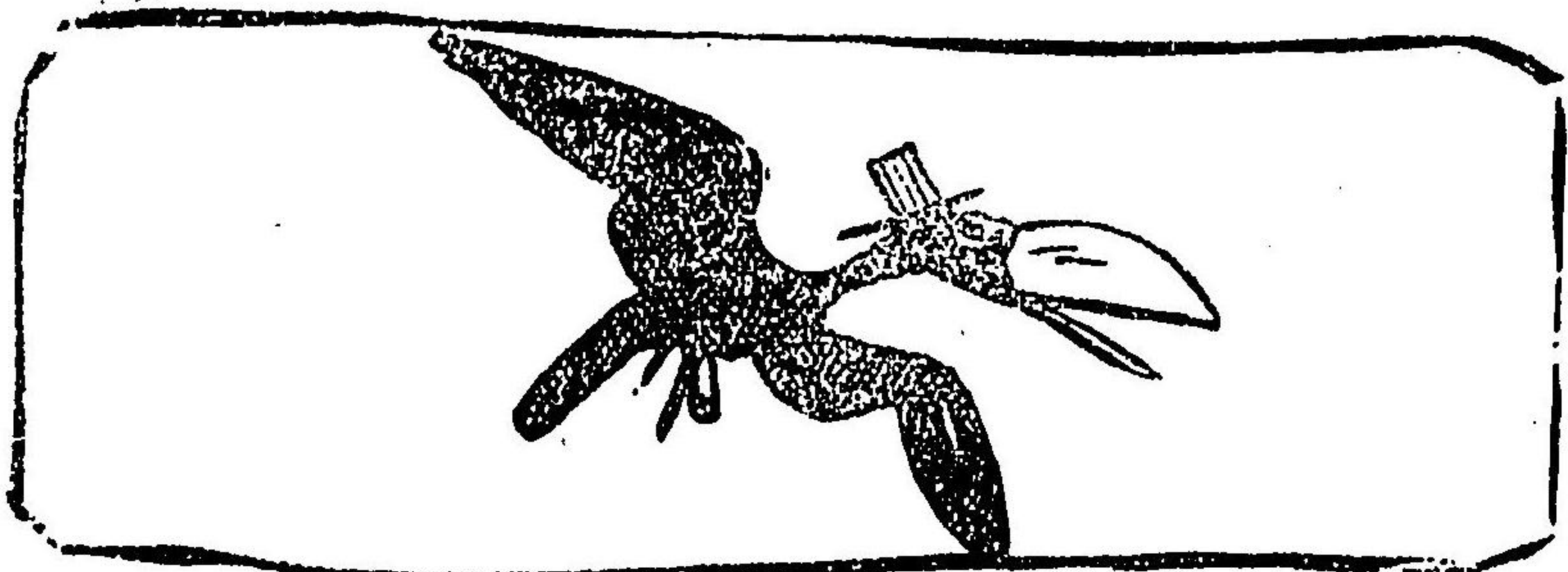
抱腹百話

電報の間違

太物商人あり、或日電報が飛び込んで来て開いて見ると「シロイヌノコヲフクレ」としてあるので、いろ／＼と考へたり又思案して見ると、先方の主人が大變に犬が好きであるのに気が付いた、そこでなるほど「白犬の子を送れ」と云ふのに違ひないと合點し、厄介な事とは思つたが大切な花客であるから捨てゝも置かれず白犬の子を鐘太鼓で捜し出し、漸く見付けて先方へ届けると、嬉ぶかと思ひの外怪訝な顔をして「白い布子を送つて下さいと云つてあげたのに、それが何で犬を連れて來ました。」

小便の囂詰

ある金満家の御隠居様が年の加減で小便近くなり、便所へ頻りに行かねばならぬので困つて居ると又、汽車に乗らねばならぬ事となつたので、サア益々困難を感じて種々と考へた上、愈々旅行の際には必ず葡萄酒の空罎を携へて行つて、もし中途で小便をしたくても出来ぬ時には此罎の中へ仕込む事にした、然るに又老人の事だから到つて

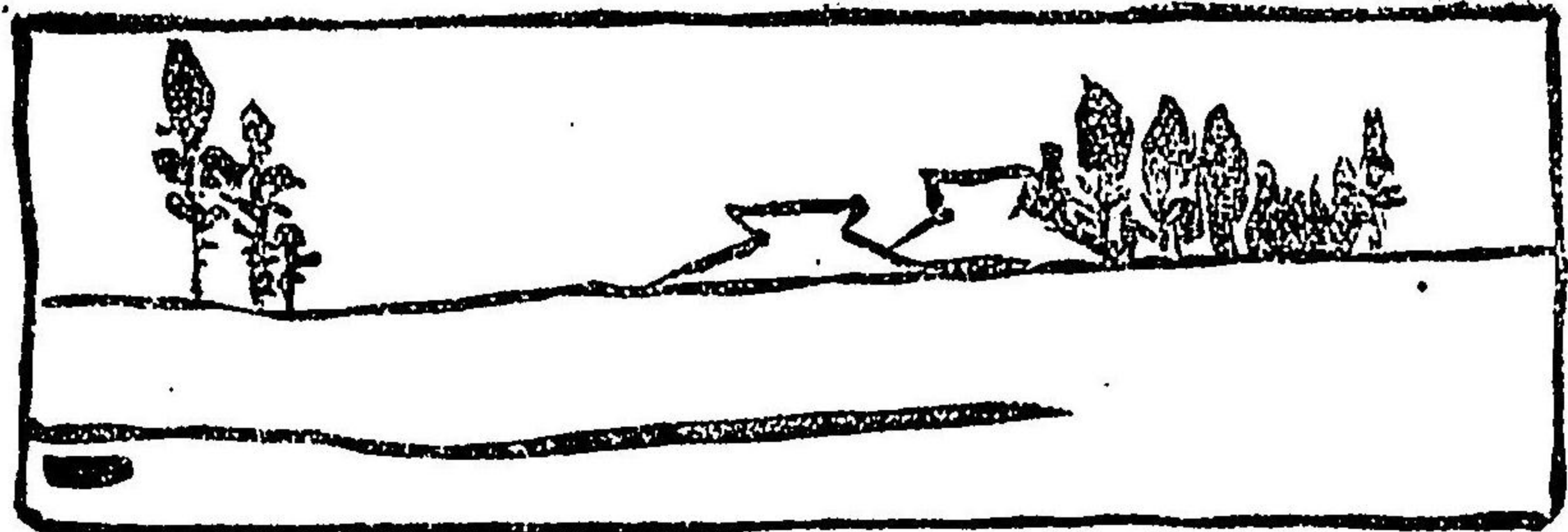


抱腹百話

吝嗇同士

物忘れを爲やすいので、或時汽車中で罎へ小便を仕込んだのを遺忘れて下車してしまふと、車掌先生が見付けて密と隠し置き、家へ持つて歸つて晩酌の膳の上へ上せて細君に向ひ「サア今日は葡萄酒を買ふて來たから、お前も一杯呑むがよい」と自分が盃を配んで酌をすると「イへ妻は不可ませんから」と云ふのを無理に「お前に呑ませようと思つて買ふて來たのだから、是非一杯」と押付ける細君も断る譯にも行かず、一杯呑むや否や變な顔をして「アラマアこの葡萄酒は眞實に鹽辛くて臭くて……貴郎、妾を騙るのですか」と柳眉を逆立てたので仰天し、自分も一杯呑んで見て「ハ、ハ、ハ、この葡萄酒は腐つて居るのかしらん」。

至つて吝嗇極る人の隣に又これに劣らぬ吝嗇屋があつて、一方の主人が松魚節を買ふて來るよりも、隣で一寸借つて來て使ふ方が餘程經濟である、と考へて隣へ借りやると使の者が歸つて「隣の旦那がどうぞ減らぬやうにして使ふてくれと云ひました」と口上を述べて松魚節を出した、そこで流石の吝嗇家も大に閉口したが、種々と又考

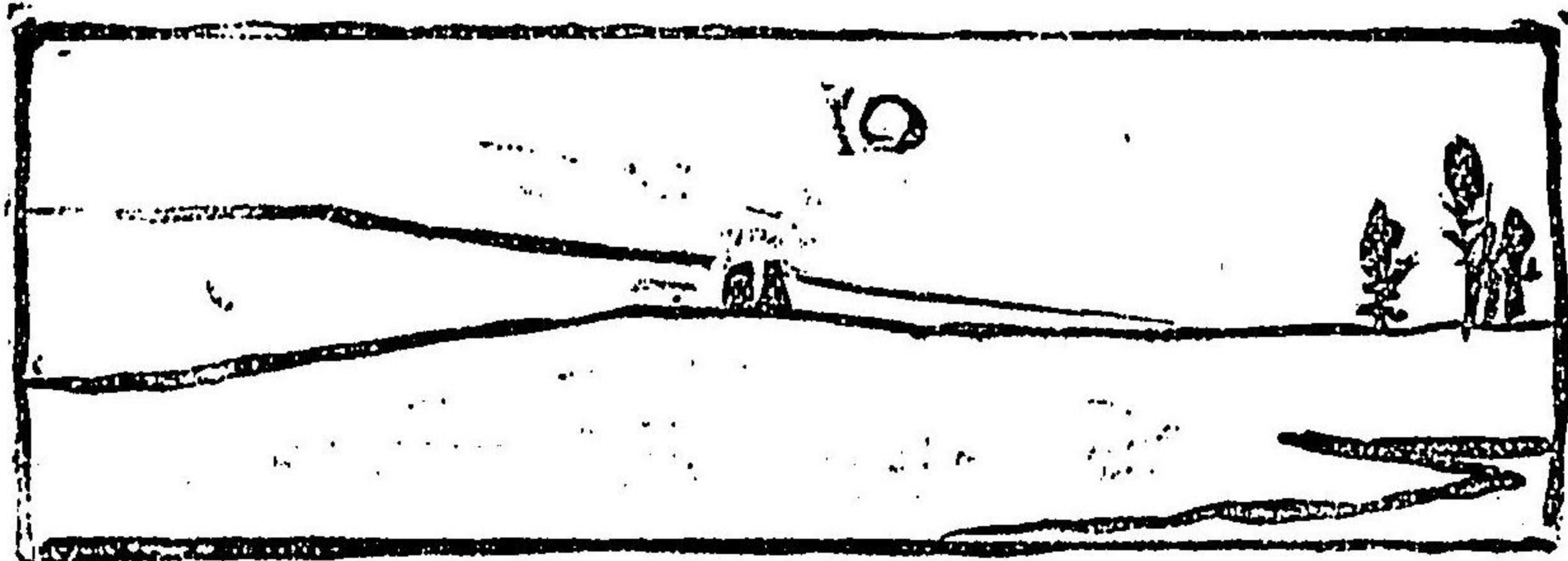


抱腹百話

へて見て「よし、そんなら此方に工夫がある」と松魚節を剥ずに釜物を鍋へ入れて煮き、煮いて煮いてダシを悉皆出し抜いてしまひ、それを乾して返へすと、隣の主人が又帳を付けるのに筆を買ふて来るより、人の物を借つて来て使ふ方が餘程経済だと考へて借りに来ると、此方の主人は使の者に「何卒墨を付けぬやうにして使ふて下さい」と云つて貸してやつた、すると隣の主人は之を聞いて點頭さ「よし、そんなら好い工夫がある」と云つて、墨を付けずにインキで書いて使ふて居た。

支那料理

田舎紳士が東京へ出て来て、友人の交際で始めて西洋料理を食つて大失敗をなし、懲々として西洋料理の交際は逃げて居ると又、今度は支那料理へ誘れて行くと、豚豆腐、肉糸麵、龍眼肉など、今まで見た事のない物ばかりであるから、サアどうして食へばよいのかと心配でならない、盡く人の爲る真似をして食ひ、御馳走の出る度、胸を痛めて居ると、漸く失敗なしに済んだので「ヤレ、ヤレ」と安心して居ると又、支那美人が恭しく盆の上へ何とも分らぬ白いホコ、と湯氣の立つたものを持つて来たので、

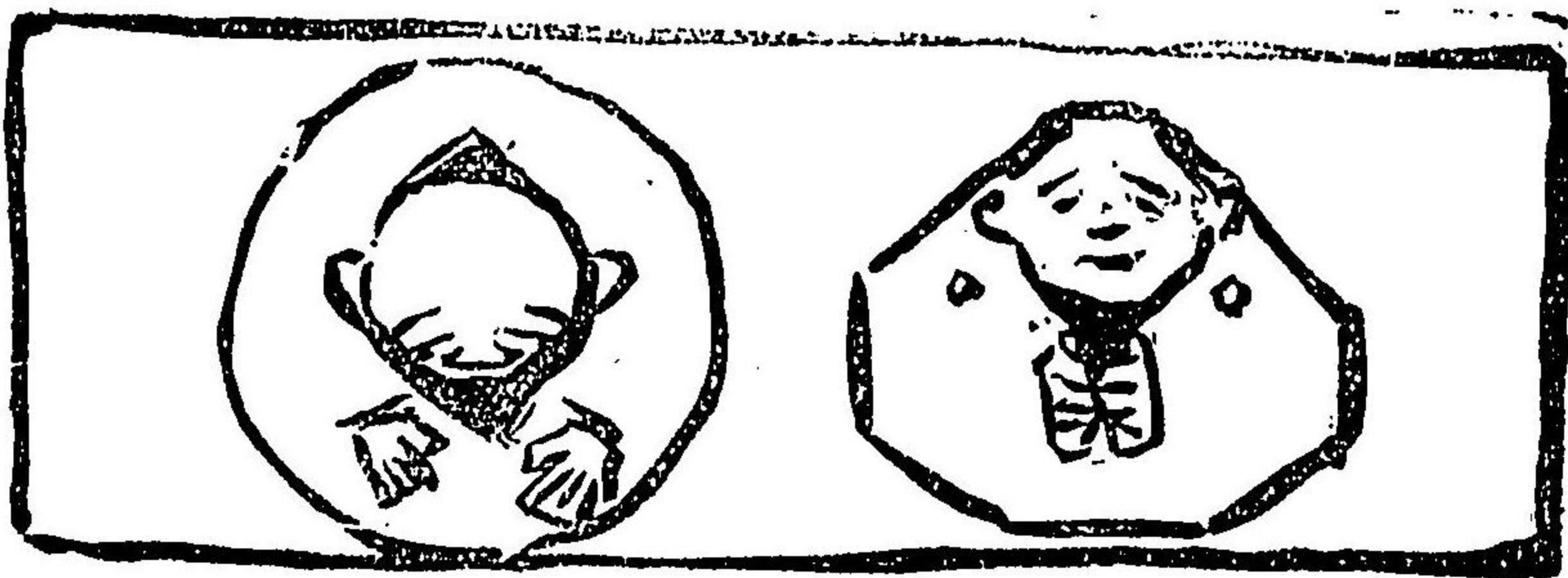


抱腹百話

一寸箸で挟んで見たが頗る長いので、恐ろしく其端を噛んで見たが滅法界に固いので一生懸命に噛んで呑み込もうとしたがナカ、食へないので「あ、若い時にはこんな物は世話なしに噛めたが、年が寄ると齒が悪くなつて……」と歎息をすると、傍の人が皆ドツと噴出して「君そりや手拭だから食ふのじやない、支那料理には油澱いものを食つた後で、顔を拭くと心持のよいやうに手拭を蒸して来るのだから」と云はれて紳士は大に赤面して、忙て、急に顔を拭いて「あ、好い心持になりました」

飛んだ間違ひ

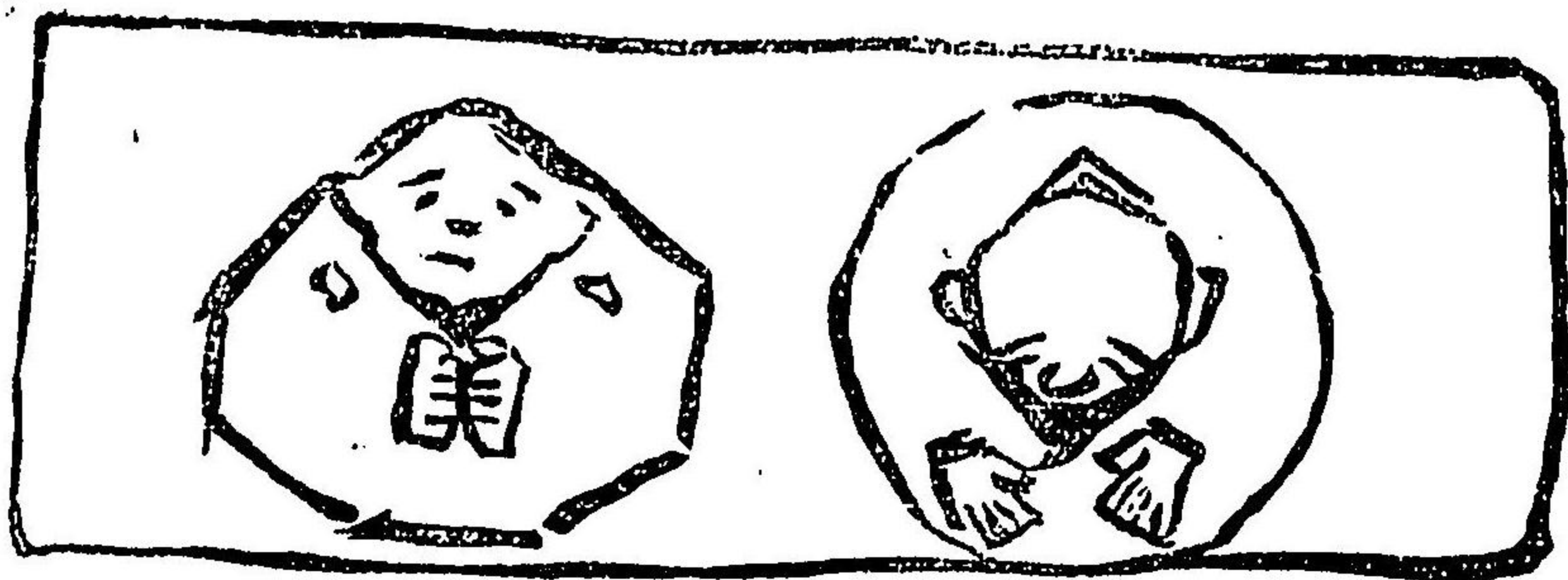
東京の某紳士が大坂に滞在の旅の憂寐に堪かねて一夜をつと南地の某樓へ御出陣、ばすと、へい今晚はと顯れ出でたる美形は二十一二の色白の細面、花ならば月前の芙蓉水を出で、水に映るが如く、妖桃の春を傷める粧ひ、垂柳の風を含める姿、雪の肌、玉の腕、畫譜の眉、丹花の唇、將さにこれ小町も三舎を避け楊貴妃も面を蔽ふ的素敵の優物、紳士は忽ち恍惚として魂を抜かるゝこと暫時、御機嫌斜ならず別れを惜み給ひしが、東京に歸つてからも其移り香忘れかね、次の用事まで待ちかねて、態々大坂ま



抱腹百話

て下つて再び某樓に上り、其藝妓の名が丸子と云つたので「丸を呼べ、丸を早く遣して呉れ」と仲居に命ずると、仲居が恭しく承つて「はい宜しう御座ります」と座を立つて行つて暫時すると、吸物の膳をもつて来て据へた、紳士は藝妓の來るのを待つて居る間に仲居の酌でやり始めたが面白くない、一時間餘りも待つたがまた來ない、紳士は堪りかねて「丸はまだ來ぬか」と額に青筋立てて怒鳴ると、仲居は不思議な顔をして「旦那、もう既前に來て居ります」と云ふと、紳士は益々怒り「馬鹿、まだ來て居ないじゃないか、早く」と急ぎ立てる、仲居は益々困り「旦那、お椀の蓋を取つて見て下さい」と云ふ、紳士は烈火の如く怒り「あのれ人を馬鹿にするか、藝妓を呼べと云つたのに椀の蓋を取れとは何たる失敬じゃ」と座を蹴立て、立去らんとする騒ぎに、女將が出て來て段々譯を聞いて見ると、大坂では籠を丸と云ふので、丸を遣せと云つたから籠をよこせと云つたものと心得、籠の御馳走を差上げたものと分りて大笑ひ。

虱

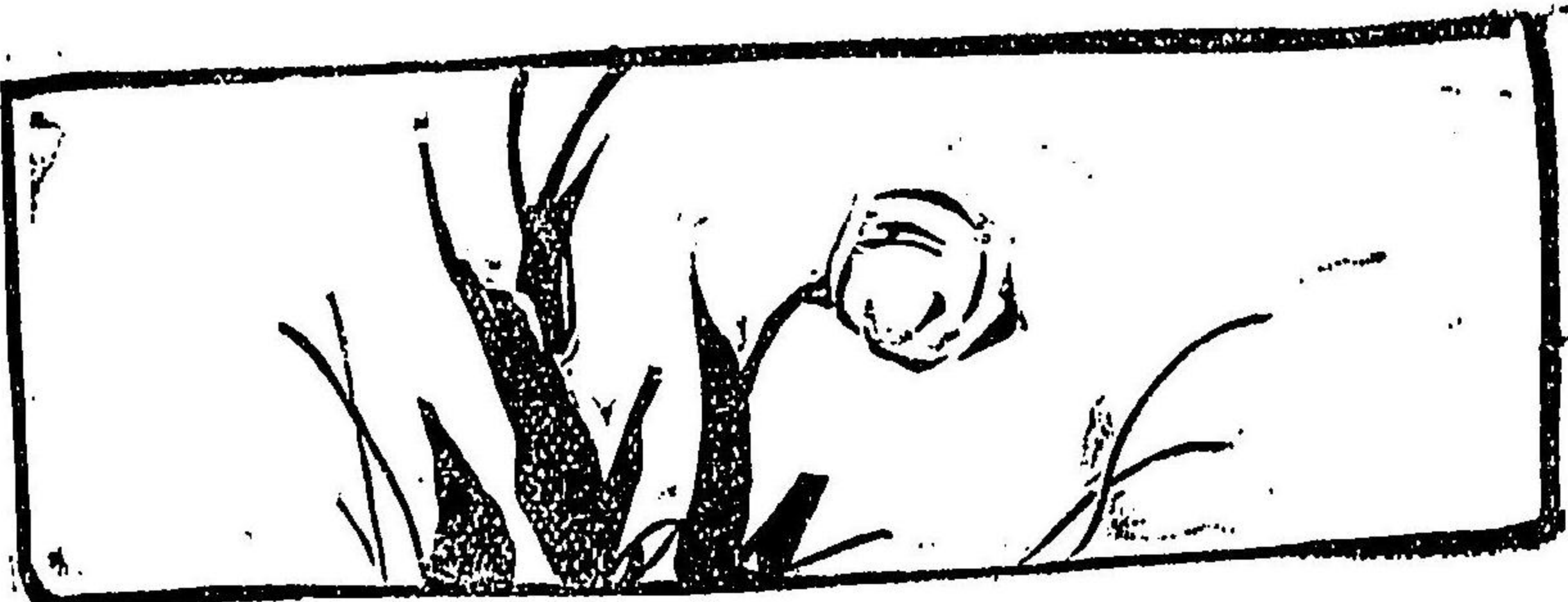


抱腹百話

獨身者の書生二人が生活をなすと、一人が寝て居る間に一人が隙を考へて虱を取始め一疋を捕へて捨處に困つてフチと噛殺すと、寝て居た男は其音に眼を覺し「ヤア君、虱などを噛んで實に汚いじゃないか」と云へば、虱取の書生が仕事を止めて寝てしまつた、すると又寝て居た書生が密と起きて來て眼を皿のやうにして虱取を始めた、一疋を取つては噛み殺し、二疋取つては又噛殺し、三疋四疋五疋十疋百疋千疋萬疋と取つたが、一々噛み殺すのが面倒になつて來て傍の火鉢へ投げ込むと、虱が焼けてパチパチと音がするので、前の書生が眼を覺し「君は最前僕に汚いと云つたが自分も噛んで居るじゃないか」と一本きめ込んだので、後の書生はグツと返事に困り「ヤ君のは生で噛むから汚いが、僕のは焼て食ふのだよ」。

謎

謎に熱心なる男が謎に心を奪られて仕事を忘れ、叱られても打れても謎で返事する、主人が風流顔をして居る癖に歌の一つも出來ず、歌の會などには密と人に頼んで作つて貰ふと、直ぐに考へて「貴郎の歌と掛けて何と解く……それ普請の職人と解く、

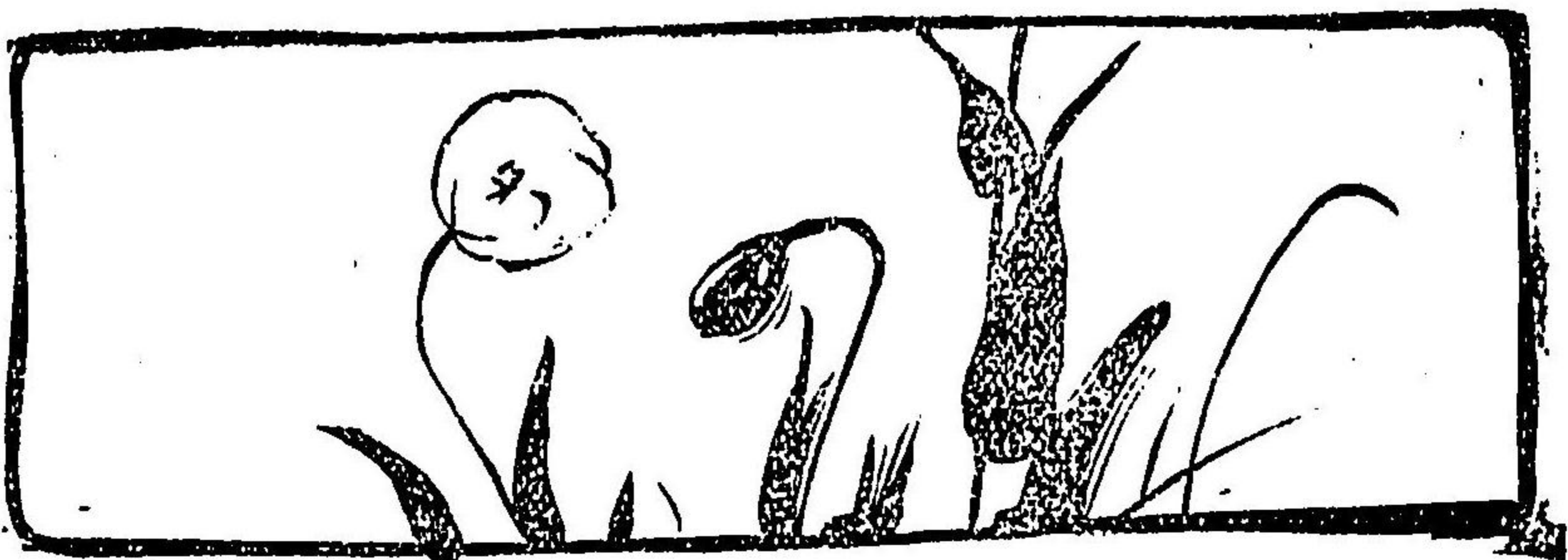


抱腹百話

其心は大工(代句)が多い」などと言つて大眼玉を頂戴する、又或時主人夫婦が喧嘩をした時、横合から「只今の喧嘩とかけて何と解きます……、それで笠の光と解く、其心は憐氣から起る」と云つて、又叱言を頂戴する、それにも又懲りずに考へて居ると、主人の友人等が遊びに来て賭博をやり始めた、すると夢中になつて真最中の頃に巡査が踏込んで来たので、狼狽騒いで逃げ廻る中に主人は度を失ひ、彼方此方と逃げ迷ふて雪隠の中へ隠れた、折から夏の真最中であつたから、堪へられぬ暑さに汗を拭きながら、臭いのを忍んで顔ふて居ると、外からグワタリ雪隠の戸を不意に明けられたのでハツと仰天して腰を抜かすと、巡査でなくて例の謎狂ひが「且那此處と掛けて何と解きます、そして夏の葱と解きます、其心は怖(硬)くて臭い」。

珠數と南無阿彌陀

ある寺の小坊主師匠に向ひて「和尚さん、佛を拜む時に珠數を使ふのは一體どう云ふ理由で御座いますか」和尚莞爾として「今教へてやらうと思つて居たのによく氣が付いた、あれはね互に煩惱と云つて人間には欲しい、惜しい、惜しい、可愛い、戀しい、



抱腹百話

辛い、悲しいと種々の煩惱が附纏ふて、其煩惱のために我々凡夫が日々夜々苦んで居るのじゃ、その煩惱を避けやうとしても佛でなければこの苦しみを離れる事が出来ぬのじゃ、處が難有い事には百八煩惱を採消するために百八個の珠をつないである珠數を手に掛けて居ると、拜む度に煩惱が消えておのづと大慈大悲の御佛の膝元に行かれるのじゃ」と聞いて小坊主大に感心し「そんなら和尚さん、檀家へ行つて法事を勤める時に、南無阿彌陀々々々と唱へるのは何の事御座います」と又尋ねると、和尚又答へて「あれはね、布施に包んである金を何枚だ(南無阿彌陀)々々と捻つて見て、其金が多ければ御經を丁寧に讀み、少なければザツと半分位讀んで置くのじゃ」。

經濟家

帝國大學の經濟科を卒業したので何でもないが、生れ付いての大經濟家があつて、他家へ行く時には兼と提灯の蠟燭を入れずに持つて行き、生憎蠟燭を忘れて來まして……など云つて一本づつ貫つて來ることにして、又烟草入と烟管だけを持つて行つて、烟草を忘れて來ましたから一服頂戴と云つて無代價で呑み、白い布を染める時に

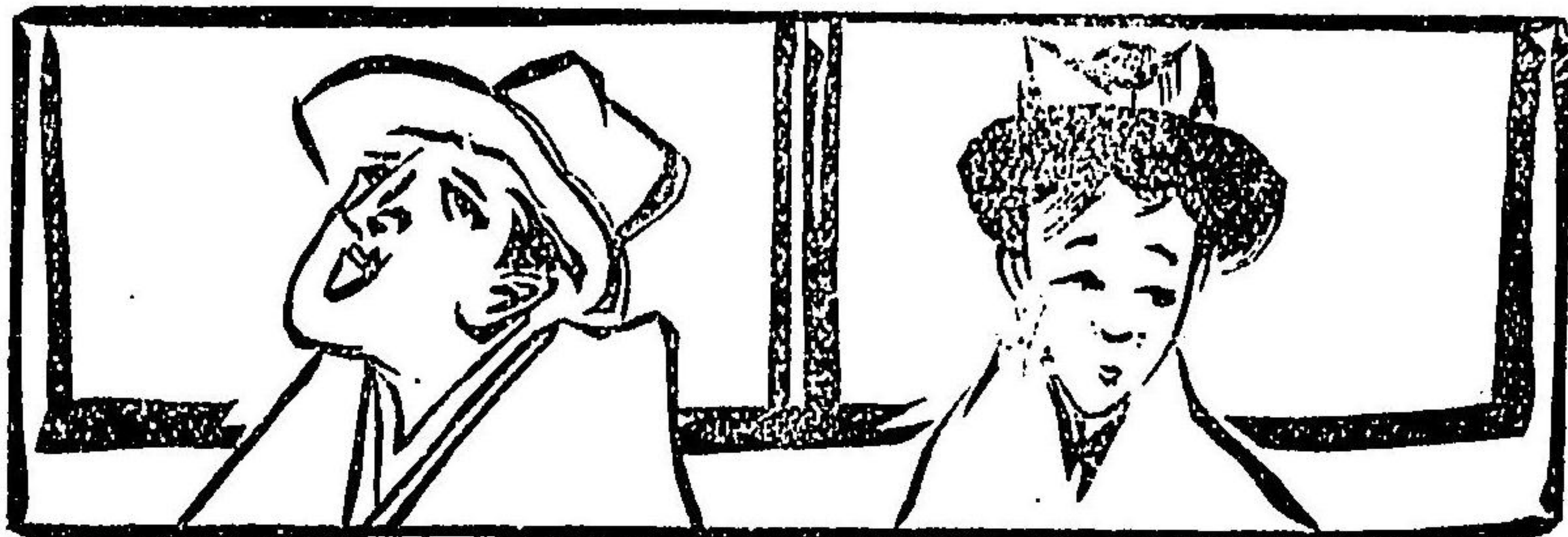


抱腹百話

は染物屋へ遊びに行き、誤つた様な風をして布を染壺へ落とし込み、萬事そう云ふ風に
 経済學を實地に試験して居たが、或時友人の結婚披露式に招かれたので、其前日から飯
 を食はずにして行き、二三日分を食込んで来やうと云ふ考へ、然るに席上で腹へ二杯
 も三杯も食つたから雪隠へ行きたくなつたが、考へて見るとこの糞を此家でした時に
 は何の役にも立たぬ、我家へ歸つてすれば肥料の賣上金がそれだけ多くなる、だから
 此家でするのは惜しいものであるから、と無理に辛抱して居たのはよいが、段々と劇
 しくなつて来て、もう堪へられなくなつて来たから立つと、大便が容赦なく出て来て
 プンと臭ひがする、あたりの人々が驚き叫んで飛び出すと、臍も腕も引くり反つた上
 へ、彼方にも黄金色の塊、此方へも黄金色の塊で、流石の大經濟家もギャフンと參つ
 てしまふた。

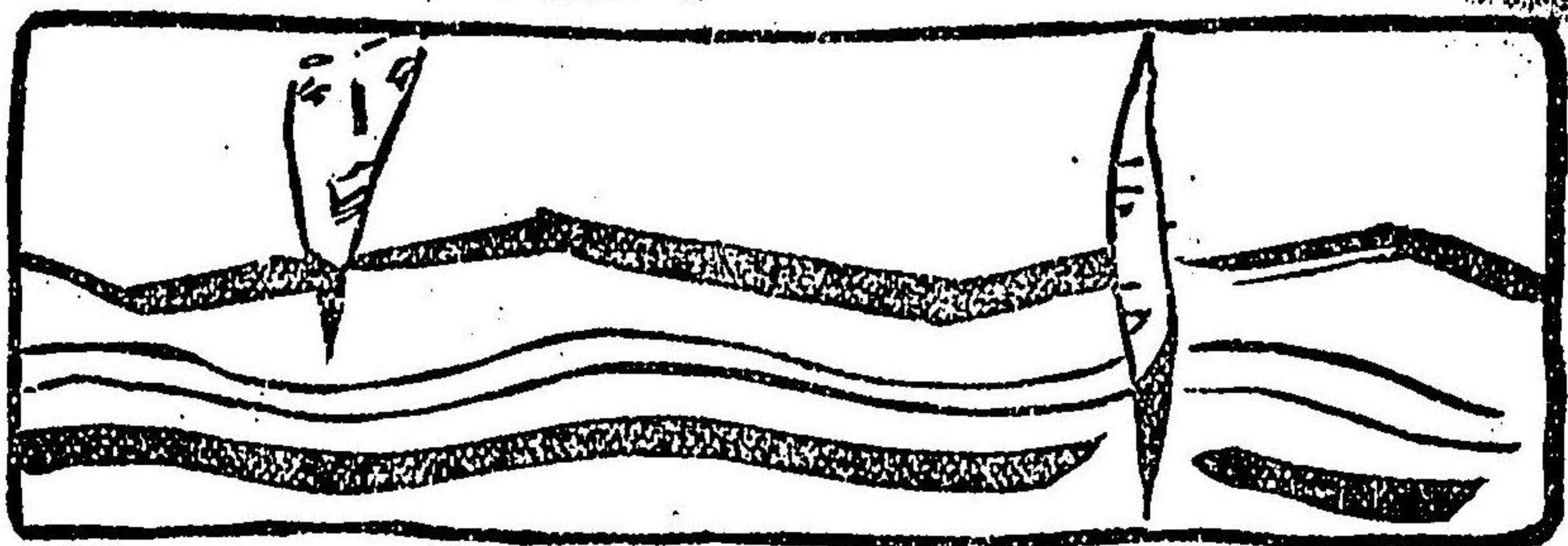
大佛と蚤の罌丸

ある人が、奈良の大佛を見て、其前の餅屋へ入つて見ると餅も人も坐布団も茶碗も皆
 小さく見えるので、不思議に思つて亭主に尋ねると、亭主は可笑相な顔をして「イヤ



抱腹百話

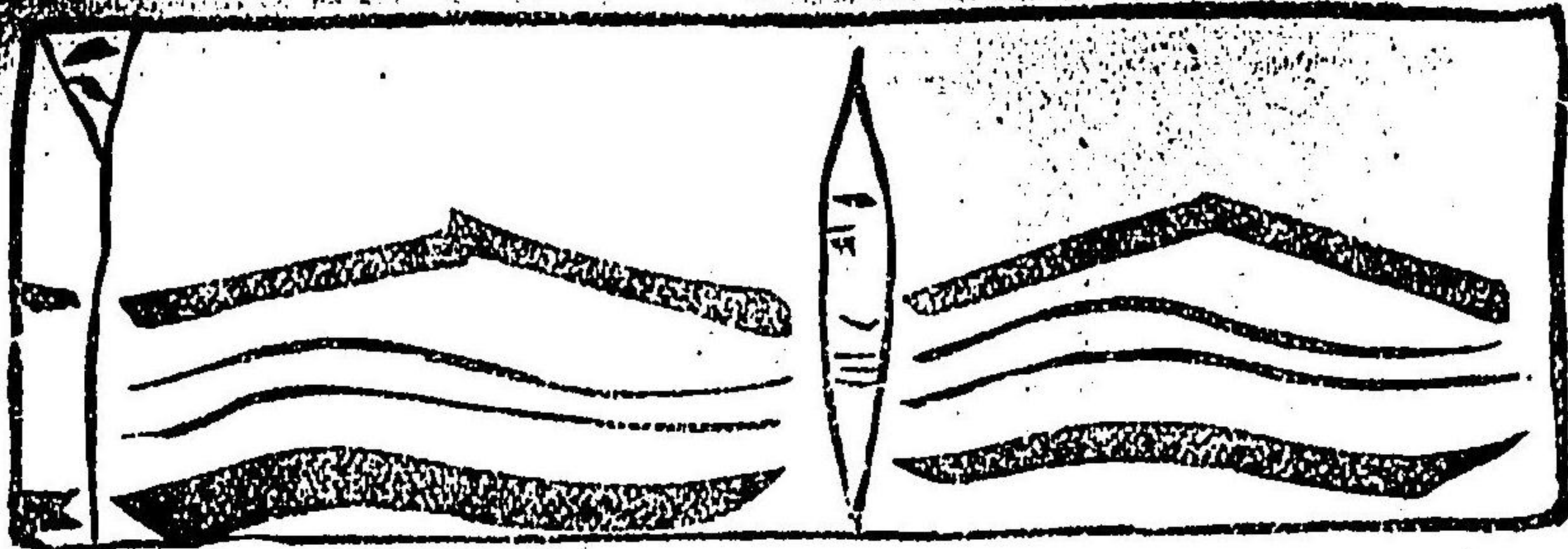
別に何も小さいものはありませんが、大方大佛様の大きいのを見た眼で見なさるから
 それで何も彼も小さく見えるのでしやう」と答へた、そこで成程と思つて一ト先づ家
 へ歸つたが、此度は小さい物を見て置いて、其眼で他の物を見たら大きく見えるか見
 えないかを試験する爲に、顕微鏡で蚤の罌丸の皺の中に住んで居る蟲の眉毛の先に止
 つて居る蟲の羽根の毛の先に止まつて居る蟲を調べて見て、其眼で他の物を見て見た
 處、何でも彼でも馬鹿に大きく見えて仕方なく、まるで何が何やらサツパリ譯が分
 らぬやうになつてしまひ、向ふから大きな飛行器が落ちて来たと思つて仰天して逃げ
 ると、よくよく見れば一疋の蚊であつた、其次に大きな鯨見た様なものがコロコロと
 轉がつて来るので、これは大變下へ轢かれたら生命がないと忙して逃出すと鼠の糞で
 あつた、それから又大きな洞穴があつたから、不思議に思つて入つて見やうと思つた
 ら自分の女房の鼻の穴であつた、これはと仰天すると又眼の前へニューと突然に見た
 事のない大木を出されたので、もしも倒れて来たらそれこそ大變と飛のくと、裁縫を
 して居た母親が眼が悪くて困るから、糸を通してくれと云つて針を出したのであつた。



抱腹百話

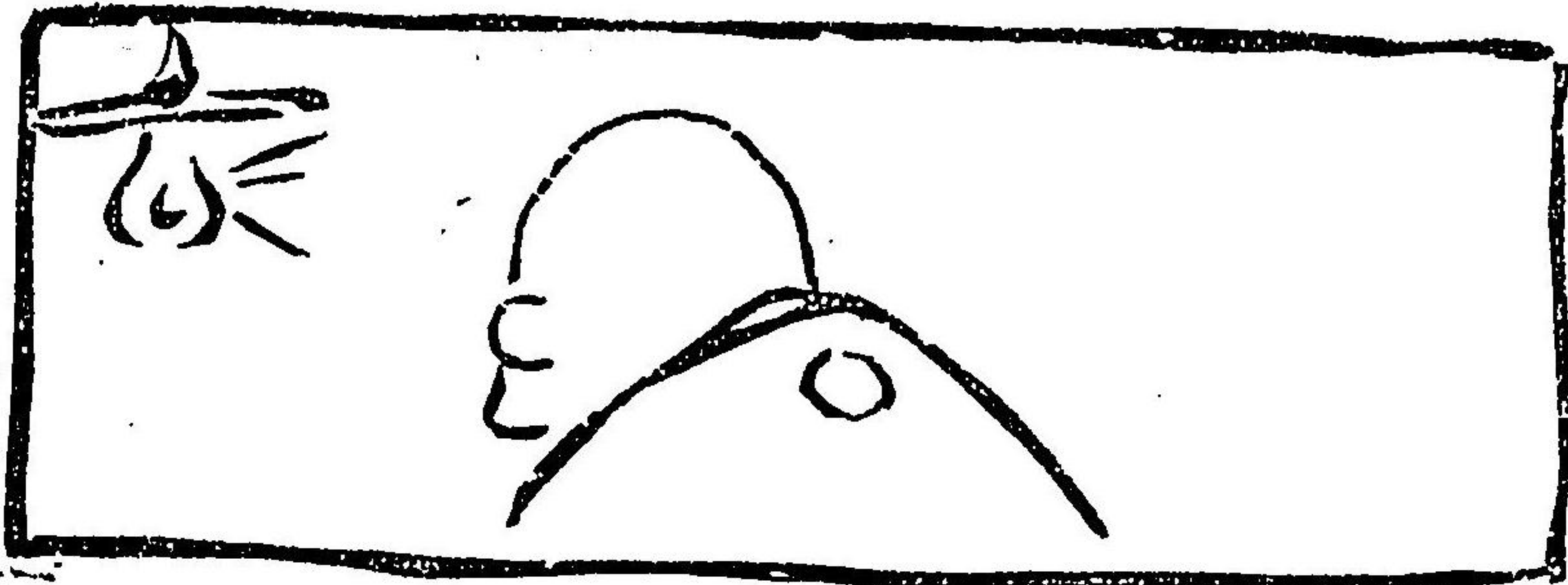
世に盲者滅法界と云ふ事あり、自分の粗忽を棚にあげて目のある者を罵ることあれども、これは不具の事故勘辨をしてやらねばなるまい、盲目先生一寸道を踏外して石地藏に突當り、見えぬ目を見張り杖を打振り大聲あげて「コリヤ／＼貴様は眼のある癖に人に突當るとは不都合千萬じや、それとも同じ盲者か、これほど云ふのに返事せぬとは慥か聲か馬鹿者か、己は盲者でも耳は聞えるぞ、口は不自由でないぞ、貴様は聾で聾で盲者か、この大不具者め」力味かへつて怒鳴つて居る處へ通行人が認めて堪りかね「これ盲者の御方、それは地藏様だから相手にしても仕方がない、蚊が喰ひ付いても蠅がたかつてもピタともせぬ御方じや」と注意されて始めて気が付き「ヤアこれは地藏様に云ふのじやない、もしも相手が人間であつたらかやうに申すのじやと云ふことを話して居たのじや、ナニ地藏様なら捨とけ投とけ(佛)／＼」。

二人の妻



抱腹百話

茲處によく稼いで金を貯める男に馬鹿な女房があつて、朝から晩まで晩から夜中まで嫉妬ばかりして居るので、トウ／＼亭主も家に居るのが面白からぬやうになつて、自暴から遊んで終ひには放蕩となり、又一方には女郎買にばかり凝つて家を忘れて居る男に極く賢い女房があつて、亭主がどんな氣儘な事をして嫌な顔一ツせず、每晚どの位遅く歸つて来ても些とも嫉妬をせず、其上酒を温めてチャンと待つて居る、その酒の加減が何時歸つて見ても勢過ぎす又冷たからず、どうしてこんなに具合よく出来るのあらうと亭主は不思議に思ひ、或時女郎買から歸つて来て女房に尋ねると「はい、宵の中に温めて置きますと歸るのが遅くなると冷くなつてしまひます、又歸つてから火を起して酢をすると手間取つて直ぐに間に合ひませんから、どうかして貴郎が何時でも歸つたら直ぐに召上られるやうにと種々考へまして、毎晩徳利を妾の肌で温めて待つて居りました」と聞いて流石の放蕩男も涙を流し「あゝ乃公が悪かつた、そんな事とは夢にも知らなかつたのだから免してくれ、貴様が貞節なるによつて今日只今眼が醒めた、これから女郎買は斷然やめる」と大に今までの行ひを悔ひ、それから女房を大切に、女房は又益々亭主を大切に、稼いで溜めて働いて立派な財産家になつ



抱腹百話

た、目出度し。

氷店

書生體の男が氷店へ飛込んで来て「オイ熱い水を一杯呉れ」主人は呆れた顔をして「そんなものはありません」と断ると又「冷い湯を一杯呉れ」と云ふ、又断ると今度は「辛い砂糖水を一杯呉れ」と云ふ、又断ると其儘歸つてしまふたので、傍て見て居た細君が不思議な顔をして「今の客は發狂者でしやうか」と尋ねると、主人は笑つて「ありや買ひに来たのでない、大方ヒヤカシニ來たのじや」。

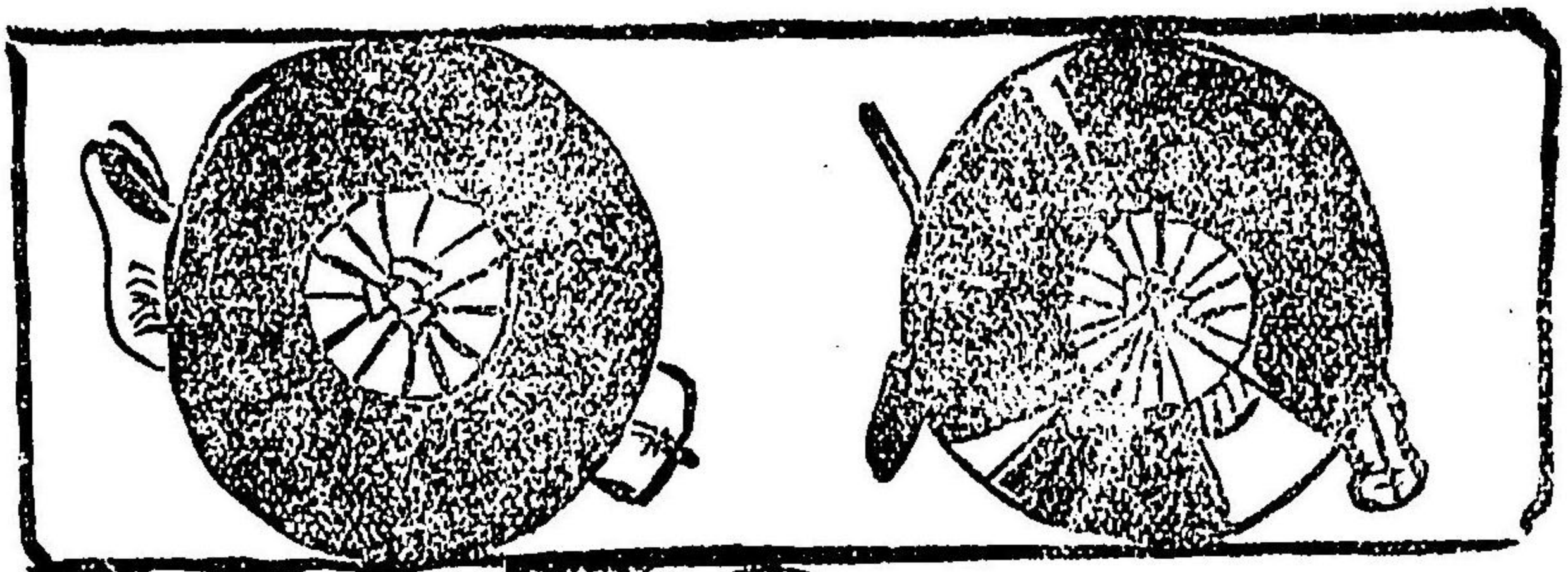
鼻糞丸

横著小僧あり、主人より何か用事を云ひ付けると俄に腹痛が起つて些とも動かず、其癖に又店の隅でグウ〜と居眠をなし、叱れば泣き、捨て置けば増長し、奈うにも斯うにも仕方がないので主人大に困り、今日は一つ偽病氣の化の皮を引ひいてやらんと考へて居る、とも知らぬ小僧は又々用事が出來たので早速平素の通り腹痛を



抱腹百話

起し「あゝ痛い〜腹が痛い〜と」かねて用意して置いた唐辛の粉を窶と袂から出して眼の中へ摺り込み、ホロ〜と又ホロ〜と豆粒程の大涙をこぼし地團駄踏んで泣いて居ると、主人は又始まつたなアと思ひながら態と素知らぬ顔をして「あゝ可愛想に、誰か世話をしやれ、まて〜私がよい薬をやるぞ」と印籠を開けて丸薬を出してやると、小僧は馬鹿旦那奴まく欺してやつたぞと陰でペロリと舌を出し、急いで布團に頭を突込むと直ぐに高野、其處へ旦那が枕元へ來り「小僧加減は奈うじや」と揺り起されて、折角よい心持に眠つて居るのを邪魔しに來やがると思ひながら「へイ難有う、誠に結構な御薬で御座りますこと、飲むと直ぐに癒りました」と形呆け眼をパチ〜させて口から出まかせの好い加減な事を云ふと、主人は可笑さに堪へず「あれはね、乃公が新發明の鼻糞を捻つて拵へた丸薬だ」聞くより小僧始めて眼が醒め「へエ……そんならあの丸薬は貴郎の鼻糞、それとも知らず飲んでしまふた、酷い事をする……」主人は額に青筋を立て「黙れ、貴様が何時も〜腹が痛いとかが痒いとか吐して動かぬから、嘘か眞實か試して見るために飲したのだ、それをよく利いたとか辻つたとか轉んだとか人を馬鹿にして居やがる、今日と云ふ今日こそはもう

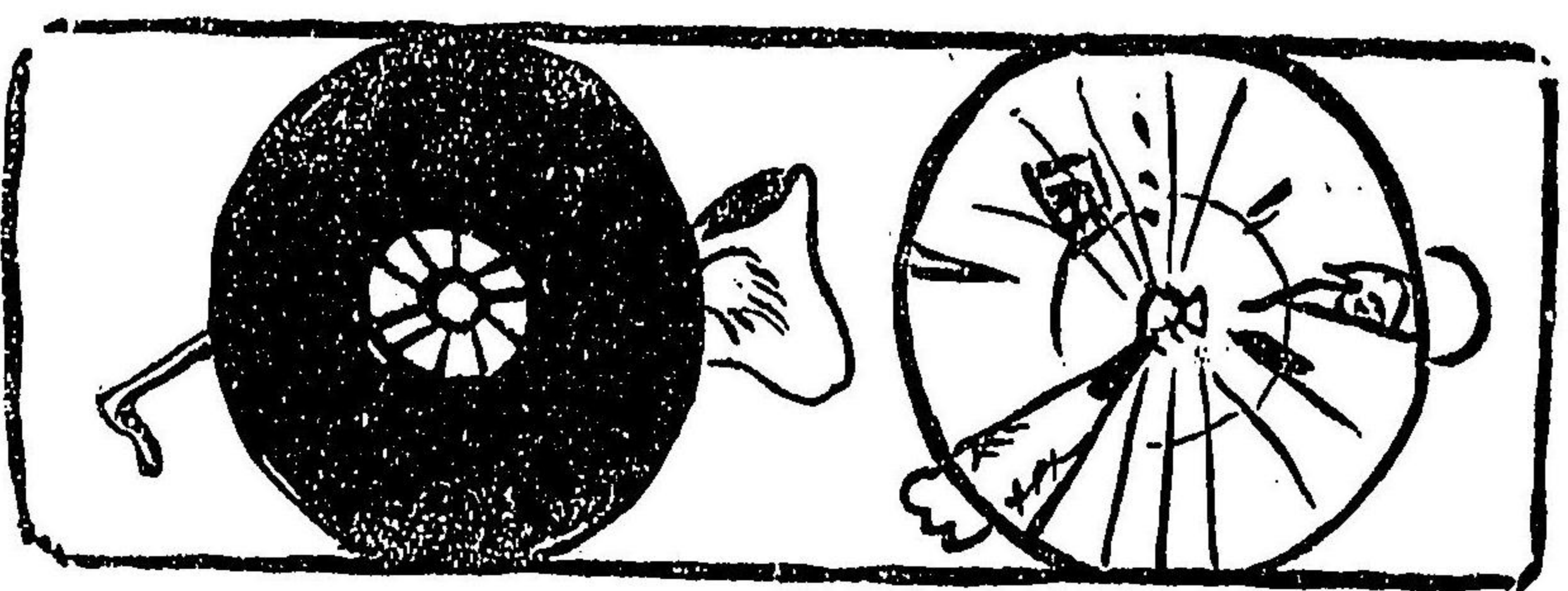


抱腹百話

堪忍袋の緒が切れたぞ。突然拳を揚げて小僧の頭をホカリ〜と滅多打に打つける、打れてワイ〜と泣き出す、主人は益々怒つて「エ、矢筈しい、今まで横着をして居た代りに、サアこれから一生懸命に身を粉に碎いて動いて稼いで働かねば承知せぬぞ」と怒鳴る、小僧は吃驚仰天コリヤ大變、何とかして逃げる好い工夫はないかと考へて居たが「旦那様、腹痛はもう癒りましたが、糞糞を飲みましたから又胸が不快くなつて来て動けません」。

炭團屋

商法人同志の親と親とが互に娘と息子とに許嫁の約束せしが、娘の方の家は段々と榮ゆるに引替へ、息子の方の家は段々と失敗して遂に炭團屋となり、手も足も顔も眞黒になりて働いて居ると、娘の親は大に驚き悲しみ、最愛の娘を炭團屋の妻となしてあはれ雪の肌を眞黒にせしむると忍びずとて、断然離縁して好き處へ嫁入させんとした息子大に歎じて曰く「たとへ富貴の家へ嫁入するとも、家庭の冷かなるときは反て貧家の温かなるにしかず、榮華を盡すと雖も夫婦間に圓滿を缺くときは、貧しくとも和

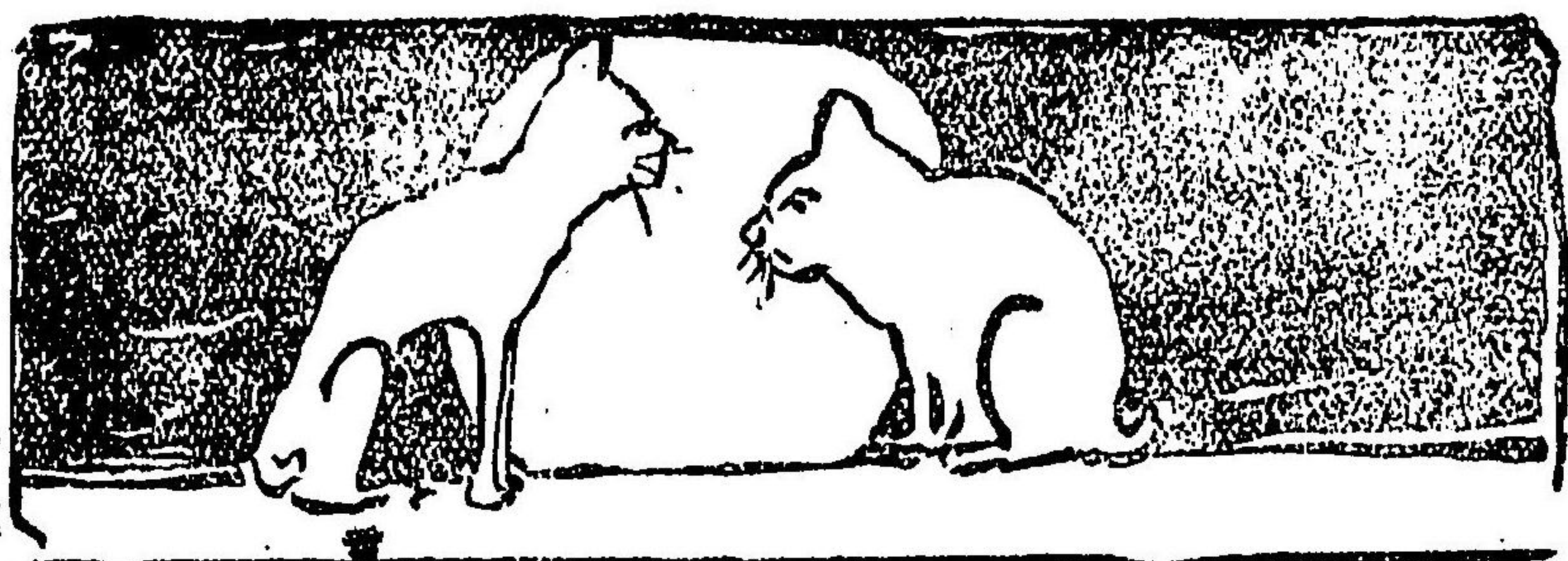


抱腹百話

合するに如ず、我愛の温かなることは炭團の如し、我心の圓くして角なきと又炭團の如し、人間は宜しく炭團の如くなるべし、故に我炭團屋となれり」と、娘の親大に感じて遂に嫁入させた。

妻の頓智

薄情極る邪見な良夫と、至極優しい貞操の正しい妻と暮して居た、良夫は何時も妻を嫌つて虐待をする、妻はそれを少しも恨みず何事も良人の言葉に従ふて居たが、良人は飽きて妻を嫌つてどうかして逐ひ出してしまいたいと種々考へ、無茶苦茶に怒つたり叱つたり擲つたり踏んだり蹴つたり、或は彼様すれば此様と云ひ、此様すれば彼様と云ひ、無理難題ばかり云つて困らせて居た、けれども妻は何時も涙を吞んで凝と辛棒をして居た、すると或時良夫が外から歸つて来て、妻が飯の準備をして魚を焼いて居るのを見るより赫と怒り「この魚は煮れば美味いのには詰らぬ事を爲やがる、この馬鹿女奴」と打きつける、妻は口惜し涙を押へて「はい煮たのも拵へてあります」と云つて戸棚から出したのを見て又怒り「あのれ煮女め、刺身にすれば美味いのを知ら

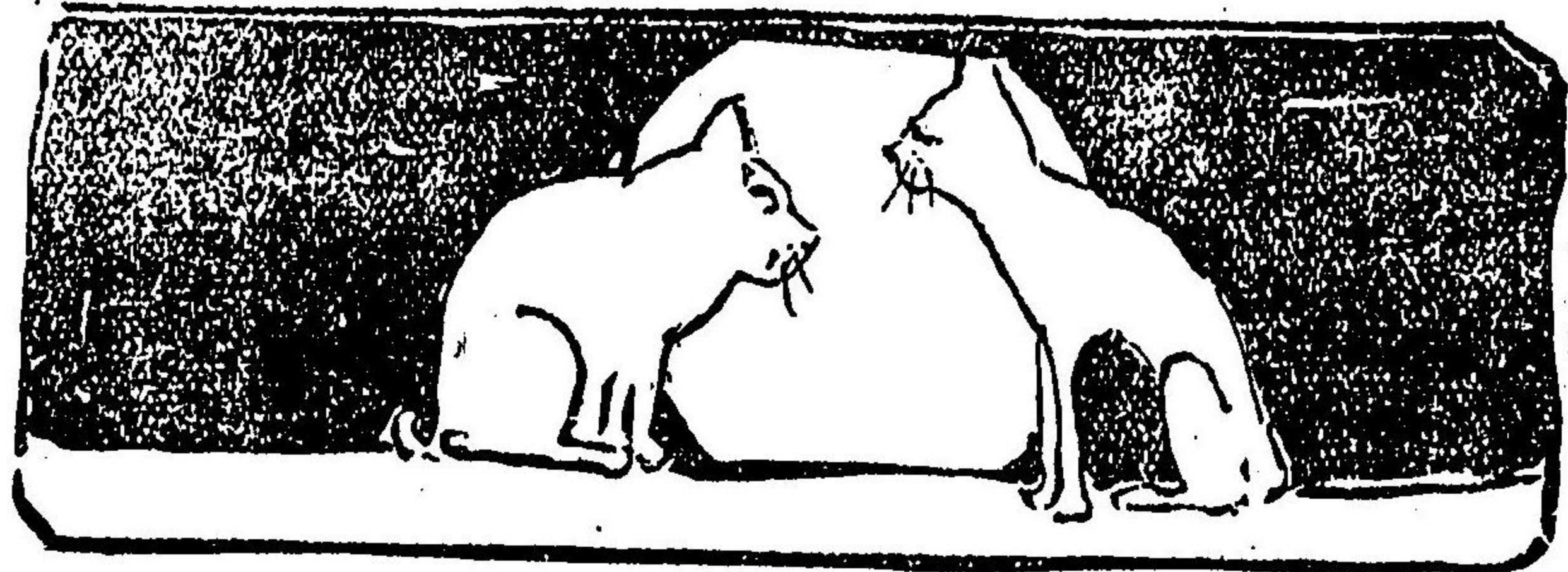


抱腹百話

ないか、衰たり焼たりして味を殺してしまふ」と怒鳴り立てる、妻は泣ながら「はい、はい、はい刺身にしたのも拵へてあります」と又戸棚から持出したので、流石の男も大に後悔し、それから妻を大切にした。

亭主の宿六

ある家の女房が亭主の留守中に隣の女房に向ひ「私の家の宿六は眞實に馬鹿で仕方がない」と話しかけると、隣の女房は「お前さんは何時も宿六と云つて居るが、その宿六と云ふのは一體どんな處から起つて、又どんな理由で云ふので御座います」と質問した、すると此方の女房は澄し込んで「はい、その理由は第一に大酒を呑む事、第二に賭博をする事、第三に女郎買をする事、第四に朝寝昼寝をする事、第五に商賈が下手な事、第六に甲斐性なしの事、合して六つの馬鹿がありますから、連れ添ふ妾こそ不幸福で眞實に苦勞が絶へません」とポロ／＼涙をこぼす、隣の女房聞いて大に同情し「妾の宿にも矢張り馬鹿がありますよ、第一に女房を粗末にする事、第二に女房に不親切な事、第三に女房に嘘を吐く事、第四に女房の云ふことを聞かぬ事、第五に



抱腹百話

女房に無理を云ふ事、第六に女房に不孝な事、丁度合して六つ、その外にまだ一つあります、それは妾が持参金を持つた來たのを皆費つてしまふて其恩を知らぬ事、だから妾の方などは宿七で御座いますよ。」

高野山

紀伊國の高野山と云ふ處は昔し丹生明神様の山であつて、一度参詣した人は御承知の通り壇場の金堂の傍に明神様の社がある、その明神様が白と黒との犬を連れて獵をして居た處へ、空海上人事弘法大師と云ふ坊主がやつて來て、この山を私に借して呉れと云つたが明神様が聞かない、そこで又大師が、そんなら一寸十年間借して呉れと云ふので明神様もやつと承知して、サテ十年間借用の證文を取交して居る内に、大師は明神様を油断さすために一寸魔法を使つて向ふへ美しい女の姿を顯したので、その麗しいのに明神様も恍惚として眺めて居る間に、大師は隙を考へて十の字の上へ一ツ點を打つて十の字にしてしまふた、明神様が氣が付いて見ると十年が千年になつて居たので屹然仰天したがもう仕方がない、トツ／＼千年貸すと其間に又トツ／＼弘法大



抱腹百話



抱腹百話

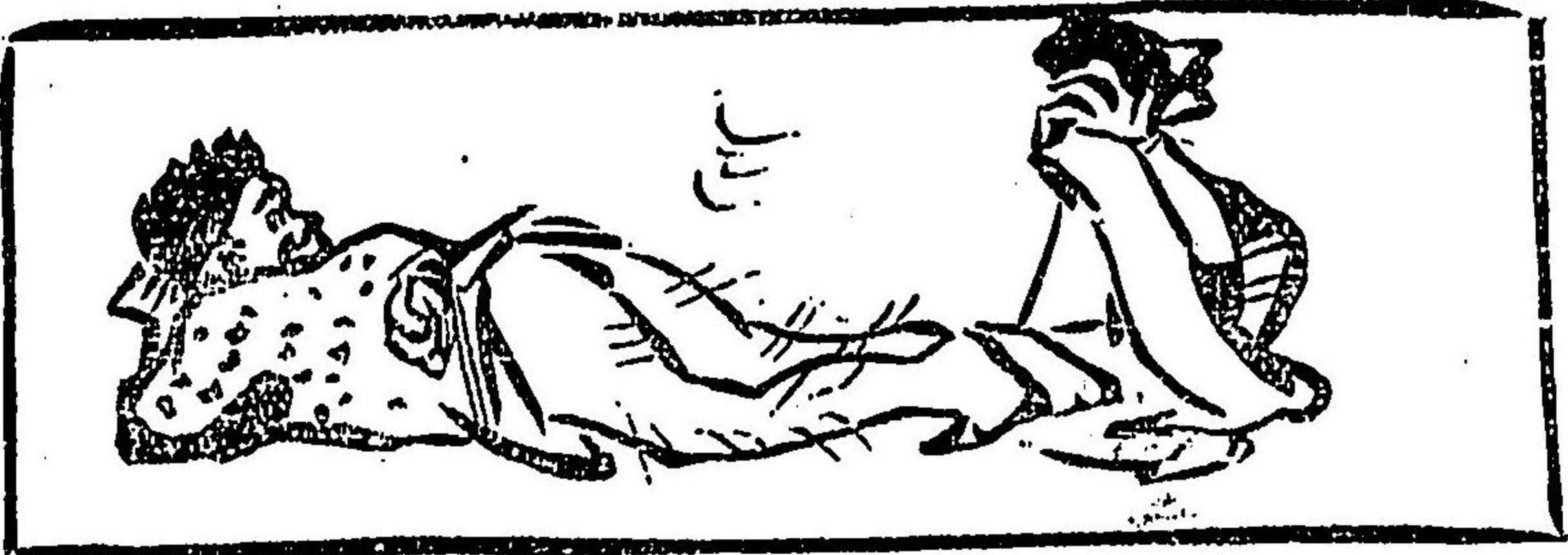
師の山にいられてしまふた、そこで明神様が大變女を嫌つて、女が此山へ登ると地震が起つたり、晴天が俄に極き曇つて凄しき雷鳴が起つたり、天變地妖其他いろ／＼の凄じい事が澤山あるので、トウ／＼この山を女人禁制にしてしまふた、然るに近頃は明神様も居眠りもして居るのかそんな事が無くなつたので、追々と女も住む子も生むやうになつて、本堂の後に襦袢も乾せば血の道薬を賣る看板も大分殖へて來た、そこへ又魚も肉も賣に來る天蓋もある、天蓋……イヤ天蓋では素人には分らぬかも知れぬが南の事で、南とは蛸は骨が無いから皆肉で則ち南である、それから卵を白茄子、雑魚はブリキの罐に詰めて置いて念茶と云ふ、次に鯉節を巻紙……これは削くほど減る故である、僕が參詣をして寺へ泊つた時に臺所へ水を呑みに行くと、其處で鯉節を削いて居た坊主が僕の足音に訖驚仰天し、遽て、出刀庖丁を後へ隠し、鯉節を僕の眼前へ突き出して「あ、お客様、この庖丁は誠によく、さ、さ、切れます」と云つて居た。

小僧の漢語

馬鹿小僧が出來て、無暗矢鱈に漢語を使ふて威張たがり、或時番頭に向ひ「番頭さん、品の價が下つた時に何と云ひます」番頭答へて「下落すると云ふのじや」小僧感心して「なる程、そんなら番頭さん、價が上つたら何といひます」それは騰貴すると云ふのじや、「へい、下つたのが下落、上つたのが騰貴、下つたのが……下落、上つたのが……騰貴」と繰返して居る處へ臺所でグワタリと大變な物音、小僧飛んで行き大聲で「猫が來て魚を取つて皿が壊れて井戸端へ下落しました」番頭驚き「何に猫に魚を奪られた、畜生何處へ逃げた」「屋根へ騰貴して逃げて行きました」。

香奠と祝儀の間違

粗忽の大先生あり、或時一日の内に友人の婚禮と葬式に出ねばならぬ事となり、香奠と祝儀とを拵へて懐中して出かけたが、先づ婚禮の處へ行つて後に葬式の處へ行く筈であつたのを、誤つて葬式の處へ先に行つてお負けに又誤つて祝儀を出して「御目出度く……」と云ひかけてハツと氣が付いて見ると、先方の主人が額に青筋立て、ギョツと睨んで居るので仰天し、狼狽しながら「イヤ御目出度く御全快遊ばして、こ

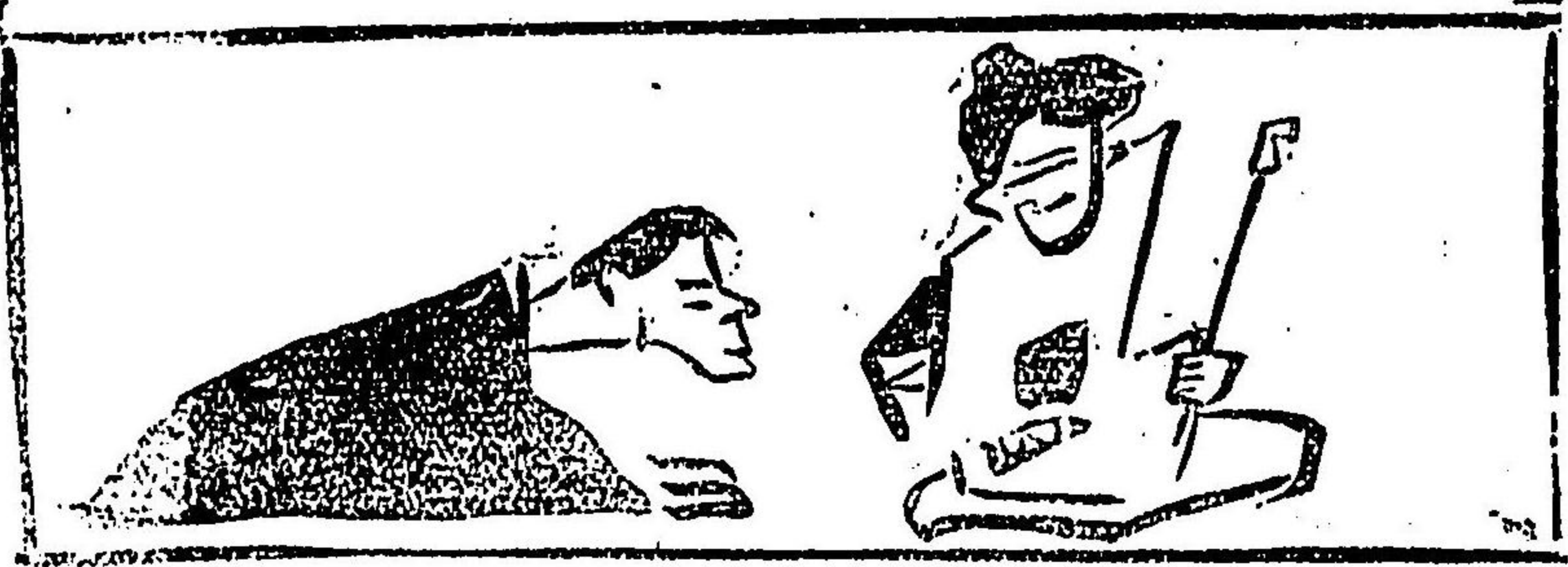


抱腹百話

の祝儀を拵へて差しあげるのを待つて居りました甲斐もなく……」と云ひながら又懐中から香奠を取出し「御死去遊ばされるとは驚き入りました、どうも御氣の毒様で、御愁傷で……」と御茶を濁し、密と祝儀を袂へ入れて冷汗を拭いたのであつた。

手の届き過る人

世の中には随分と手の届き過る人もあるもので、死んだ跡の事まで世話の入りぬ様にして置く人がある、石黒元齋男の如き其の一人で、毎年遺言書を書き直して何時死んでも差支のない様にしてある。又野田裕通男の如きも其一人で、是れは中々に精細なもので家事萬般の事は申すに及ばず、通知する人の人名録までが出来て居て、誰には葬儀係誰れには何と其役割までも定めてあつて、是れも毎年修正されるさうで、俗に生前に石碑を用意して置くは長壽の縁起だとかつて舊慣もあるさうだが、兩男が壯者も及ばぬ元氣なは必竟するに是等用意の届き過ぎたる縁起かも知れない、特に石黒男の如きは、多忙な人々に會葬などに無益な時間を消さするも氣の毒なれば、葬式はほんの身内に止め、其他には何月何日死去何月何日葬式致し候間此段御通知申上候、と



抱腹百話

云ふ位な一本の通知狀で済まそうとの事だ、石黒男百歳の後には定めて此の通知狀で出し扱を喰ふ人も多からうと云ふ。

相撲狂

これは和歌山縣伊都郡に於てあつた實話であるが、仇名を相撲狂と云はるゝ相撲好の男があつた、當時大坂の力士連が地方巡業に來た時、狂氣のやうになつて騒ぎ出して仕事に手につかず、細君に叱られて漸く商賣に出て行つたものゝ、又相撲の事を思ひ出し、足が識らず知らず相撲場に向つて何時の間にもやら見物して居た、すると幕の内を取組も濟んで愈々大關の取組となるや、歡聲は場内に滿ちて沸くが如く、東西より顯れ出てたる大關、何ても猫の鼻とか、豚の臍とか云つた、イヤそんな名でなかつたがそれとして於いて、その勇ましさは龍闘虎争の勢ひで、観客は皆酔へるが如く、愈々勝負の付いた時には祝儀を投げるもの、帽子を投げるもの、或は羽織を投げる者暫時は雨の如くであつた、相撲狂はもう夢中になつてしまひ、持つて居た財布を投げ出してしまひ、さて家へ歸つてから始めて氣が付き、又々妻君に叱られて頭を搔



抱腹百話

四〇
いても逐ひつかず、其日暮しの稼ぎ人が有りだけの金を投げ出してしまふたのだから明日の糊口にも窮する譯であるから、止むを得ずこの次第を述べて取り戻しの談判に及ぶと、大關の方よりは「一旦貰つた以上は決して一文も返却する譯には行きませぬ」との返答に落膽し「あゝあの金が無くなつては食ふことが出来なから、己はもう死ぬ」と騒いで居る處へ、ガラ／＼と荷車を三臺人足に挽かして關取が尋ねて來り、恭しく禮を述べて云ふやう「未熟なる我々の相撲をそれほどまでに熱心に御覽下さつたのは有難い事であるから、その御禮として甚だ輕少なから何卒この品御受取下されたい」と云つて車より米を降して庭へ十五俵積んだ、亭主も妻君もこれは夢かとはかり嬉び勇んで、その米を資本として米屋を開業し、一生懸命に稼いで立派な商法人になつた。

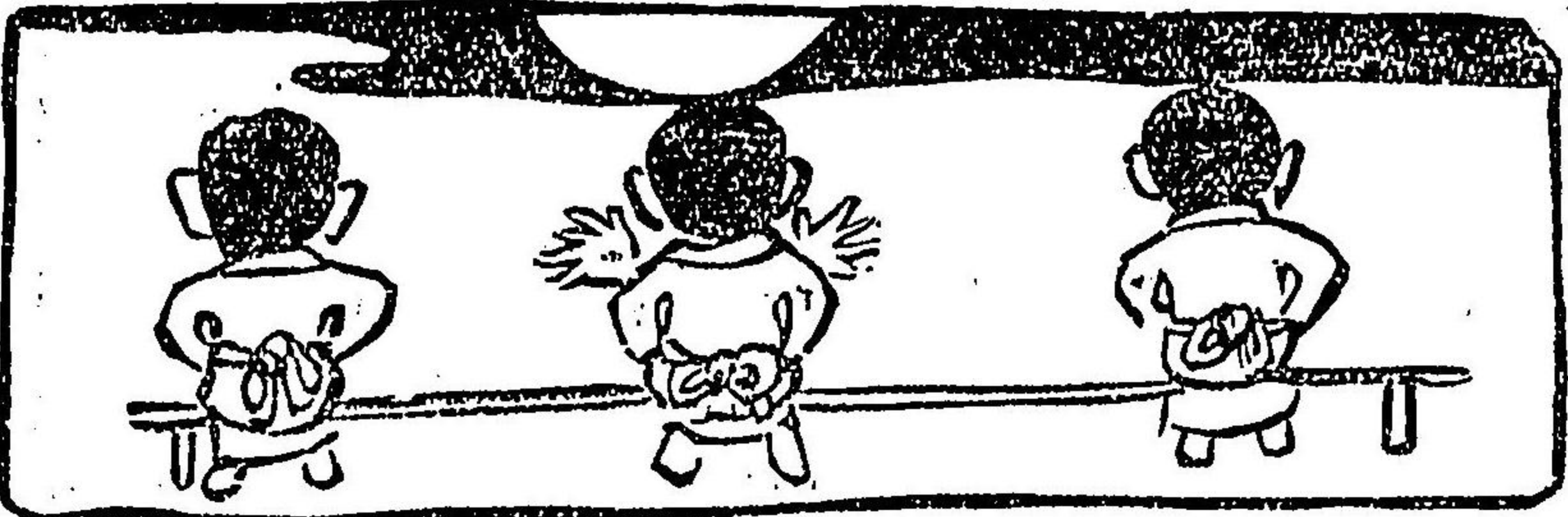
子僧の風呂加減

「あけましてお目出度う御座ります」と元日の朝番頭が主人の前に、恭しく手を突いて云ふと「目出度のいもう」と主人も機嫌よく新年を迎へ、それから奥様も息子もお嬢



抱腹百話

様も女中皆も「お目出度う御座ります」と祝ひあふて居る處へ、一疋の馬鹿小僧飛來つて「ア、眠とう御座ります」と云ふ、この小僧餘程念の入つた馬鹿者と見へて、主人が新年の初風呂を焚いて皆なを入れて休まさらと思つて、この小僧に風呂焚を命令になると、いつまで待つても湯が沸かぬので催促しても返事がないので、主人自ら行つて見るとグラ／＼と居眠をして居ると云ふ有様、主人は嚇と怒つて叱り飛ばすと今度はドン／＼と焚いて／＼焚きぬいて「まだか」と催促すると「もう沸きました」と答へる、主人心得て片足這入つて仰天し「熱、熱、大熱」と熱傷して「馬鹿小僧奴、水をうめぬか」と叱ると、今度は又ザブ／＼と水を無暗に入れて冷くしてしまひ、それとも知らぬ主人が這入つて此度は寒さに顔ひ上り「ヤア風邪をひきそうだから早く焚け／＼早く焚かぬか」と急ぎ立てると又ドン／＼焚いて又主人に熱傷させ、水をうめれと云へば又冷たくしてしまふたので、主人も堪忍袋の緒を切らして拳を揚げて擲ると、大聲を揚げてワイ／＼と泣くので、番頭驚いて飛んで來て「旦那様、元日初々から泣聲を揚げるのも縁喜が宜くありませんから、何卒勘辨してやつて下さい」と仲裁に入る、主人も點頭さ「私もそう思つて辛抱して居たがのう、餘まり馬鹿

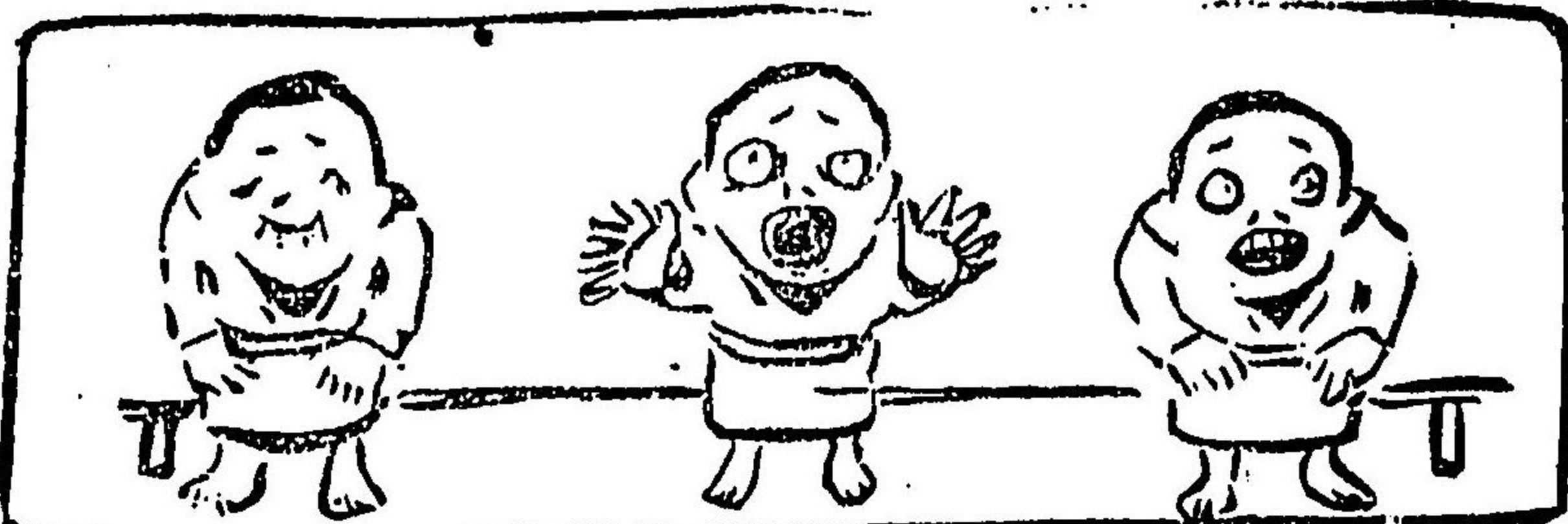


抱腹百話

て仕方がないから一寸撲つとあんなに泣くのじゃ、眞實によく泣く奴で困るのう、あれは一體蛙か何かの生れ變りじゃないかしらん」番頭首を振つて「蛙など云つては又縁喜が悪う御座りますから、私が祝ひ直して、鶯の生れ變りとして置きまじやう」と云ふ、主人不思議相な顔をして「番頭どん、そりや何故だ」「へい其證據にはうめ（梅）に来てないて居ります。」

妻君の氣轉

亭主の不在中に妻君が只一人留守をして居る處へ、夜中強盜が三人押込んで来て、サア金を出すか生命が惜しいか、とち定まりの威嚇し文句をならべて大刀を目の前へ突付けると、妻君はギョツとして一度は頭へ上がったが、元と賢い婦人であつたから、早速氣轉を利かして態と打測れて涙を拭く眞似をして「はいく昨日良人が虎列刺病で死まして、家財道具は明日皆焼き捨てるので御座いますから、何卒御遠慮なく何なりとも御持歸り下さい、あの笹笥の抽出に鍵も風呂敷もありますから」と聲を疊らせて眞實らしく云ふと、流石の強盜も吃驚仰天顔色を變へて、一物も取らずに逃げ



抱腹百話

て行つてしまふた。

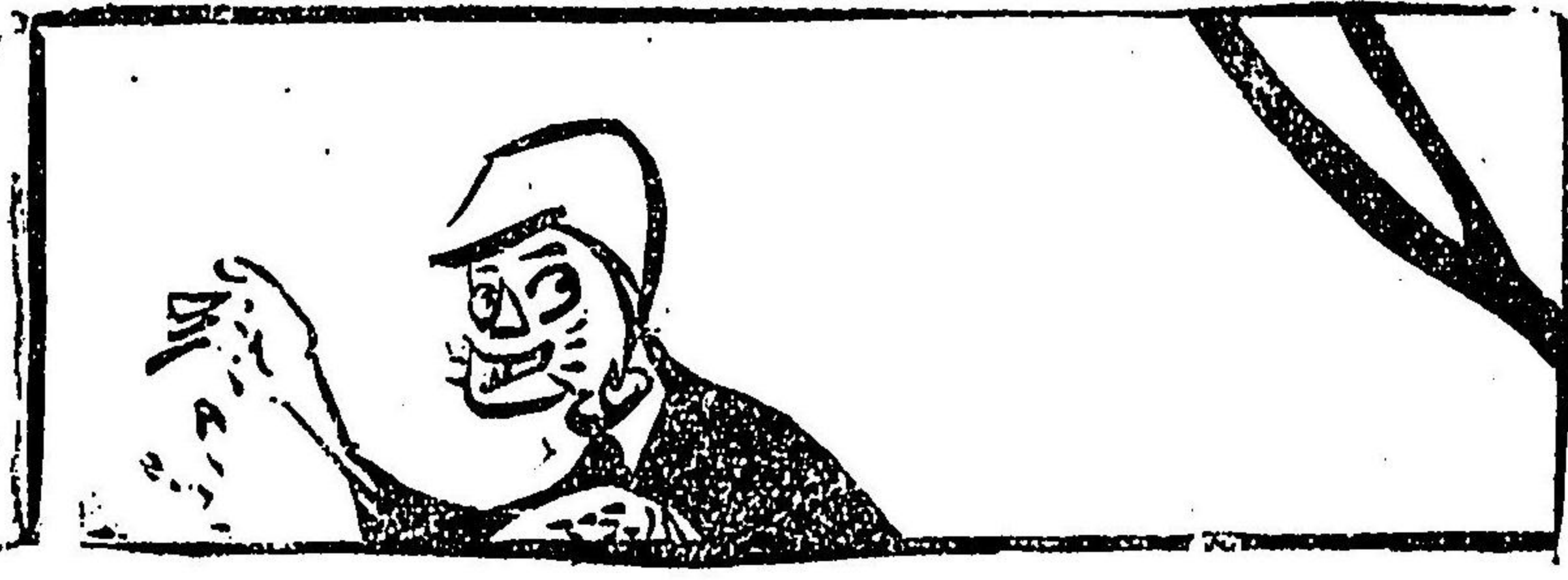
嫉妬の角

病院の一室で親切な看護婦が患者に向ひ「御氣分は如何で御座いますか、熱が高いので姜心配をして居りましたわ」と優しい聲で云ふと、患者はその精神に感伏すると共に嬉しくてならない「はい御親切に難有う、今日は實に氣分がよくて病氣もなくなつた様に思ひます、これと云ふも貴女の行届いた看護の御蔭です」と云つて、あゝ世に優しい女もあればあるもの、其誠心と云ひ親切と云ひ實に感心じや、それに家の女房は邪見て横著で……あゝ自分ほど不幸福なものはない、あの看護婦のやうな女と夫婦になることが出来たらどんなに幸福であらう……とこんな事をフト思ひ浮べて溜息を吐いて居る、とも知らぬ看護婦は又苦しくなつて来たのかと早合點して背を撫て「奈うなさいました、御遠慮なく仰つて下さい」と云ふ、患者は益々感激して「イヤ貴女が餘りの御心切に嬉しさが胸につかへた處です」看護婦は顔を赤くして「不束なる妾の看護をそれほどまでに思つて下さるのは……」とハラ／＼として「この上



抱腹百話

は一日も早く癒して御壯健で暮すやうに祈ります、不及ながら妾が誠心を籠て看護を致します。「辱けないです。」いへ難有存じます。「貴女の御親切は忘れません。」その御言葉が嬉しう御座ります」と互に涙を流して居る處へ、患者の女房姉姑の髪振亂して夜叉の如く暴れに／＼と這入り來り、この様を一目見るや忽ち飛付かんばかりの勢で睨みつけ「この畜生、よくも人の良夫を寝取つた、看護婦など、威張つて居ても大方妾が賣淫か女郎上りか……」と口を極めて罵る、罵られて看護婦は口惜しさ腹立しさ泣ながら「わ、わたしはたゞ病人を大切にすればかりです、それを人の良夫を寝取つたとか淫賣とか、一體何を證據で御座ります」嫉妬女益々罵つて「證據も何も要つたものでない、今巫山戯て居たのが何より確かな證據、油斷がならぬと思つて見に來るとこの有様、エ、憎い女、エ、浮氣男、薄情者、畜生」と狂ひ廻る、患者は屹驚して又病が起る、看護婦が泣くと云ふ騒ぎ、醫員が驚いて駆け付けるとこの有様、女は齒齧をなして「あゝ口惜しい／＼、こんな處へ置いて置くと又看護婦に大事の良人を寝取られるから、家へ連れてかへつて妾が看護をします」と泣く、院長は聞つけて「貴女家へ連れて歸つては駄目だ、當院には薬よりも滋食物を澤山に食し

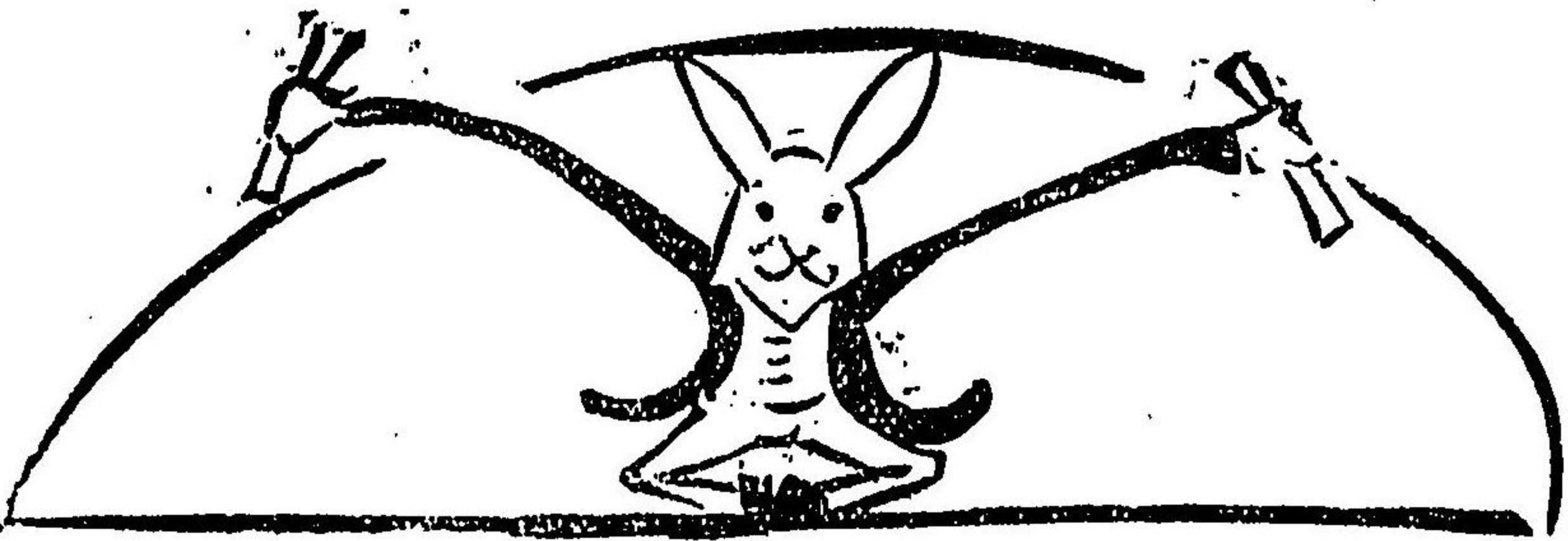


抱腹百話

て居るから大變に癒るのが速いが、家へ歸れば滋養物が」と云ふを皆まで聞かす「ええ滋養物で癒るなら、食はすものが家に澤山あります」院長首を傾けて「ハーテ、ソツプ屋であらうか薬屋であらうか……何屋であらうか」「いへ牛肉屋です」聞くより院長横手を打つて「ナル程、道理で大變角を生やすと思ひました。」

三段飯

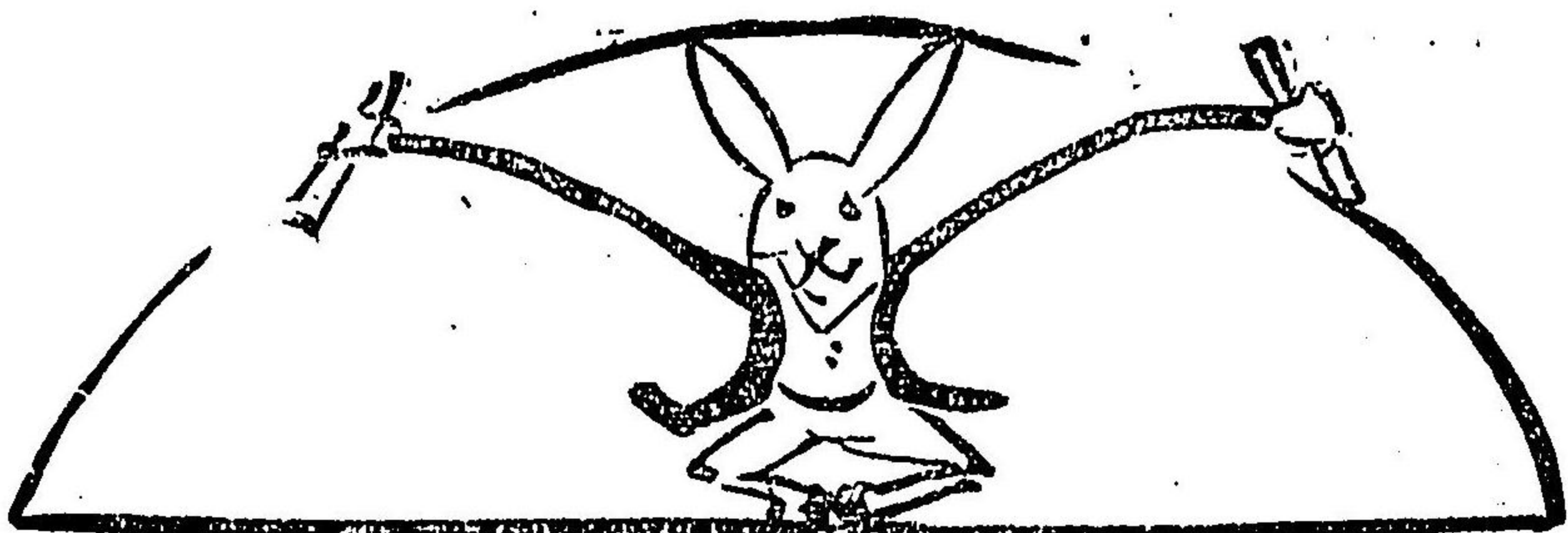
下女が數入をしたので奥様が代つて飯炊をして居ると、奥様も又生憎御病氣が起つたので、止を得ず店の小僧に炊かして見た處、粥とも汁とも何とも彼とも譯の分らぬものが出來たので、主人大に立腹して「おのれ小僧、大方居眠でもしながら炊いたのであらう」と怒鳴ると、小僧平氣で「へい旦那、これは三段飯と申しまして……」
「何じや、三段飯とはまだ聞いたことがない、奈んなものか見てやらう持つて來い、一體何處で習ふて來た」
「イエ私が只今發明致しましたので、一番下が眞黒々焦て、中頃が褐色で、上が生米で、丁度三段になつて居ります。」



抱腹百話

餘り小供が澤山で養ふに困つて居る亭主女房に向ひ「この貧乏世帯に小供の十二人もあつては實に遣り切れん、就ては年の行つたのも行かぬのも皆奉公に出して口を減さねば、借金の淵に沈んで行くばかりだ」と相談をする、女房も黙頭を暫時考へて居たが「お前さん」と云ひ悪くそうにして漸く「其十二人の他に又十二人の子供がありますから丁度二十四人になります、何卒この子供の方も何とかして貰はねば、妾の苦勞が絶へません」と泣く、亭主膽を潰し「オイ、何を云つて居るのじゃ、乃公とお前との間に拵へた子供の數が確かに十二人の筈じゃ、乃公は何程馬鹿でも我子の數位は忘れはせぬぞ」と怒鳴る、女房頭を振り「イエ、確かに二十四人に相違ありません」。「ナニそりや影も一緒に數へたのであらう、それとも密夫の子か」と眼の玉を三角にする、女房堪らず「お前さん些と妾の身にもなつなさいな、その二十四人の譯は……お前さん吃驚しては不可ませんよ、氣絶しては不可ませんよ、實は今までお前さんに隠して置きましたがね、始めの子を生んだ時に雙兒であつたから、世間へ外聞

澤山の小供



抱腹百話

も悪るし、又お前さんが驚くだらうと思つて、妾がいるいると思案をして、密と一人を他方へ預けて置きましたのさ、其次も又雙兒、其次も又雙兒、其次も又雙兒、其次も又雙兒、其又々次も、皆雙兒、始めから終ひまで雙兒ばかりだから、妾はお前に愛想を盡されはすまいかと心配したり氣兼ねたり、生む度毎に一人宛内密で他家へ預けて置きました、其養育料が一人に一ヶ月三圓から五圓位、又始めから十二人の分を合して四千圓餘りの借金が出来て居ります」と聞くより亭主は氣絶するばかりに仰天し「な、な、な、なんと云ふ、十二人でさへ困つて居るのに何故そう餘計な小兒を澤山に生みやがつた」と地團駄ふむ、女房大に涙を流し「何も妾一人で拵へた子供てありません、お前さんも何故澤山に拵へた。」

質屋の規則

茲に頗る勉強な質屋が出来て「譬へ何んな物でも質に取ります」と云ふ看板をかけると、氷屋が飛込んで来て「もう涼しくなつて氷は賣れないから質に入りたい」と云ふので番頭大に頭を掻き「譬へ風のついた襦袢でも、壊れた下駄でも、當店では勉



抱腹百話

強して取りますが、氷の質入とは昔から聞いた事も御座りませんから」と断ると「何故あんな看板をかけて置く」と怒鳴り出すので番頭が弱つて居ると、主人が静かに出て来て「そんなら質に取りますその代りに、何卒流れぬ内に早く受け出しに来て貰ひたい。」

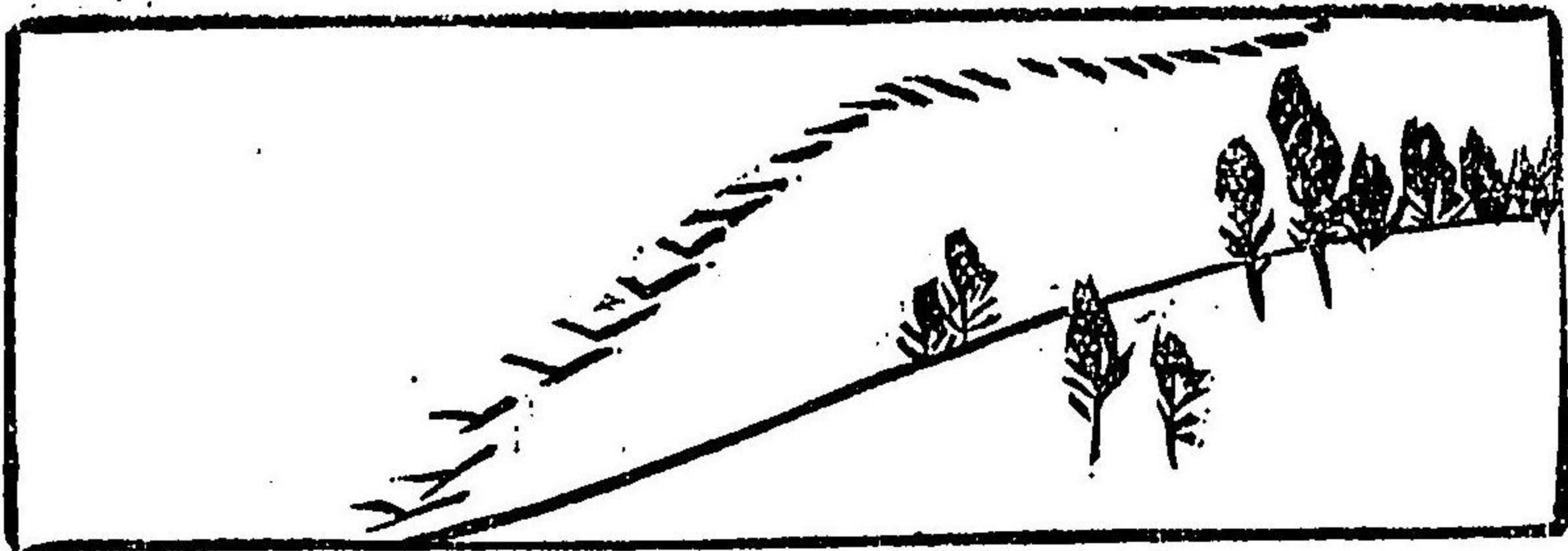
女小説家

何々女史と稱する女小説家、何か面白い材料はないかといろく考へて「馬鹿男」と云ふ題で一篇を著すこととなり、良人に向ひ「貴郎、妾が寫生するのだから馬鹿になつて居て下さいよ」と云ふ、良人は閉口したが妻の原稿料で養ふて居るから妻君の命令と雖も上官の命令も同じ事て服従せざるを得ない、そこで西を向けと云へば西を向き、東へ向き直れと云へば東へ向き直り、這へと云へば這ひ、起てと云へば起ち、飛んだり撥ねたり、すべて妻君の怒に觸れぬやうに汗を流し、それが済むと掃除を云ひ付かる、掃除が済むと洗濯を云ひ付かる、洗濯が済んでやれと思ふと客が来る、客が来ると我妻を先生々々と呼んで茶を汲まねばならぬ、と云ふ具合です



抱腹百話

べて妻君の鼻息を伺はねばならぬ、それと反對に妻君は又頭の押へ手が無いから感張り次第であつた、或時に一篇の小説原稿が出来上つたので、先生より良人へ読んで見ると云ふ命令が下つた、良人は又妻君イヤ先生の御機嫌を損じてはならぬと思つて勉めて読んで見たが、餘り平凡で駄作で讀むに堪へられないから其儘に返すと、先生怒ることか怒るまいことか頼に青筋立て、「妾がこれほど苦心して作つた作物を讀んで見ないと、苟も小説家の良人たるべき者の本分ですか」と顔色を變へての責込み、良人はサテハと青くなつて顔へ上り「イエ、何遍も讀んで見ましたが、イヤどうも何時もよく出来て居りますので感心と得心を一度にしました」と手を突いて云ふ顔を女史はシロリと睨んで「嘘を云ひなさんな、讀んだか讀まぬかチャンと妾に分つて居ります、妾の書いた悲劇を讀む人は醫へどんな者でも泣かぬ人はない筈です、讀んだなら涙をこぼして濡れた跡がなければならぬのに、チツとも涙の痕が無いのだもの」と非常な立腹、良人は腹の中で可笑しくなり、あゝこんな事なら水でもふつて置けばよかつたのに……と横を向いて舌をペロリ。



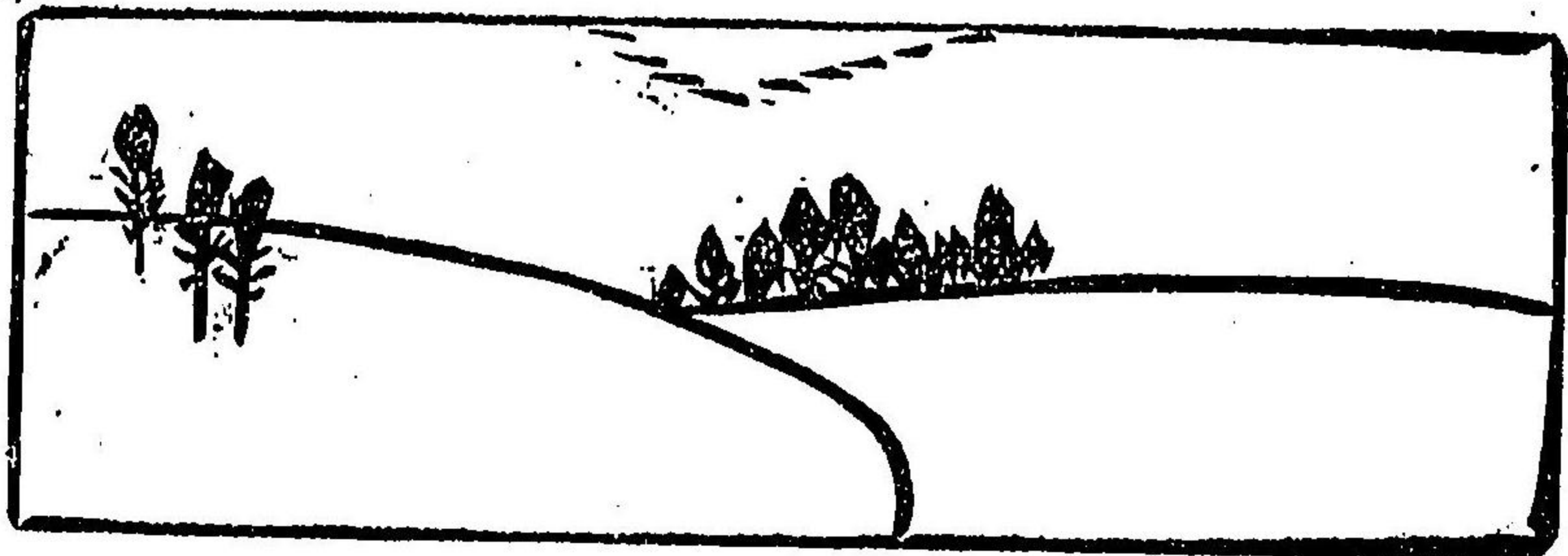
抱腹百話

論語讀みの論語知らず

茲處に論語を盡く暗誦すると云ふ男あり、人が論語讀みと云ふ仇名を付けて呼ぶと大に嬉び、自ら己は論語讀みじやと威張つて居た、其處へ一人の男が論語讀みを尋ねて来て、「論語の中に澤山に子曰くくく」と書いてあるが、あれは一體何の事で御座りますか」と質問した、處が論語讀みの先生大に弱り、素讀は随分勉強して達者になつて居るが講義は爪の垢ほども分らぬので、暫らく考へて後に漸く「昔の人は目も耳も足も達者であつたから、大方齒も達者であつて、岩でも食つたのでしやう」と答へたそうなの。

汗と涙

寐小便の癖ある小僧が毎朝叱られる度に「イヤこれは小便ではありません、汗で御座います」など、強情を張るので主人大に怒り「以後は汗を出すことも相成らん、汗も小便と同様に取扱ふべし」と云ひ渡した、そこで小僧又叱られると「ハイこれは小

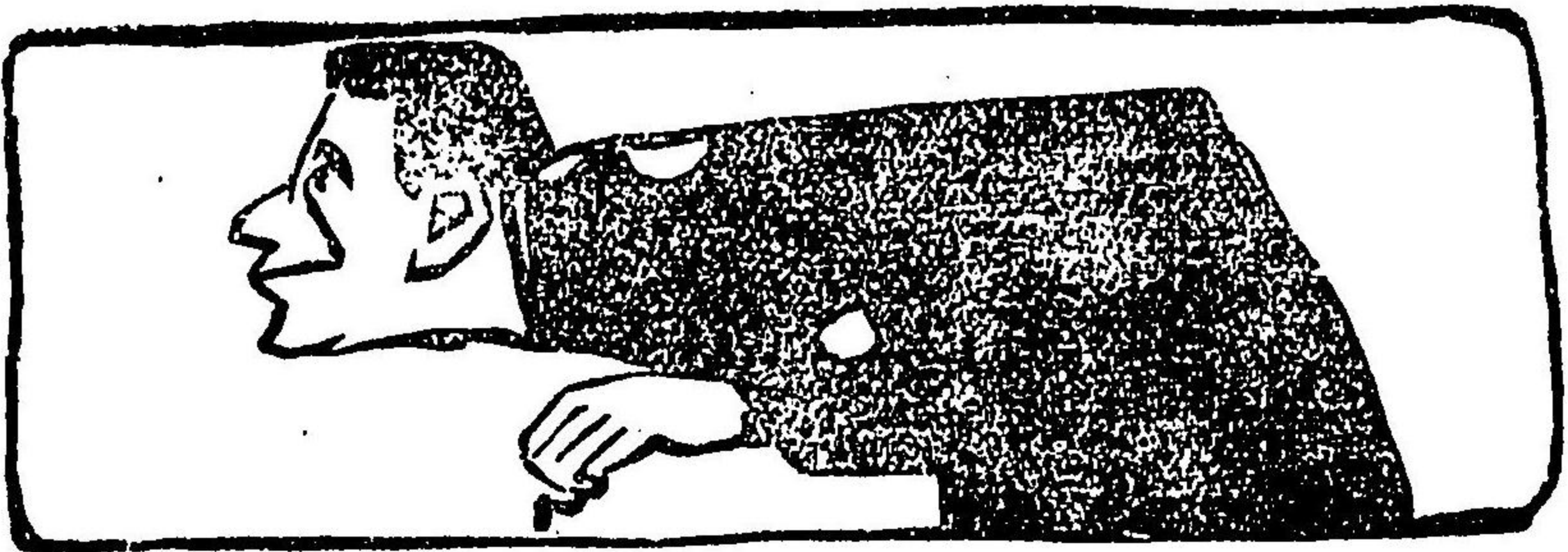


抱腹百話

貸馬の乗倒し

便ではありません、昨夜死んだお父さんの事を思ひ出しまして、あゝ親爺が生きて居つたらこんな馬鹿な主人に」主人眼の玉を三角にして「な、なんと云ふ」小僧狼狽へながら「イヤ親爺が居つたらもつと樂をして可愛がられて居るだらうに……と思つてつい涙がこぼれまして」主人問答めて「涙が出た、涙なら枕元が濡れて居るさうなもの……」と不審な顔をする、小僧平氣の平左で「へい私の涙は臍から出ます。」

狡猾極る男が旅行をしたので、どんな風にするかと見て居ると、汽車は赤切符を買ふて二等室へ潜り込み、汽車の通せぬ處は必ず貸馬に乗り、その乗る時には又馬方と約束をして「乗せ賃はいら高くてもよいから、成るだけ良い馬を選んで少しも揺らぬやうにして呉れ、その代りにチツとでも馬が荒れ出したら代金を拂はぬぞ」と云つて置く、そこで馬方が良馬を選んで乗せると、馬が靜かに荒れず誠に心地よく走る、然るに降ると云ふ間際になると必ず荒れ廻つて狂ふ、それがために馬方は乗せ賃を取れずに泣寐入となつてしまふ、こんな具合ひて馬をたゞ乗して居たが、或時とうとう



抱腹百話

馬方に見付けられて警察へ突出された、其證據物件は丁度宜い時分に馬の尻を突く針一本。

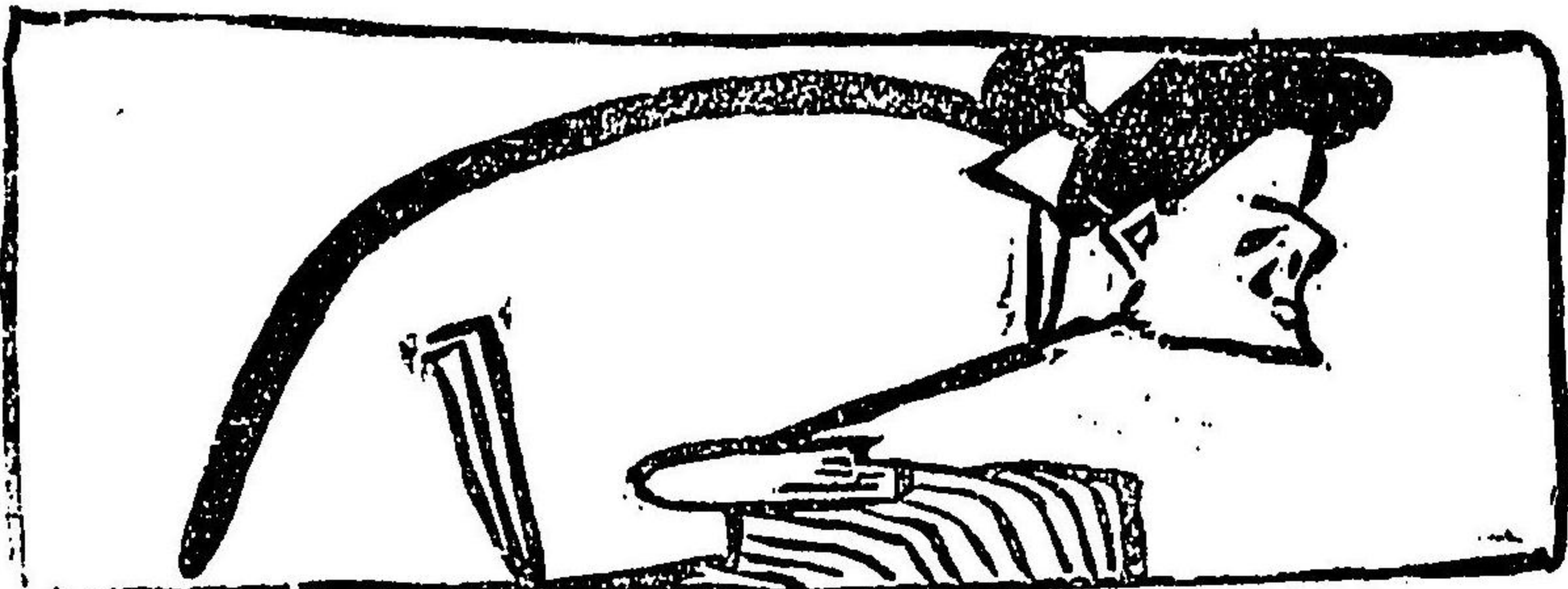
狸の愛玩家

種々の道楽もあるが、狸の愛玩家も妙からぬ様である、故の後藤伯の如き其一人であつて、曾て後藤邸に臨幸の際、玄關に在つた狸の置物が長き邊りの御目に止まり献納したとがあつたそう。

足立諸陵頭も狸の愛玩家て繪畫、陶器、彫刻凡て狸に關する物を蒐集して凡そ二百點も持つてるさうで、初代道八の焼きと、今一つは賣茶翁の遺愛との傳へある狸の床置の二つを最も珍重して居る、自分でも狸の一筆畫が極く得意である。

成田源十郎と云ふ狸の愛玩家があつて、狸に關する著作までもあるが、麻布四の橋側の或る寺に在る同氏の墓石には、只だ狸の畫が彫り附けてあるばかりで外に何にも書いてないそう。

今一つは北麻の何とか云ふ引手茶屋の老爺が大の狸好きで、上り口の大鉢からが



抱腹百話

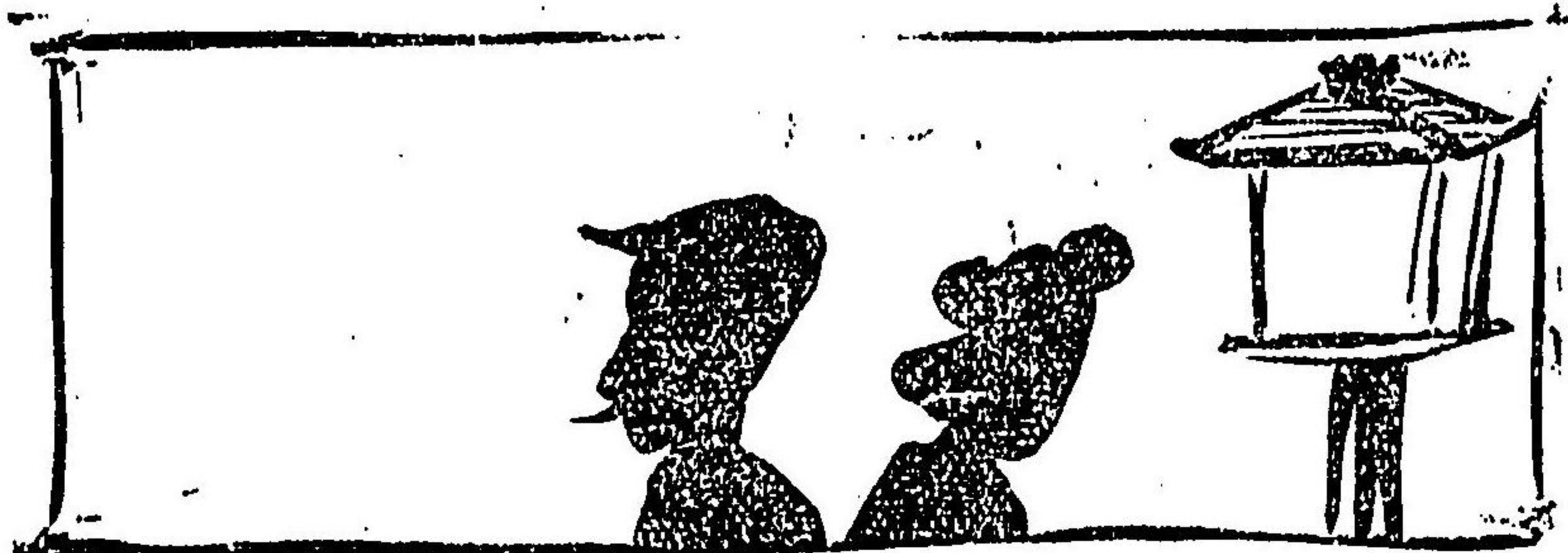
既に大きな狸で其の他掛物でも額でも置物でも盡く狸であるさうだ。

たいは起きぬ

頑固一點張の主人奉公人一同に向ひ「人間は轉んでもたいは起きぬと云ふ覺悟が必
要じゃ、たい起きるやうな者は速坐に解備してしまふぞ」と眼玉を光らせて殿しい云
ひ渡し、奉公人一同顔へ上つて、轉ばぬやうに心得て居たが、或時小僧が主人の供を
云ひ付けられたので心配し、轉ばぬやうに〜と氣を付けて居たが、どうした機會か
石に打突つてドンと轉び、サア困つたと思つて何か拾ふものはないかと思つたが
塵一本もない、と云つてたい起きる時は忽ち解備になる、あゝどうしたら好かるう斯
うしたら好かるうと思つて起上る事も出來ず、ヤット思ひ付いて馬の糞を掴んで起上
り、「且那樣、私はこの通り譬へ轉んでもたいは起きません。」

茶釜の病氣

大藏先生と云ふ貧乏醫者十人の患者を十一人まで殺すので、誰も生命の惜しい人は

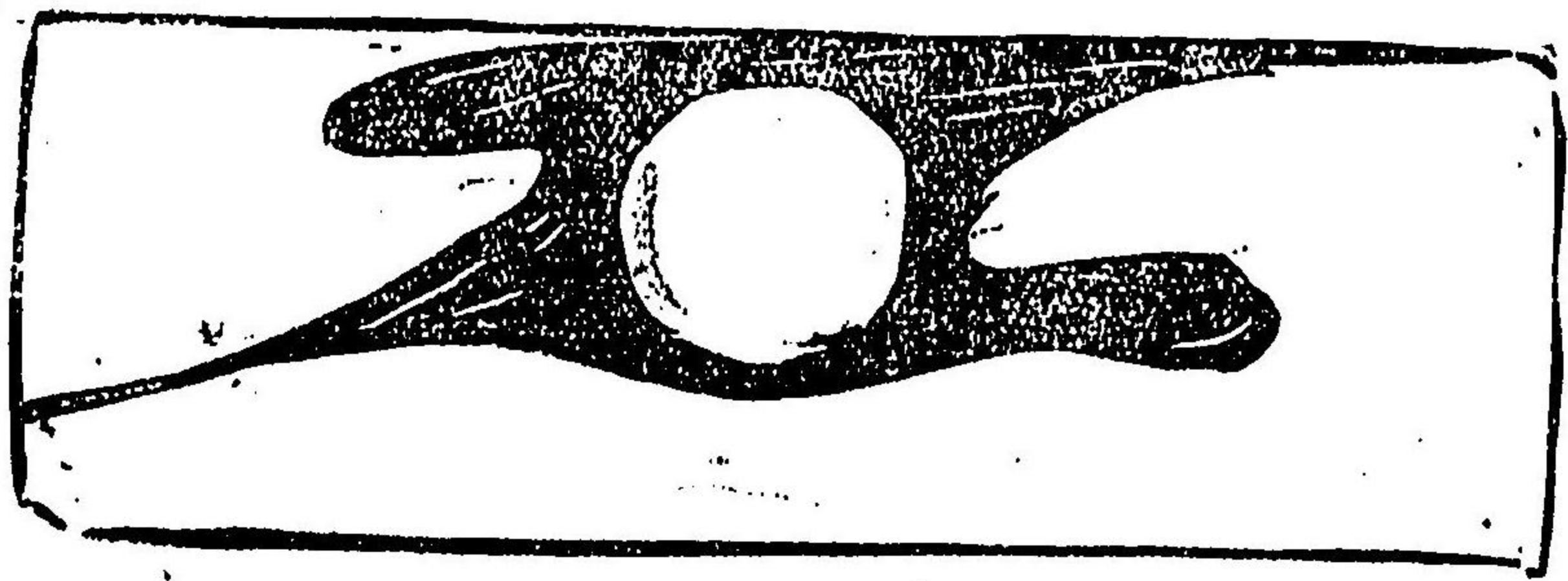


抱腹百話

診て貰ひに来ぬやうになつた、そこで先生犬猫其他何でも病氣を診ると云ふ看板をあげたが、鼠一疋も来ぬので大に閉口をして居ると、大きな茶釜が来て先生に向ひ「私は病氣で實に困つて居りますから、何卒癒して下さい」と云ふ、先生口癖を捻つて「君は頗る色も黒ろし、口も大きく腹も大きく、足も三本あつてナカ〜丈夫相に見えるが、一體何處が不快のじや」茶釜君涙をこぼして「はい、私はこんなに丈夫に見えても生れた時から一ツの持病がありまして、年中苦んで居ります」先生合點行かず「ハテどんな持病じや」。「はい、毎日々々のやうに杓(癩)がさし込んで來ます」。「あゝナル程分つた、しかしそれは君の祖先より傳はる處の遺傳病であるから、全快はナカ〜覺束ない」聞くより茶釜は其不幸福を歎き悲しみ、先生も又同情の涙に暮れる、かと思へは急に夢さめて「あゝ餘り閑暇で欠伸をして居たら、いつの間にかやら居眠をして居た。」

銅貨三百圓

強慾親爺あり、食ふものも食はず著るものも著らず、爪に火をともして貯へた金が



抱腹百話

三百圓、人に貸すのも心配でならぬ、銀行に預けると銀行が潰れる憂ひがある、紙幣にして持つて居るのも物騒な、銀貨でも安心がならぬ、コリヤ銅貨にして持つて居るのが一番好からう、第一水にあふても大丈夫で、次に盜賊が入つても皆まで持つて行けまい、と悉く銅貨に取替へて石油の空函へ詰あ込んで積重ね、ヤレ嬉しやと莞爾々々と眺めて居ると、突然ジャン〜と半鐘の音、そりや火事だと云ふ間もなくドンドンと隣から燃え移つて來た、親爺仰天して金箱を持出さうとしても腰が立たず、「あゝ大變々々、私が生命より大事の金が焼ける、あれを焼いてしまふてはもう生きて居られぬ」と狂氣のやうになつて居ると、一人の男が聞付て飛込んで來て驚き「ヤア重いぞ〜、親爺奴何時の間にこんな大金を貯めて置いたのじや」と云ふ聲聞いて又一人が飛込んで來た「大變な金じやないか、二三人では駄目だ、一人前二十圓宛禮をやるから十五六人やつて來い。」

誤つて小便を呑む

某氏が清國漫遊をした時の事て、一夜酒を呑んで寐ると夜中に眼が覺めて頻りに咽



抱腹百話

喉が乾いて堪へられない、苦しさは水を呉れと叫んでも誰も起きて来て呉れないので、トウ／＼困つて花瓶の水を呑まうとしたがそれも無いので、あゝ何處ぞに水はないかと室内を捜し廻ると、隅の方に壺があるのを見付出し、覗いて見ると水は入つてあるが固く氷つてあるので、早速氷を打ち破つて食ひ、漸く渴を癒して又寐入つたが、翌朝眼が覺めると昨夜の氷は少し鹽辛くて妙な匂ひがした事を思ひ出し、不審の餘り聞き合して見ると失敗も失敗も大失敗であつた、支那婦人は室内に壺を置き夜中それに小便をするのであつた。

鳥糞の滑稽

これは著者が實見したのであるから、嘘でない事だけは請合ふて置く、或紳士の家で鳥糞で蠅を取ると、小兒が鳥糞を踏んだり觸つたりするので困ると、氣の利いた女中先生が工夫して、藁筋へ鳥糞を塗つて之を電燈から下へブラ下げて置くと、たまたま醫者殿が来て其下へ坐つた、診察が終つて左様ならと立つた時、頭の上へブラ下つて居た件の鳥糞が醫者先生の肩から首筋へかけてビタと引附いてしまつた、先生驚い



抱腹百話

て之を取らうとすると又口髯へも附いた、愈々大騒ぎとなつて狼狽し、漸く人手を借つて取放したのはよいが、新調の洋服を汚したのと、口髯が變に引付き合ふて居る格好の可笑しさ、又氣の毒さに堪へなかつた。

無頓著將軍

瓜生海軍中將と云へば善謀善戦の名將軍であると共に、又常識圓滿な好紳士であるが、恐らく又將軍ほど小事に拘泥しない豪傑もなからうと云ふ評判である、中にも將軍が金銭の勘定を知らないのは有名な話である、てまた恐ろしく平民主義の人であるから、上陸でもすると單獨飄然として市中を散歩く、煙草でもなくなると無造作に途中の煙草店に入りこみ、數島の一個も買つて五圓札を投出し、其儘知らぬ顔をして又も飄然として立去るかと思へば、十圓位の買物をして置ながら五圓札一枚で、平氣の平左衛門ですまして居ると云ふ、世間に餘り類のない奇行をやるに至つては、將軍も又大に振つてるといふはなければならぬ。



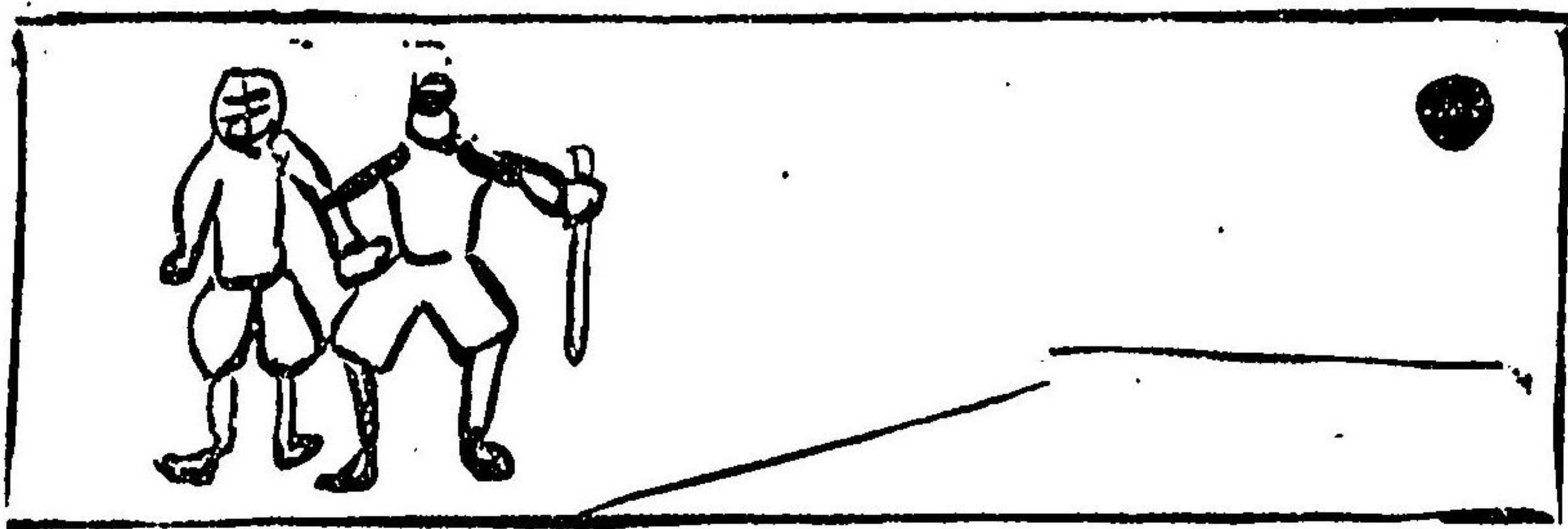
抱腹百話

御名前御商賣

地方人を見ると無暗に田舎者と罵る東京生抜の人物でも随分分らぬ人物が澤山ある、他人に對して尊敬の意を表する爲に用ゆる御の字を、自分の方から自分の名稱の上へ附けて得々然たる者がある、殊に藝妓屋、待合などに尤も多い、余が電燈會社に居て宿直をした際、濱町から電話が掛つて来て「モン、電燈が消えましたから、早く直しに来て下さい」と云ふのである、此方から「御名前は」と尋ねると「御名前は花の家です」更に又「御商賣は」と聞くと「御商賣は待合です」と平氣で云つて居る、可笑さに堪へず思はず電話口で笑ふと「アラマア、本當に嫌な人だこと」と云ふ聲が聞えて居た。

自惚男の大失敗

大坂ほど俳優凝りのする土地はない、藝妓娼妓仲居から妻君令嬢に至るまで、俳優熱に浮かされて夢中になり、井戸端會議にも、火鉢を圍んでも俳優の談話で、俳優か



抱腹百話

ら何か品物を貰ふのを無上の光榮として居る、こゝに一つ可笑しいのは大坂の藥屋某氏が、雁次郎と懇意なので一寸尋ねて行くと、雁次郎は鶴の羽根で拵へた簪を呉れたので、某氏は妻君や娘への土産にせんと大嬉ひになつて歸ると、途中で出會ふ女も、皆ついで来て某氏の顔を眺め、終ひには前後左右から取圍んで進む事も退く事も出来なくなつたので、某氏はグツと逆上してしまひ「あ、困つた、色男にはなりたくない」と獨言、一人の娘が「老爺さん、簪を一本下さい」と云ふ、某氏は「よしよし」と一本やると又一人「私にも下さい」と云ふ、又「よしよし」と一本やり、二本やり、三本やり、とうとう無くなつてしまふとあたりには雌猫一疋も居らぬやうになつてしまふたので、始めて簪を欲しさについて來た事が分り「何だ馬鹿々々しい、己に惚れて來たのでなかつたか」と呟き、家へ歸つて罪もない妻君や娘に八ッ當りとは、さりとて年寄の頭の禿げた甲斐もないものだ。

寒山の夜逃

鐵筆家中の奇人山田寒山は折々よくお笑草の種を蒔く、或時湘南の梅を探ぐる序を



抱腹百話

以て某子爵を鎌倉の別墅に訪ふた、子爵も骨董の癖があるから互ひに古器物を評して例の高話をして居つた。

時にこの別墅へ或る華族の素敵な令嬢が來合はせて、寒山の風采を怪み、一體彼の男は何物でございますかと尋ねると、子爵が戯談に、「彼の者こそ東京で隠れもない茶の湯の宗匠である」といふた、令嬢はげにもと領づきて歸つた。

聽て一人の三太夫が寒山の宿へ來て恭々しく一禮し、「手前館の姫様事、茶の湯を好まれ是非共老宗匠の御手前を拜見したいとの事てござるから、御運下さい」との案内である、寒山は不得手てござると辭退すれども、それは御謙遜是非くと言葉を盡して承知せなかつた。

その跡で寒山和尚先生大閉口、大當惑、煎茶の方は長崎仕込で心得はあるが、抹茶の方は服紗捌も覺束ないのである、百萬の債鬼が群がり來てもびくともせず逃げも隠れもせぬ寒山なれど、抹茶の手前のみには困じ果て、暫時滞在の筈であつた鎌倉を逃げ出して、下谷の風火仙窟へ歸つて來て太息を吐いたとは大笑ひ。



抱腹百話

畜生商賣

野暮客通人に向ひ「君一體女郎屋を畜生商賣と云ふのは奈う云ふ理由だ」通人笑つて「ナニ分つて居るじやないか、そりや女郎は客を欺すための白狐、藝妓は何處まで行つても猫と云ふのだ、客は狸の空寝入するのだ、遣手が狼で、錢のない客に付いて行く奴が馬でないか」野暮客大に悟つて「ナール程、道理て家へ歸ると女房までが嫉妬の角を生やすよ。」

拙者と拙僧

少しばかりの學問を聞嚙つて大威張をして居る秋芽倉之助と云ふ人物、或時新聞を見て、俺はもう大學者だから私など云ふのは素町人のやうで耻かしい、僕と云ふのもまだ書生のやうで面白くない、吾輩でも不可んと種々考へて、ある書物に拙者と書いてあるのを見付出し、遇ふ人毎に拙者と云つて居る内に忘れてしまひ、いくら考へても思ひ出されず困つて居る處へ、阿房山馬鹿樂寺の住持目録養空と云ふ和尚訪ね來



抱腹百話

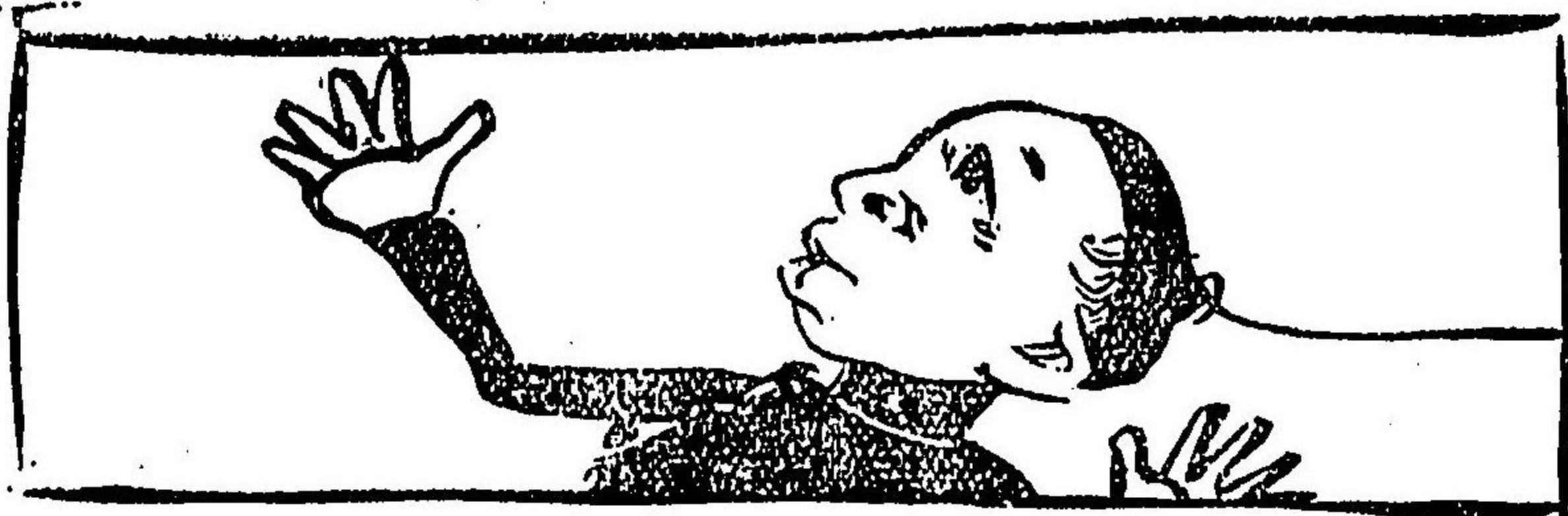
六二
り「拙僧は」と云つたので、あゝ拙僧であつた〜と大に嬉んで、それから遇ふ人毎に「拙僧は近頃、イヤ今日は拙僧の都合により、拙僧はこれから」と頻りに拙僧を振り廻して居た。

大は小を兼ねる

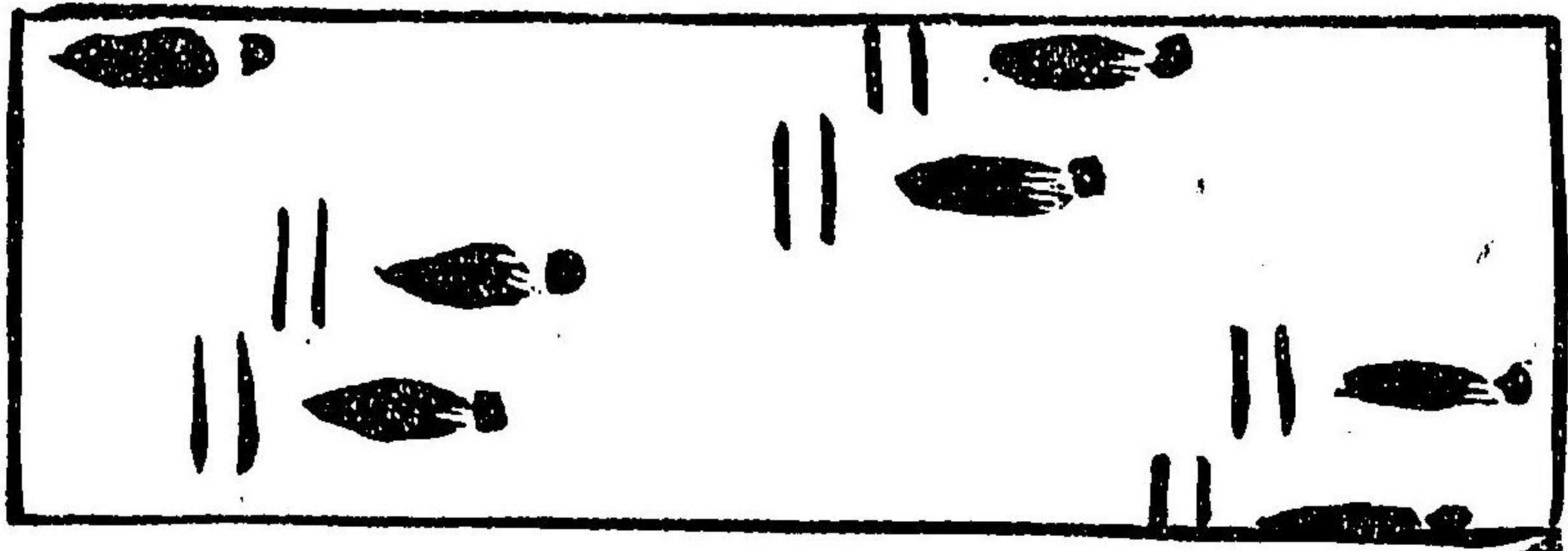
ある學校の先生大勢の生徒を集めて演説し「皆さん大は小を兼ねると云ふことがある、楊枝の小さいのは辨當箱の隅をほじくるに妙ありと雖も、まさに倒れんとする家を支ふるには大木なかるべからず、土鍋は一人世帯に都合よけれども、百人家内には特別の大釜なかるべからず、然り而して大を以て小を兼ねることが出来るが、小を以て大を兼ねることが出来ないから、これから勉強をして成るだけ大事業を起さねばならぬ」と述べて居る最中、一人の梳白小僧が立揚つて質問し「先生杓子は耳搔にもなりませんか」と先生大に閉口す。

迷信博士

六三
迷信の博士ありて、何事が起つても八卦見や家相見に見て貰つたり、神佛に祈禱をしたりして居た處、或時鍋釜を盗賊に取られて行衛不明となつたので、早速近傍の稻利明神の御告を伺つて搜索せんと參詣すると、神官も又迷信の自家本元だけあつて恭しく御幣を振り廻して祈禱を凝らし、サテ云ふやう「汝が失ひたるものは何色なるや」迷信博士答へて「それは色黒くして大きな口あり耳もあれば足もありまして」と云ふを神官皆まで聞かず「エ、矢釜しい、色だけ神様に聞くのを忘れたから貴様に聞くのじゃ」他の事は皆神様の御告によつてチャンと分つて居るのじゃ「迷信博士大に感伏頓首して「あゝ争はれぬは神様の御力、難有や辱けなや盗られた品の在所が知れて返りますか、南無稻利大明神々々」と隨喜の涙をこぼすと神宮調子に乗つて感張りかへり「何と恐れ入つたか、今其品の在所を教へてやるから賽錢をあげる」と賽錢を出させ「貴様が盗られた牛は只今丑寅の方角で草を喰つて居るから連れて戻れ」と云つて奥へ入らうとするを、流石の迷信博士も始めて眼が覺め「もし〜私の盗られたのは鍋釜でありますか、それが何て草を食ひます」と責込む、神官失策なと思ひながら「南無三寶間違つたか、色が黒うて口も耳も足もあると云ふから必度牛だと思つたの



抱腹百話



抱腹百話

「や。」

落し話

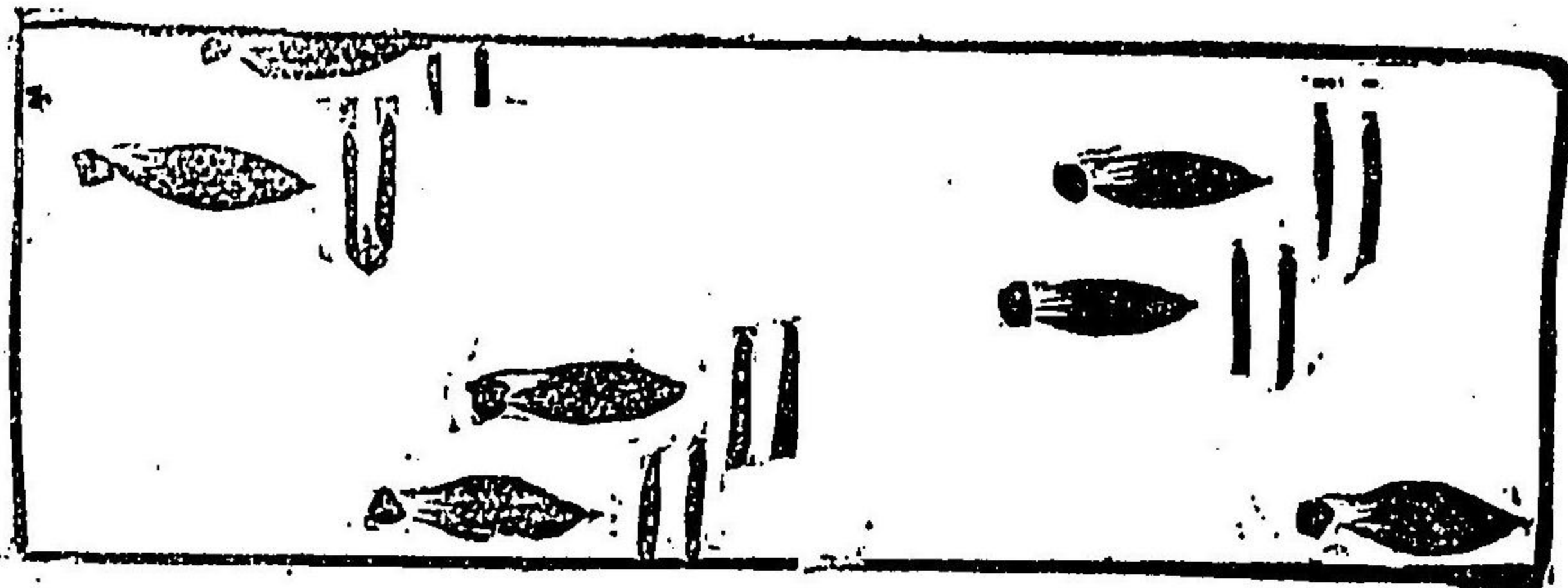
「僕は落語の面白いのを考へて居るが出来ないよ。」僕は今度極く面白いのが出来たよ。「イヤ君のは何時も落語になつて居ないでないか。」處が今度と云ふ今度こそは請合ひ眞實の落語じゃ。「ナニ眞實の落語、そんなら是非一つ聞かして呉れ給へ。」然るに只今途中で落して忘れてしまふたから話されぬ。「何だ馬鹿々々しい。」「これを眞實の落語だらう。」

飯を美味しく食ふ法

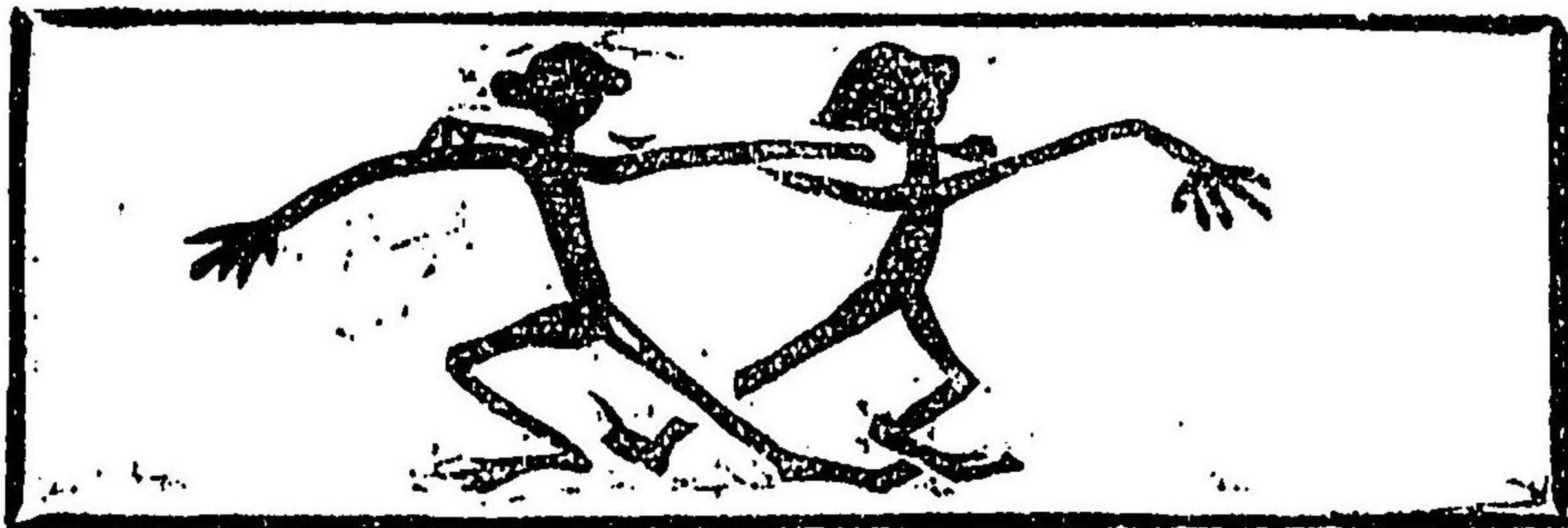
余が或記者先生の宅を訪問した時、丁度晝飯頃になつたので、先生は「御馳走をするからまあ待ち給へ」と云つて又妻君に向い「オイなるだけ美味しいものを拵へて呉れ」と云ふと妻君「今日は別に美味しいものはありません」と答へる、先生又「そんならお前の腕前でなるだけ美味しく拵へて呉れ」と云ふ、妻君點頭さ「はい、妻は不味い御馳走でも美味しく食ふ法を知つて居りますから、それをやつて見ますからお客様にも待つて居つて貰つて下さい」と云つて臺所へ入つて、ゴロ／＼と味噌を摺る音やら、トン／＼と何やら切る音が爲出したが、それから一時間経つても二時間経つても出来て来ないので、先生も待かねて催促をすると、妻君が「只今美味しく食べる法を爲して居りますから、今暫らく御待ち下さい」と云ふので已を得ず又一服して凝して待つて居ると、やつと三四時間も経つてから御馳走が出来て来て、早速箸を取ると傍から妻君が「何も御馳走はありませんが、腹を減らして置いて食ると美味しくしてしやう、これが妾の飯を美味しく食ふ法であります」とこれが妻君の秘術であつた。

爪の火

客々の隠居が小僧を供につれて夕方家に家を出て行くと、段々と暮くなつて来て路が分らなくなつて来たので「こりや小僧この暗いのに何故提灯を點けぬのか、氣の利かぬ奴だ」と怒鳴り付けると、小僧平氣で「はい、提灯は要らぬと思つて持つて来ません」「何、何、何故要らぬのだ。」「要りませんとも、世間の人は皆貴様の事を、客々



抱腹百話



抱腹百話

て爪に火を點すと云つて居りますから、何卒其火で道を歩いて下さい。六六

放蕩息子

放蕩息子が又々親の金を擡んで家を飛出したので親爺が烈火の如く怒つて居る處へ隣の信心疑りの婆さんが家出を出家と間違へて來り「これは近頃殊勝な事、出家なるとは若いのに感心な事」と挨拶する、親爺堪らず「イヤ金を持つて行つたのだ」婆さん益々感心をして「なるほど鐘をもつて、それは御念佛を唱へる時に打くので、して何處の御寺の弟子になりました」親爺堪忍袋の緒を切らし「エ、煩さいこの蕪婆々奴」と擲らうとすると隣の人が飛んで來て仲裁に入り「ヤイ婆さん、息子は隨德寺を極め込んだのだよ」。

臆病男

臆病男あり、或日深い谷底へ入つて仕事を爲ると、淋しい〜と思つて居ると急に又平常の臆病が起り、怖い〜と震ひ出すと、後の方でバシヤリ〜と別嬪が忍んで

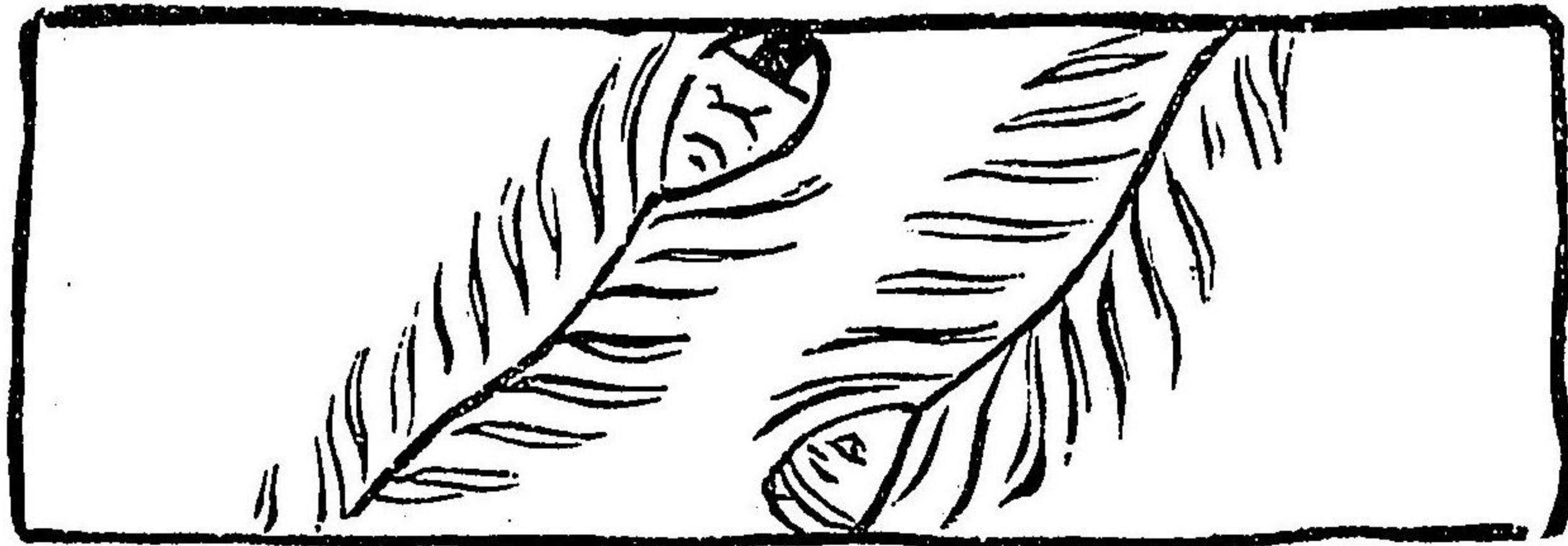


抱腹百話

來るのではない氣味の悪い音がするので、振返つて見るとコハとも如何に大蛇が火焔の如き口を開いて、今や鎌首を揚げて一ト呑みに飛かゝらんとする勢に、屹然仰天蓋を踏外してコロ〜と轉びながら逃出し、夢中になつて走し出し振返つて見ると、まだ大蛇が後について來て居るに仰天し、又夢中になつて馳け出して又振返るとまたついて來て居る、何處まで逃げても〜振返つて見ると矢張りついて來て居るので、とら〜死物狂ひになつて逃げるうち、向ふから來る百姓に突當つて肥桶を頭から浴び始めて氣が付きやつと正氣になつて見ると、今まで大蛇が何處までも逐かけて來ると思つたのは、自分の兵兒帯が外れて端を引摺つて居るのであつた。

芋物語

芋助の畑に作つてある芋の子が親芋に向つて「お父さん、私は大きくなつて如何するの」親芋答へて「伴や、お前も芋助に掘れて芋屋へ賣られて行くのだよ」「賣られて行つたら奈うなるの」「三助や小僧や三どんに買れて行くのよ」「買れて行つたら奈うなるの」「それはねエ、お芋々々々と云つて御飯の代りになつたり又お菓子



抱腹百話

代になるのよ。「御飯の代りになつたら奈うなるの」。「腹へ入つて瓦斯になるのよ」。「その瓦斯は何になるの」。「それが芋の效能で屈になるのよ」。「屈になつて奈うするの」。「尻の穴の掃除をしてやるのじや」。

お六とお七とお八

頗る厭き性の男あり、連れ添ふ女房が厭いて来ては貰ひ直し、貰ひ直しては又厭き取替へ引替へ何百萬人と云ふ數知れず、終ひにはお六と云ふ女房を貰つたがそれも又厭き、お七と云ふ女と取替へやうとする時、お六はお七に向ひ「近い内に又お八さんが来ましやうから、其お積りてお樂みなさいよ」。

鼠退治

警察から鼠を退治してしまへと矢笠しく云つて来たので、親爺がいろ／＼と工夫をして升落しと云ふものを考へ出した、それは膳の縁へ升を横向けに立て、置いて餌を其中へ入れて置くので、鼠が来て升へ足をかけるが最後、グワラリと升は下向いて落ち

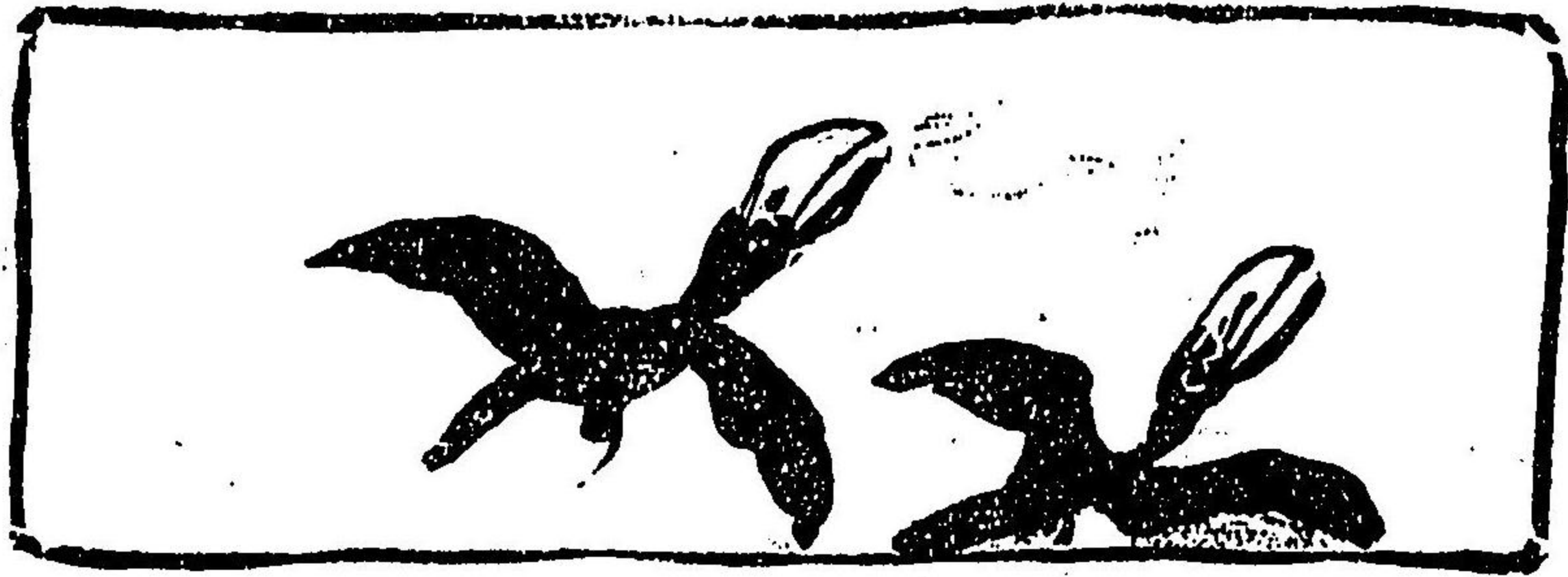


抱腹百話

て来ると鼠は伏せられて逃げられぬと云ふ寸法、先づ臺所へかけて置いて待つて居るとグワタリと云ふ物音、親爺大に嬉んで「小僧見てまいれ」と寐て居る最中を呼び起すと、小僧ブツ／＼と小言を云ひながら行つて見ると、鼠は餌だけ食つて逃げて了ふてあるので、又かけて置くと又音がする、其度に小僧は起されるので大に困り果て、一策を考へて落ちぬやうにして置いた、とも知らぬ親爺は背の口から夜明まで凝て待て居ても何の音もなく、その明る日も其又明る日も同じ事で、幾晩たつても只の一度も音がせぬので不思議に向ひ、小僧に其理由を尋ねると小僧平氣で「へい旦那、毎晩眠い盛を二三度も起されて遣り切れませんから、いつを見に行く世話のないやうに釘で打付けて置きました」。

忘れ男

仇名を忘れ男と云ふものあり、何でも彼でも皆忘れてしまひ、自分の住處も忘れ自分の名も忘れ、他へ行くと煙草入を忘れて来る、財布も忘れて来る、序手に墨丸も忘れて来る、肝心の用事も忘れて来ると云ふ次第、終ひには自分の女房も忘れて手を突

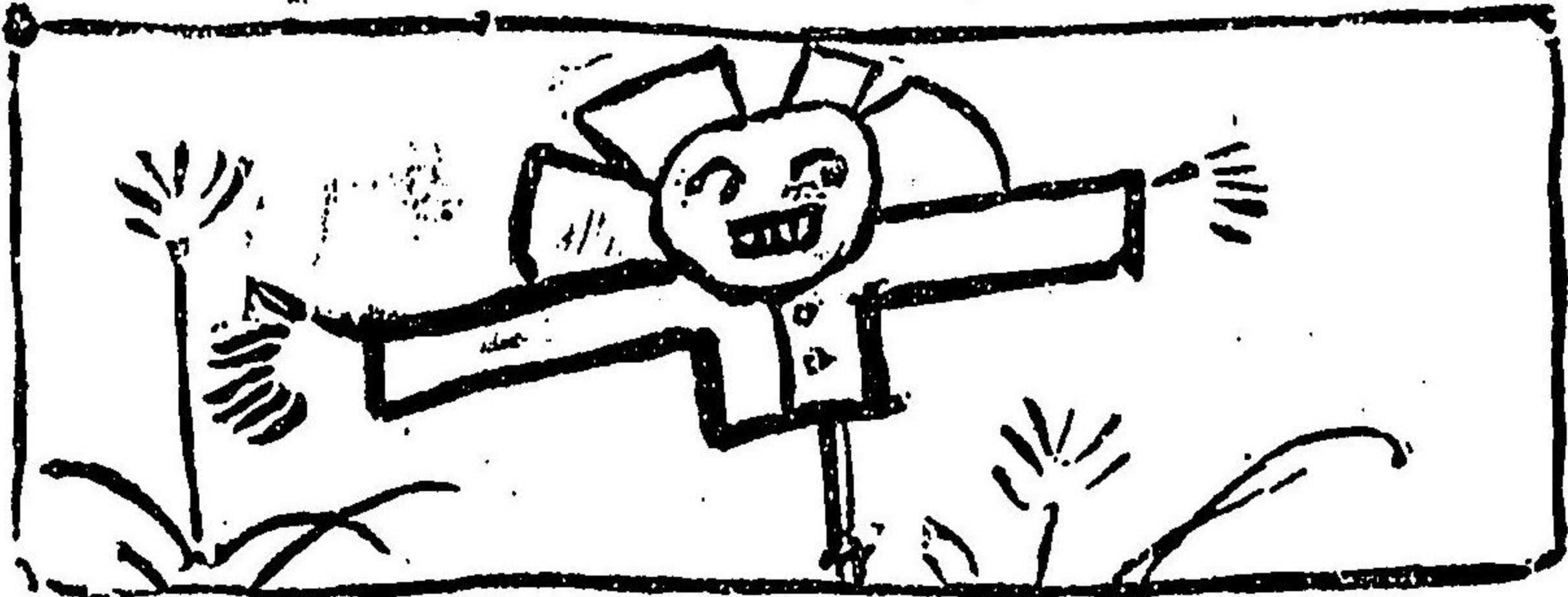


抱腹百話

「エ、貴女は何誰てありました」と尋ねるので、女房可笑しくて堪らず「ホ、前さん戯談云つては不可ませんよ、妻は貴郎の女房」と云へば「ハテナそんなものがあつたか知らん」女房面を膨らし「あつたか知らんとは餘まり情ない、子供が二人まてあるのに」忘れ男益首を傾けて「そんな子供があつたか知らん」「貴郎困るじやありませんか、確かりして御呉れよ」「あ、そうであつたか、して男であつたか女であつたか前知つて居るかへ」「馬鹿らしい、自分の子を男であつたか女であつたか分らぬやうでは……」と女房涙を流して「貴郎よく覚えて居なさいよ、二人で兄と妹」「あ、分つた〜年齢が何歳であつたなア」「ア、又年齢を忘れて居る、兄が九才で妹が七才、して貴郎二人の名を知つて居りますか」「サア……」「又忘れたのかい」「はい、女房が歸つて來たら尋ねて置さしやう」。

小便男

寐小便をする男を雇入れたので主人大に困り、毎朝叱ると「イヤこれは昨夜の雨が洩つて來ましたので」と云ふ、主人不審に思ひ「ハテ昨夜はよく晴れて雨が一粒も降

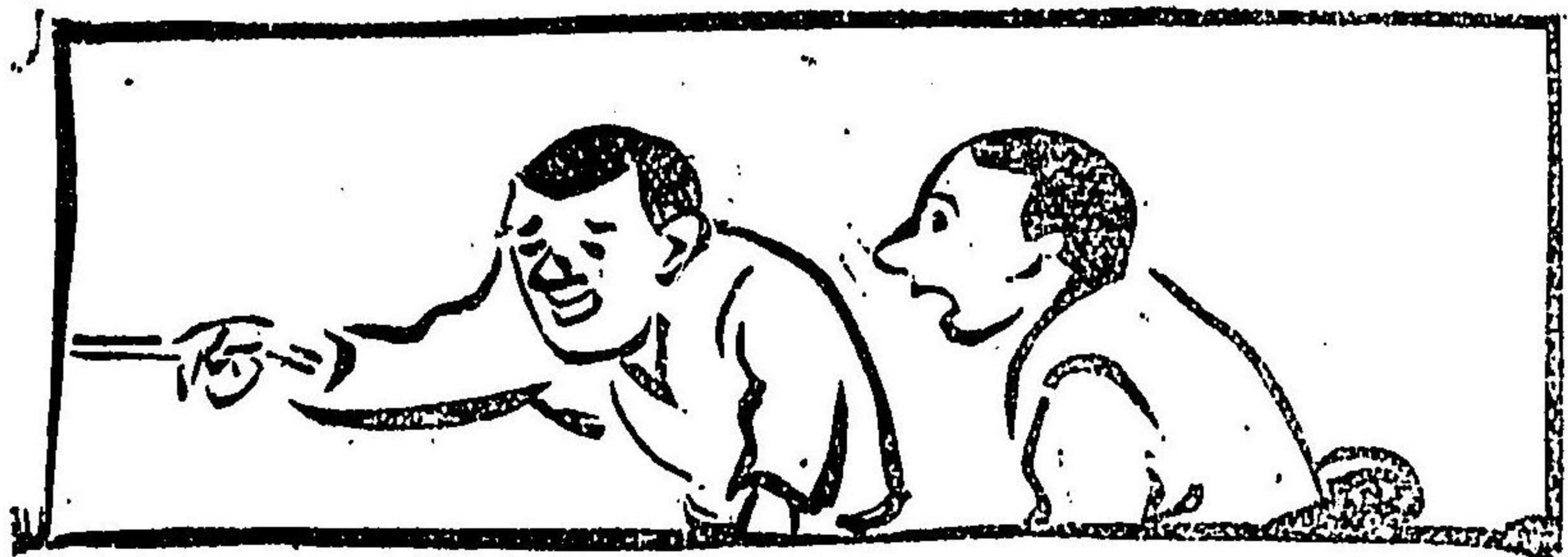


抱腹百話

らぬのに」と首を捻れば又「汗てあります」と云ふ、主人怒つて「そんな汗があるものか」と叱ると又「イヤ死んだ親翁の事を夢に見て涙を零しました」と云ふ主人大に怒り「涙なら枕が濡れて居る筈じやないか」と怒鳴ると「イヤ私の涙は臍から出ます」など、強情を張るので主人益々怒つて遂に豚小屋の天井の上へ寐かしく置くと、小便て床が腐り板が腐り柱が腐り、腐り腐つて真夜中頃に天井が抜けて豚の寐間へ落込むと、豚は仰天して鳴聲を揚げる、この物音に驚いて主人が何事ならんと驅付けて見ると、小僧はまだ夢現で眼が覺めず「且那樣、私の寐間へ豚が上つて來ました」と譯の分らぬ寐言。

盲の水見舞

雨がザブ〜バタ〜又ザア〜と降つて居る最中、盲の和之市が杖に縋り忙て、走せて行くので、或人が不審に思ひ「和之市さん、この降つて居るのに何處へ何用あつて行くつもり」と尋ねると、和之市は見えぬ眼を見張り「はい、大變な洪水だから、私の親類の家は流れたが奈うしたかと思つて、今見舞に行く處であります」と云ふ。

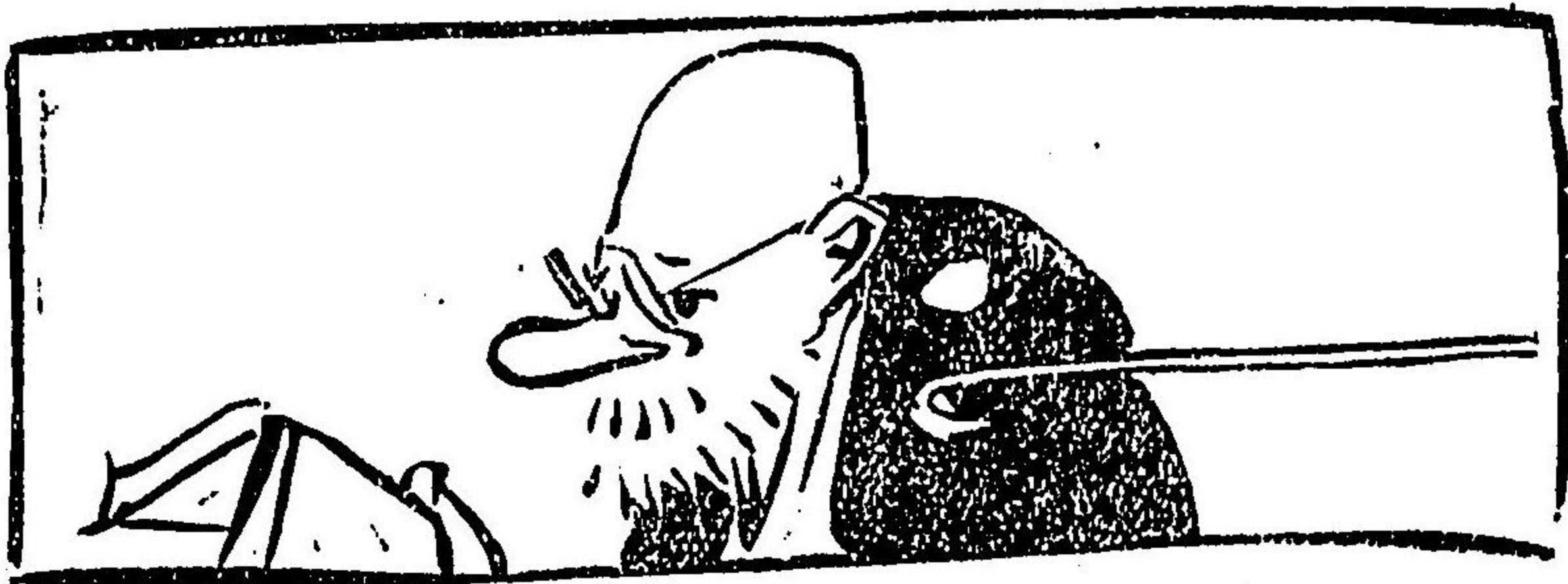


抱腹百話

前の人が又「貴郎は盲だから行つても見えないでしやう」と云へば和之市は點頭さだから水(見ず)見舞と云ふて居るじやないか」

嫁と姑

こゝに極々仲の悪い嫁と姑あり、互に白いと云へば黒いと争ひ、黒いと云へば白いと反對し、年百年中白眼合ふて居ると、良人は又大の親切者で妻を可愛がるので、嫁は姑と一緒に居るのは嫌だが良人に別れるのが嫌で離縁する事が出来ぬが、又良人に喰ひ付いて居ると姑が邪魔になるので、奈うかしてあの憎い〜鬼婆々を無いものにした、それにしても打殺してやらうか……イヤ恨の刃で思ひ知れと突殺してやらうか……待てまてそれでは證據が上つて殺人犯罪で捕へられる、そんなら密と首を絞めて……イヤそれでも知れる、ハテ奈うしやうか、ワット好い工夫があるコッソリ誰にも知れぬやうに毒を呑し、あゝそれに限ると毒を買ふて来て考へると又、あの達者な婆々奴が急に死んだ時には奈うも不審なと人が疑ふに違ひない、疑へば又嫁と姑の仲が悪かつたと人が噂をする、噂をすれば又妻だと思はれる……こりや大變、殺す前



抱腹百話

に姑を大事にくにして居いて、どんな無理でも聞いて、どんな邪見でも辛抱して、あゝあの嫁は實に感心な、あの嫁は實に姑を大事にする孝行者じやと人に思はして置いて、そして毒を呑して死んだら態と泣き悲んだら、誰も氣が付くまい、もしも疑ふ人があつても、あの嫁に限つて……あの嫁は姑を大事にして居たのだからと云ふに違ひないから大丈夫、とそれから姑を馬鹿に大切にすると、姑の方でも嫁が孝行をして呉れるので嬉しくなり、嫁を可愛がるやうになつたので嫁の方でも嬉しくなり、此度は又眞實に姑を大事にする様になると又姑の方でも益々嫁を可愛がるので、嫁の方でも益々姑を大事にすると云ふ具合に、姑を撫てたり擦つたりすると、姑が嫁の仕事を手傳ふ、アレまあ阿母さん濟みませんよなどと姑の親切が嬉しくてたまらないやうになつてしまひ、反て良人より姑の方が好いやうになつて来て、折角買ふて来た毒薬も要らぬ事となり、茲に於て嫁も姑も大に悟り「あゝ姑は悪いと云ふのは皆嫁が行届かぬからである、此方から親切にすればあんなに可愛がつて呉れるものを、それとも知らず自分が恐かなるため、姑を憎んで殺さうとまてしたのは、まあ何と云ふ恐ろしい事であらう、あゝ耻かしい淺猿しい了見てあつた」と懺悔の涙ハラ〜と、これより



抱腹百話

益々姑に親切の限りを盡し、姑は益々嫁を可愛がつて、一家波風静かて目出度く治つたと云ふ事である。

七四

木猫

大工の弟子が親方の家を飛出して處々を流浪して渡り歩き、或る大工の家へ食客となつて居る内、仕事が閑暇になつて遊んで居ると、親方のお神さんが「貴郎、毎日遊んで居て欠伸するなら、キネコでも拵へて下さいな」と云はれたので、弟子はそろ／＼と考へたがサツパリ分らん、全體職人と云ふものは自分の商賣の分らぬ事を自分の親方以外の人に問ふのを耻として、又一ツには自分の未熟なるを願はさぬため、聞くことを嫌つて居るが聞かねば分らぬので大に當惑して、一生懸命になつて考へて見たが何の事だか分らぬのでトウ／＼「お神さん、誠に耻かしう御座いますが、私はまだキネコと云ふものを拵へた事がありませんから、どんなものだから一寸見せて下さい」と顔を赤うして云ふと、お神さんは可笑さに轉げ廻つて「なに家に餘り鼠が多くて困るから、一ツ鼠取りの道具を拵へて貰はうと思つて、鼠を捕るのは猫の本職であるが、猫



抱腹百話

が居ないから木で鼠取りを拵へるのだから、木猫と云つたのさ、ホ、ホ。

糞たれ

ある親爺怒る時は必ず人を捉へて「糞たれ」と罵るのを常として居た、お三が飯粒を三粒ほどこぼしても「この粗鹿つかしの爺たれ下女め」と怒鳴り飛ばし、番頭が一厘の間違をしても「ヤレ大變な大間違じや、この勘定知らずの糞たれ番頭め」と睨みつけ、妻君が衣服の著せようが悪いと云つては「この不束な糞たれ女奴」と叱り、何でも彼でも皆糞たれ／＼と大聲あげて居た、然るに小僧が寝小便をたれたので、今度には薬罐にポコ／＼湯氣を立て、怒り「おのれ糞たれ小僧奴」と怒鳴るのを小僧は平氣の顔をして「イへ旦那、私は寝小便こそはしたに相違ありませんが、まだ糞たれませんよ。」

秘密話し

主人が妻君に極々秘密に妾を拵へてあると、それを横から番頭が嗅ぎ付けてそつと

七五



抱腹百話

手代を呼び「家の旦那は近頃素敵な美人を圍うてあるが、何でも藝妓を落籍したものらしい、お前だから話すが、奥様に知れては大變だから誰にも云つてはならないよ」と眉毛を下らして話したので、手代も又鼻の下を長うして小僧を呼び「お前だから云ふが、家の旦那はこれくだ、必ず他言してはならぬぞ」と言渡すや否や、小僧は又隣へ飛んで行き「オイく、一寸元吉さん茲處まで來なさい」と店に居る小僧を庫の中へ迷込み話したから、其小僧が手代に、手代から番頭に、番頭から主人に、主人から妻君に、妻君から下女に、下女から又元の家の下女に話すと、其下女が又番頭に向ひ「番頭様、家の旦那は妾宅を拵へて樂んで居るのを知つて居るのは妾ばかりでありますが、貴郎の事だから話を爲ますがね、何卒誰にも云はぬ様にしてお呉れよ。」

山本芳翠

日清戦争の際、山本芳翠と云ふ従軍記者があつて、毎晩氏の十八番で陣中の勞苦を忘れた人も多かつたと云ふ、氏は中々に奇談の種を拵へるのが上手な人であつて、従軍中ばかりでも數へ切れぬ程ある、第二軍が威海衛攻撃に出掛る船中の事であつたと



抱腹百話

か、管理部よりの頂戴物で従軍記者連中と船中の徒然を慰めつゝあつたが、何時か好い氣持になつて寢込んでしまつた處、氏は随分に舳の高い人であつたから、一杯遣つて寢てからと云ふものは恰も雷の如き舳で四隣を驚かすの有様であつた、其邊りに寢て居た兵士は夢を破ると云ふ騒ぎで、屢々注意をされた、注意をされた瞬間は雷聲が止むが復た忽ち轟々と鳴り出す、そこで是れでは不可んと到頭一人の歩哨を附けるととなつた、轟と鳴り出すと歩哨が墓尻でオイコロくと遣るので、今度は反對に芳翠先生到頭熟睡が出来ぬので閉口し切つたそらな。

鑑識家の大弱り

三井では益田、朝吹の兩氏が一番の鑑識家で、誰でも書畫骨董を買ふたら兩氏の鑑識を乞ひ、もし兩氏が賞賛をせぬと直に賣り飛ばすと云ふ位であるから、兩氏は特更に氣に入らぬ體をなして其人が賣ると、直に裏から手を廻して買取り、常人に口惜がらせて樂んで居た事も勘からぬさうである、然るに世の中には上には上があつて、二三年前の事とか或る道具屋は一番其の裏をかいで見ると、三井の某氏に一幅の贋物を



抱腹百話

買り付けて置いて、倍て是れは復たと得べからざる珍品で御座れば、必らず益田さんや朝吹さんなどに例の通り悪く云はれて御賣りなど遊ばすなと固く云ひ含めた、某氏は一日、益田、朝吹兩氏を招んで件の物を掛け置き、兩氏が何と評するかと待受けて居た、案の如く兩氏は之を見るや否や口を揃へて散々に貶し始めた、然るに某氏は道具屋の含め置いた通り空ら嘯いて取り合はぬ、兩氏は道具屋の魂膽を看破し、早くも何とかして元の通り返させ呉れんと、口を極めて最下等の賸物なるを指摘すればする程某氏は益々落ち附き拂ひて取合はず、流石の益田、朝吹の兩氏も道具屋に裏かゝれて思はず日頃の敵を打れた。

三杯汁

或家て客を招いた處、馬鹿太郎と云ふ男がたゞ一人來た限りて、待つてもく他の客は一人も來ないので、馬鹿太郎腹が減つてベコクになつてしまひ、トウク掘らなくなつて催促をして自分だけ先に食ふと、汁を二杯も三杯も四杯も五杯も十杯も二十杯も三十杯も、百杯も旨い／＼と云つて取替へ引替へ腹に二滿も三滿も食つた上に



抱腹百話

又椀を差出すので、給仕人も料理人も大に迷惑をして「もうしお客様、馬鹿の三杯汁と云つて、汁は二杯より食ふものでないと決つて居ります、そう何杯もく食つて貰つては後のお客様に差上るのが無くなつてしまひます、イヤもう鍋の底を叩きました」と注意すると、馬鹿太郎首を左右に振り「イヤ馬鹿の三杯汁でない、折角の熱い美味い御馳走も遠慮を爲過ぎて冷して不味くしてしまふのが馬鹿の冷し汁で、私はそんな馬鹿な事をせずに、美味い内になるだけ澤山に食つて、食ふて貰ふために人を招んだ御主人の厚意を無駄にせぬのじゃ。」

車引

「遺線の廻り兼たる身の上は車引くより他に道なき」と云ふ歌の意をそつくりと、茲に貧乏博士ありて爲すこともなきまゝ人力車を挽くこととなり、或店へ行つて聞いて見ると三十五圓と云ふので「高價いから二十圓に負ける」と云ふと「イヤ負らん」と云ふ「ドウしても負らんか」と念を押すと「はい、ドウしてももう一厘も半厘も引けません」と云ふ「ナニ挽けぬ」「はい些少も引けません」「挽けぬ車なら買ふても仕方



抱腹百話

八〇
がない」と其儘歸つてしまふた、店の主人後見送つて「買ふのかと思つて一生懸命に
騙引して居ると、素見に一杯乗せられたわさ。」

鬼の不景氣

地獄のある處で赤鬼が青鬼に向ひ「青鬼君、近頃は娑婆でも大變な不景氣だと云ふ
事だが、我々の商買もサツバリ不景氣で困るじやないか」と云へば青鬼も點頭さ「左
様々々、近頃は戦争も起らず、流行病も無く、トンと亡者が來なくて困るよ」赤鬼は
心配顔をして「ア、僕は虎の皮の幘袴を質に入れてあるが請出す事が出来ないの
だ」青鬼も「僕のはもう質流れをしてあるのだ」と青息を吐く、暫くして赤鬼も又、
「大きい聲では云はれぬが、閻魔様も大分借金で困つて居るそうな」と聞いて青鬼は
屹然として「僕は親方の閻魔様に少々借して貰いたいと思つて居たが、それでは仕方が
ない」赤鬼は益々心配顔をして「君、僕はもう明日の米代もないから、角を抜いて賣
らうと思つて居るが、誰か買手はないかな」青鬼も「それはよい處へ氣がついた、そ
んなら僕のも一緒に賣らうが、それにして何は處がよからう」と思案をして居たが、



抱腹百話

赤鬼は「娑婆へもつて行つて、鯉節だと云つて乾物屋へ賣つてしまはう」青鬼も「そ
れは好かろう」と早速角を切つたが、よくよく考へて見れば娑婆で見た事のない鬼が
直接に乾物屋へ入つて行くとは或は膽を潰してしまふかも知れぬ、骨を折つて角が賣れ
ぬ……折角と云ふ言葉は大方こんな處から起つて來たのかも知れぬ、そこで青鬼が
赤鬼に向ひ「我々が賣りに行つては賣れぬから、誰か娑婆の奴に頼んで賣つて貰は
う」と聞くより赤鬼は横手を打ち「そんなら人をダシに使ふてやらう」。

儉約

馬鹿小僧あり、主人より物事を叮嚀にしると云へば百足の足へ一つ宛駒下駄を穿
し、又早くしろと云へば鳥の行水をなし、或時一本の釘を打つのに一時間もかゝつて
主人より「急ぐ時には何でも一つ位打つのを儉約して早くせぬか」と大目玉を頂戴し
たので、これから何でも一つ宛儉約せんと思ひ居る處へお嬢様に急病が起つたので
「小僧大急ぎで薬を買ふて來い」と云ひも終らぬに飛出し、買ふて來たのを見ると錠
であつたから主人大に怒り「薬と云つたのに何故錠を買ふて來た馬鹿小僧奴」と叱る



抱腹百話

と「へい、九スリと云ひましたからお急ぎゆへ一つ儉約して八スリを買ふて来ました。」

山家の火事

ある山の上の一軒家から火事が起つたので、麓の人々が驚いて走せ上ると、頭の上から「来てもよい〜」と頻りに呼ぶので、来なくてもよいのだと思つて皆歸つてしまふた、すると段々火が盛になつて来てトウトウ其家が全焼になつてしまふた、後で聞くと山の上で水一滴も無くて大に困りはたつたので、水が無ければ小便でも雪隠の肥でもよいから持つて来てかけて貰ひたいので「肥でもよい〜」と一生懸命に聲を枯らして云つたのであつた。

皆さん御存じ

ある御寺へ説教を聞きに行くとき、味噌摺坊主が壇へ登つてさも殊勝らしく珠數を爪繰つてさて勿體らしく云ふやう「皆さんようこそ御參詣遊ばされた、ある人の歌に「火

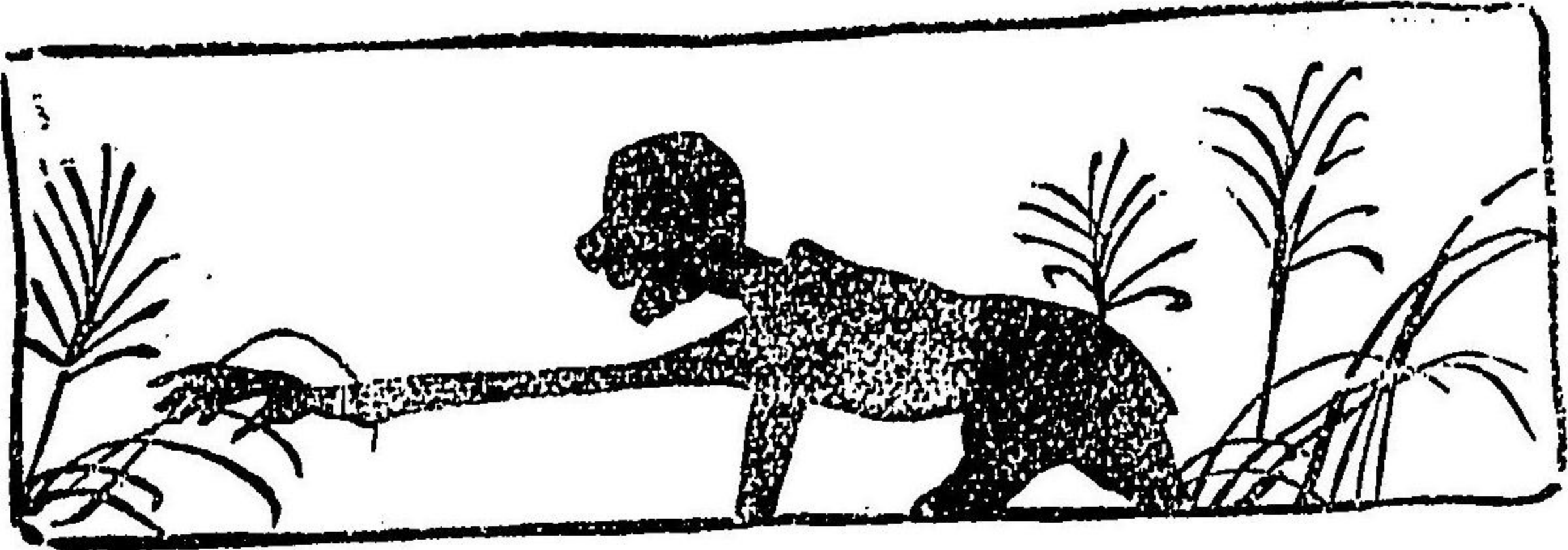


抱腹百話

の中を分けても法は聞くべきに雨風雪は物の數かは」と仰せられてある通り總て説法を聴聞するには此心得が肝要で、たとへ雨が降つても槍が降つても火の中でも水の中でも厭はず一心に聞いてこそ、佛様も其信心を受けさつしやるのじや、折角御説教の坐敷へ来て居眠をするやうでは、未來は必ず地獄のドン底へ落ち込んで焦熱地獄の釜の中で眞赤な煮蛸のやうになりますぞ」と一座を睨みまわし「今度御話しをして置くのは何れの寺でも皆山號と寺號とありまして、譬へば金龍山淺草寺とか、萬松山泉岳寺とか云ふ具合ひに、田の中にあつても畔の中にあつても皆何々山何々寺と云ふのじや、それ故大本山、中本山、別格本山、準別格本山、小本山、總本山と云ふのじや」とさも難有相に説いて居ると、聴衆の中から一人の無遠慮者が出て来て説教師を壇から引ずり降りし「そんな下らない事はもう聞かして貰はないでも、皆サン御存じだ。」

何でも澤山

自分の家には何でも澤山にあると云ふのを大自慢の男が出来て、一寸遊びに行つて烟草入を失ふても、そんな烟草入は家に澤山にあると云つて態と惜しい顔もせず、衣



抱腹百話

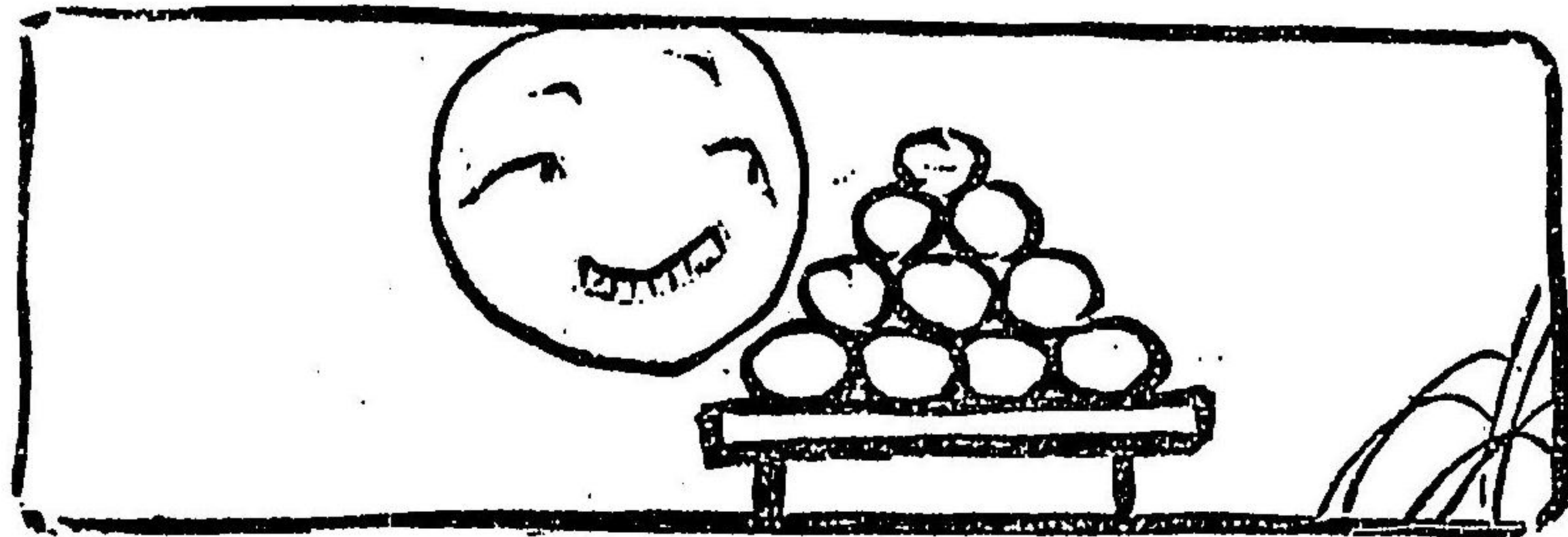
服が破れても、時計が壊れても、帽子が飛んでも、財布を落しても、何でも彼でも皆平氣な顔をして、そんなものは家に澤山ある〜と口癖になつてしまふた、すると或時友人の家へ行つて頭を打つた時、先方の主人が氣の毒がつて居ると「何に、こんな頭は家へ歸れば澤山にある」と云つた。

大山大將に意見

先年大山大將が埼玉地方へ遊獵に出掛け、或茶店に憩ひしに其店の老婆が「お前さんの體格は實に立派だが二十貫以上もあるだらう、そんな立派な身體を持ちながら獵などして遊んで居ては物體ない、何ぞ一仕事眞面目に稼いで見たら一麻の身代が出来てあろう」と散々に意見をされたと云ふ話があるが、一世の英傑でもこんな無心のものには敵はない。

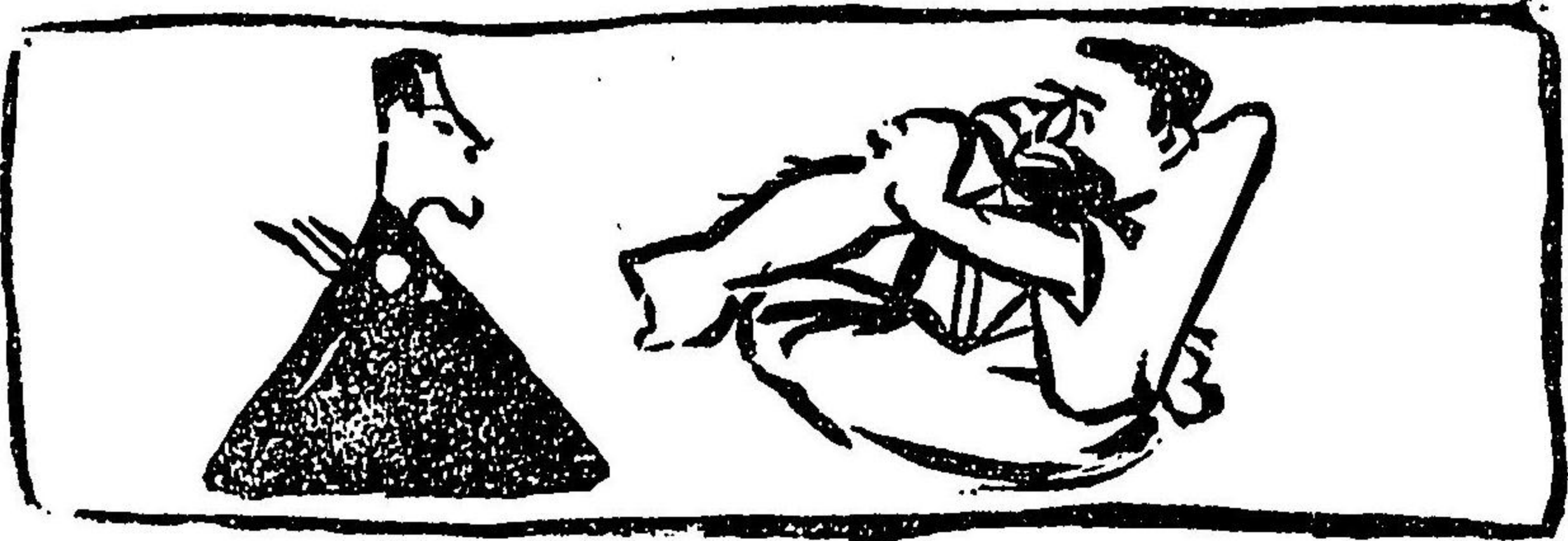
夢判断

賣卜先生夢判断と云ふものを始め、夢の善悪によつて其人の吉凶禍福運命を觀ると



抱腹百話

云ふ看板を出す、忽ちお客が来て「先生私は昨晚筍の夢を見ました、何卒御判断を願ひます」と頼むと、先生勿體らしく首を捻つて「イヤそれは〜滅法界に好い夢じゃ、これから立身出世は疑ひなきこと恰も筍のヅン〜と伸びるが如く、又枝葉の繁るが如く事業發達して榮ゆること疑ひなし、あゝ羨い夢じゃ」と譽める、其人大に嬉んで禮を出して歸らうとする處へ又一人来て「先生私は昨夜筍の夢を見ましたが一ツ見て戴きたう御坐ります」と云ふ、先生又首を傾けて「それは誠に氣の毒な誠に悪い夢で、貴郎は近い内に生命を失ふ事がありますぞ」と云ふので其男は仰天し「先生、只今外で聞て居りましたら、前の人が筍の夢で大相好い様に云つて居りましたから見て貰ひに入つたので御座ります、同じ筍の夢で見たのも同じ晩であるのに、何故こんなに違ふので御座ります」と不思議相に云ふと先生澄し込んで「ハテ分らん人ぢやないか、同じ筍でも初めに生へるのは味もよければ品も好く人にも嬉ばれるが、段々後に生へる程味も悪く品も悪く人にも嬉ばれず終ひには腐るのもある通り、同じ筍の夢でも初めに見て貰ひに来る人はそれだけ運が好く、後になつたのが運が悪いのじや。」



抱腹百話

高利貸の本尊

貧乏長屋あり、いろ／＼の神や佛を祭つても祈つても拜んでも踏んでもサツバリ
效驗なく、段々と凹んで瘦せて枯れて食ひ込むばかり、それに引替へて隣の長屋に住
む高利貸先生の運の好さ、コロ／＼と金が儲つてツン／＼と溜る勢ひに、貧乏長屋
の人々は皆羨しが「貴郎の家には一體どんな好い神様を御信仰なさるのですか」
と尋ねて見ると、高利貸先生煙草を輪に吹いて「私の信仰するのは一番確かなもの
で、お前様等のやうなアテにならぬクダラヌものでない、神佛の御光より金の威光が
難有いのじや、成田の不動様より、地所山林の不動産が信仰じや。」

藝妓の歌

近來は藝妓と雖も多少學問が出来るやうになつて來て、曰く廂髪の英語藝妓とか、
曰くハイカラの文學藝妓とか云ふものが出来るやうになつた、そこで或先生が其藝妓
を相手に風流な遊びをして見たいと云ふので、新橋の底拔亭へ飛込んで藝妓の星子道



抱腹百話

子幫間馬鹿八を呼んで、「福の神」と云ふ題で狂歌狂句或は都々一を名々に作らすと、

星子が

鼻かんだ反古に二度の務めさす

雲隠の中で尻をフクノカミ

次に童子も又後れじと、

自然主義腹はホテイとなりけり

馬鹿八も劣らじと、

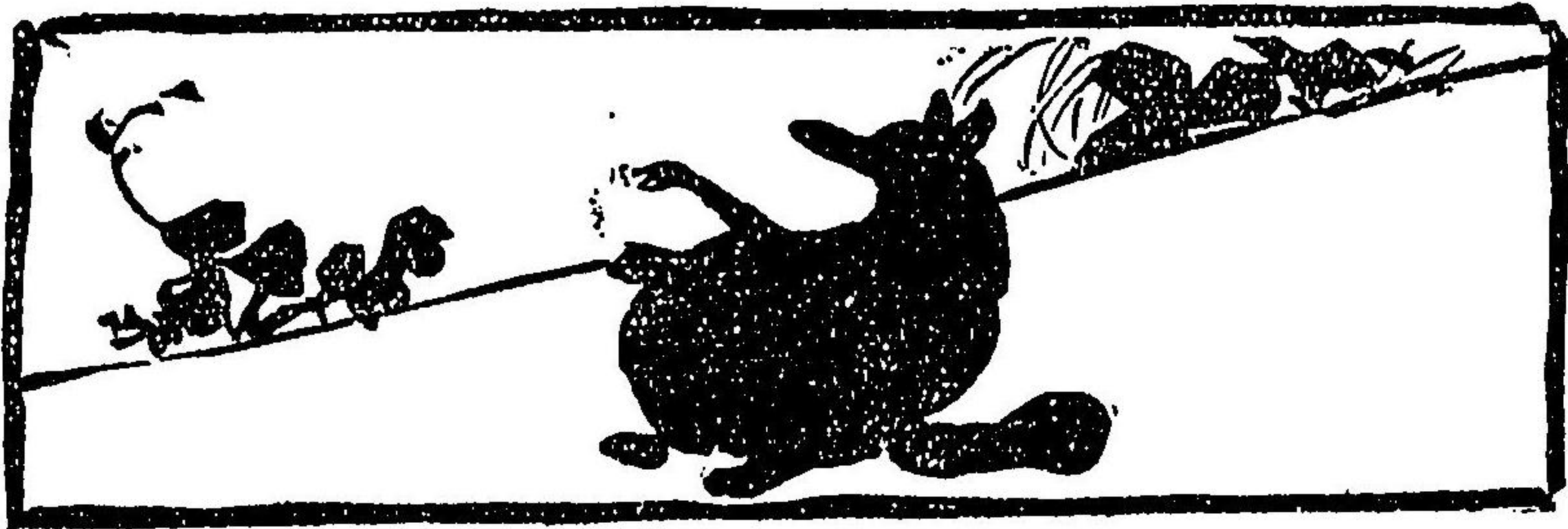
芋喰て腹張て尻を大コク

先生機嫌斜めならず、更に又自ら筆を取りて、

此家を七福神が取巻いて

と上の句を作り、各々下の句を付けよとの仰せ、三人ハツと心得て又一生懸命に考へ
込む、馬鹿八は暫らく考へて居たが何か考へ付いたと見えて横手を打ち、「先生、宜い
のが出来ました。」

貧乏神の出處もなし



抱腹百話

とやつたので、折角の目出度い歌も至極縁喜が悪くなつて来たので、今度は又「月」の題で作れと命ずると、馬鹿八又、

まんまるく坊主頭に似た月は

雲の衣をかけて出けり

菫子も又

食ひかけの饅頭に似たる三日月哉

星子も又

月々に客に無心を云ふけれど

借金の根は未だツキぬなり

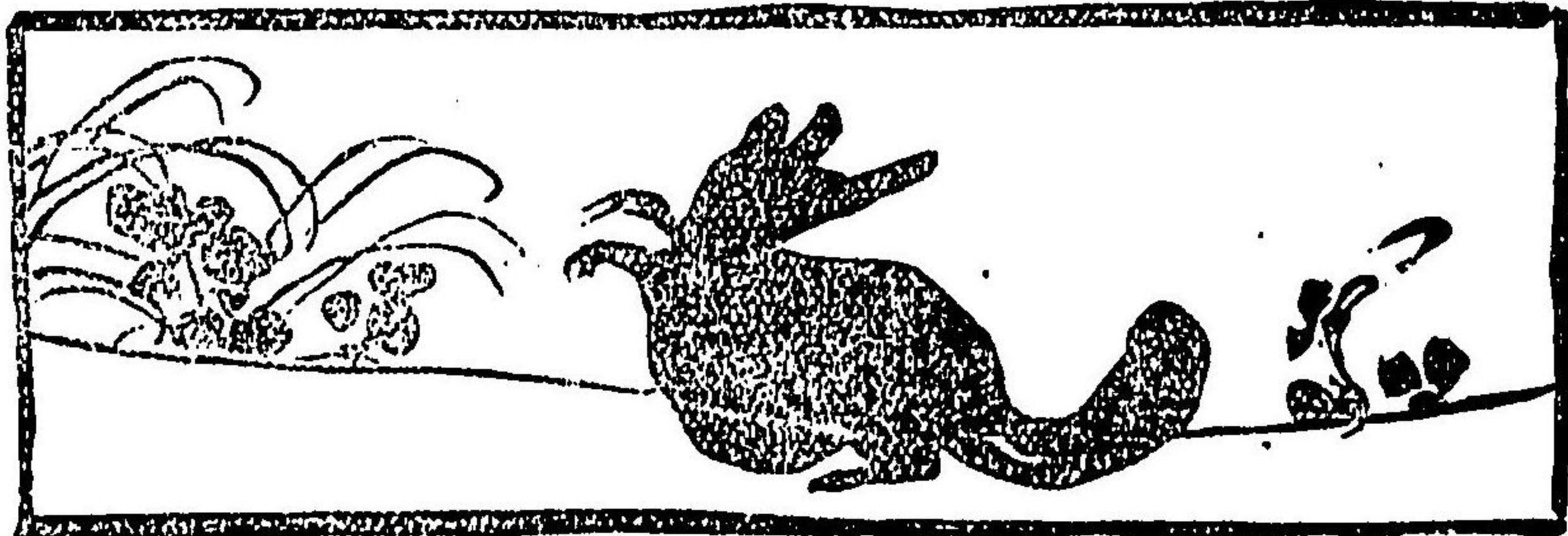
馬鹿八又

牛の糞踏んで尻餅ツキにけり

これは秀一でなくて臭一である、次に「猫」と云ふ題で賞をかけると、菫子が、

あの面て戀とは可笑し通ふ猫

次に星子も、



抱腹百話

色に出ず聲に出けり猫の戀

次に馬鹿八出て、「旦那、猫には油断のならぬのがありまして、ニャン〜と鳴いて鼠を取るのではなくて、三毛でも斑でも何でもなくて、色が白くて口紅つけて、髪は烏田に結ふて茶屋を住居となし、チャンボンと三筋の絲で鳴き出して、鼻髯の長い人に巫戯たり、馬鹿息子を欺して御金を取るのは通常の猫より餘程巧妙で油断がなりません。」

客の居ぬ間に肴あらず猫

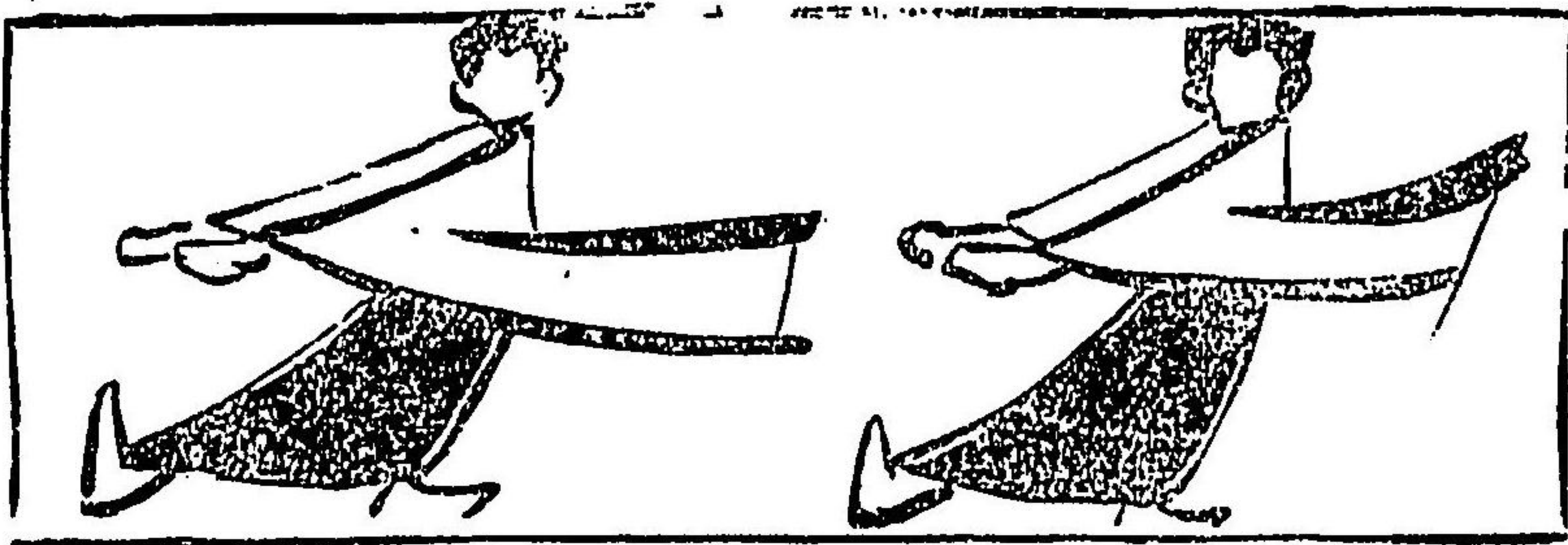
とやつたので二人の藝妓は面を膨らして居ると、先生は大に興に入つて此度は、

焦れ死した例なし猫の戀

とやつたそうである。

火災保険

田舎の太兵衛爺さんが東京見物に來り、夢心地で丸の内を通つて居ると、明治火災保險會社の建物の宏大なるを見て驚き、暫時呆然として眺めて居たが來合した人力車

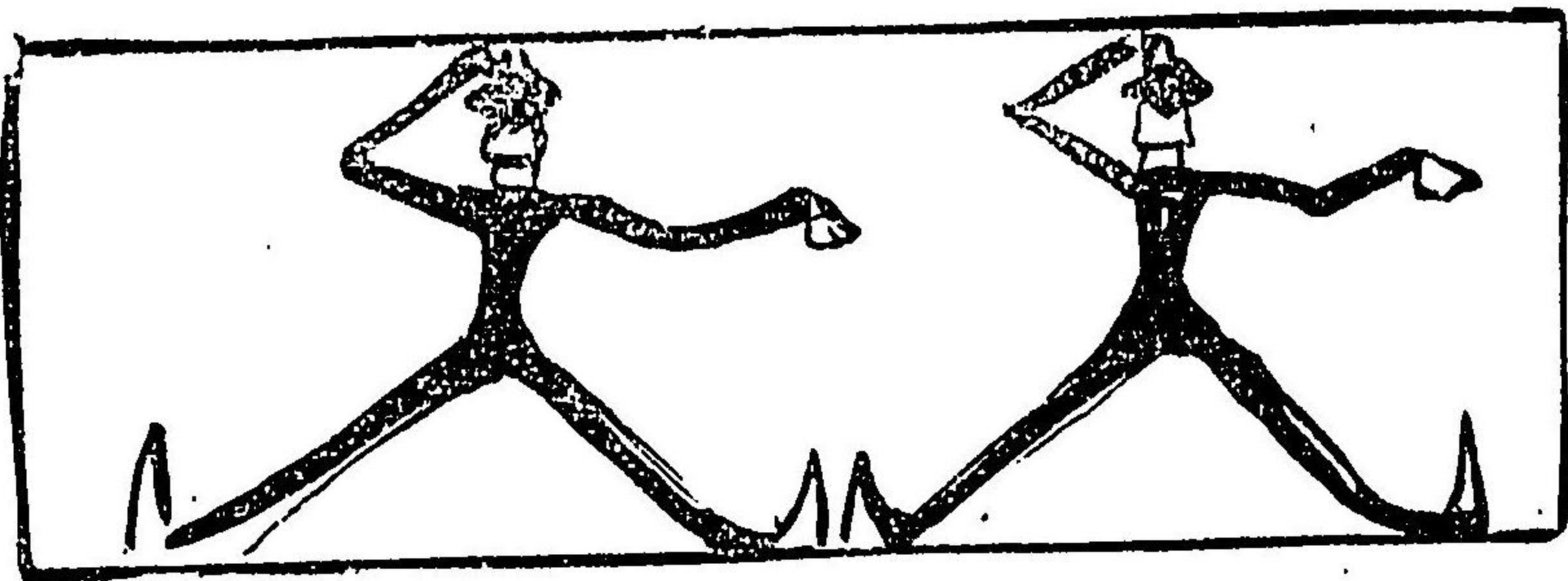


抱腹百話

夫に向ひ「此家は何をする家だつべし」と尋ねる、車夫は答へて「これは火災保険と云ふて、焼れた時に困らぬやうに保険をする會社だ」と教へてやると爺さん大に喜び「俺の噂は餘り焼過ぎて困るから、その保険とやら云ふものを頼んで下さい。」

幽 靈

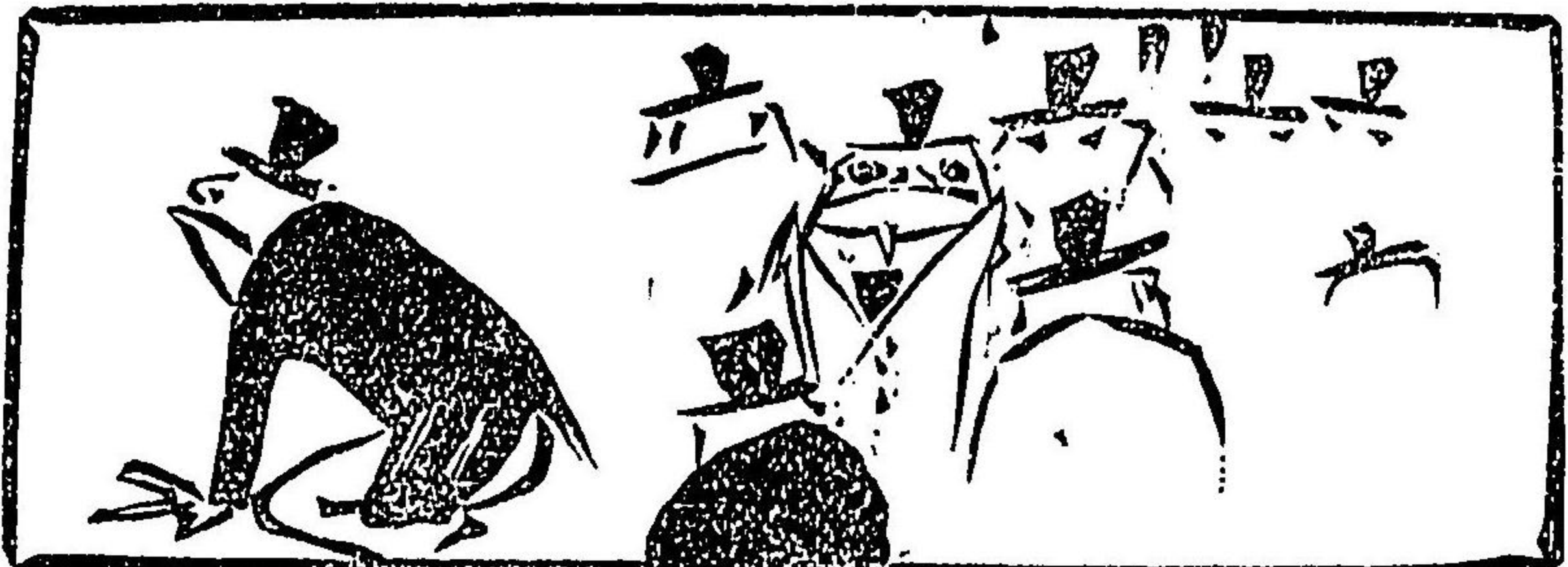
淋しい田舎の山寺に咽喉を突いて死んだ女の墓があると、好奇心の男が五六人集つて相談を爲し、一ツ膽玉を試して見るために夜中一人て其墓へ行つて来る事となし、行つて来た證據に一本の杭を打込んで来ることにした、處が一人の大臆病者があつて、恐ろしさに齒の根も合はずガタ／＼と顫ひながら杭を打込むと、墓の中から青い手を出して衣服の裾を掴へて離さない、キャツと呼んで引破り引千切つて一目散に逃げて歸つたまゝ、ドツと寒氣を催して病氣になつてしまふた、他の男は皆仰天して翌日の晝中に見に行つて見ると、それは幽靈に裾を捉へられたのでない、自分の裾を自分が杭で打込んだのであつた。



抱腹百話

食ひ倒し者

飲食店へヌーツと大男が這入つて来て「こりや／＼亭主、茲處へ腰を掛けるのは何程だ」亭主頭を下げて「へい／＼、それは無代で御座います」「無代か、よし／＼そんなら一ツ腰をかけてやるぞ」「へい難有う」「お茶を一ツ呑みたいが何程だ」「それも無代で御座ります」「無代なら一ツ汲んで呉れ」と四方を見廻し「あの牡丹餅の餡は何程だ」「あれは餅の附物でありますから別に代價はありません」「あ、そうか」と茶を呑んでは餅の餡だけを食べ、又茶を呑んでは餅を食べ「亭主、大きに御馳走であつた左様なら」と出て行かうとするので「あ、御客様々々何卒御拂ひを」と亭主が逐ひかけると「何じや、腰をかけるのも茶を呑むのも無代と云つたでないか」「へい、それは無代で御座いますが、食つた物の代價を」「フン、それは別に代價は無いと云つたでないか」「イヤ餡は餅の附物でありますから餅を買ふて頂きましたら無代で御座いますが、餡だけ食へては無代になりません」「無代と思つて食ふたのだから金は一文もない」「ヒエー」「品物を返せと云ふなら吐出して返すから嘔吐でもよいか」



抱腹百話

福の神

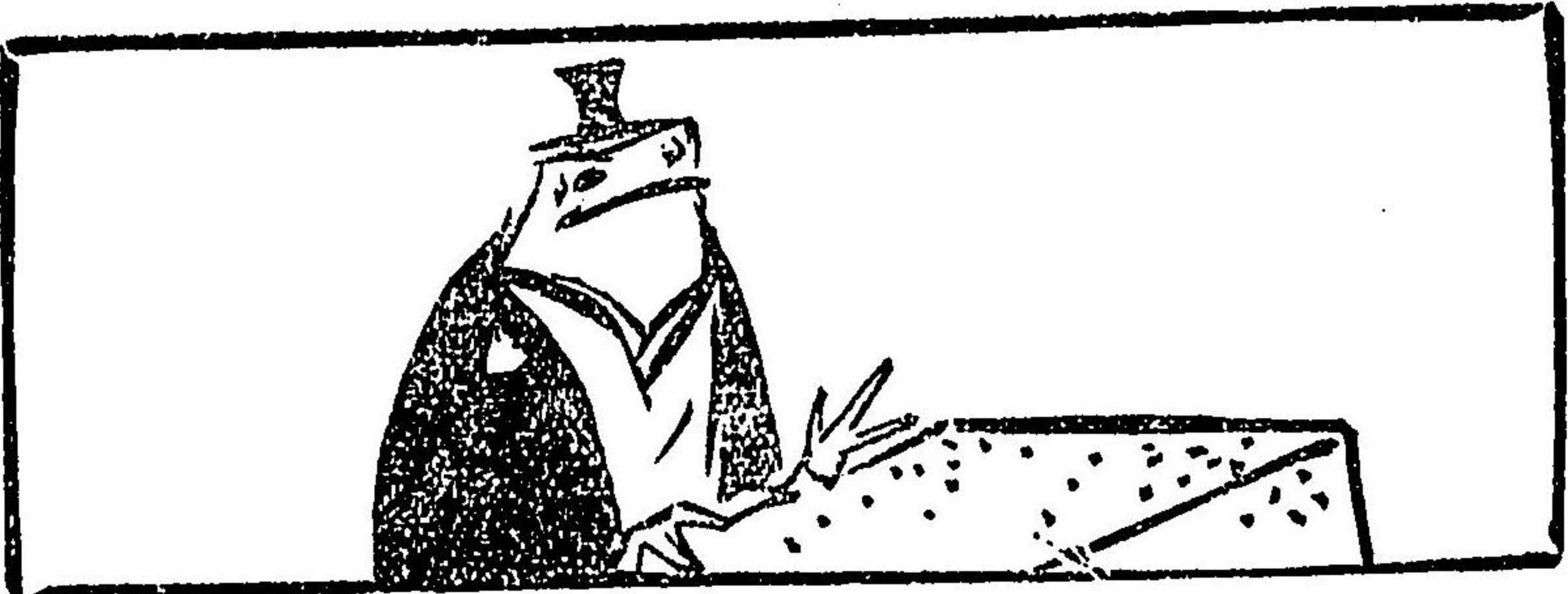
此處に符醫者あり、先生は年中借金病で苦しんで居ると、隣の風呂屋では又毎日々々大入の大繁昌、これを羨んだ先生滿らぬ顔をして「隣の家は一體どうしてあんなに繁昌するのだらう」と不思議相に云つて居ると奥様が聞つけて「貴郎、隣の家では福の神を祭りて朝晩信心をして居りますから、それであんなに儲かるのでしやう」と聞いた先生早速福の神を祭つて見たが何の效能もないので落膽し、そこで風呂屋の福の神を盗んで來て祭つて見ると、風呂屋の御客はパツタリと無くなつてしまふたかと思ふと、或金満家の奥様が診て貰いたいと云つて籠で迎ひに來た、先生大喜びで早速出かける途で日が暮れた、すると其籠昇は盜賊であつて突然に「生命が惜けりや金を出せ」と刀を引抜いて威嚇された、先生魂身に添はぬまで打頭つて「何卒生命だけは」とトウ／＼九裸にされて這々の體で逃げ歸つて、トン／＼と表の戸を打ち「ヤア大變々々、隣の神様は恐ろしくよく利く神様だがあれば人を裸にする神様であつた。」

人殺し

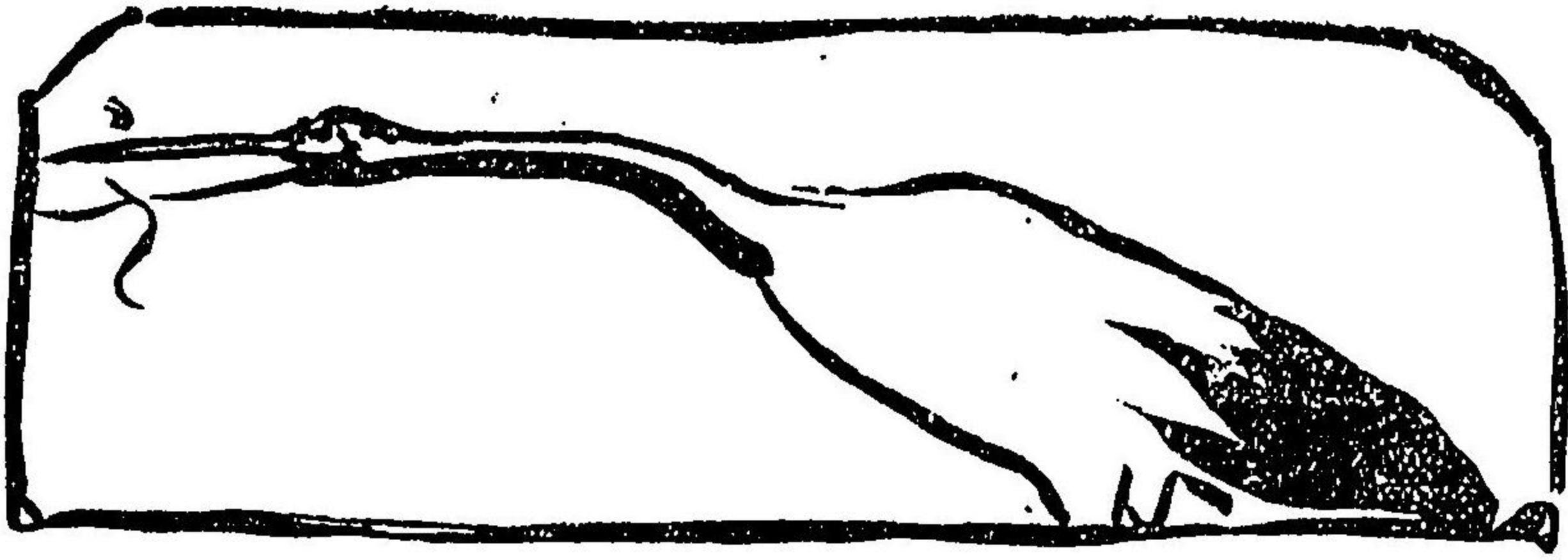
「人殺じやく／＼隣て人殺じやく／＼」と親爺が外から忙たしく歸つて來る、お神さんは尻餅を搦く、息子は飛出す、娘は顔ひ出す、隠居は膽を潰す、婆さんは腰を抜かす、近所の彌次馬連が我先にと見に行つたが何の氣もないので、欺されたと云つて怒りながら歸つて來た、そこで大悶着が起つて四方八方より「何故嘘を云つて人を欺したい」と責込むと、親爺濟し込んで「ナニ、人殺しと云つたのでない、犬殺しと云つたのだじや。」

二世三世

男心と秋の空、ある百姓家の亭主が何の咎もない女房が厭いて來て、種々様々色々として逐ひ出さうとすれば女房は涙を流し「お前さんの方から惚れ込んで來て、妾が聞かぬのを無理無體に矢笠しく云つて女房にして置ながら、今更三行半にしやうとは、そ、そりや餘まり情ない、エ、祝言の時に何と云つた、二世も三世もとあれほど固く



抱腹百話



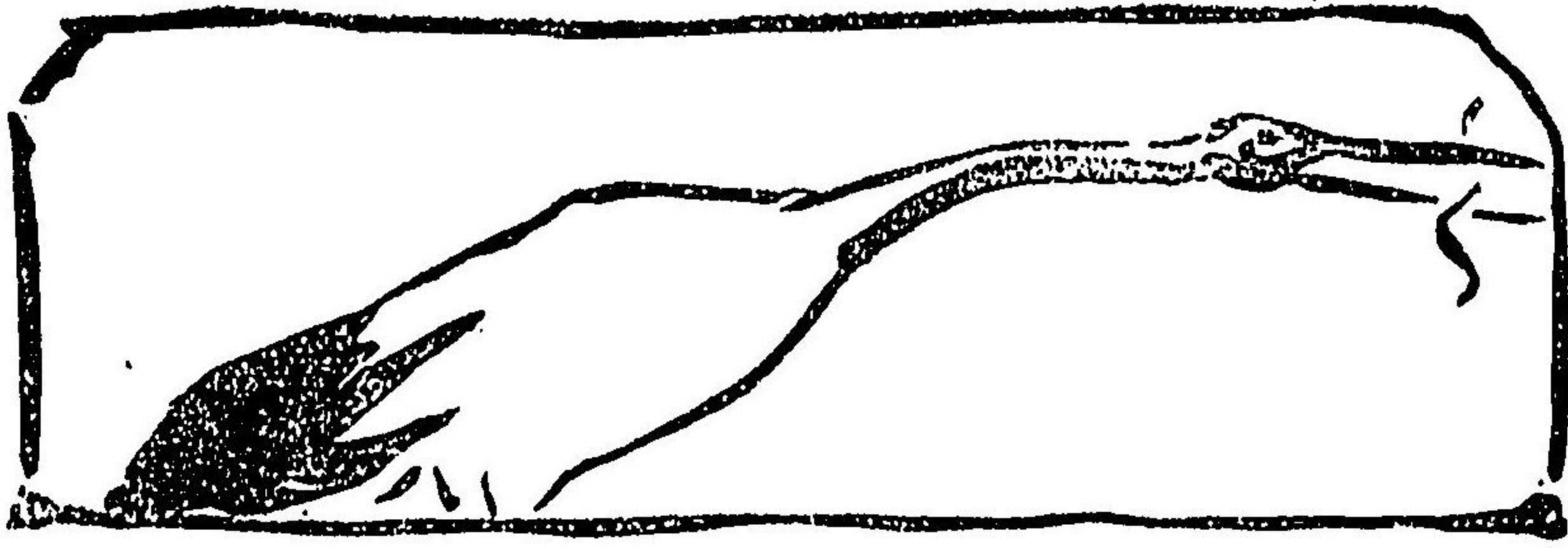
抱腹百話

云つて置きながら」と鼻を叩いて恨みの數々、亭主空嘯いて「エ、煩が、お約束の二世三世はもう遠くの昔に濟んである筈」と聞答めて女房「エ、まだ一世は愚か半世も添ひ遂げぬのに、二世三世は何時濟みました」亭主濟した顔で「まだ分らぬのか、夫婦になつた時に五畝も六畝も七畝も一反も一緒に草を取つてやつたてなつか。」

九四

親切な妻君

ある娘が嫁入前に母親から「女は嫁入をしたら良人に親切を盡さねばならぬ、何ても彼でも云はれぬ先にチャンと氣を利かしてせねばなりませんぞ」と懇々と云ひ聞かされたので、娘は其時耳の穴をほじくつて聞いたかどうだかそんな事は分らぬが、嫁入つてからと云ふものは恐ろしく良人に親切を盡し、云はれぬ前に心を配つてするのて良人も大喜び、そこで或日良人が銃獵に出かけて、今日こそは得物を澤山に打つて妻君への土産にして嬉ばさんものと思ひ、一生懸命になつて打つても、當らず、あゝ歸つたら又親切な妻が酒の酣をして待つて居るだらうから、一羽も打たずに歸りにくい、あゝ困つたと思ひながら我家の近くまで來ると、途中に鳥屋があつたからント



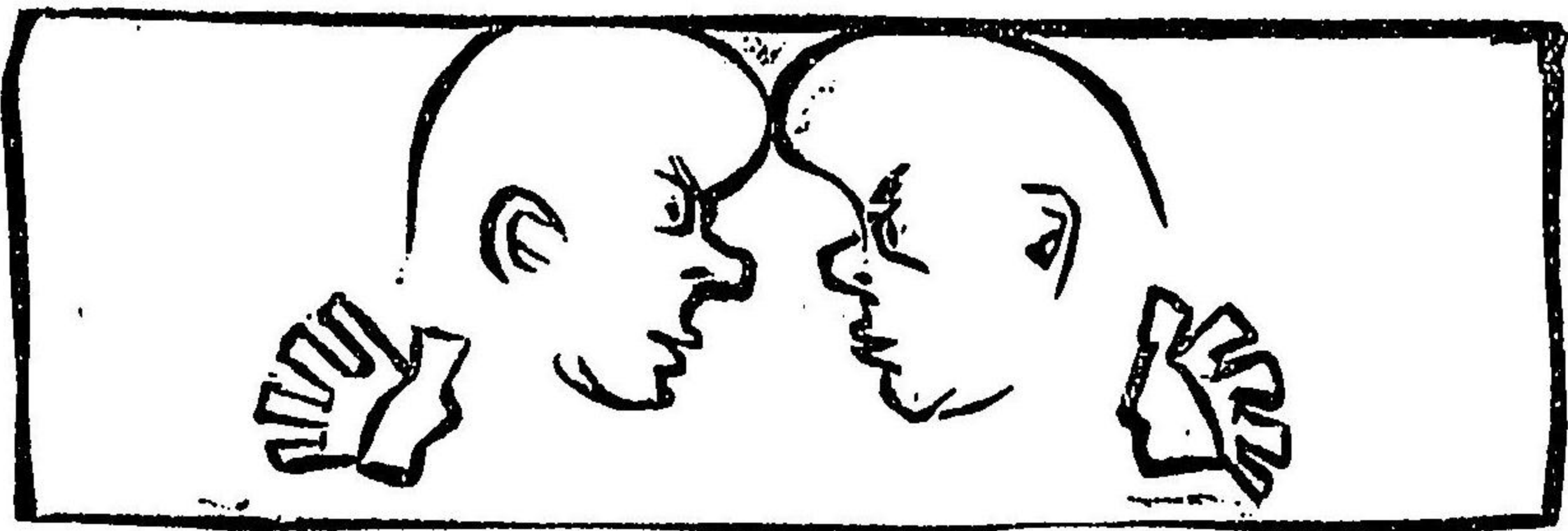
抱腹百話

思ひついて中へ入り「鳥屋さん、小さい鳥かないか」と尋ねると、鳥屋の亭主待ち兼ねたと云ふ風で「最前奥様がお出になりまして御注文でありましたから、取寄せて待つて居りました」と云ふ、良人合點行かぬまゝに小鳥四五羽を買つて歸り、妻君に其譯を聞いて見ると「はい、又いつもの下手な鐵砲で一羽もとれず、鳥屋で又買ふて御歸りの事と思ひまして、それ故もし品切であつたら御氣の毒と思ひ、妾の親切で鳥屋に用意させて置きました。」

結婚と離婚

ある馬鹿者が同じ馬鹿者に向ひ、「君、日本國中て一年間に結婚する人の中て男と女と孰らが多いか少いか」と尋ねると、問はれた馬鹿者はしばらく首を傾けて考へた後「そんなら僕の方からも尋ねたい事がある、離婚する人の中て男と女と孰らが多いか少ないか。」

哲學家

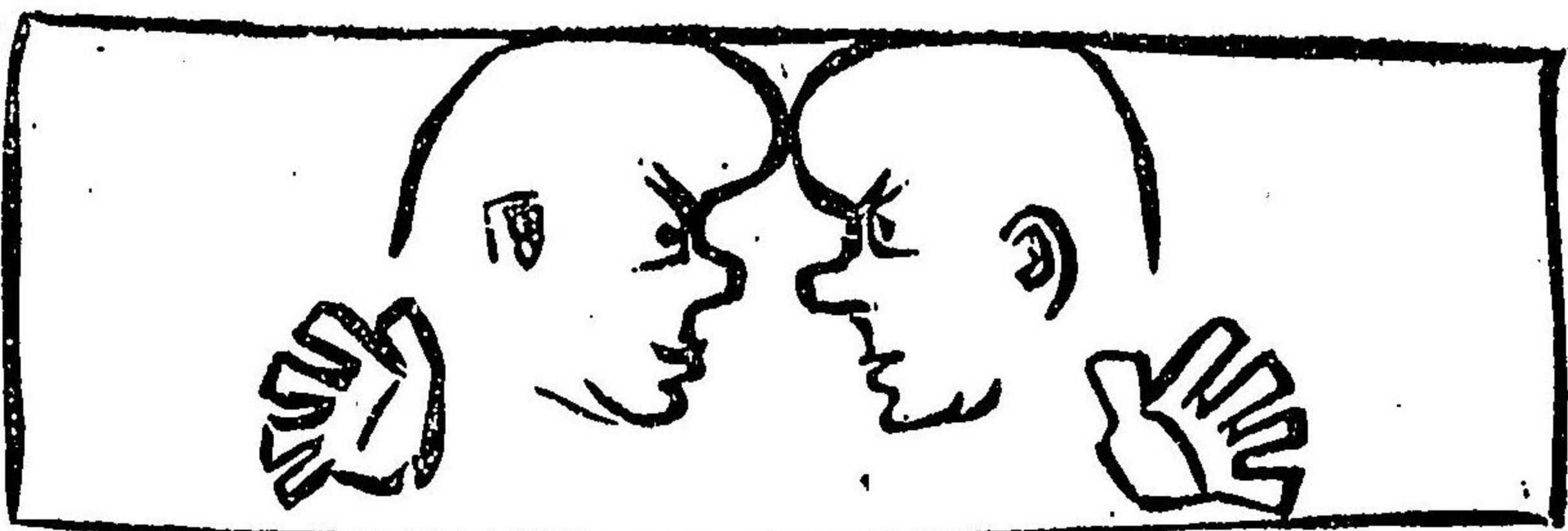


抱腹百話

二十世紀の文明から三十世紀も後れた思想をもつた哲學家があつて曰く「天地間の森羅萬象天文地理文學算數美術工學何でも彼でも知らぬものなし」と威張る、之を聞いた一人の子供が来て「先生、人間の住む土の下は何であります」先生答へて「土の下は火と水である」小供又問ふて「水と火の下は何であります」先生又答へて「其下は大きな石なり」小供又「其石の下は何であります」先生「其石の下は大きな柱である」小供「その柱は何故落ちないのです」先生「其下に又大方の神様があつて其柱を持つて居るのじや」小供「其神様が何故落轉ないのですか」と先生終に答ふる辭がなかつた。

嘘

嘘嫌ひの主人がある、嘘云ふことも聞くことも嘘のウの字も嫌ひにて、店員を呼び集めて云ひ渡すやう「以後は決して嘘を云ふこと相成らん、又嘘と云ふ言葉も決して出してはならん、もし誤つて云ふ時は速坐に解備してしまふ」と嚴しい仰せ、何れも大頭痛の中にも一人の小僧が、嘘を云ふのが好きで人の云ふ事は何でも彼でも皆嘘と

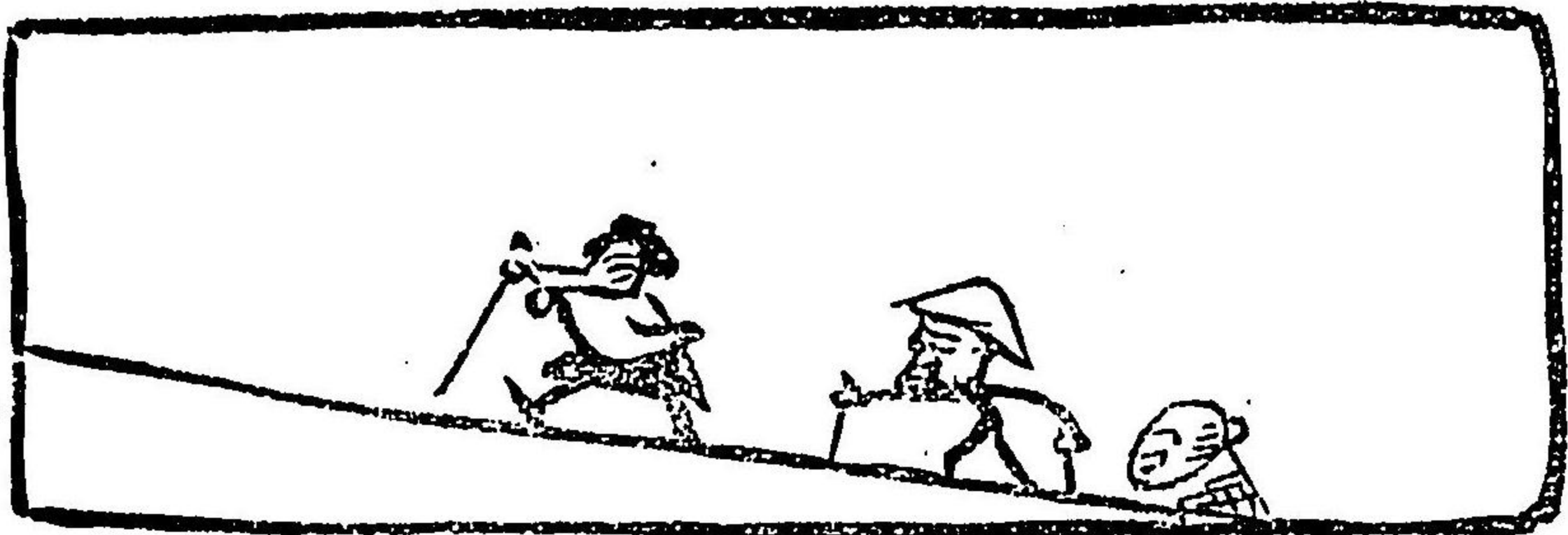


抱腹百話

云ふ癖があるので、首が浮雲くなつて來たので大に心配を仕て、早速考へ出して主人に向ひ「旦那様、昔大風が吹いて人間の首が折れて、家の敷石が飛んで行つたさうてムります」と聞くより主人眼を怒らせ「黙れ、又嘘を吐すか」と云ふ聲の下より「旦那様、貴郎が嘘と云つたものを解備すると云つたから、今云つた人を解備して下さい」と主人大に閉口して「待つてくれ〜」。

戸籍調べ

巡査「コリヤ〜貴様の家には何人あるか」戸主頭を疊に摺つけて「ハイ〜皆で三人あります」巡査「ウム、妻はあるか」戸主「ハイあります」巡査「して名は何と云ふのじや」戸主「あゝもと云ひます」巡査「あゝもとは放屁の出さうな名じやな」戸主「左様に御座ります」巡査「歳は何歳だ」戸主「ハイ歳は……」と考へてどうも分りませんが大方一歳でしやう」巡査大に怒り「コリヤ〜官吏を侮辱するの、己れ拘引するぞ」戸主「ハイそれでも一歳に違いありません、何程御上の御威光でもそんな無理な事は……」巡査聲を荒らげ「馬鹿、茲處へ連れて來い、己が見てやらう」



抱腹百話

戸主「へい〜」と戸棚から出して来るのを見れば芋の御馳走、巡査呆れて「何じゃ、これは飯の副食じゃないか。」

赤ン坊

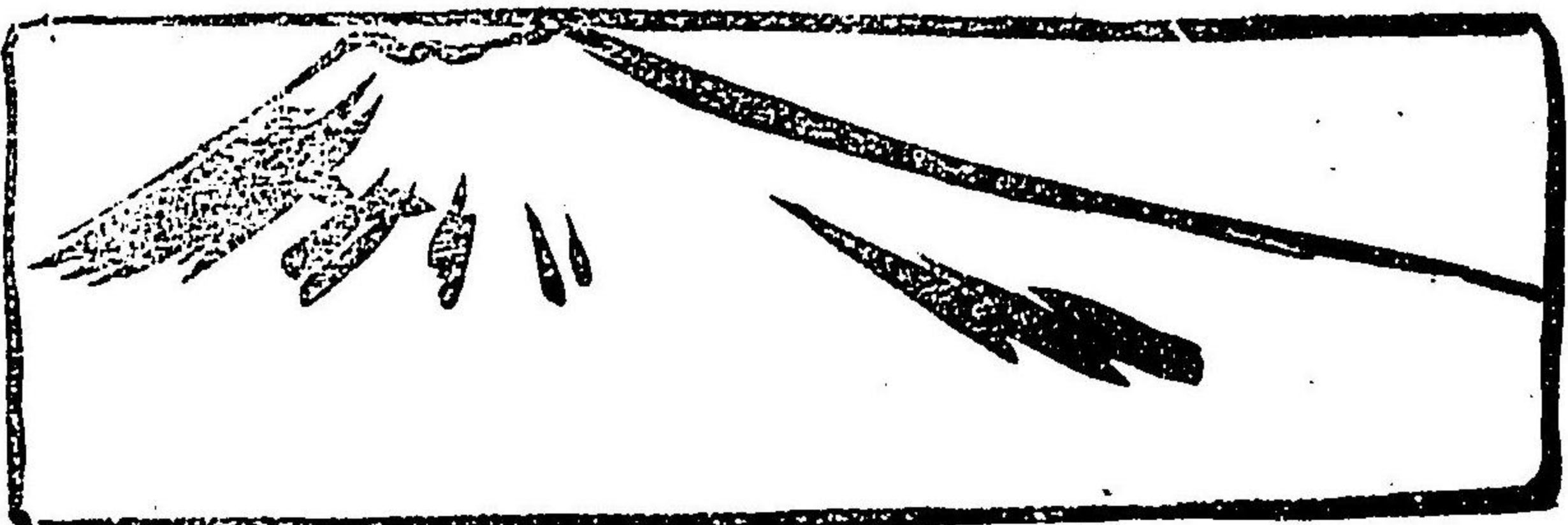
貧乏で子供の澤山にある人が、子供のない金持の夫婦に向ひ「私等は貧乏の上に子供が多くて困ります、それに引かへて貴様方は子供もなければ楽な上に又、コロコロと金が出来来るから實に羨しい」と歎息をすれば、其人は頭を振り「イエ〜何程金があつても子供のない程淋しいものはない、子寶とは眞實によく云つたもので、子に優る寶はない」と歎息する、貧乏人はそれを打消して「如何に子寶々と云つても、子の爲に苦勞をして、子の爲にいくら稼いでも金が残りません」と云ふ、子のない夫婦は又それを打消して「金が残りぬ〜と云つても、生んだ赤ン坊だけが残つて行くじゃないか。」

目鏡の失敗

或貧乏博士借金取に散々攻め立てられ防禦の計略全く盡き、こゝに一策をば考へ出して債權者が来ると忽ち泣聲になり「あゝどうも不幸福の上に病氣續きて、子供が餓に迫つて居ります、女房は病氣で苦んで居ります、私は稼がうにもこれこの通り目が悪くて働けません」と態と目鏡を掛け、さも悲しそうに「何卒御慈悲で御助け下さい」と手を合せ涙を拭く眞似をすると、債權者の一人が怒り聲を揚げ「オイ〜目鏡の上から涙を拭けるものか、如何に空泣が巧みなりともその手は食はぬ」と云はれて氣が付くと、コレハハヤ失敗つたり、目鏡を外すのを忘れて頻りに目鏡の上から涙を拭いて居たのである。

のり屋の看板

横柄な客が店員に向ひ「貴様の店は何でも皆高くて困るから負けて置け」番頭大に頭を捻りて曰く「イエどう致しまして、手前共の品は何でも皆滅法界に安う御座りまして、まるでのり屋の看板も同じ事で御座ります」と述べれば客は不審相な顔をして「何じやのり屋の看板とは、貴様の店ではのりを賣るのか」「イエ賣りません」「賣



抱腹百話



抱 腹 百 話

らぬなら看板をどうした。「へい、そのり屋の看板と云ふものは皆のの字が太くて
りの字が小さく細く御坐いまして、へ、へ、へ、手前の口饒は其通りにりの細い小かい
もので御坐いますから、そんなに直切られては困ります」客反て怒つて曰く「馬鹿云
へ、この間買つて歸つた品は安いと思つて居たら、皆屑物や瑕物ばかりであつたから
さすればの太いのじゃないか。」

水泳の先生

我こそは水泳の大先生であると自ら名乗り、「我が水泳の秘術を受くる者は決して水
に溺るゝ事なし」と揚々として大音聲を揚げると、往來の一人が飛込み來つて教授を
乞ふ、先生早速承諾して先づ硯を引寄せ、足を出させて股へ筆で印しを付ける、人々
怪んで其理由を尋ねると、先生自慢の鼻を高くして曰く、「この墨の處より深き處に入
るべからず、然る時は決して水に溺るゝ心配更になし」と云つた、なる程これでは大
丈夫である。



抱 腹 百 話

壁 に 耳

「旦那様、家の御嬢さんはもう肺病になりかゝつて居ります、早く御醫者に診せたら
奈うて御座います」と突然に大きな聲で云ふ、主人堪らず「こりや馬鹿」と怒鳴り付
けて又急に聲を低うして「そんな事を隣へ聞かれたら、隣から又世間へ知れ渡つて、
嫁に貰ひに來なくてしまふから、聞かれてならぬ事は極く小さい聲で云ふのだよ、壁
に耳と云つて油断のならない世の中じゃ」と聞いて小僧大に感心をしながら臺所へ行
き仕事をして居ると又「小僧魚を何處へ入れて置いた」聞くより小僧走り寄り小聲に
なり「旦那、戸棚の中へ入れて置きました」主人耳を傾け「聞えないよ、何故もつと
大きな聲で云はぬか」小僧益々聲を低うして「猫に聞かれたら奪られますから、壁に
耳ありますからな」。

仇 名

極々念入りの馬鹿者あり、人より新煙管と仇名を付けられて大に喜び「己は新煙管

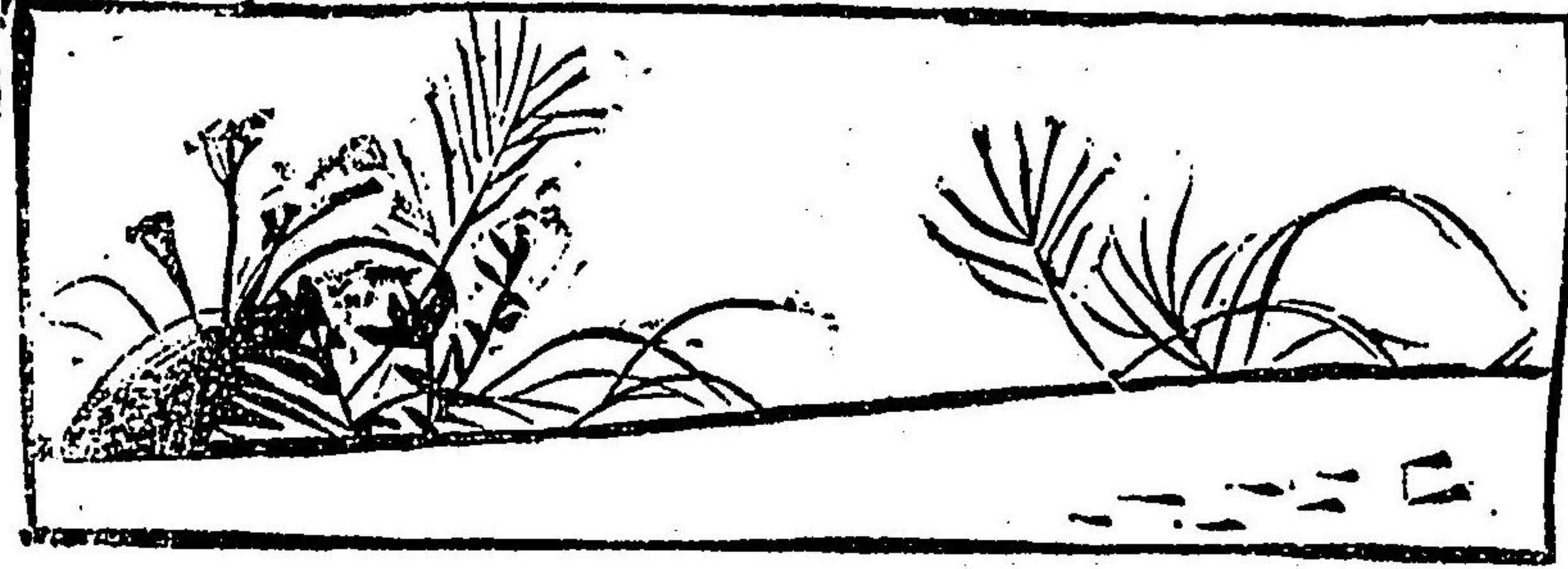


抱腹百話

じゃ、何でも己の云ふ理窟はよく通るから新煙管と云ふのじゃ」と自慢し、新煙管々々々と唯されて通上て居ると、或人が注意して「そりや君大間違じゃ、新煙管は詰らぬのでよいが、君はトント詰らぬ人間で困るのじゃ、それで新煙管と申すのじゃ」。

跛行

ある金満家のお嬢さんが大層な美人であつたが、惜しい事には跛行であつた、或時長松と云ふ小僧を供に連れて宮参りをした、然るに向ふから人足が車曳いて来るのに出遇ふと、人足はお嬢さんを見て歌を唄ひ始めた、其歌が「お嬢さん別嬪で、お嬢さん別嬪よいけれども、か、た、あ、し、短、かい」と云ひながら行過ぎた、お嬢さんはそれを聞いて急に悲しくなつて来て、宮参りもせず其儘歸つてしまふた、両親は大に驚いたり心配したりして種々と尋ねたが、お嬢さんは只泣くばかりでサツパリ理由が分らぬので大に困ると、小僧の長松が出て斯く〜と理由を話したので、主人は小僧に向ひ「長松や、家の娘はそんなに跛行であるか、一ツ調べて見ろ」と云ひ付ける、小僧は心得てお嬢さんの足を調べる、旦那は傍で凝とそれを眺めて居ると、

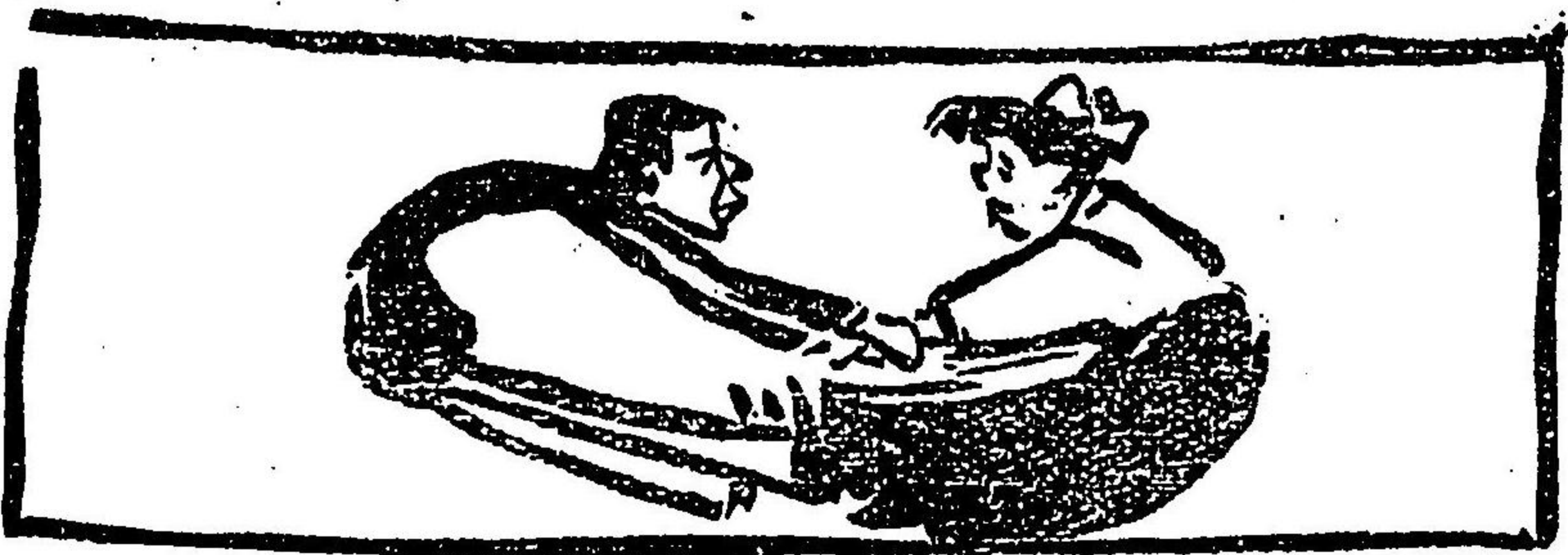


抱腹百話

小僧は養馬鹿町噂に念を入れて、お嬢さんの右の足と左の足とを延引して比較て居たが、不意に大聲を出し「旦那、お嬢さんの片足短いのではありません、片足長過ぎるので御座ります」。

あはて夫婦

あはてた男にあはてた花嫁が来て、結婚披露を開くこととなり、花嫁は招待状を書き、花嫁は化粧の支度にかゝる「もし貴郎一寸、この金剛石の指環をお客様に見せてやりたいですな、貴郎好つて」。「あ、好いとも〜、そしてお前が學校で習ふた西洋料理の手前を見せてやりたい」。「あ、見せますとも〜、料理も好いが妾髪を結はねばなりません、廂髪にしやうかしらん、丸髷にしやうかしらん、丸髷なんて妾羞しいわ」など、云ひながら御馳走まで出来上つたが御客様が一人も来ない、待かねて花嫁が「あ、早く来ればよいのに、貴郎もしや日を書違ふたのでなくツて」と尋ねる、花婿首を傾けて「さあ、そうかも知れない」花嫁呆れて「あら、まあ、妾が一生懸命になつて支度をして居るのに、貴様が肝心の日を書き違ふやうでは……」と涙を

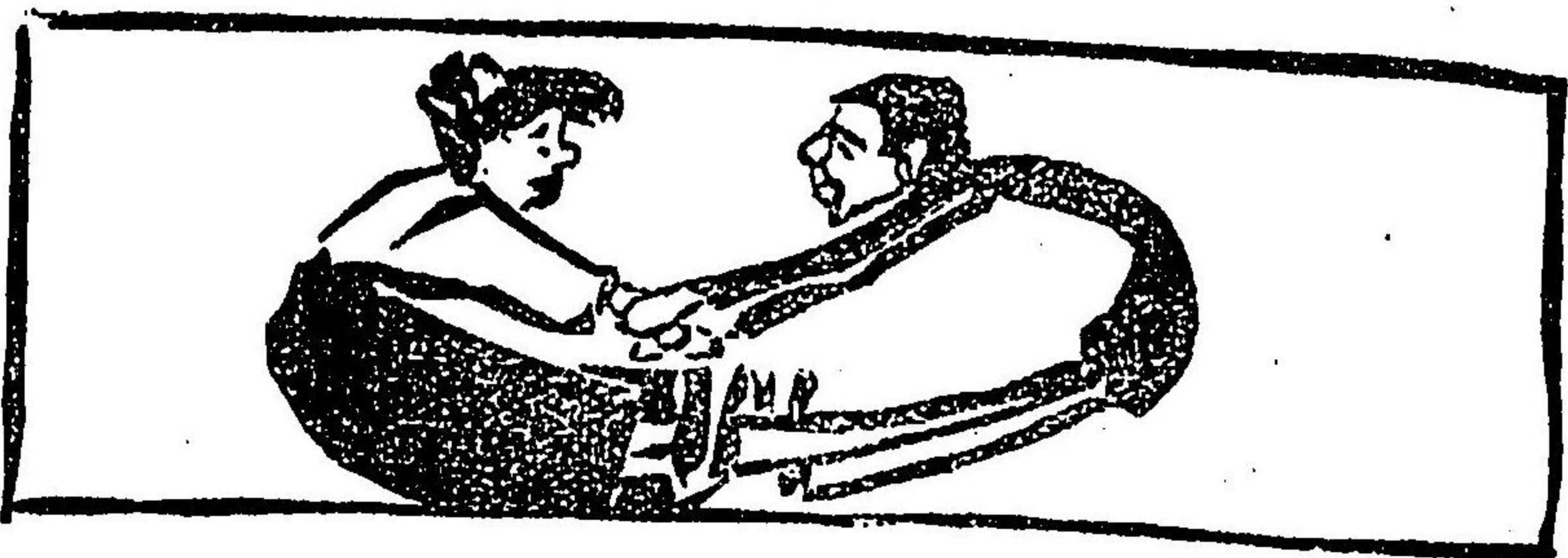


抱腹百話

こぼし「末の見込がありませんから、もう妾は暇を戴いて歸ります」と立かゝると花婿は狼狽しながら「お前に歸へられては困る、己の粗鹿は幾重にも詫びるから何卒機嫌を直して呉れ」とあやまり、やつと花嫁が元の坐に戻つたので、ヤレ安心と花婿が胸を撫下して机に向ふと、花嫁に出して呉れと頼んで置いた招待状がまだあるので、「ヤアこれは奈うした、招待状を出さぬから客の来ぬのも道理だ、己れ不都合極る女だ、もう離縁をしまふから出て行け」と怒鳴る、花嫁は仰天したが招待状を眺めて、貴郎、これでは肝心の媒灼人や、一番近い親類や、極く親しい友人のが書いてないではありませんか。

御上とお神

誰ても少し鼻蕨程の財産が出来ると威張出し、我こそは日本一の富豪で御座ると云はぬばかりに人を見下し、嫌に氣取つて世間の物笑ひとなる事があるが、これは又大坂の某氏が一寸小金が出来たので、真借屋から出て門構への家へ轉宅し、奉公人と云つても書生と下女を呼寄せて云ふやう「乃公も今度金が出来て立派な家へ移つたから、



抱腹百話

もう旦那様では面白くないから、乃公の事を御上と云ふのじや、これから旦那と云つては不可いぞ」と厳しく云ひ渡すと、奉公人一同謹んで拜聴し奉つて、御上々々と擔ぎ廻ると主人調子に乗つて嬉び、女房を奥様と尊稱させ、其癖に借金取が来たら奥へ隠れて「御上が御不在」とか「奥様が不在」とか云はすと、新聞屋の集金人が来て拂ひを請求した、奉公人が例の通り「只今御上が御不在だから後に来い」と横柄に云へば集金人お神と間違へて奥を覗き「お神様は彼處に坐つて御座るじやないか、それでも不在か」と怒る「イヤお神さんでない、御上と云つたら旦那様の事じや、旦那様も大分お金が出来て立派になつたから、これから御上と云ふのだから、以後は左様に心得て貰ひたい」と云へば集金先生呆れ果て、暫らく言葉も出なかつたが「何だ馬鹿々々しい華族様じやあるまいし、尊大ぶるにも程がある、新聞代位をお神さんが拂へん位じや、御上の價値も大抵知れたものさ。」

馬の畫

横著女房亭主の不在中に米を盗み出して賣り飛ばし、其金で買ひ食ひをしようと云ふ



抱腹百話

不届者、亭主が嗅ぎ付けて大に怒り、それから出て行く時には米の上へ文字を書いて置かうと思つたが、この亭主元來無學文盲でイの字もハの字も知らねば、止を得ず指の先で馬の糞を書いて出て行つた、然るに女房も又さるもので、又米を盗み出して元の通りに馬の糞を書いて置くと、亭主歸つて来て小首を傾け「ハテ不思議ぢや、たしかに立つて居る馬の糞を書いて置いた筈じやが、寐て居るのばどうじや」と云はれて女房驚き失策たと思ひながら「はい、餘り立つてばかり居るので足が疲勞れたから、それで寐たのじやありませんか。」

106

ボーグワイ

關西線の王寺から和歌山に至る間に高野口驛と云ふ停車場がある、有名な高野山へ参詣者の乗降する處であるから一寸賑しいが、この驛の矢田某と云ふ新聞店に配達の小僧が居て、日露戦争の初めから終りまで號外を配達したが、號外を誤つてボーグワイと呼びながら配達したので、そりやボーグワイが來た又來た又々來た、今日もボーグワイ明日もボーグワイ明後日もボーグワイと、車夫や下女先生が皆ガウグワイをボ



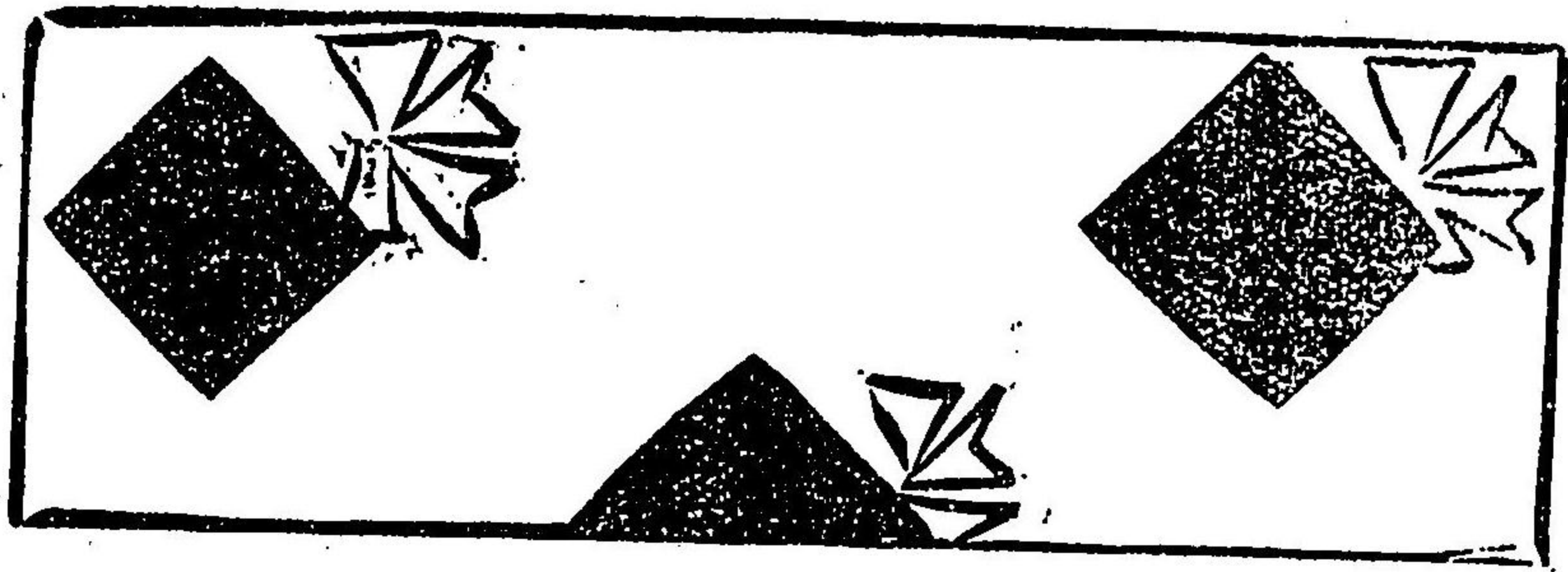
抱腹百話

ウグワイと云ふ様になつてしまひ、とうとう近傍近邊の村落まで皆號外をボーグワイと云ふ様になつて、學問のある人が正しい眞實のガウグワイと云つても、ボーグワイと云ふ人物が大多數のため、反て負かされて笑はれるから仕方なしに又ボーグワイと云ふので、今に至つて猶號外をボーグワイと云傳へて居る。

雷嫌ひ

息子の留守中に大きな雷が鳴つて來たので、爺と婆々が心配をして「あの雷嫌いな伴は今頃奈うして居るであらう、のう婆さん」。「はい家の中に居てさへこのやうに恐ろしいのに、外を歩いて居るともう氣絶するかも知れません、あゝ萬願無事で歸つて來て呉れ、ばよいが、桑原々々」と唱へて居ると、やがて空晴渡つて雷も止んだのでホッと息を吐き「あゝ伴が遅いぞ、もしやあの雷にかまれたのではあるまいか」と爺さんの心配顔、婆さんはもう泣き出して「あれほど澤山鳴つたから、雷嫌ひの伴は途中で聞いたとけても死んでしまふたのかも知れませんが、あゝ可哀想な事をした」と悲んで居る處へ息子はノツンリと歸つて來たので二人は大喜び「あゝよく歸つてく

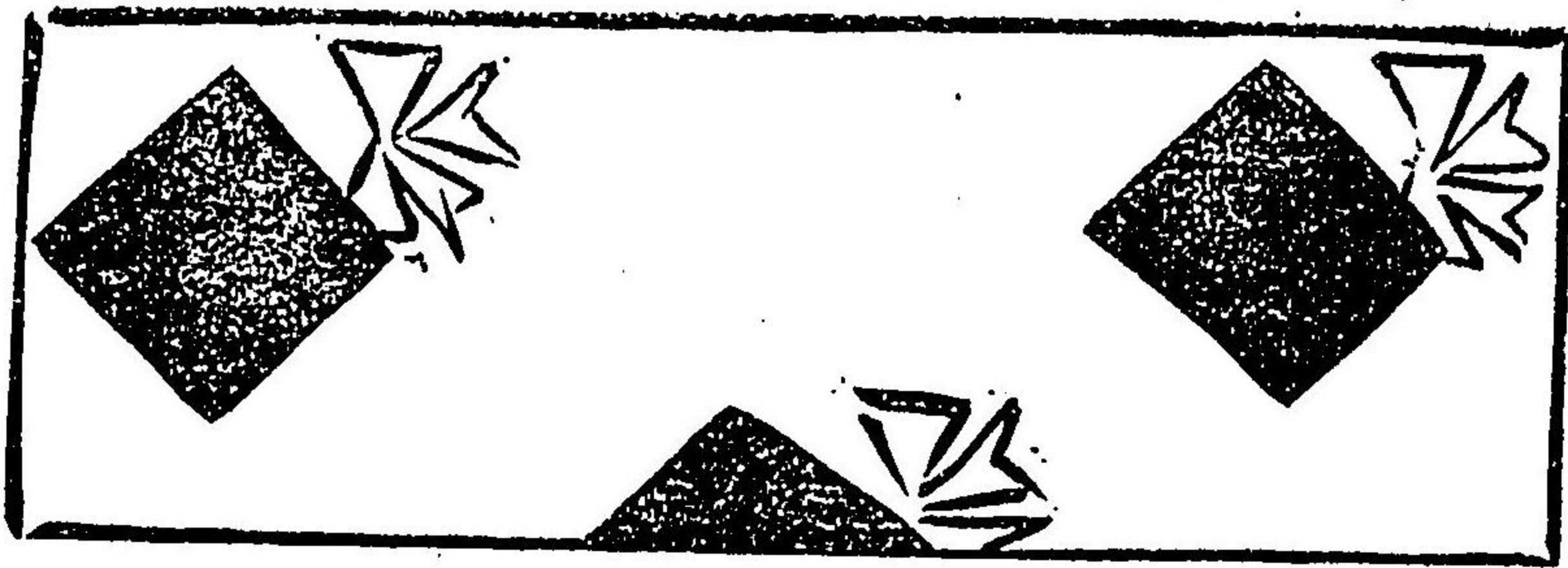
107



れた、サア〜衣服が濡れたであらう、早く著替るがよい」と右左から云つたが衣服は露程も濡れて居らぬので「作や一體何處に奈うして居た、雷は怖くなかつたか」と尋ねると「はい其時は吉原に居りました」聞いて二人は又屹驚し「吉原へ雷が落ちたと云ふが臍を取られはせなんだか」息子は首を振り「イエ、臍の下を取られて來ました。」

銃獵家の縮尻

帝國大學の飯島理學博士は銃獵家として有名である、イヤ博士が銃獵に就て面白い話がある、或る時田舎に出掛けて一羽の鴨を打つた處へ、百姓老爺がヒヨコリと出て來て「此の鴨を打つたのはお前さんか」と聞いた、博士は心の中でしまつた、人の飼鴨を打つたのであると思つたから「イヤ僕が打つたのでない」と答へると「そんなら己れが貰つて行く」と老爺は其鴨を掴まへてサツサと往つて仕舞つた、之には博士も呆れ果て、口あんぐり。



茶の加減

ある店に頗る氣の利いた小僧あり、客が來ると直ぐ臺所より茶を入れて來るが、その茶の加減が實に旨いので主人大に感心して、奈うしてあんなに加減よく出来るのかと不思議に思ひ、或時そつと覗いて見ると、かくとも知らぬ小僧先生主人の茶椀へ茶を入れ、それを垢だらけの口でグツと一口飲み、茶が濃過ぎれば湯を入れ、又薄過ぎれば茶の濃いのを入れ、延やら鼻糞が少々交て居るのであつた。

骨董品の詐欺

誰でも財産が出來ると書畫骨董品に凝り出して人に誇るが、俄長者などは大抵皆賈物を掘むのが多くて間々意外な滑稽を演ずる事がある、某氏が大阪の書畫骨董商の有名な山中某店へ買ひに行くと、種々の畫幅を取替へ引替へ出して見せた、その中で氣に入つた一幅を二百圓で買ふて來た、スルト歸つて床間へ掛けて眺めて見ると、何となく賈物のやうな氣持がしてならないから、他の品と取替へて貰はうと思つて店へ行



抱腹百話

くと、番頭は見るより大嬉びの體で待遇し「旦那、あの品は五百圓や千圓位で賣る品でありませんだが、實は主人不在中でありましたので、私が間違つて無茶苦茶な安い價で賣りました主人に叱られて居る處でありますから、百圓位は損をしても宜しいから三百圓で何御卒返し下さい」と拜むやうに又泣くやうに云つたので、某氏は欺されるとは知らず又急に惜しくなり、いろ／＼と頼むのを無理に斷りて待歸り、これで愈々眞物に違ひないことが分つたと大悦び大安心をして、或時友人を招いて其畫幅を掛けて鼻を高くして居ると、一人がクス／＼と笑ひ出した、一人は溜りかねて「君失禮ながらこの幅は眞赤な腰物で、小供にでも分りそうなもの」と云つたので、主人も始めて欺れたのを知つて大に赤面したそうなる。

臆病博士

疑心暗鬼を生ずと以つて、枯尾花を幽霊かと思つて氣絶した馬鹿者もあれば、浴衣や襦袢の物干場に掛つてあるのに腰を抜かした者もある、田舎の夜路にはそんな滑稽が澤山にある、これは十二三年前にもなるが、和歌山縣の縣會議員某が政治運動に



抱腹百話

熱中して晝夜奔走して居た際で、選挙日の前日急用で夜道をすると淋しい墓があつた、氣味悪くなつて来て足が進まないが仕方がない、度胸を決めて近寄ると、コハ如何に墓の中でポ／＼と青い火が燃えて居る、ギョツとして見ると又白い衣服を着た坊主がス／＼と頭を出したので、某氏はギョツとして死物狂ひとなり、一生懸命に洋杖を打振つたまでは覺えて居るが、其儘其處に氣絶して了ふた、後て人々に介抱せられてヤツと氣が付いて見ると、怪物と思つたのは巡禮の乞食で、梅毒患者は人肉或は人の灰を食へば癒ると云ふ迷信から、墓場で人骨を集めて焼いて居たのであつたそうなる、一つは同じ處の百姓家の雇ひ男に大變な臆病者があつて、ある晩雪が降り出して大分積つた、すると夜の十二時頃に急病人が出来て醫者を迎ひに行く使を命ぜられた、嫌と云ふ譯にも行かぬので仕方なしに出て行くと、もう往來の人は絶えて行先に淋しい藪がある、怖さ恐ろしさに足が頓へて少しも進まない、と云つて行かねばならぬ、と一生懸命になつて駆け抜けやうとすると、何だか知らぬがバラ／＼前へ白いものが立塞つた、ハツと思ふ間もなく手に持つた傘を上へ上へと引上げられた、怖わ／＼仰いて見ると不思議や傘は虚空遙に舞登り、アレ／＼と驚くと上から白い手が落ちて來

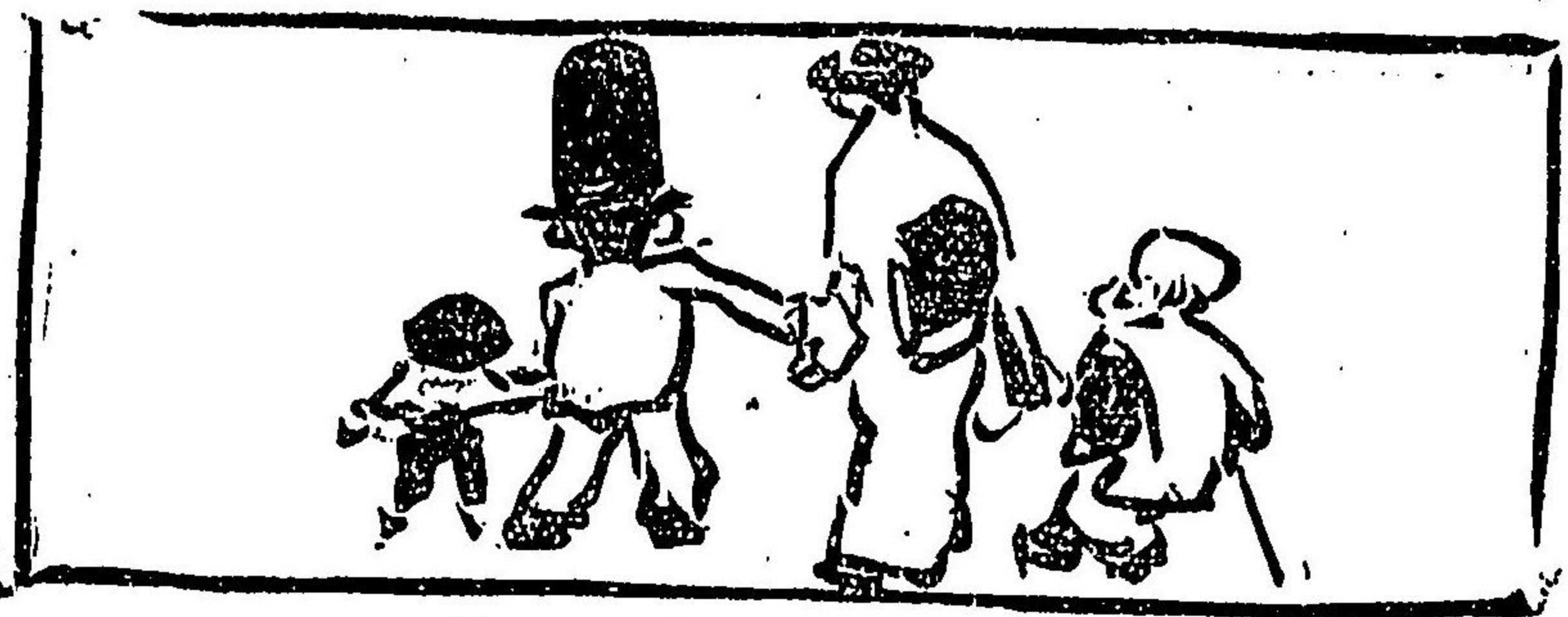


抱腹百話

てヒヤリと首筋を撫てられたので、もう溜らずキヤツと叫んで氣絶してしまつた、御話し變つて主人の方は何時まで待つても歸らぬので心配し、又人を出して見るとこの有様に呆れ、早速介抱すると漸く息を吹かへし、斯くくと有つたまゝの話し人々二度呆れてよく見ると、最初化物と思つたのは竹へ雪が積つてブラ下つて居たので、それに傘を打當つたからバラ〜と雪が落ちたので、雪が落ちると又竹が上へ擦ね起さるので、其處へ傘の轆轤が引掛つてしまふたのだから上へ引上げられたので其處へ又雪が落ちて来て冷い手で撫てられたと思つたのであつたそうなる。

大砲の艱難苦勞

前の横綱大砲萬右衛門は巨大な體軀をして居るため、小相撲時代に他の力士より多くの辛酸苦勞をしたもので、旅行の際などは一層甚しき艱難をしたそうなる、第一出来合ひの草鞋で間に合はぬから跣足で道中をした事もあり、又大草鞋數十足を作つて腰につけて旅行をした事もある、それから宿屋へ泊つて夜具布團にも困つて、肩へ被れは足が飛出る、足へ被せれば肩が出ると云ふので、何時も二人前を接續て被て寐たものである。

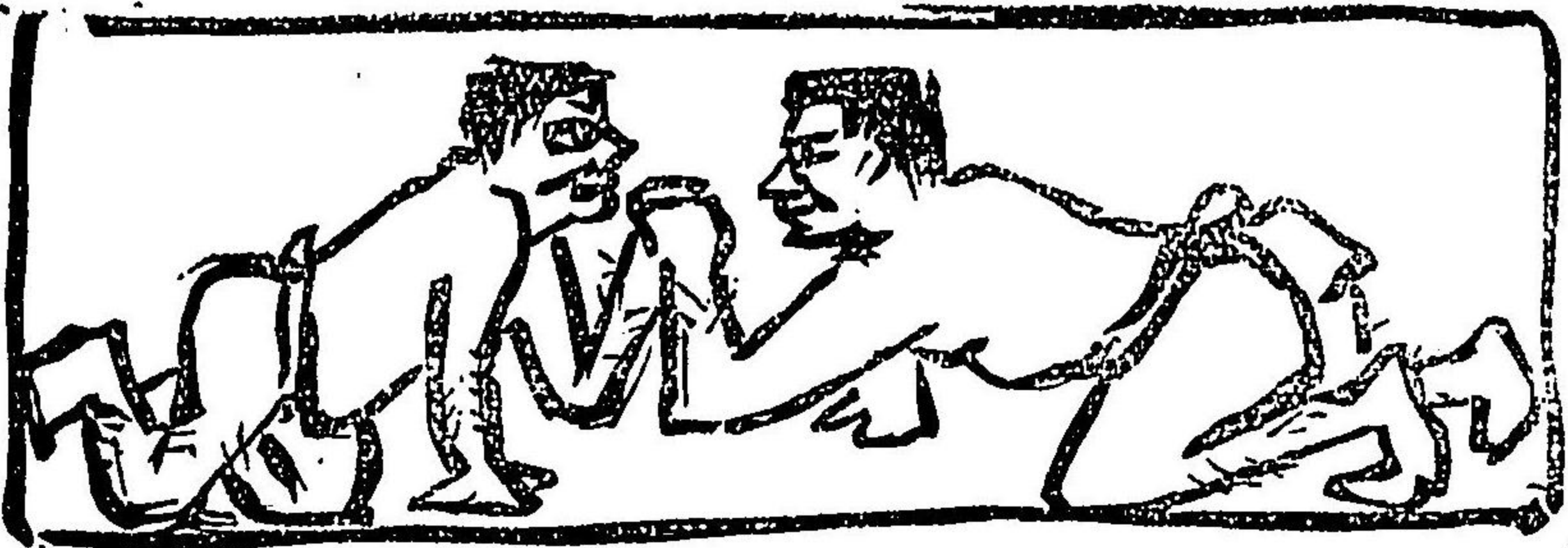


抱腹百話

ので、夏となると又蚊帳にも困つた、其時にはまだ小相撲であつたから一帳の中へ幾人も寐させられた、處が大砲のやうな大男が這入つて來ると一杯になつてしまふて、他の力士が這入れぬから邪魔にする、邪魔にせられても又蚊帳がなくては寸時も寐られぬので無理に這入る、だが全身入るを許さないのて、已むを得ず頭だけを潜り込む、後の半身乃ち足の處へは風呂敷や布團などを被せて、漸く蚊軍を防いで居たさうである。

粗忽者

世の中に粗忽なものが澤山にあるが、自分の粗忽なるを忘れて何の粗忽もない者に怒鳴り散らす程粗忽馬鹿はない、或家の隠居が自分の目鏡を紛失し、捜しても出て來ないのであたりの人に怒鳴り立て「さあこゝへ置いた目鏡をどうした、何時も何時も物が失なつたり、分らなくなつたりして實に困るじや、これから失ふた時には辨償させるぞ」と鼻息荒く、罪もない人間を叱り飛ばして居ると、人々は又かと可笑しさを堪へてフト見上げると、隠居の左の手に持つて居るのはどうやら目鏡らしいので



抱腹百話

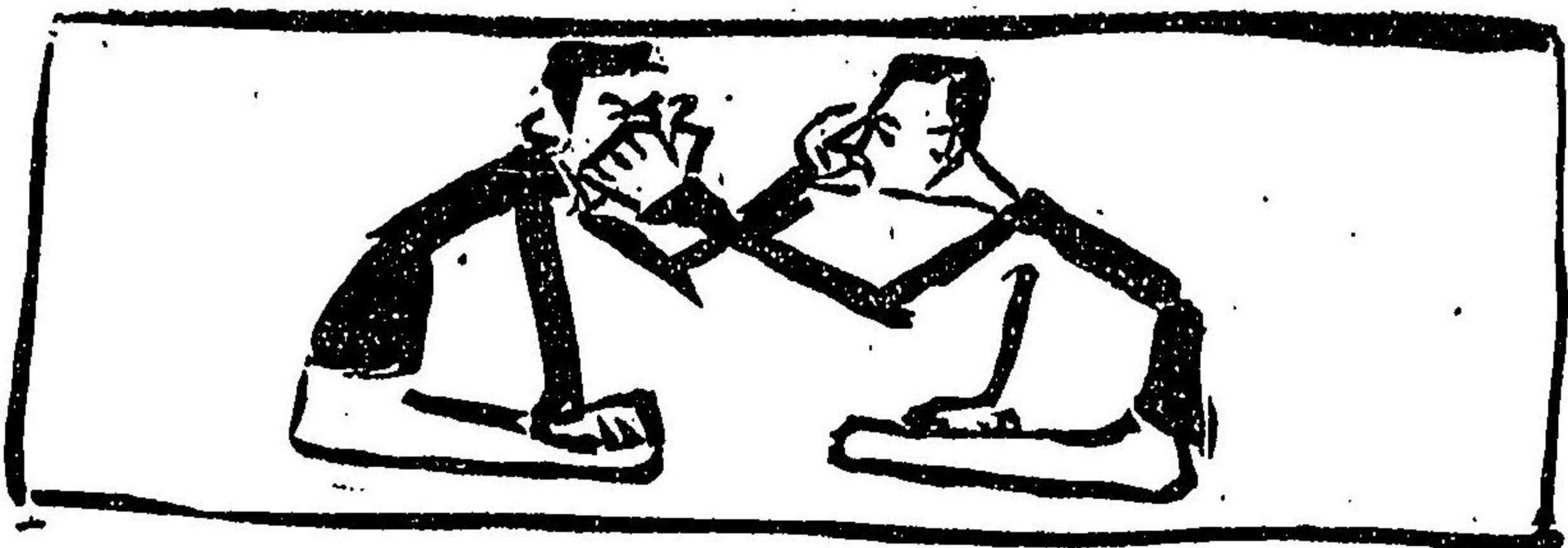
「御隠居様、貴郎の左の手に御持ちなさるのは一體何て御座います」とやられたので、隠居もハッと心付き、コンは失敗つたりと思ふたが負け嫌ひだから何處までも人に塗り付けて「私は眼が悪くて目鏡を掛けねば分らぬのだから、自分の手に持つて居るものでも目鏡を掛けねば分らぬのに、何故早く云はぬか馬鹿者奴。」

梅ヶ谷腕車を乗潰す

巡業中の事であつたとか、梅ヶ谷は四十二貫目の巨體を腕車の上に乘せたことだから、轆棒がミリミリと折れて腕車を乗潰してしまつたから、早速協會から賠償をしたさうであるが、この事が新聞に出てから人力車夫は皆御免を蒙ると云つて來ないので大に困り、歩いて見ると太つた股が擦れ合ふて堪らない、そこで止むを得ず荷馬車を雇ふて梅關を運搬したのだが、その道中がナカ／＼珍奇で、先づ荷車の上へ麥藁を澤山敷き込んで四布蒲團を並べ、其上へ力士を載せて運搬したのであるさうな。

圍碁狂

碁打の負け嫌ひと云ふものは一番負けると又打ちたくなり、又負けると又打ちたねば承知せぬ、又々負けると猶も打ちたくなる、續けて負けると怒る、腹が立つ、甚しいのは相手の頭を擲ると云ふのは敢て珍らしくもない様だ、然るに僕が知人に下手な横好き先生があつて、何遍負けても／＼性懲りなく挑んで止まぬ、娘に婿を貰つても碁攻めにするので皆續かない位で、先づ一ヶ年に碁茶に食はず米が何石何斗と小作米の中から取つてある、其外の經費はどの位と碁に費す金の豫算を立て、あるので、碁打と名の付く者は片端より雇ひ來つて三五夜でも五晝夜でもやる、しかし下手碁で堪へられぬから客は皆歸らうとする、それを又無理に引止めて碁攻にするから、終ひには誰も彼も恐ろしがつて行かぬやうになる、スルト猶も打ちたくて辛抱が出來ない、碁打が來なければ機嫌が悪くて家人も持て餘すと云ふ風で、死んだ時には遺言によつて碁石と碁盤を棺箱の中へ入れて葬つたさうで、僕も生前一度戦つた事はあるが、先生碁は頗る下手でも一ツの計略があるので、何時も／＼負かされて居た、その計略と云ふのは他にもない、飯時になつても飯を食はず、三時間も五時間も續けてるので、空腹に堪へずして終ひに降参して、負けなくてもよい碁を負けるので、これが先生の



抱腹百話



抱腹百話

奥の手得意の兵糧攻めであつた。

百圓紙幣

貧乏の先生節期となつて大狼狽をなし、思案の果に家財道具を残らず悉皆抵當に入れ、百圓紙幣を一枚日歩で借つて来て、己れの家には五圓紙幣の半枚もあるまいと思つて、掛取も馬鹿にして剩餘金を持つて来まいから、百圓紙幣を見せて追拂ひ大晦日の難關を盲く逃れやうと云ふ工夫、愈々大晦日となつて斯くとも知らぬ家主が威氣揚々と「積りに積つた家賃の滞りが溜つて何十何圓何十錢、今度は是非共一厘も残らず拂つて貰ひたい、それが出来ねば今日只今限り家を出て貰ひたい」と恐ろしい談判、貧乏の先生平素ならば震ひ上る處であるが、今日は平氣で濟しこんで「これで剩餘を出して呉れ」と突然百圓紙幣を眼の前へ突付けて威張ると、家主は膽を轉倒へし「こ、こりや、ひ、百圓紙幣、生憎な剩餘が……」と凹む、先生莞爾と嬉んで居ると「又貧乏屋さん、御免」と米屋の催促、先生大に怒つて「こりや、貧乏屋とは誰の事だ」。「へい貴郎の事で、云はずと知れた筈」。「馬鹿にするない、して何御用だ」。「もしも

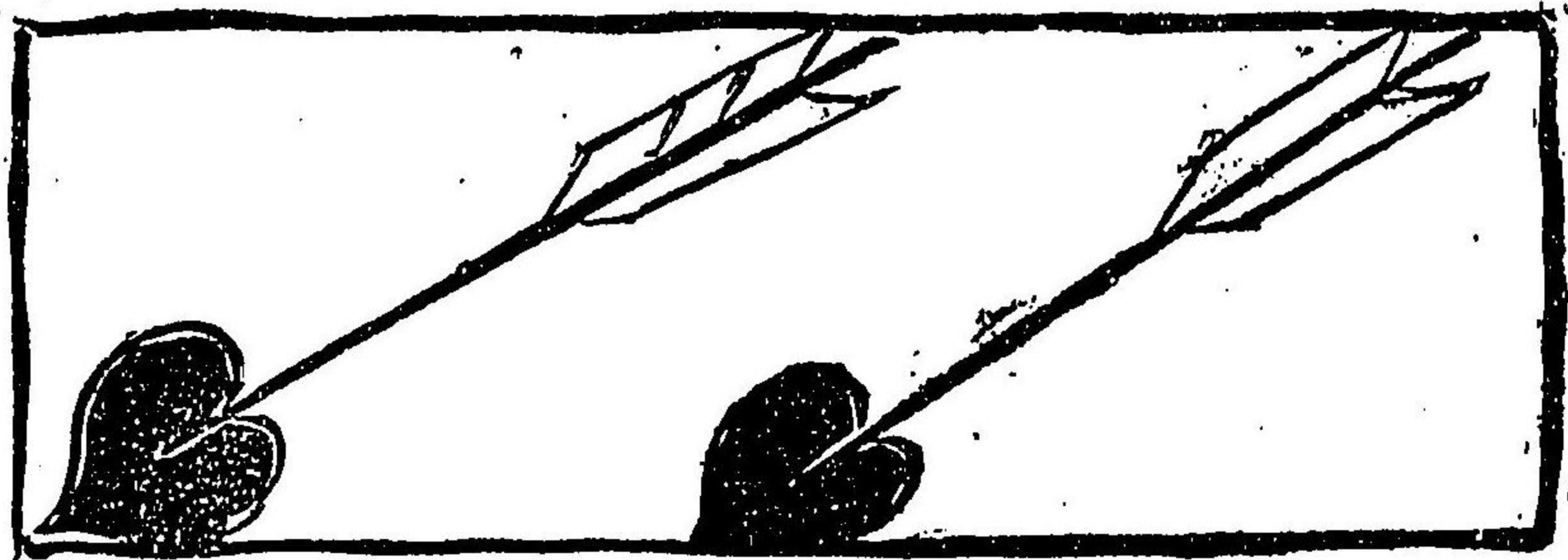


抱腹百話

し巫山戯ては困ります、節期となれば云はずと知れた掛取様だ、第一今までの生命を何て繼いで居ると思つて居るのだ、何を捨て、も生命の親たる米屋様の勘定を拂はぬと云ふ奴があるものか」と亂暴な掛取もあるもので、先生いつも大弱りする處を大威張で「百圓紙幣をやるから、サツサと剩餘を出して行け」と又百圓紙幣を振廻す、流石の掛取も避易して大敗北の體で頭を掻く、先生大嬉びて来る掛取も「皆百圓紙幣で逐ひ返し、天晴名案陸海軍の參謀長もかなふまいと力味んで居ると、前の掛取の名々一處に押寄せて来て「サア剩餘金を用意して来たから百圓紙幣を出せ〜」と口々の叫び、先生ギョツとして南無三失敗つたりこれは大變、絶體絶命の處を又一と工夫「たつた今一足前に、剩餘を澤山持つた人が来ましたから其人に拂つてしまひました、どうも御氣の毒さま」。

馬力

ある店へ客が来て主人に向ひ「君の處で使ふて居る機械は幾馬力ですか」主人答へて「へい二十馬力ですが、君の方は」。「左様、運轉するに三十馬力かゝります」と話

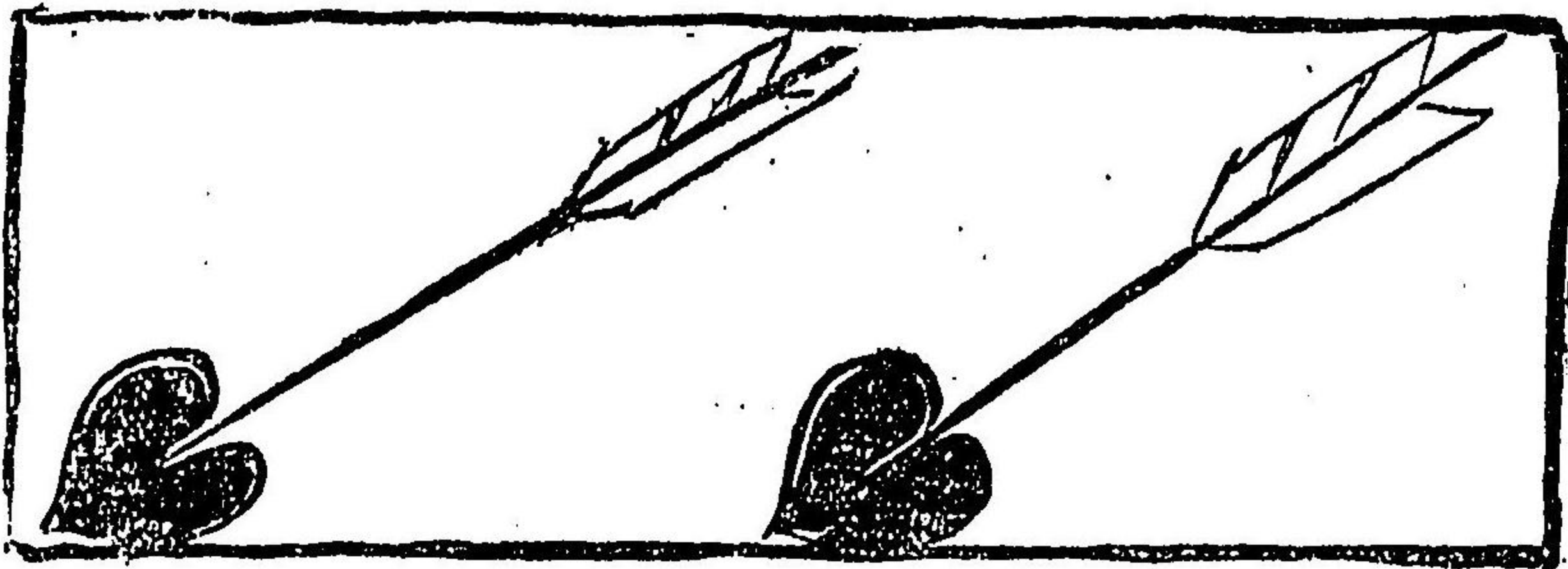


抱腹百話

して居る最中に横合から田舎出の小僧が口を出して「旦那、それじゃ一日にどの位食ひますか」と聞く、主人も客も不思議な顔をして「馬鹿！何を云つて居るのじゃ、機械に何を食はずのじゃ」と叱る、客は仲に入り「小僧君、そりや石炭だらう、石炭は焚くと云ふのじゃ」と云ふと小僧首を振り「イ、エ、私は幾馬力と云ひますから、一馬力が馬一疋の力で、二十馬力と云へば馬二十疋かゝつて其力で運轉するものと思つて居りました」。

無筆者の滑稽

東海道線興津の小さい宿屋へ泊つた時の事である、隣の室で客と宿屋の下女とが何か云ひ争ふて居たから、フト耳を傾けて聞いて見ると、下女が宿帳をもつて来て客に姓名をつけて呉れと云ふと、客は二人らしいが「貴様の店では客に帳付をさすのか、亭主に書いて貰へ」と云ふ、下女は首を振つて「イエ、他の帳などは御客様に願ひませぬが、お客様の名前をつける宿帳で有升から何卒」と聞くより二人は益々怒つて「何處へ泊つても此方から云へば店の者が書くのは當然だ」と怒鳴る、下女先生大に弱り、

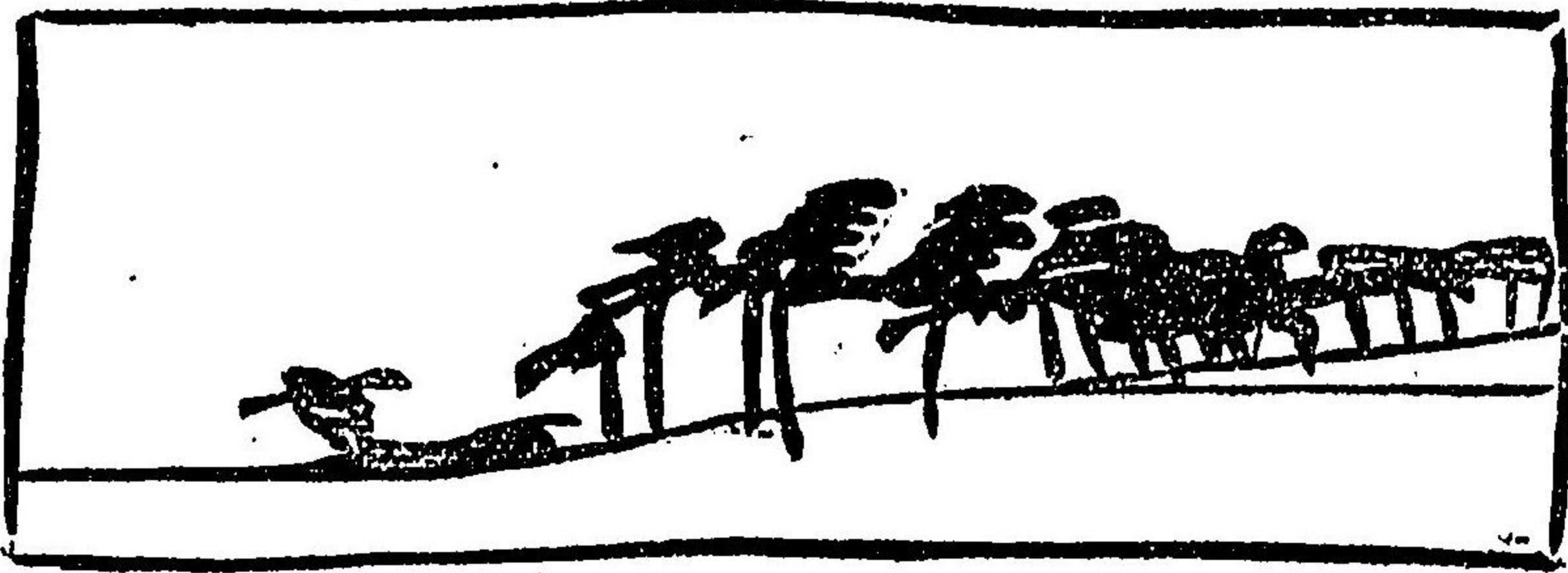


抱腹百話

又「はい實は主人が不在で御座いまして、お神さんは誠に申悪う御座いますが無筆で御座いまして、それからあの妾も……誠に恥かしく御座いますが……矢張りその無筆で御座いまして一字も書けませんから、濟みませんが何卒」と顔を眞赤にして頼む、二人は迷惑相な顔をして暫らく何とも云はなかつたが、ヤット一人が「そんなら何故字を書ける者を雇ふて置かぬか、馬鹿、こんな不勉強な宿屋は嫌だから外で泊る」とはや立かゝる、其處へ宿屋の亭主がやつと歸つて来て宿帳をつけたから、二人はホツと息をして互に顔を見合して「あゝ世の中に無筆ほど辛いものはないな」と冷汗を拭き、歎息をして居た。

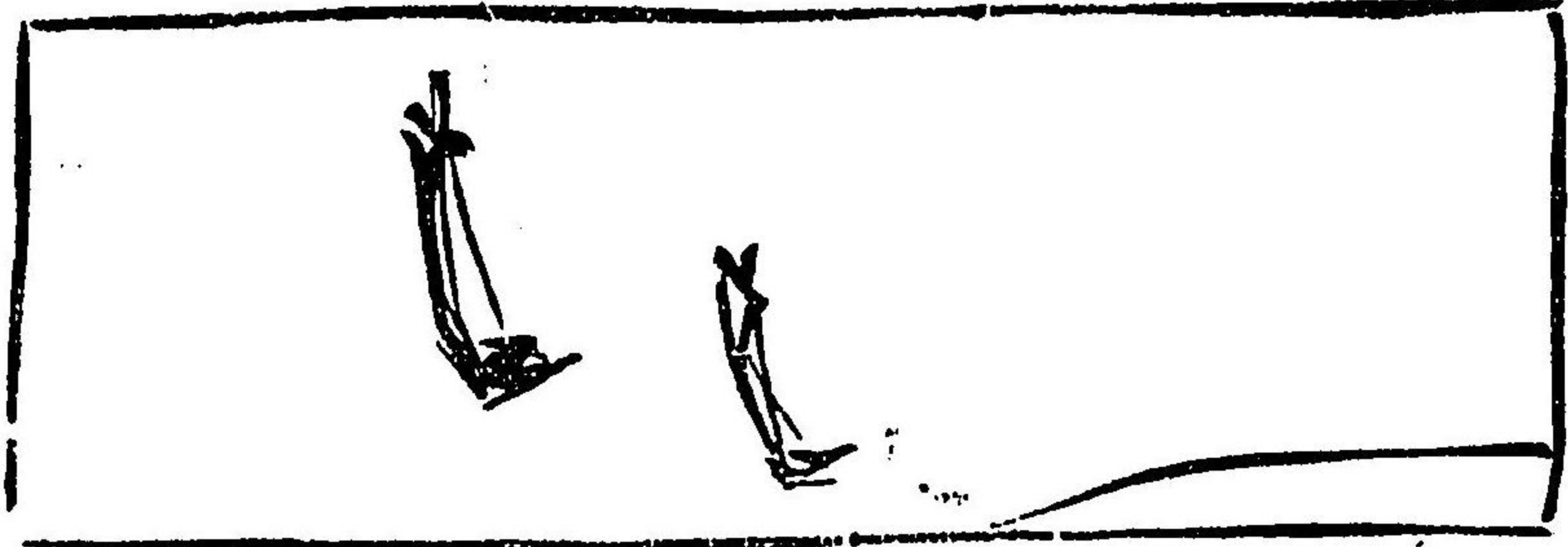
贗醫者

神田某校の學生が地方へ旅行して或山奥で泊つた時「僕は醫科大學を卒業した」など、出鱈目出放題の大法螺を吹たてると、何れも皆屹驚して俄に尊敬を始め、御馳走をするやら言葉遣ひが改まるやら優待をせられたので、學生は計略圖に當れりと内心密かに嬉んで居た、然るに其家の令嬢が突然急病で七轉八倒の苦しみを爲始めた、何



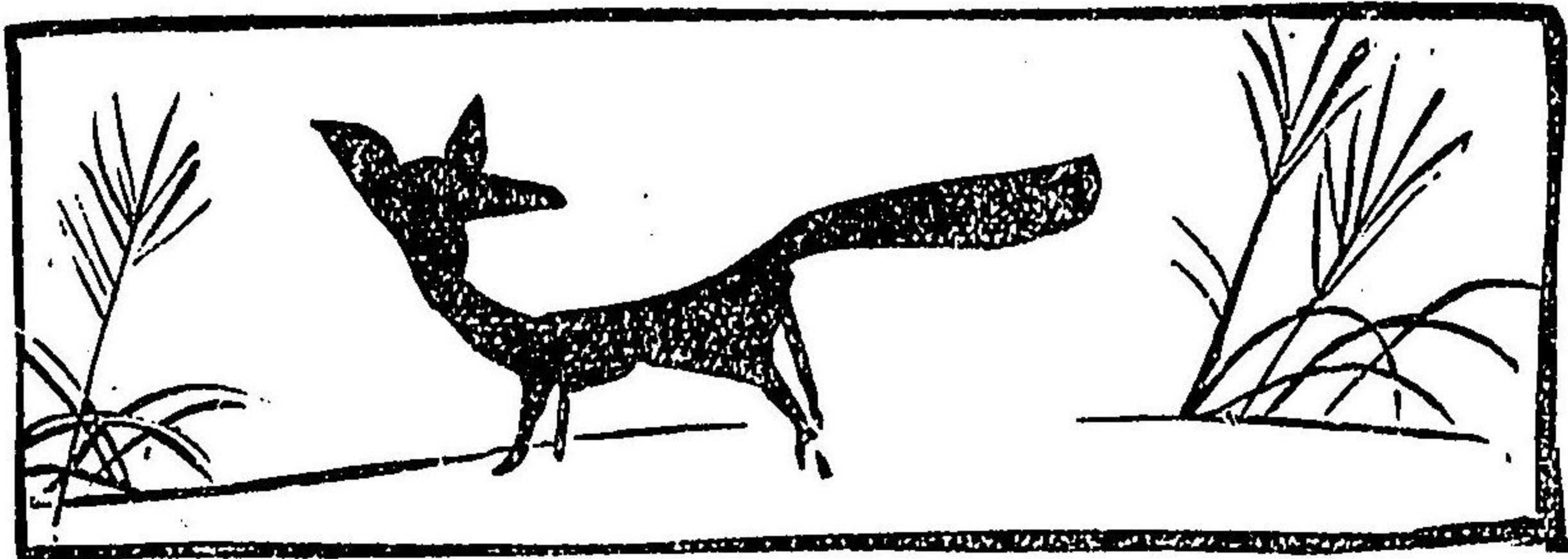
抱 腹 目 話

を云つても片田舎の事だから醫者はない、それに幸ひ大學の卒業生が来て居ると云ふので忽ち診察を乞ふたので、學生は大弱り大閉口をして「イヤ僕はまだ免許を受けてないから診察することは出来ぬ」と旨く切抜けやうとしたがナカ／＼怵へて呉れな
い、今更後悔をしても仕方がないので恐わ／＼脈を見たがサツパリ分らぬ、流石の學生も當惑をして思案の首を傾けると「あれ大學の御醫者様でさへ首を傾ける位だから、到底六ヶ敷いわいな、あゝ可哀想に」と蚊の鳴くやうにワイ／＼と泣きたてる、
學生愈々困り狼狽して居ると「先生早く御藥を／＼」と催促せられてヤツト氣が付き
「よし／＼今やるから」と自分の室へ歸つて来て袍をあけて見たが藥の精も粉もない
ので、二度閉口して鼻糞を取つて丸めて丸藥となし「さあこの藥を飲めば直ぐに癒る
から」と與へると、大學の先生と云ふのに惚込んで居るから不思議にも神経の加減で
病氣が癒り、両親は大嬉ひで村中へ觸れて廻る、と村中の病人は皆先生の診察を乞ひ
に来る、と云ふ具合で先生大當り大繁昌で鼻糞が無くなつてしまひ、爪糞足垢でドン
／＼と丸藥を拵へて賣つて儲けて居ると、痔疾患者が來たので嫌々辛抱して診ると又
肺病患者が來た、それも辛抱して診ると又此度は虎列刺病患者から迎ひに來たので、



抱 腹 目 話

先生頭ひ上つて仰天し、あゝ恐ろしや／＼と青くなつて夜逃して歸り、宿へ著くとホ
ツと一息して
鼻糞で癒る病はよけれども
危険傳染コレラ(是等)には閉口。
と譯の分らぬ歌を作つて居ると、或人が、
肺病赤痢傳染のコレラをば
癒したならば蒙いお醫者よ。
學生又、
傳染のコレラで生命しまふなら
醫者は今日限り廢業するぞ。
或人又、
進歩した醫學でコレラ癒らねば
大救醫者じや宿醫者じや。



抱腹百話

向島百花園に故伊藤公、山縣侯を始め東久世伯、榎本子等諸名家の書畫帳があつて、折々園主の床の間に飾られてあることがある、其中に珍らしい桂侯の和歌があつて、

桂侯の和歌

1111

岡田川上り下りの舟見れば

夏も涼しき心地こそすれ

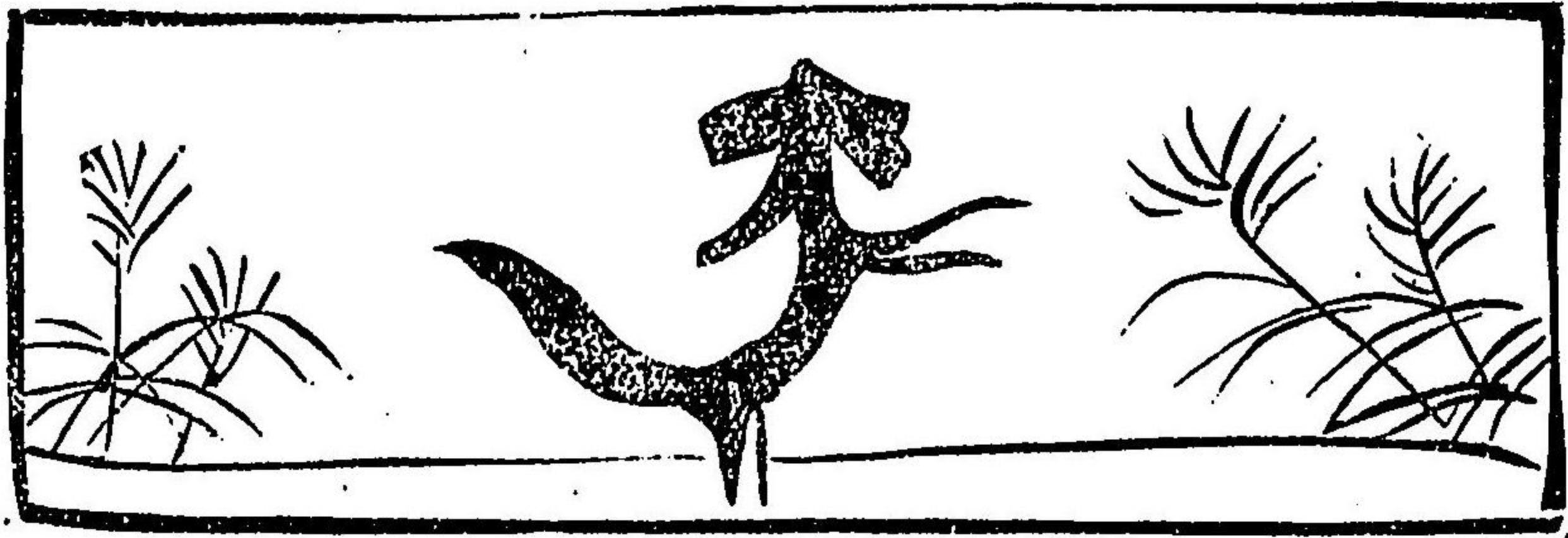
と金箔ふつた奇麗な短冊に無頓着な風に書いてあるが、桂侯の和歌と云へば恐らく後にも前にも只これ一ツより外にあるまいと思へば又

静かなる空を認めて漕ぎ出し

海士の心や長閑なるらん

とこれは葉山の所見て侯の得意のものであるそうな、又侯の述懐は頗る其性情を表してあるものもある。

一日に十里の路を行くよりも



抱腹百話

十日に十里行くぞ樂しき

大倉氏の茶

大倉喜八郎氏が茶室の建造を思立ち、他人の容喙を許さず入費かまはずと云ふ二條件で、或茶人の指揮の下に工事を急いだが、其時これを聞いた氏と交際ある人の中には、大倉さんの御馳走と聞いては後で美術館拜見と一中節拜聴は先づ覺悟の前と心得て行かねばならぬ、美術館は感心して拜見も出来るが一中節と來ては中々堪られぬ、大倉さんの茶の御手前は未だ一度も拜見せぬが、我々無風流漢には四疊半で窮窟な思ひをさせられ、漸く放免されると又直ぐに十八番の一中節を聞かされるのだから、之では又容攻めの道具が一ツ殖へたと、頭痛を病んだ人が澤山にあつたそうなる。

大阪の觀せ物

大阪の千日前は芝居や觀世物ばかりの處だが、土地が土地だけに餘程要心せねば馬鹿を見る事が多い、活人形で極々非凡なるものがあつて大評判となつた事がある、さな

1112



抱腹百話

二二四
 がら生きて今にも歩み出さんかとも思ふ位よく出来て居るので、毎日々々大繁盛であつた、然るに一婦人が死んだ我子に似て居る處があるので思はず知らず一寸指で觸れたら、生人形は仰天して動き出した、コレハ〜と驚く観客はよく〜見れば生人形でも何でも無い、眞實の人間を坐らせてあつたので、當時朝日毎日の兩新聞にも此記事が載つてある、又一ツは僕が一日千日前を通ると、大きな看板に大駒の繪が書いてあつて、其傍に長さ二間の大いたち大人五錢小人三錢と張紙をしてある、随分大きな駒もあるもので長さ二間とは恐らく世界一であらふ、と好奇心に驅られて話の種にと大枚金五錢を奮發して入場すると、場内では欺されたとか馬鹿々々しいとか口々に罵つて居るので、長さ二間とは大方懸値であつて實物は其半分位しか無いのであらふと思つた、しかし半分にしても三分の一にしても未だまだ大きいものだ、五錢の價値は體にあると思つて見るとコレハ如何に……、觀世物の正體は長さ二間の板へ血を塗つたもので、駒ではない板血であつたからしばら、開いた口が閉らなかつた。

素人謠曲家の失策

二二五
 某會社員に或る謠曲の熱心家がある、所謂下手の横好で所嫌はず厠でも唸ると云ふ男で、姓名丈は勘辨し呉れとの事であるから先づ預かりとして置いて、或る夜其男が自宅への歸り途夜も既に更けて居て往來の人も少く、折柄臘る月夜の事であるから先生堪へられなくなつたので徐ろ〜唸り始めて「花の都を立ち出て〜」と調子に乗りて何時となく足は我が家の門前に着いた「急ぎ候程に是れは早や我が宿に着て候よ」と門の戸をがらりと明けて、玄關の前に來てみたが何だか勝手が違ふ様だと能く瞳定めて見れば、こはそも如何に間違へて隣の玄關の前に立て居る、南無三是れはと急に忍び足となりて門の方に歩み來たり、戸をそつと開けて出るが否や一目散に走り出し裏町へと驅け抜け、何喰はぬ顔色にて復た元の路に出て、自宅へと歸つて済まして居た、隣家では此の物音に驚き、是れ畢竟盜賊の忍び入りしなりと思ひ急に騒ぎ出し、其の男の宅へも只今かく〜のとあり御宅でも御警戒然るべしと、特に使を遣はすなど心切にして呉れるより今は済しても居られず、逐一白狀に及びはては物笑ひとなつてしまふた。



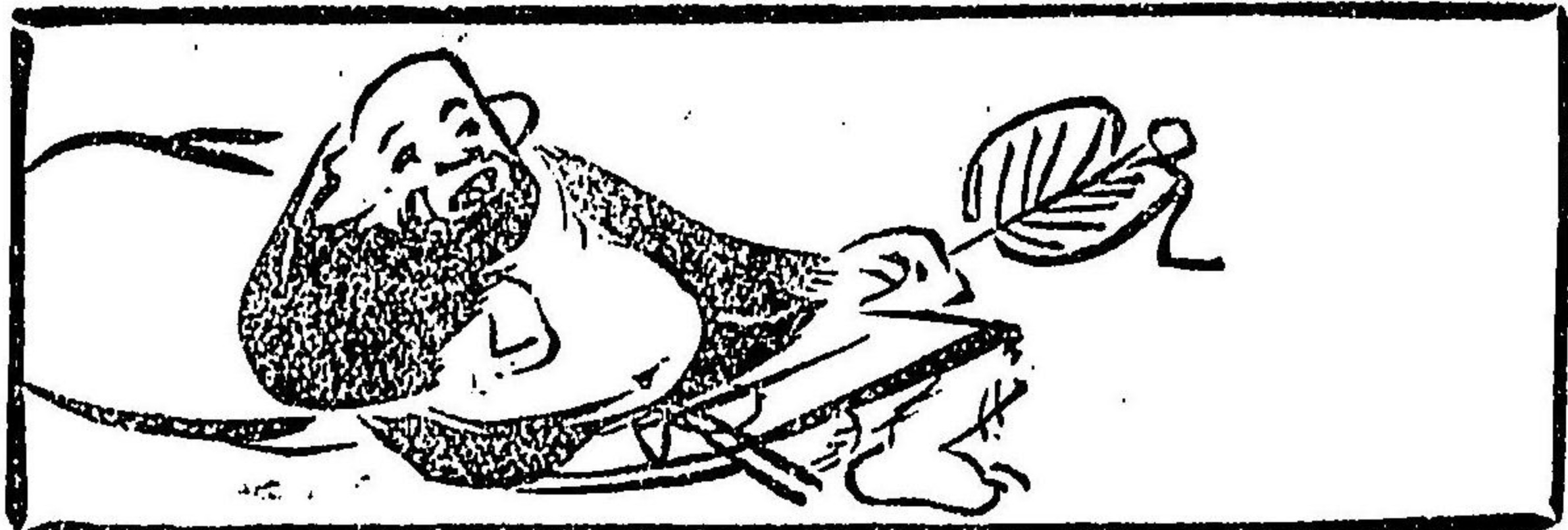
抱腹百話

山の神

信心婆さんハイカラ娘の孫を叱つて「これ〜お前は何故そんなに無信心だへ、神様佛様を拜まぬと罰が當りますぞへ、これからちと朝晩宮参りでもしなさい」と云ふ、娘は首を振つて「お婆さん、妾神様などを拜まなくても、今に嫁入したら直ぐにお神さんになるわ」。

發明家小供に教へらる

發明狂の學士先生、人體の目方を計るカン〜はあるが、容積則ち何斗何升何合になると云ふことを計る器械がないので、己が一つ發明をしてやらうと妙な處へ力を入れ、一生懸命となりて寐食を忘れ、或時は護謨製の升を造り、又或時は人を袋の中へ詰めて見、種々様々と苦心を重ねたが一向成功せないので失望落膽して居ると、隣の小供が遊びに来てそれを聞き「伯父さん、そんなら風呂桶へ人を入れて。其上に水を一杯入れて、人が出てから其後へ水を計つて入れると分ります」と云はれて、流石の



抱腹百話

投身の見合せ

發明自慢の男も開いた口が塞がらず。

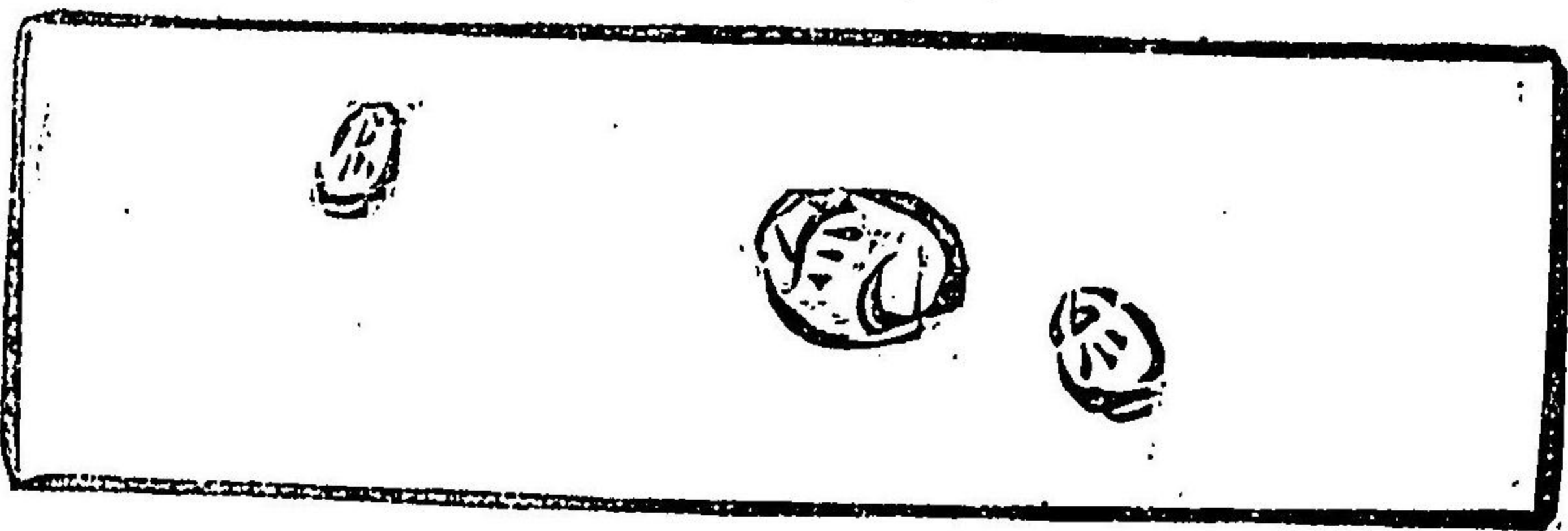
馬鹿男と馬鹿女が夫婦の約束を爲た處、双方の親が頑張つて聞き入れぬので大に落膽し、夫婦になれぬ位ならいつそ死んで未來とやらで世帯を持つて見やうかと相談が煮え、さて愈々奈うして死なうかと思案をすると、刃物で死ぬのは痛い、毒藥を呑むのは苦しい、まて〜縊死をして…それも面白くない、いつそ流車に轢かれて一と思ひに…それも死損ふたら大變、そんなら華嚴の瀧へ行かうか、淺間の噴火口へ飛込まうか、そんな金のかゝる處よりもつと近い川端で投身しやう、とやつと思案が決つて二人手に手を取つて水際まで來ると急に顔ひ出し、南無阿彌陀佛と唱へつゝ尻引まくつて見たが、一足這入つては冷く、二足這入つては寒くなり「こりや冷たい」「ほんとうにたまりませんよ」「もつと暖かになつてからにしやうか」「はい、いつそ時候のよい花咲く時分まで延して置きましやう」。



抱腹百話

飛行機の發明

仇名を發明狂と云ふ男あり「僕は今度完全なる飛行機を發明した」と法螺を吹いて居る處へ又一人の飛行機凝りの男が來合して「君、そりやもう試験が済んだのか」と尋ねると「此間上野公園で試運転をして見た處實に十二分の好結果で、初めは段々と地を離れて天へ登つて行く心地の面白さ、市街を見下すと人間は蟻の這ふ様で、高いと思ふて居た淺草の十二階も遙に脚下にあり、今まで飛ぶ鳥を羨しく思つて居たのは可笑い位、近きは隅田川に糞船を漕いで居るのが見える、彼方の二階で誰も知るまいと思つて藝妓と巫山戯て居る、此方の窓に密と風を捻つて居る人がある、その向ふに巡查さんの居らぬのを考へて立小便をして居る奴がある、遠くは富士筑波、三保の松原、近江の湖と瞬く内に自由自在に飛んで行ける、おや何時の間にやら臺灣へ來て居た、この島は上から見下すと丁度大きな椀へ飯を盛つたやうな形に見える、それてタイフンと云ふ事が分つた、と思ふと夢であつた。「何だ人を馬鹿にして居る。「まあ聞き給へ、乗つたのは夢であつたが機械は著々と出來上つて九分九厘まで成功

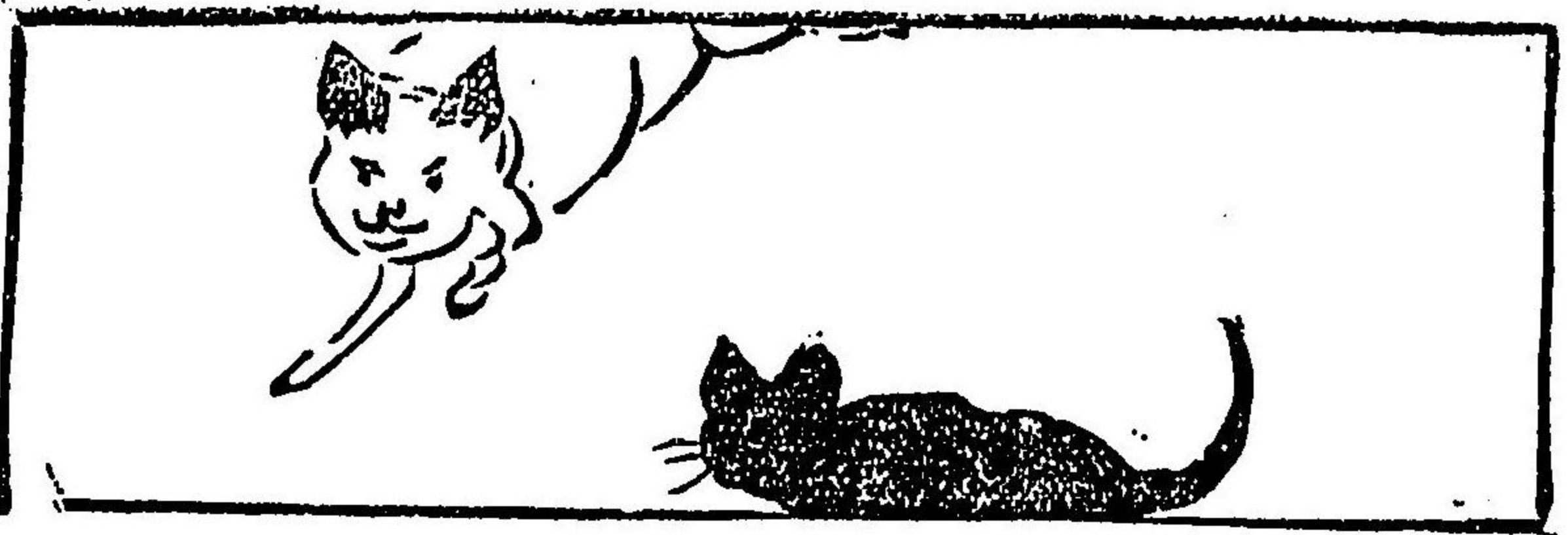


抱腹百話

して居る、空中へ上つたり下りたり進んだり退いたりするのに、實に便利で活潑でしかも最も新式の船が出來て居るが、惜しい事にはたつた一つまだ出來ないものがある。「そりや何だ。「機械を空中へ浮き上らす事が出來ぬのじや。「肝心の空中へ上る事が出來ない飛行機は運轉せぬ時計も同然じやないか。「サア、それだけがたつた一つ残してあるのじや。」

猫だ

ある日一天俄かに掻き曇つて墨を流し、霹靂一聲グワラ／＼ゴロ／＼又ビカ／＼と家屋も震動するばかりに雷鳴し、大雨沛然として盆を覆すと云ふ光景、その凄しい中にバリ／＼と物の裂けるやうな音響「それ雷が井戸の中へ落ちた／＼」と大聲あげたのが栗手込助と云ふ馬鹿者、それを聞いて馳け付けたのが四五人の隣同志「ナニ雷がこの井戸の中へ落ちた。「そんなら引捕へて見せ物にしやう。「それ逃すな」と嚴重に網を張り「おや何だか獸に似て居る、それは昔から云ふ雷獸と云ふ奴に違ひなし」と怖わ／＼引上げて見るとコハ如何に、雷獸と思つたのは隣の三毛猫殿、落雷に驚いて家

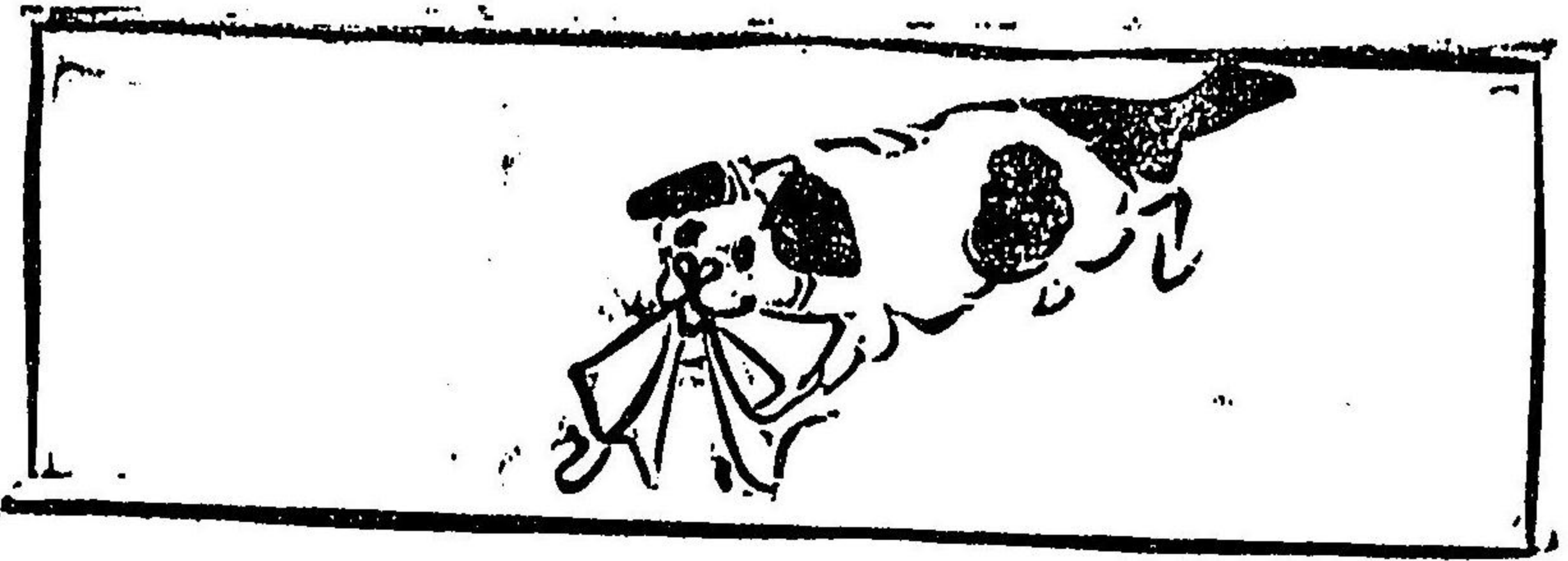


抱腹百話

110
根から井戸の中へ落轉たのであつたから、一同開いた口が閉からず「おや猫だよ」。

理髮錢

頗る慾の深い客旦那あり、出すこと云つたら手を出すもの嫌ひ、葉書を買ふにも流車に乗るにも値切らねば氣が済まぬと云ふ困つた性質で、ある時に理髮店へ入つて十錢の刈賃を五錢に負けておけと云ふので床屋の主人大に立腹し「私も長い間此商賣をして居りますが、理髮代を負けて呉れと仰しやるお客様はまだ貴郎が始めて、御座います、大抵の御客様は定價より多く置いて行きます」と注意をしてやると、流石の客旦那も少しは耻ぢ入つたと見えて理髮が済んで歸る時に、生れてから始めての大々的大奮發をなして拾五錢を投げ出したので、床屋の主人膽を潰して「へい旦那、どうも有難う〜」と頭をぺこ〜〜下げて禮を云つて居ると、客旦那顔色を變へて、「私は皆あげたつもりでない、十錢銀貨は理髮代で、五厘多くあげるのだから五錢の白銅貨から四錢五厘剩餘を出して貰いたいのじゃ」。



抱腹百話

投身に非ず

真夜中に橋の欄干へ凭れて泣いて居る女があると、通り合した男が大に驚いて抱き止め「これ御婦人短氣を起しては不可ません、どう云ふ深い譯があるのか知らぬが死ぬには及ばん、及ばずなから私が力になりましやうから思ひ止まつて下さい」と云つても首を振つて又泣いて居る、其處へ又一人來り二人來り三人來り、終ひには彌次馬連中も來りてツイ〜と騒ぎ出したが、女は矢張り泣いて居るばかりで譯が分からぬて困つて居ると、警官が投身女と聞いて駆け來り「コリヤ〜不心得をしちやあ不可ないぞ、姓名は何と云ふ、歳は幾歳だ、亭主はあるかないか、またどうして死ぬ氣になつたのだ」と尋ねると女は漸く顔を揚げ「いへ〜妾は死ぬつもりではありません、茲處まで來ると急に齒痛が起りまして、それ故幸抱が出来ず泣いて居たので御座います」。

貸困り



抱腹百話

負債者「旦那、誠に済みませんが今月返へすつもりでありましたか……今暫らく待つて頂きたう御座います」債権者「そう毎度延びては實に困るじやないか、間違なく何時返済して呉れる」負債者「はい、まだ何時と決つて居りませんが」債権者「返されるか返されぬか分らぬのか」負債者「恐れ入りますが萬願御待ち下さい」債権者「仕方がないカシヨマりました」。

加藤氏の洋行奇談

加藤正義氏が先年洋行をした折、此處彼處と宴會に呼ばれ大に歡待された、併し氏は何處へ往つて見ても色の白い男女の間にたつた一人なので、何だか自分の顔の色が氣にかゝつてならない、此處ぞ日本男兒の本色を發揮すべき所と力んで見ても、何うも氣後れがする、もしも女々しい顔色でも他客に覺られなば一大耻辱と氣を勵まし、やをら椅子を離れて今しも立ち上らんとして、ふと向を見れば這は如何に短軀黎面の東洋紳士と覺しき一人が是れも椅子を離れて今しも立ち上らんとして居る。

是は知らなんだ、我の外にも亦た東洋の客人が來て居たかと心の中に喜び、何

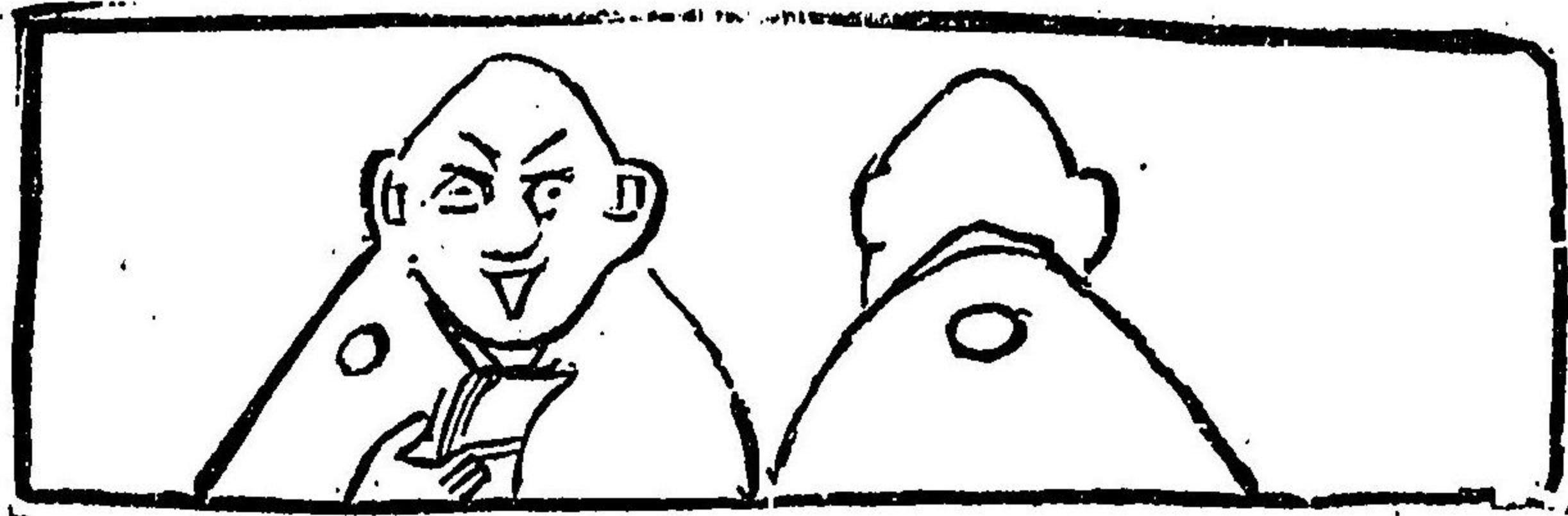


抱腹百話

とはなしに歩み出だせば、彼の紳士も氏と同じ方向に歩み出すので益々心強くなり、歩みながら紳士の方を向けば、彼の方よりも此方向き、偕ては彼も我を慕ひ居るなと、向きつ向かれつ屢々其を繰り返しつ往つて安樂椅子を見出だし、其所に身を横たへて彼の紳士は如何にせしと向を見れば、這は如何に彼も同じく安樂椅子に身を横たへ、氏と同じ姿勢で此方を見て居るので、餘りの不思議さに能く眸を凝らして見れば、失敗つたり這は餘りに日本人は色が黒いとか、丈が低いとか他の來客に批評されんとの残念さ、口惜しさの一念が凝て室内の一大鏡面に寫りし吾姿が、一個東洋紳士の幻影を現出せしめたのであると氣が附たので、今更ら可笑しくなり、是れは飛んでもない彌次喜多を遣つたものかなと獨りて微笑めば、鏡中の紳士も同じく微笑み居る可笑しさ眞個に一場の喜劇であつた。

酒 禁 笑 說

人生僅か五十年、泣て葬すも一生、酔て面白く暮すも一升。と妙な處に覺りを開いた坂月花三と云ふ男。もしもこの乃公が明日の口にもコロリと死んだなら、酒樽を棺



抱腹百話

箱にして酒の糟かすで詰めて、末後の水も酒、追善供養も酒の外には御馳走は無用、そして御寺の坊さんに頼んで銘酒上酎しゅ信士と戒名を付けて貰ふのじや。當てにならぬ未來の極樂より

酒吞めば借金取も驚おどろの

聲こゑに聞ゆる此世の極樂

と理由の分らぬ事を唸うなつて居る内に節期となり。先づ酒屋の勘定書を始めとして米屋薪屋が日毎の催促、味噌醬油屋が夜毎の責込、流石の亭主も青くなり。

亭主「あゝ困こまつたく、この節期を如何しやう」

女房「酒ばかり吞くて居るのは當然あたりまですわ」

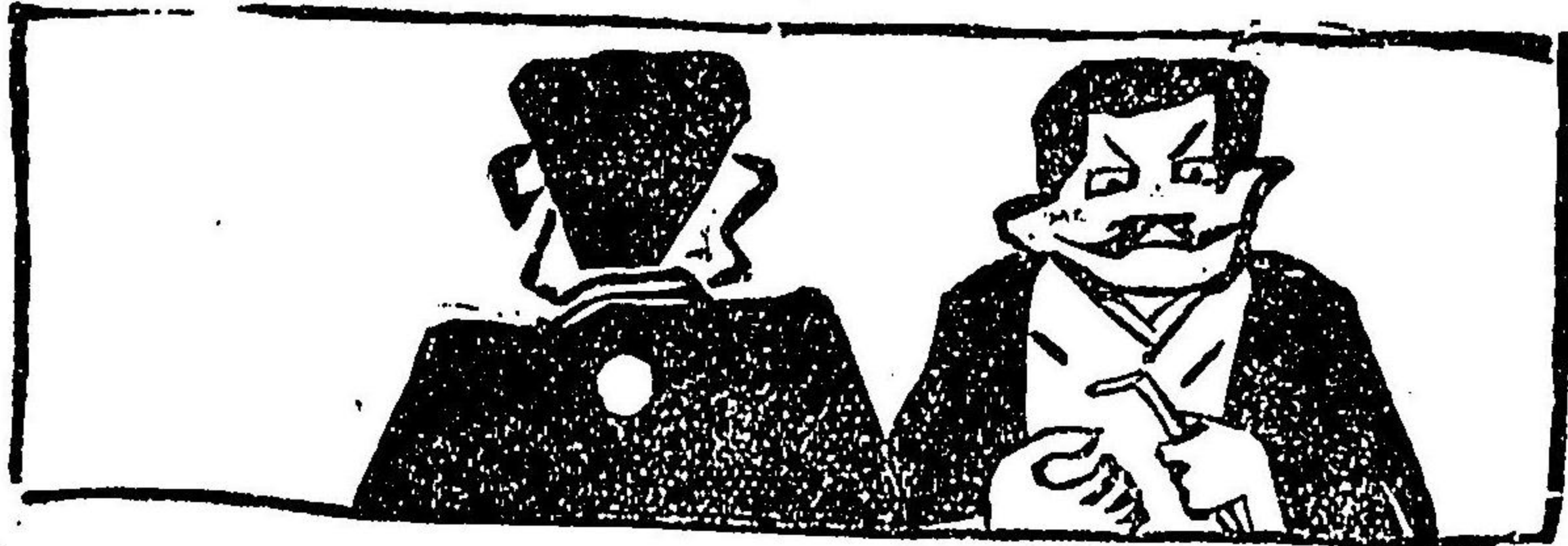
亭主「お前に濟まぬが衣服を質に入れて呉れぬか」

女房「そんな事位で、とても大晦日は越せませんよ」

亭主「イヤそれを路銀にして欠落かた落ちをするのだ」

女房「妾わがしは欠落などは嫌いやで御座いますよ」

亭主「誰たれが好んでするものか、乃公なつかみがこの通り心配しんぱいをして居るのに、お前は何故平



抱腹百話

氣きで居るのだ、この薄情女奴はくじやうにやうま」

女房「イへ妾は節期になつたら困ると云ふ事をチャンと前から知して居て、用意よういの金を貯たくわへてありますよ」

亭主「如ど、如ど、如何いかしたと云ふのだ、そんな金があるなら早く出して呉れば好こいのに」

女房「馬鹿々々しい、酒ばかり吞くんで節期になつてから騒さわぎ出し」

亭主「己おれが悪わるかつた、一體何の位有あるのだ」

女房「……………」

亭主「早く聞きかして呉れぬか」

女房「二百圓」

亭主「エッ、二百圓。そりや眞實まことか」

女房「何なにて妾が嘘うそを吐はきましよう」

亭主「そんなら如何いかして拵こしらへた」

女房「お前様、まあ耳の穴あなを掃除そうじして妾の云ふ事をよく聞きいて下さいよ。お前様が



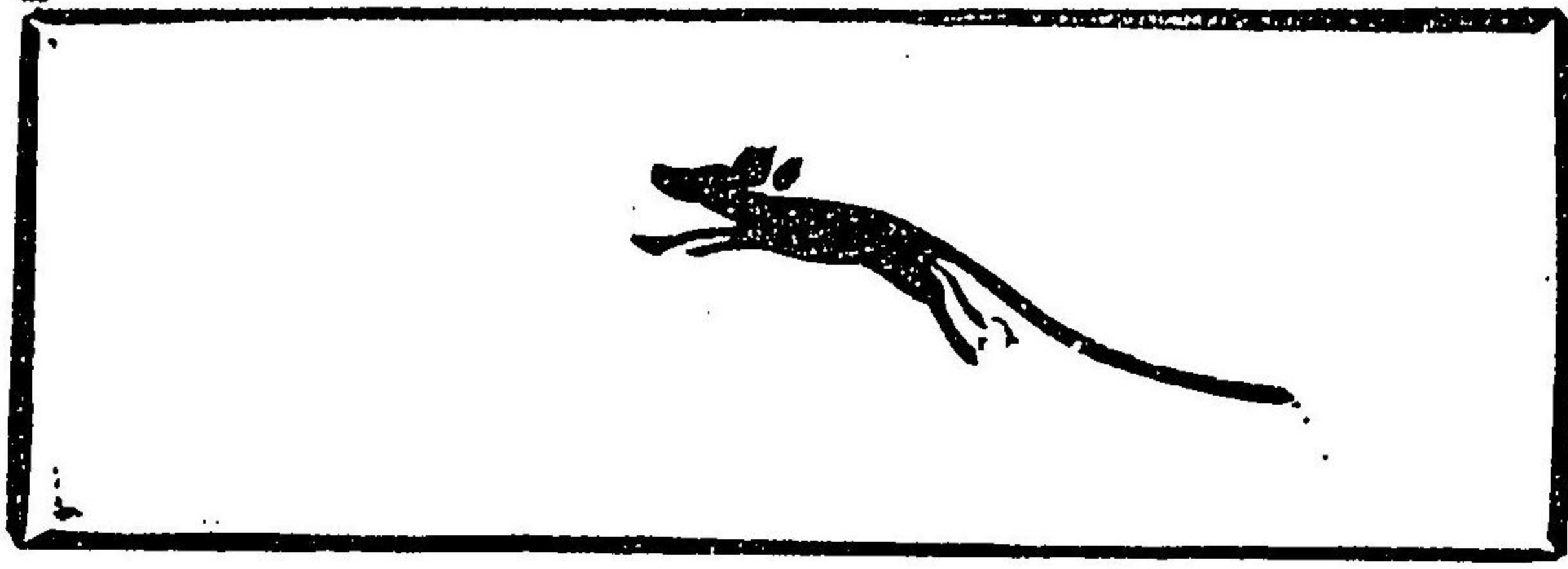
抱腹百話

毎日飯かさず朝も晝も晩も酒を呑む、お蔭で妻は雨が降ても風が吹いても酒買に走らねばならぬ。その苦勞は厭はねど、あゝ此の酒の爲に胃中食之、もし酒さへ無ければ安樂に儉約にすれば金も溜るものを……」
と涙を流しながら、

女房「せめて毎日呑んでしまふ内から少しづつなりとも残して置たらと思ふて、お前様が十銭出せば、妻がそつと二銭除けて置いて八銭だけ酒を買ふて来る、又五銭出せば一銭除けて四銭買ふて来る。そして貯めた金が月に一圓五十銭、一年に十八圓、妻がお前様に連れ添ふてからもう七年、その七年間のが百二十六圓、それを日賦で貸したり年利に貸したり色々として、利に利が積つてとうとう二百圓」
と隠し持たる財布から出してズラリと並べて見せるに、亭主は勝を潰し。

亭主「難有い、南無難有い、お前の親切は滅多に忘れはせぬ。それだけあれば立派な正月が出来て、思ふ存分に呑まれるわい」
と手を合すと、ジツと聞いて居た女房は涙に聲を震らせて、

女房「お前様、妻がこれ程に貯めるのになど程苦勞をしたと思ひます。これと云ふ



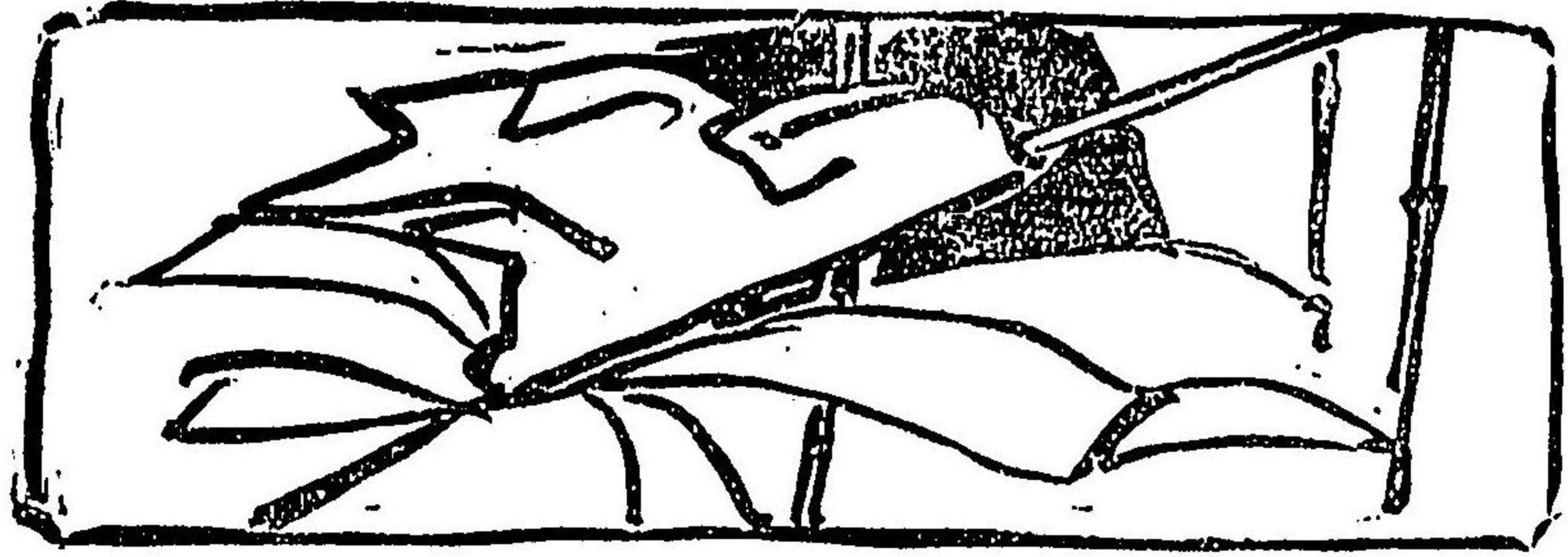
抱腹百話

も此金を資本にして商賣を始めお前様を立派な人にして、妻も早く安樂に暮したさ。それを又ひだくと呑んでしまふ様では……」
と堪らずなつて来て泣き出した、亭主は吃驚ナール程と感心して、

亭主「あゝ女房の手前不目ない、今より酒は一滴も呑まぬ、斷然禁酒する。乃公も男だ安心致せ」
女房「では禁酒して下さるか、こんな嬉しい事はありません。これから夫婦一生懸命に働さましやう」

亭主「諾し心配するな、僅か一銭か二銭づつを貯めてさへその通りだから、いつそ乃公がスツカリ酒を止めたら、それこそ大變な金が貯るわい。あゝお前に苦勞をさして濟なかつた免して呉れ、その代り今に樂をさせるよ」
と目度く正月を迎へ、愈々元日より酒を廢めてしまふたので、

「時に酒……否酒を廢めたのだから……あの……餅を食たい。使ふために溜める金だから、使はずに方付て置くと蟲が食ふかも知れぬ、否腐るかも知れぬ。お前もそんな汚ない衣服を着て居らずに、もつと奇麗な物を着て白粉でも塗つて、乃公の



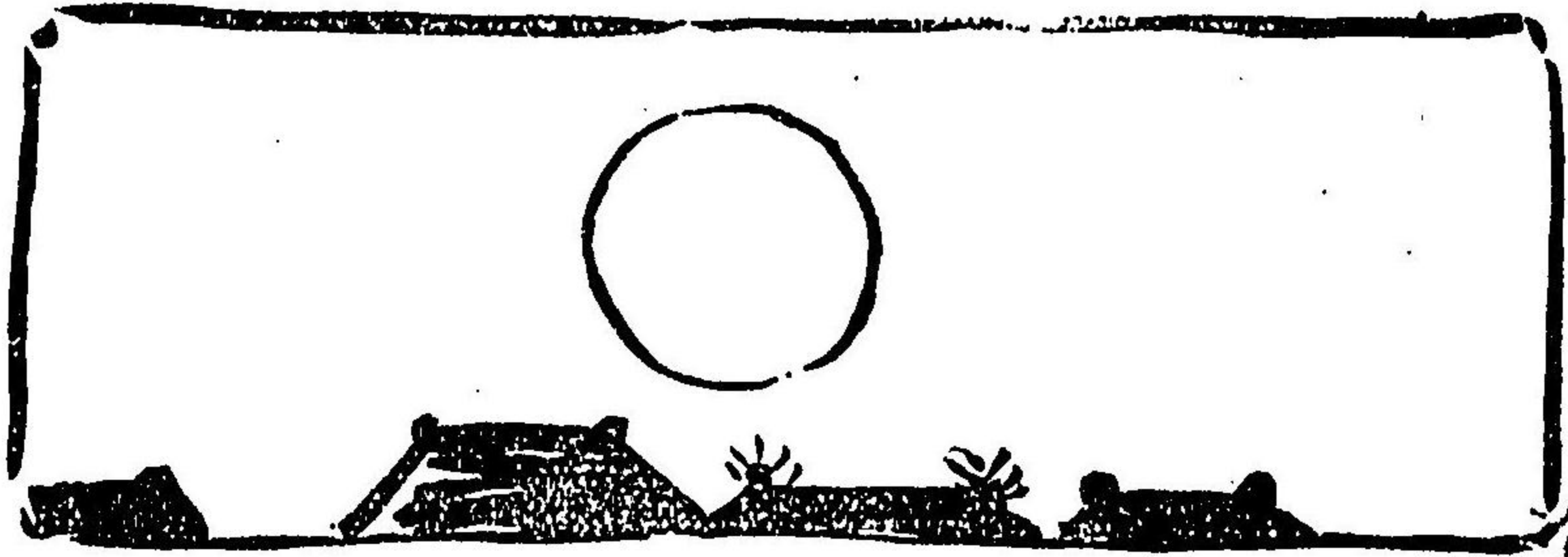
抱腹百話

婿……いや大金持の奥様と云はれても耻かしくないやうにして呉れ」と無理に女房を引張つて馬車で三越へ行き、その歸りに料理屋へ這入つて牛鍋で飯を食ひ、その又歸りに歌舞伎座へ乗込んで上等棧敷へ坐る、其上又新橋の博品館で買物をして風月の菓子近所への土産にする。こんな風で毎日遊んで居る内に又節期となつてしまふと、今度は酒屋への拂ひは一文も出来なかつたのは好いが、其代りに餅屋餅屋蕎麥屋菓子屋への拂ひが去年の二倍以上、其上家主から立退を命ぜられたので、蒼くなり。

亭主「サア大變々々、今年も又飯を置かねばならぬわい」

女房「イへもう妾は裕一枚で頼ふて居ります、去年の節期にはまだ質に置く品が有りましたが、今年もうありません」

亭主「弱つたなア、これと云ふも酒を廢めたからだ。呑む口には矢張り呑む方が得と見へる、月にも花にも酒が無くては不可ん。サ、貧乏序手に一杯買ふて來て呉れ、久しく酒を呑まぬゆへ腹の蟲がグイグイ云ふのが聞えて居る」と又々酒を呑始めて、



抱腹百話

酒なくて見れば櫻も河童の屁

と歌ふに、女房は餘りの事に泣くに涙も出でず。

酒呑んで見れば意見も屁の河童

と云へば亭主は益々興に入りて又、

酒酌まん雪積む山を富士と見て

と歌ふに、女房は溜らず自暴自棄となり

酒買はん借金金の山を富士と見て

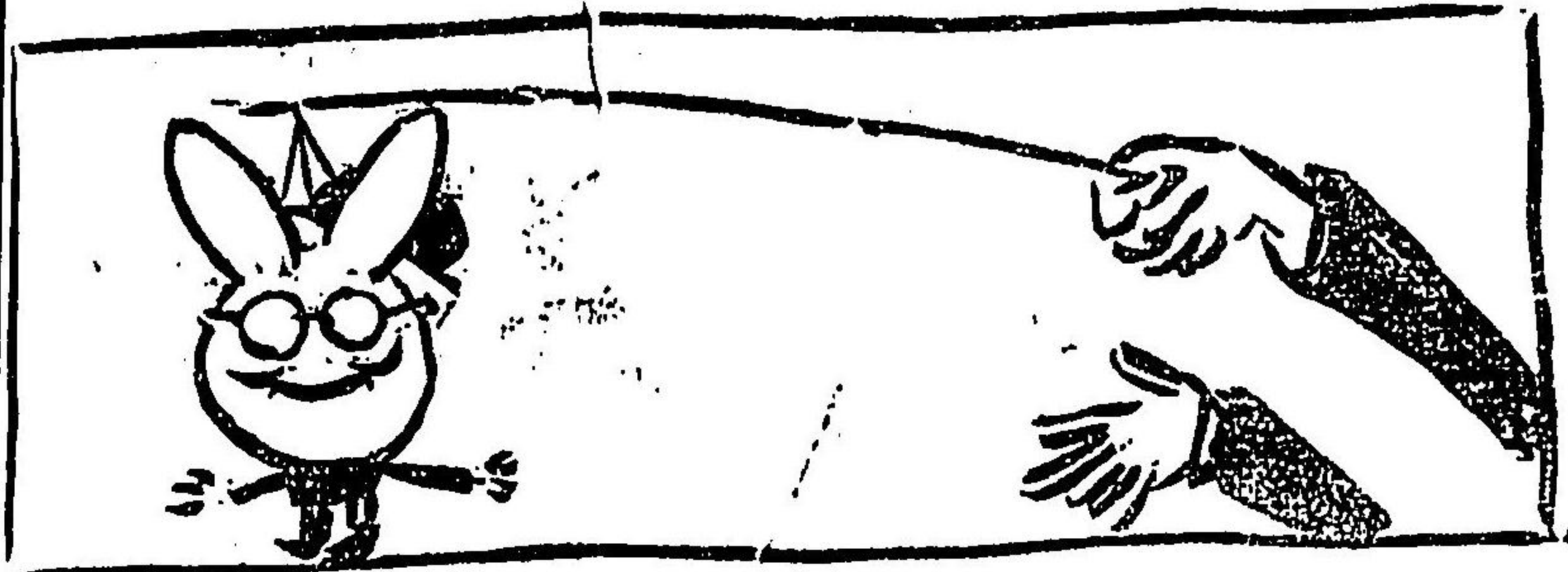
毒の歌

髯を生せや口髯を、大髯小髯等外髯、鯨髯鰐髯薩摩髯、赤髯茶髯願の髯、大事の髯の塵拂つて、

一本目には 一つもくの櫛を連れ、

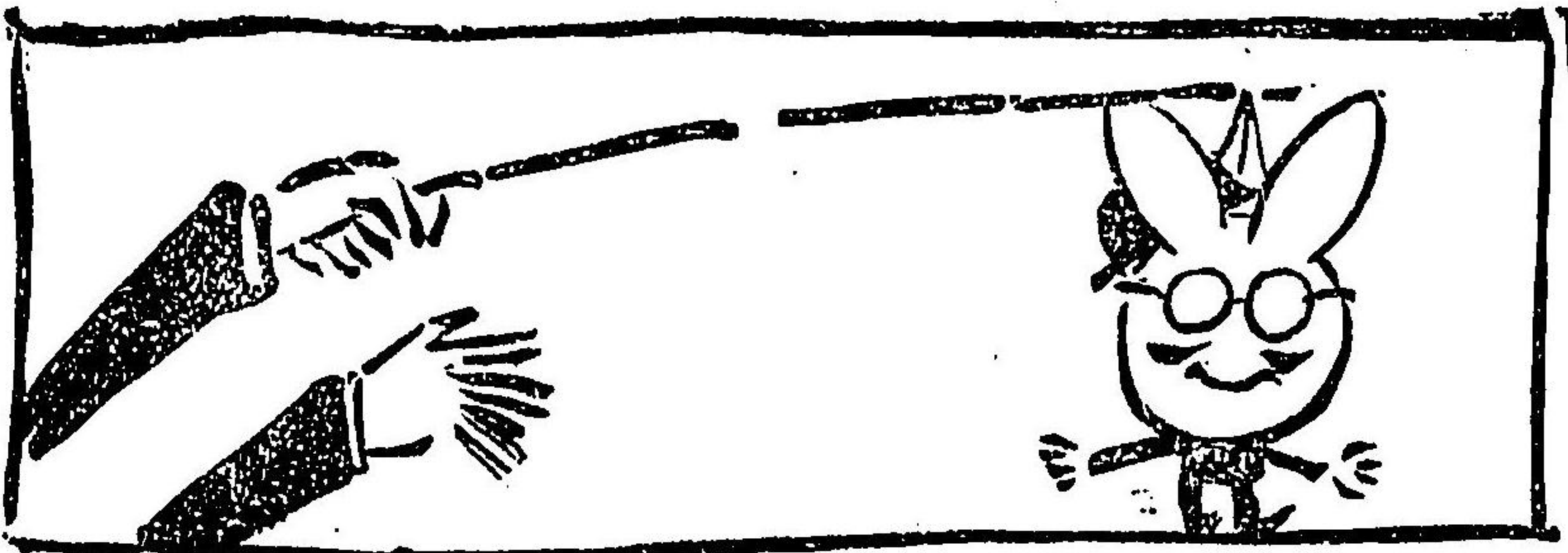
花見遊山になてる髯。

二本目には 俄かに生やす口髯に、



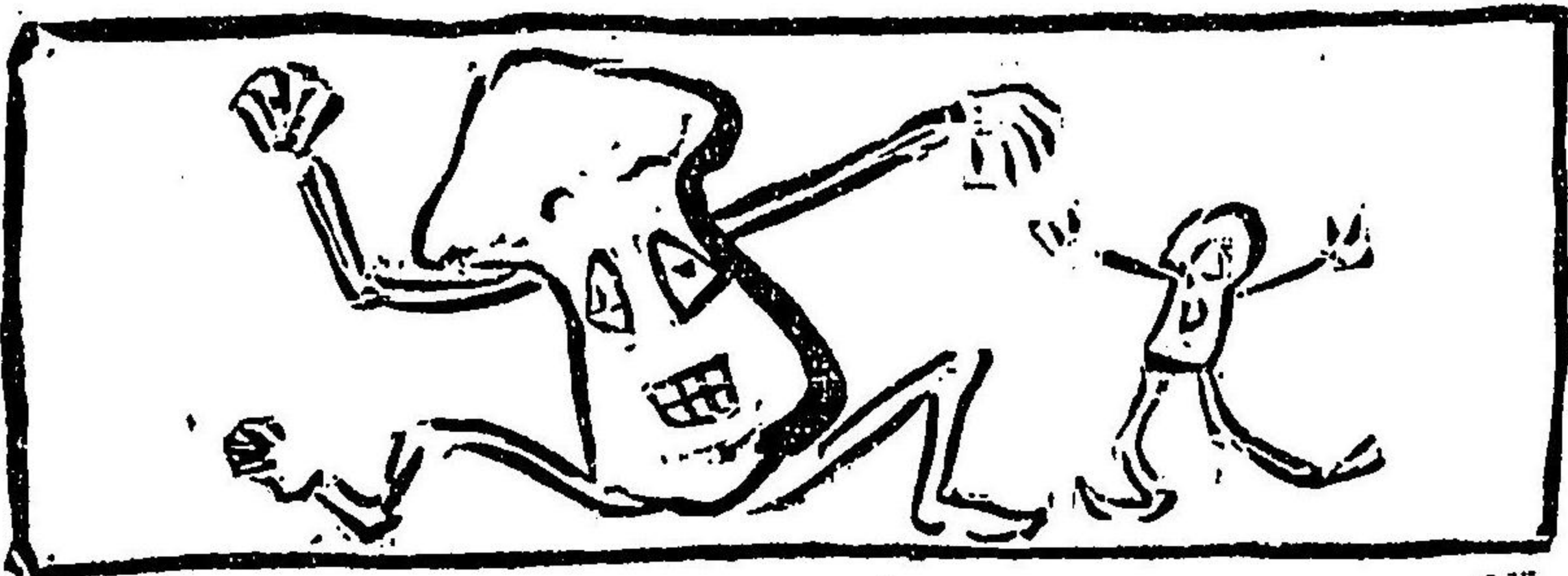
抱 腹 百 話

- 三本目には 新任官と知られけり。
さても珍らし白髯の、
老爺息子に意見され、
始終威張つた口髯を、
借金取に下げまわす。
- 四本目には 誤魔化す帳の金銀で、
藝妓に讀ますや髯の敷。
ろくく讀めぬあき旨、
本を見るたび拵る髯。
- 五本目には 質におく物なけれども、
質におく物なけれども、
あくに置かれぬ口の髯。
- 六本目には 八字の髯を振り立てて、
人を叱るか馬鹿役人。
苦しさをかくす笑い顔、
- 七本目には
- 八本目には
- 九本目には



抱 腹 百 話

- 十本目には 思案のたびにひねる髯。
じつと女に髯延ばし、
長うなつたる鼻の下。
- 九々一口噺
- 馬肉を何程で買て來た「肉十八錢だ。
 - 婆さんの顔にある皺の数は一體何個ありますか「皺三十二ありませう。
 - 此家は大分大きいか何疊敷てせう「ハイ敷く三十六疊あります。
 - 君と別れてからもう三十年餘りになるエ「左様碌々三十六年。
 - 今の碁で何方が勝つた「僕の方だ「何目だ「碁々二十五。
 - 貧乏で満らんから皆質に入れてしまふた、羽織が五圓に、衣服が三十五圓に、帯が三圓に、帽子が一圓に「合して質々四十九圓、
 - ある官吏が在職の時に別に下賜金もなかつたが、死亡の後に賞金があつた「乃ち死後二十圓。



抱腹百話

○此間の灘に猪を澤山取つた様だが何疋あつた「猪十六疋。
 ○君は久しく病氣で苦しんで居るがモウ何日程になる「苦々八十一日。
 ○魚を澤山仕込んで来た相だが何の位だ「鯿が八圓。
 ○君の妻君は難産で一月ばかり御困りの様子でしたねエ「ハイ産苦二十七日。

英和一口噺

夕方になると蝙蝠が飛ぶよ
 石を落したら音がする
 彼女は嫁入せぬからまた子を
 官吏は勤めるに自宅を
 鰻は池や川に
 小舟が遠く幽かに見へるよ
 馬鹿な息子が商賣をすると
 虎の皮を買ひ

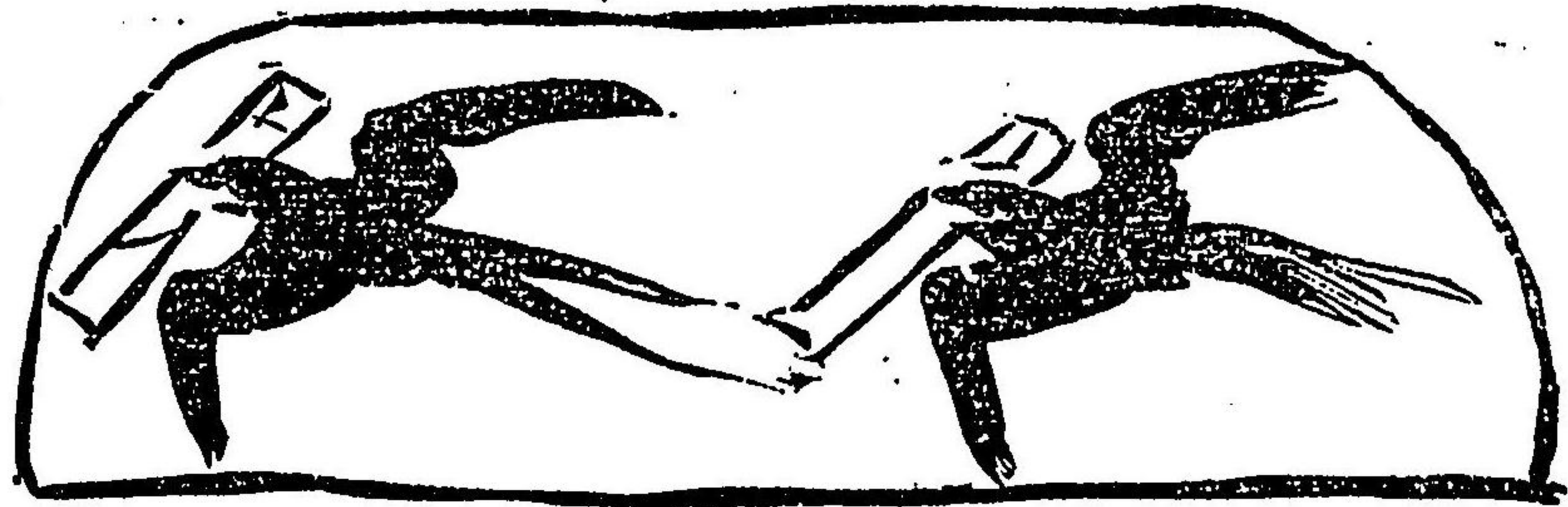
バット
 ストン
 ウーマン
 デー
 イール
 ポート
 ソン
 タイガー



抱腹百話

鶴の子を呉れと云ふても
 橙の木を庭に植て
 姉妹のべて居る帯は
 猫を打くと鳴くよ
 犬が尾をたれ
 女の子は耻かし
 遊び過ぎてきた
 穴を
 口を開いて
 雷が一時に開くよ
 蚤が多くて困るから蚤取粉を
 外套の色は
 押合にて袖を
 殺されると息を

クレイン
 ライク
 シスター
 キヤット
 テール
 ガール
 プレト
 ホール
 マウス
 バット
 フリー
 クローク
 スリース
 キル



抱 腹 百 話

小さい室へ多勢坐ると狭く
監獄には悪い人が澤山
嫁は姑の意地悪に
大掃除で塵を打き
襦の吹降りて窓の中へ
君の母は隠居をするのですか

手 後 れ 集

ナロー
イル
クロース
タスト
ヘイール
マザーア

○早く歸へそう〜と思つて居る間に、嫌な女房のお腹が大きくなつてしまふた、あゝ残念な手後をしてしまつた。
○内の息子に限つてそんな事はないと油断して居る間に、息子は賭博と茶屋遊びをばえてしまふたので、ア、一と悔んでもモ一手後れて後の祭だ。
○僅かの診察料や薬代を惜んで捨て置いて、脈があがつてから御醫者を幾人迎へても、モ一手後れてお氣の毒様だ。



抱 腹 百 話

○美人と思つて結婚が済んでから、あゝこんなお多福であつたかと口惜しがつても、追出すわけには行かぬから、矢張り手後れと諦めるより外はあるまい。
○餘り婿の選り好みを爲過ぎて居る間に肝心の嫁入盛が過ぎてしまふたのに氣がついて、ア、もつと早く方付で置けば宜かつたにと思つた時には、モ一大分手後れになつて居る。
○梅毒に罹つて鼻が落ちてしまつてから、ア、もつと早くから養生をして慎しんで置たら宜かつたにと、歎いても手後れて元の通りに癒らぬ。
○祝儀を人にやつてから多過ぎたと惜んでも、取返すわけにも行かぬから、手後れの泣寝入だ。
○監獄へ投り込まれてから、ア、悪い事をせなんだら宜かつたにと、臍を噛んで悔んで見ても、免して呉れぬからこれも手後れて赤い衣を著せられる。
○娼妓に魂を打込み身財を吸取られ、揚句の果に金の切目が緑の切目と振捨られおまけに女郎は他のお客に落籍されたから、己れそんな心と早く知つたならと、地團太踏んで見ても、手後れて仕方がない。



抱腹百話

○酔た紛れに手あたり次第に打毀して置いて、醒めてからア、詰らん事をしたと思つても、モ一手後れて後を慎しむより外はない。

○ア、もつと孝行をして置いたら宜かつた、と親爺が死んでから涙をこぼしても、そん事は手後れて親爺は冥途から歸りもせまら。

○盗難にあふてから後で急に要心を厳しくしても、手後れて品は戻らない。

○一等の乗車切符を買ふてから、ア、三等にして置けば宜かつたにと云つても、僅かの手後れて仕方がない。

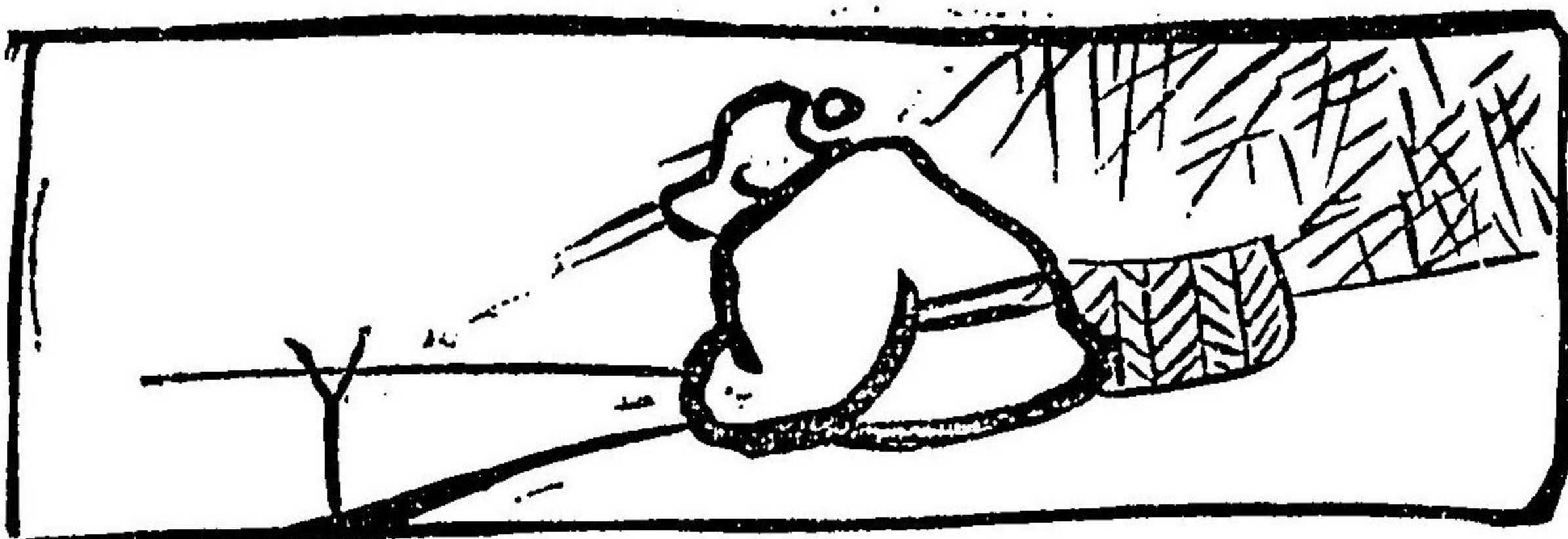
千手観音虱問答

千手観世音菩薩ある時虱の親方を呼出して云ひ給ふに、

観音「汝何處のものなりや」

虱「恭しく答ふるやう、

虱「恐れながら我々は、男の積鼻禪又は女の湯もじ或は股又などより生き出で、襦袢股引或は下著寝衣を住居と致し、段々と子孫の繁盛するに随つて上衣へも這出



抱腹百話

し、又た他人にも傳染いたし候」

観音「如何なる處に最も多く集り居るや」

虱「乞食の身體を我々の都と成し、頭の毛の先より足の指の先まで常に珠數繋ぎを致し居り候」

観音「一體何を食して生活するや」

虱「人間の垢を食物と致し居り候」

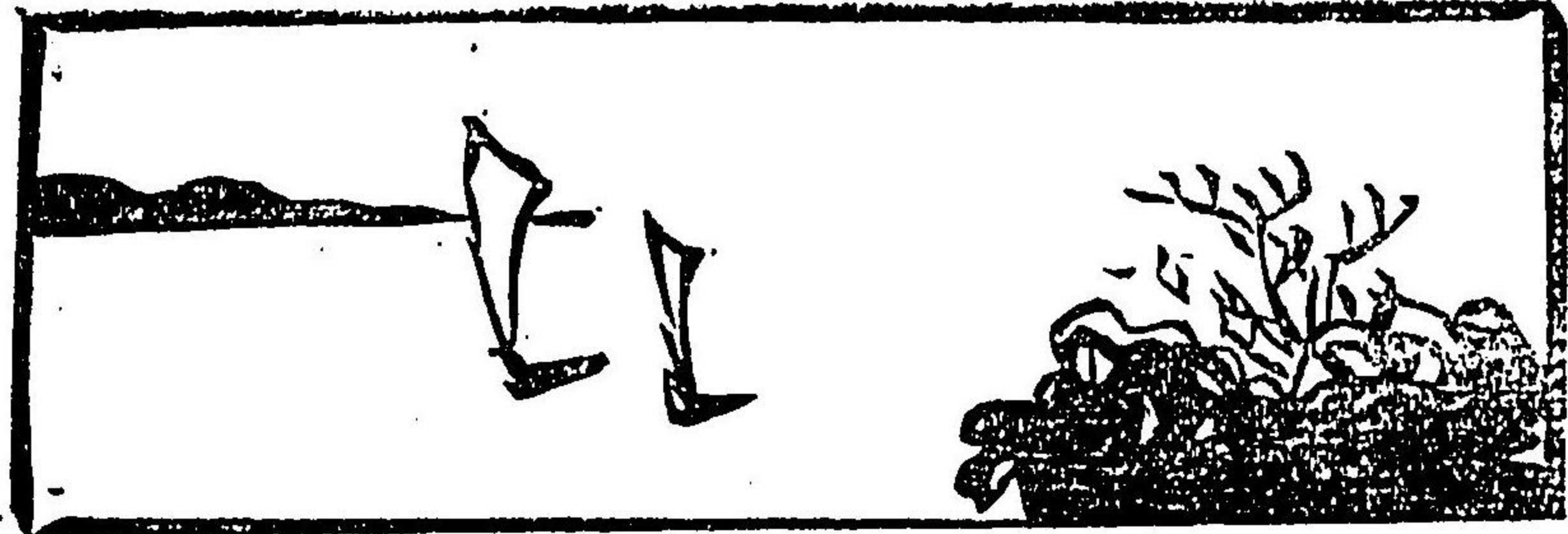
観音「汝の職務は何なるか」

虱「人間が垢を溜める時は衛生に害あり、故に我々が其垢を食つてやる……」

観音「ナル程」

虱「然るに人間は其親切をも知らず、我々を捻り潰し、其上恐しい熱湯の洗濯で我々の住家を責め込み、アツと云ふ間に親子兄弟女房卵まで残らず一時に全滅の憂目に遇ふ事度々にて、誠に哀れなる身の上御察し被下度候」

観音「さりながら汝汚はしき身分をも願みず、千手観音と我名を稱するは甚だ不都合千萬なり、一體全體誰の許可を得たるや」



抱腹百話

風「これは迷惑千萬、我々の姿か千手観世様に餘りよく似て居ればこそ、何時の間にか人間より千手観音と云ふ仇名を受けて候」

観音「然らば誰が云ひ始めしぞ」

風「誰とも分り申さず候」

観音「汝人間の身體に喰ひ付き居りながら、知らぬ筈なし」

風「知つても知らなくても、観音様の御厄介にならねば餘計な御世話は御免にて候」

観音「エ、云はして置けば増長し、佛に對して無禮の段此まゝに免し難し」

とハツタと睨み付け給ふを、風少しも騒がず

風「然らば御尋申さん、世に尻くらひ観音と云ふ事あり、此は何故にて候」

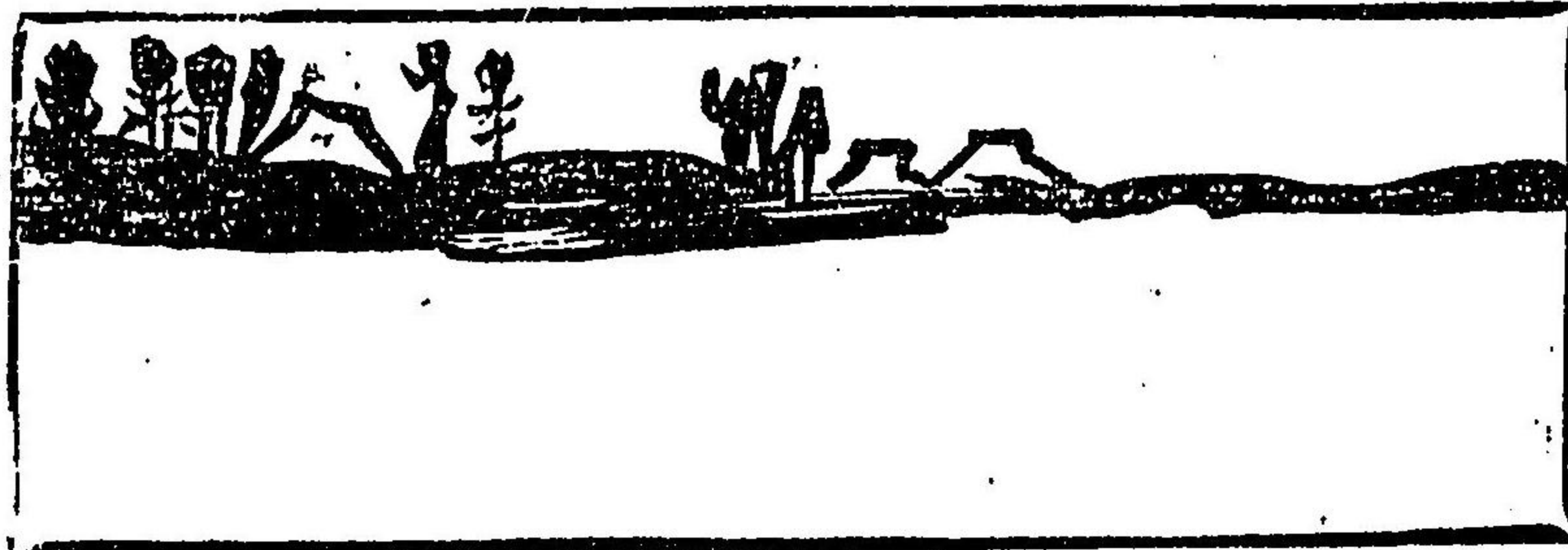
観音「それは人間の云ひ始めし者なり」

風「誰が云ひ始めしものにて候や」

観音「誰とも分り難し」

風「観世音様とも云はるゝ者が夫れ位の事を分り給はぬとは心得難し」

と責込まれて、流石の観音も大に赤面し返事に困り居る處へ閻魔大王來合して、



抱腹百話

閻魔「最前から陰で聞て居れば、観音と風の喧嘩とは近頃の滑稽じや、観音も風に負けたとあつては佛の威光に關はる、又風貴様も佛に對して餘り無遠慮過ぎるじや、乃公が一つ仲裁をしてやらう」

と懐中より矢立と紙を取出し認めた其歌は

忙しいと洗濯もせず風呂入らず
千手観音履ひ込むなり

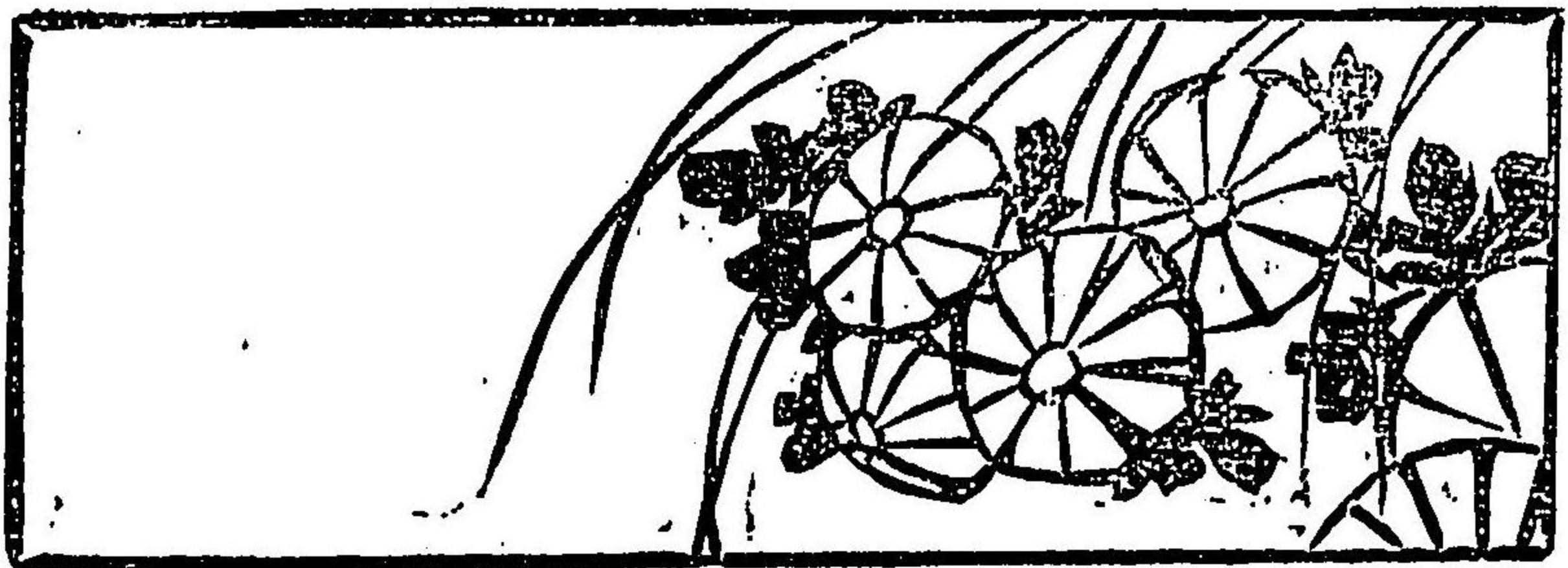
ABC都々一

- A「華するより苦勞を共に主の實意をたゞ頼む
- B「人命才子多病主と妾の無事祈る
- C「ん婚旅行して居る氣て見て居る萬國名所繪
- D「ん話かけたり又郵便で戀の手管も新世界
- E「はふと思へば主から云はれ手持無沙汰の捨烟管
- F「ふた振りしてする痴話口説顔を見られて耻かしい



抱 腹 百 話

Gつと見上る眼にもつ涙今度も出の時は何日
 H愛と英和とりませ戀の文句も西東
 Iの變らぬ互の證據二人並んで取る寫眞
 J非の約束待るゝ時に行くに行かれぬ其つらさ
 Kすに消されぬ月の光りを首尾する今宵だけ憎い
 L氣仕掛で成るなら戀の無線電信設けたい
 M魔に誓ひし一枚舌何ても前に嘘を云ふ
 Nは互の誠がもとしてそれに浮世の義理でもつ
 O前と私と新婚旅行世界一周して見たい
 Pツと疝癪立てたる主も後で優しい氣が嬉し
 Qな用事と云ふて呼んだのも戀しい顔を見たいゆへ
 R亭主より外に男は雄猫一疋抱きはせぬ
 Sがた書いて主の聲音を傍に置たい蓄音器
 T主の留守に影膳すえて無事を祈つて居る女房



抱 腹 百 話

Uに云はれぬ妻の胸は遠くて近き物思ひ
 V事な電話に嬉しい返事切ればせぬかと氣にかゝる
 Wに爲やうと堅い證文取つて印章押せたい
 X光線應用さして主に見せたい胸の中
 Yく騒ぐ座敷をはづしそつと眺むる窓の月
 Z分辛い妻の辛抱も主の爲なら厭はない
 & 遠い身は出雲の神に願をかける外はない

勝手な願ひ

○極蕩息子手を合して「南無我信仰する觀世音菩薩、私と藝妓の花吉とは切つても切れぬ深い情交、それを請け出すには親爺の藥罐頭が邪魔になります、萬願二人が早く夫婦に成れますやうに、佛「オイ〜そう惚氣て呉れるな、藝妓の手練手管で旨く欺されて居るのをチットモ知らないのか、それより親爺が堅氣の好い娘を嫁にせうと一生懸命に眼玉を光らして搜して居るじやないか、心得違ひのこの馬鹿野郎奴。」



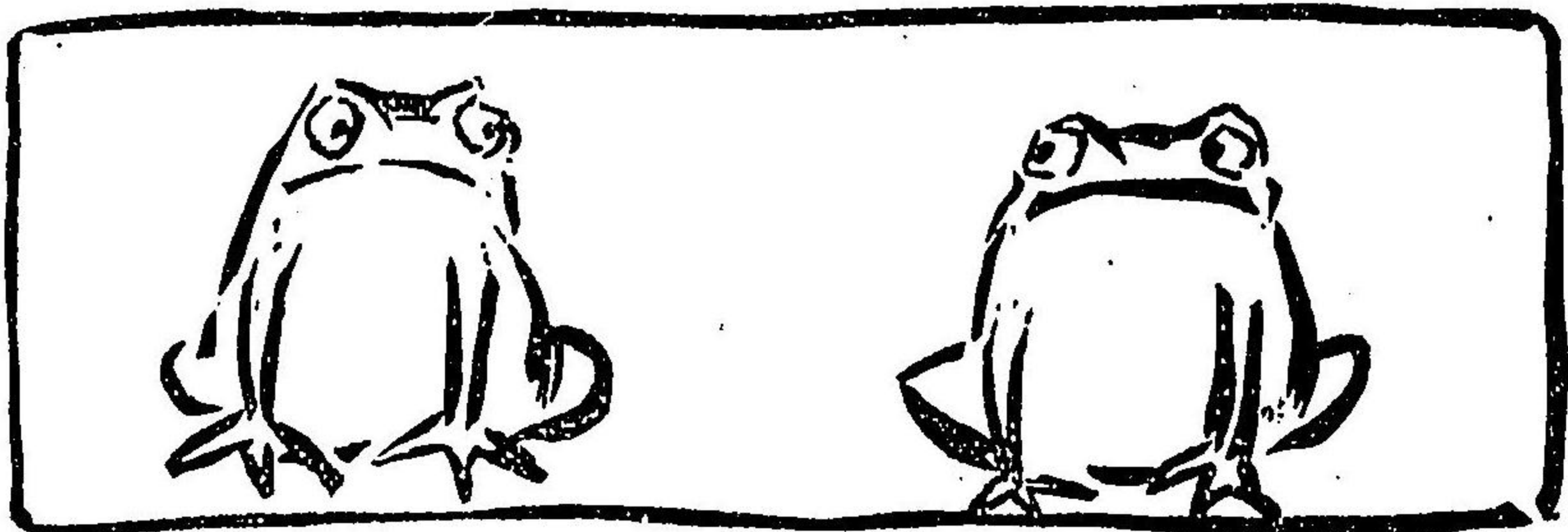
抱腹百話

○病氣の男「南無大師遍照金剛、哀れな病人で御座ります、人を助けるのは佛様の御役で御座ります、萬願一刻も早く癒りますやうに南無大師遍照金剛、佛「己れは醫者でないよ、全體世間の愚夫愚婦分らぬ屋の無學文盲の奴等が、神佛が病氣を癒すのを本職のやうに思つて居るのは大間違大迷惑じゃ、それに貴様の病氣の原因は淫賣を買ふて貰ふた梅毒じゃないか、もつと苦しむが好いこの罰當奴。」

○流行らぬ藝妓「お客が無くて困ります、萬願お金の澤山ある旦那を遣して頂戴な、嘘でない眞實にお願するのですよ、好いお客が出来ましたら此から屹度信心を致しますから、佛「困らぬ時は無沙汰をして置いてかなわぬ時の神頼みとは商賈柄の薄情でないか、お客を欺すのは上手でも己れは欺されぬよ、罪造りのこの男欺しの阿魔奴。」

○怠惰男太鼓を打いて「南無妙法蓮華經、南無貧乏で困ります、毎日々々祭つて居るのに運が向いて來ぬのは如何した者でせう、佛様も餘りな南無妙法蓮華經、佛「エ、煩さい貧乏で困るのは當然だ、その理由は毎日々々晝まで寐て居るじやないか、寐て居て運が開いて來るなら起きて働く者があるか、勝手な事を吐す此不精男奴。」

○兒の無い人「南無地藏菩薩何卒男の子で縹緞のよい賢い豪い病氣の無い孝行なよく



抱腹百話

働いて親に樂をさせる子の出來ますやうに、佛「飴細工か何かのやうに人間がそう自由自在に出來るものか、それに貴様のやうなヒョットコ面の惰け者の馬鹿者にそんな好い子が出來るものか、蛙の子は矢張り蛙だこの分らず親爺奴。」

○賭博師「南無不動明王何卒一ト摺みに千圓を勝たして下さい、お禮には何なりとも寄附致します、佛「そんな事を聞いてやると世界の人が皆賭博師になつて働く者が無くなつて大變じゃ、人を負かして取り上げた金などは一文半文たりとも眞平御免だ。」

今様官吏氣質

○人民を叱り飛ばす時の權脈

コリヤ〜規則に違反して居るぞ、法律第何十號を知らぬか、ナニ願書じゃ、あの書き方では行かぬ、それに手数料を添へて來ぬと却下するぞ。

○上官の機嫌を取る時の顔

へい〜どうも恐れ入りました、これからよく氣をつけますから御勘辨を……何卒宜しく御指揮を願ひます。



抱腹百話

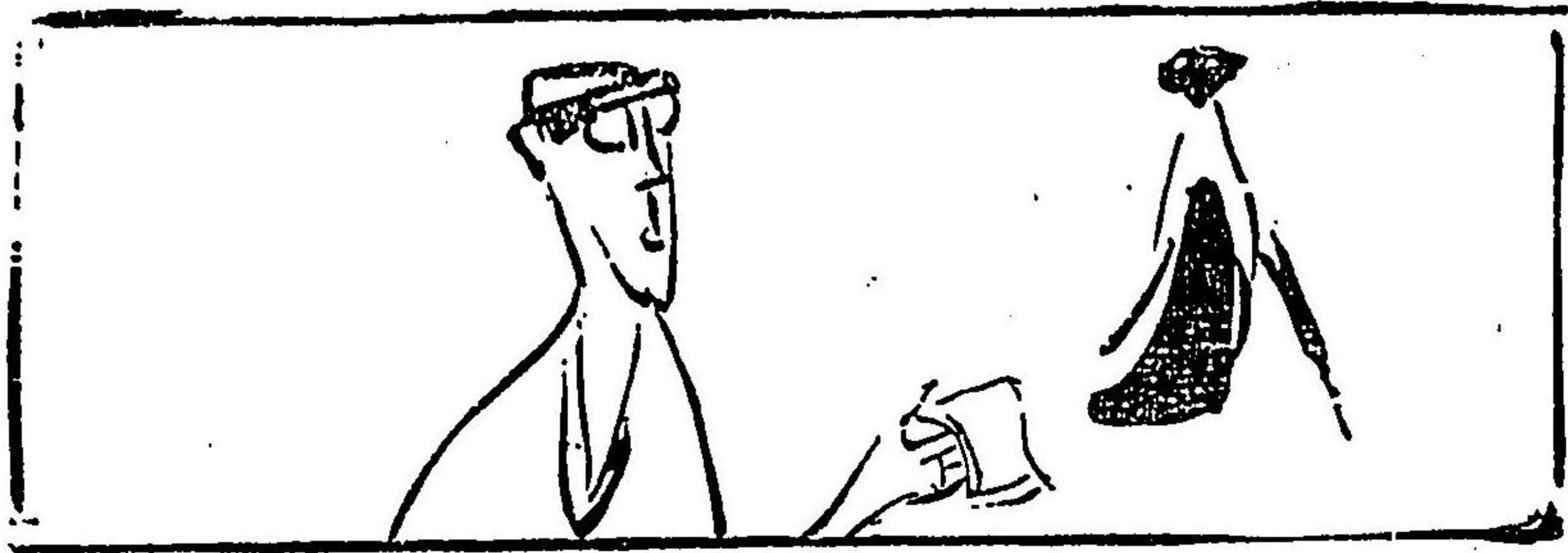
○増俸と聞いた時の喜び
待焦れて祈つて居た甲斐があつて、都合よく議會を通過して呉れたのは有難い、三割にならなかつたのは玉に瑕なれど、まづこれにて借金も少しく減るわい、恐ろしい家主と米屋への言ひ譯が立つは、洋服の新調も出来る、細君の衣服も出来る、あゝこんな嬉しい事はない。

○免職となつた時の泣面

多忙しい時にはかり無暗に使ひまくつて置ながら、勝手な時に首を切るとは餘まり情ない、兎の字は免の字とあまりよく似て居るから、兎の話も兎の肉を食ふのも嫌ふで居たのに、この間の晩に兎の夢を見たのがどうも縁起が悪かつたので、ビクビク心配して居るとこの始末、あゝ奈うしやう。

○待合へ行つた時の機嫌

ア、酔ふたく、ケエブ、これ花吉貴様は如何程柳に風と受け流しても、乃公が思ひは……、落花情あり、流水豈意無からんやである、ア、……、イヤ乃公は堅い木の枕は大嫌ひじや、兎角……、「酔ふては眠る窮乏たる美人の膝。



抱腹百話

醒めては握る堂々たる天下の権じや。

○妻君の嫉妬に逢た時の様子

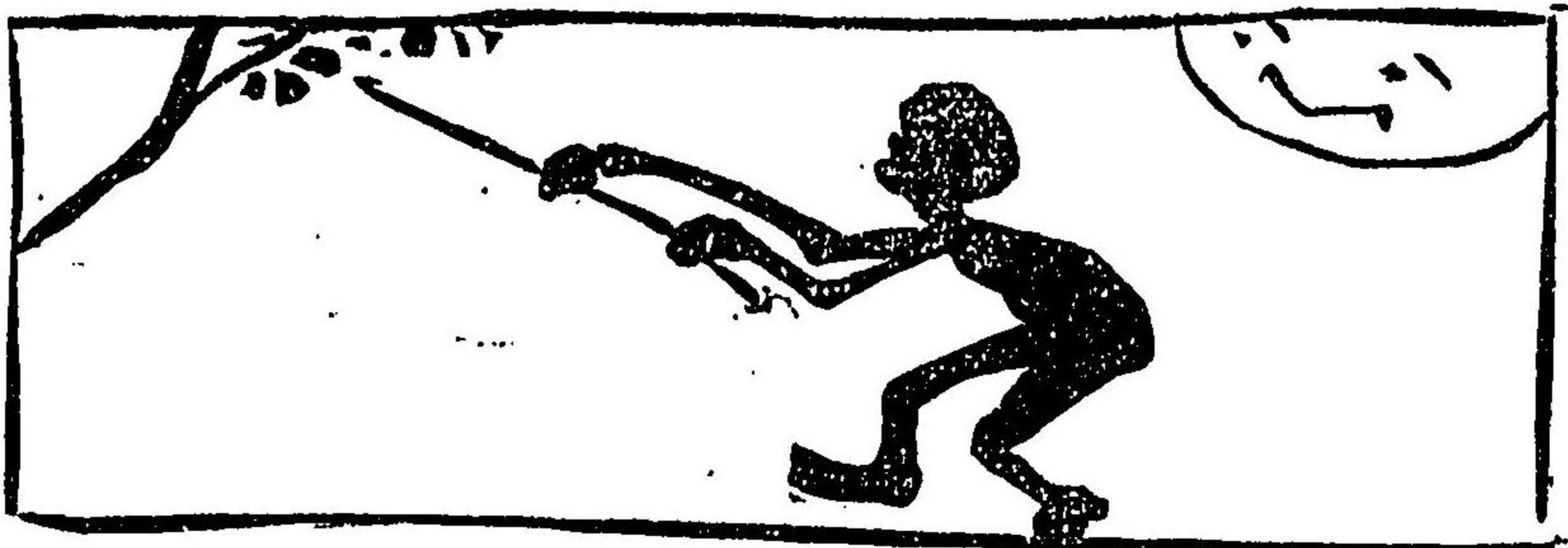
宴會へ行くのは官吏の交際上已むを得ざる處じや、宴會へ行けば藝妓に相手になるのもこれ又避くべからざる處である、その避くべからざる處を彼是と矢釜しく云はれると、宴會へ行くのを廢めねばならぬ、宴會へ行くのを廢めれば官吏も廢めねばならぬ、官吏を廢めてしまへば月給が取れなくなる、月給が取れなくなれば鼻の下が日干になつてしまふのをどうする。

○昇級になつた時の景氣

判任官になつて間もないに、又奏任官になつたとはこりや驚いた、早く髯を伸ばして置かねば大臣になつた時に困るぞ、エヘン、當今天下の政治家をして後世恐るべきものは、豈吾輩の右に出づるものあらんやである、後進の政治家宜しく吾輩の教へを受けて可なりである。

○借金取に逢た時の狼狽

へい、毎度申上兼ますが、何卒暫らく御待を願ひます、本月は病氣で缺勤勝て月



抱腹百話

給も取ませず、其上薬代や診察料で大分凹んで居ります、何卒御察しを願ひます、其代りに來月は精々と勤めまして、第一番に貴様の方へ御返濟致します、誠に氣の毒

一五六

○賄賂を貰ふた時の御世辭

コレハ〜毎度御氣の毒さま、そんな御心配に及ばぬものを、しかし抑角の事ですから頂戴を致します、ハアなる程、それならあゝして、こうして、あれは極々秘密じやがこれ〜じや、期日も表面は未定じやが實は何月何日に内定してあるのじや、ナニ御心配に及びません、都合のよいやうに計らひます。

女の狂句

白粉で年増も若う化する藝妓
女郎はしほしの針で客を釣り
蚤いらつお三の寝顔あもしろさ
洋妾は混血兒を多く製造し



抱腹百話

戀瘦か夏瘦かはた嫉妬なのか
流車に乗る刹那に見たる女哉
女郎は金の切目で縁を切り
花嫁の姿を何に喩ふべき
讀みかけた文止めて泣く女かな
六歌仙女房一人に婿五人
鶏に似たり蓄妾する紳士
丸鬘に結ふて耻かし新世帯
家倉も流す女郎の空涙
娘とはまだ苔の良き女なり
家に居る女を嫁と云ひにけり
二人して女一人を彌るなり

神佛讀込み狂句

一五七



抱腹百話

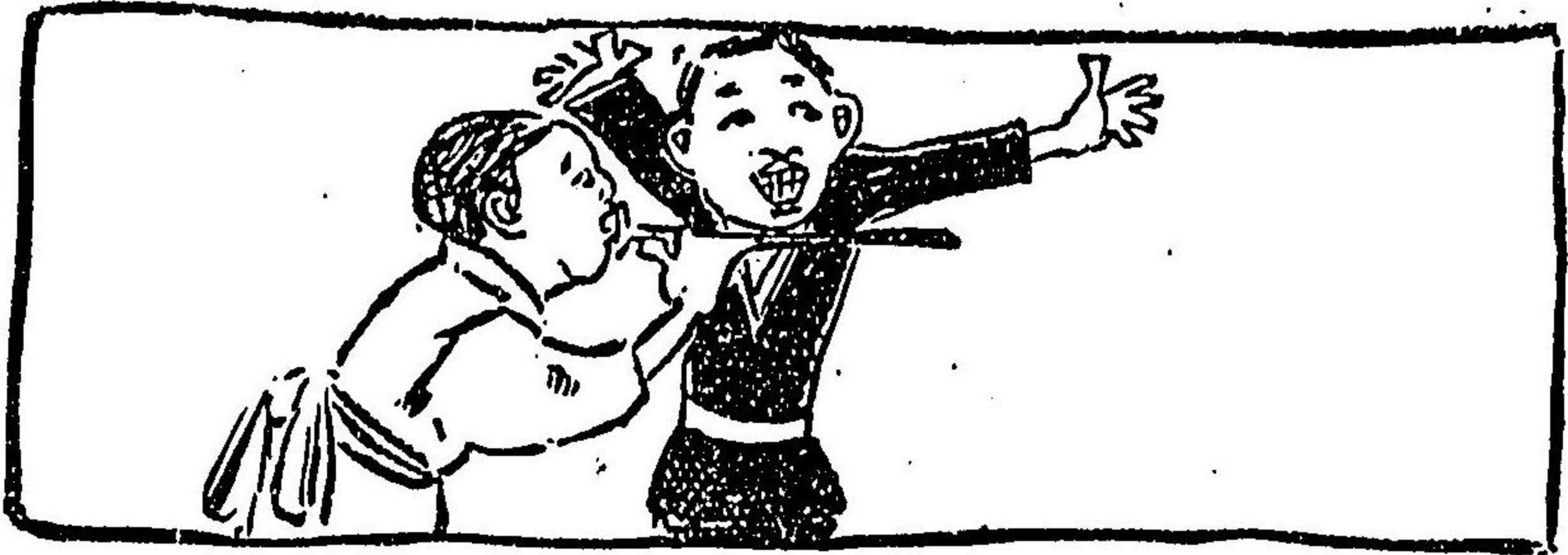
美形酌ぐエビスビールや櫻色
 大黒の腹を布袋にする和尚
 不忍の辨天堂や蓮見客
 大師堂緑日て婆々珠數つなぎ
 觀音の姿に似たる虱かな
 大佛に櫻の散るや春の風
 天神の垣根に清し梅の花
 整列の兵士不動の姿勢とり
 勸銀の一等籤で歎喜天
 免職で青面金剛のお役人
 福祿は望まぬ主や梅の花
 靡がへり活辨天と愛さ別れ
 氣が利いて辨當の中へ稻荷ずし
 女から釋迦も達磨も生れけり



抱腹百話

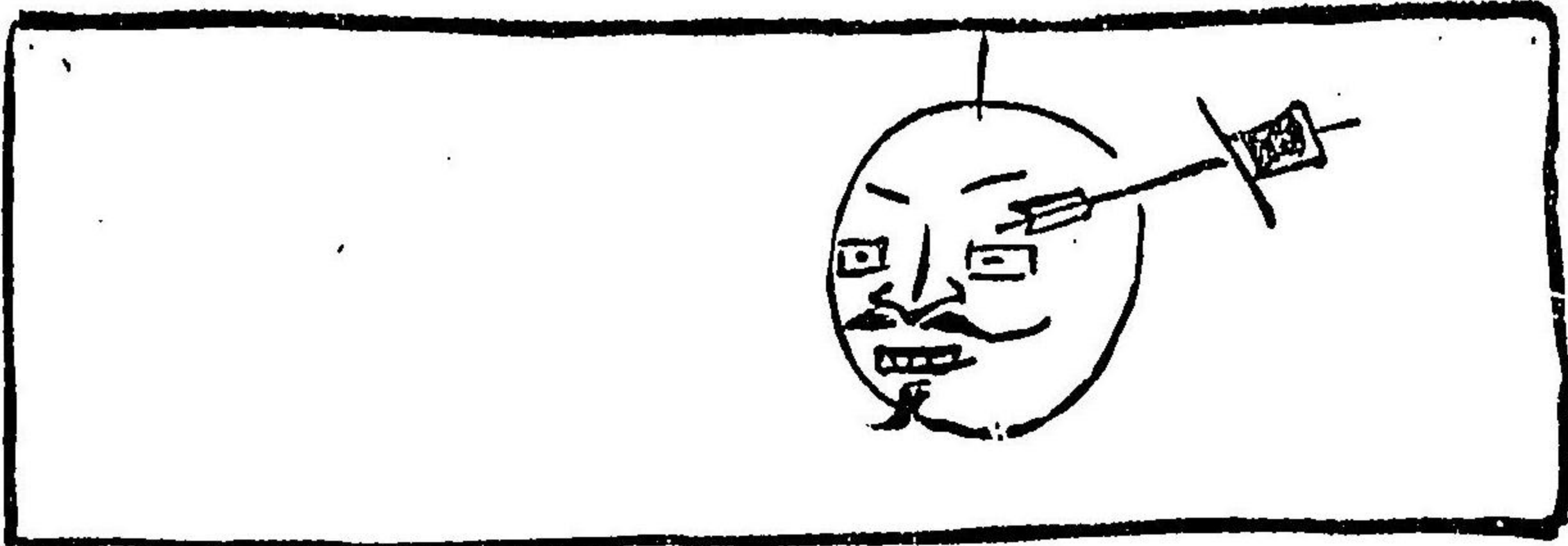
滑稽問答

正直の頭に神は宿るなり
 金出して遊ぶ時には地藏顔
 勘定の不足の時は閻魔面
 屁を發せざるに上野とは如何、
 臭くもなきに淺草と云ふが如し。
 噛まざるに神田區とは如何、
 舌を焼かざるに下谷區と云ふが如し。
 戀しくもなきに小石川とは如何、
 深くもなきに深川と云ふが如し。
 飽かざるに秋田縣とは如何、
 痛くもなきに大分縣と云ふが如し。
 山ありても山梨縣とは如何、



抱 腹 百 話

拭かざるに洋服とは如何、
 眞直に持つても盃と云ふが如し。
 下等の品でも上衣と云ふが如し。
 噴まざるに紙とは如何、
 眞中へ置ても墨と云ふが如し。
 焼かざるに薬師とは如何、
 移轉しても不動明王と云ふが如し。
 啞にあらざるに駕猪とは如何、
 釣らざるに鶴と云ふが如し。
 有つても梨とは如何、
 賣らざるに瓜と云ふが如し。
 細くても大根とは如何、
 小さくても大豆と云ふが如し。
 咲かざるに櫻とは如何、



抱 腹 百 話

吹かざるに福島縣と云ふが如し。
 摺らざるに駿河とは如何、
 負傷せざるに河内(皮血)と云ふが如し。
 阪もなきに大阪とは如何、
 打たざるに宇都宮と云ふが如し。
 痛まざるに伊丹とは如何、
 赤くもなきに明石と云ふが如し。
 茶を賣らざるに茶屋とは如何、
 箱を賣らざるに箱屋と云ふが如し。
 足を拭ふても手拭とは如何、
 引かざるに股引と云ふが如し。
 畑で作つても煙草とは如何、
 木で製ざるに煙管と云ふが如し。
 來るものを婚禮とは如何、



採まざるに紅葉と云ふが如し。
古くても寫眞とは如何、

大きくても肖像と云ふが如し。

新しくても飾とは如何、

古くても皿と云ふが如し。

蒸さるるに娘とは如何、

細くもなさに細君と云ふが如し。

吹くものを吹風琴とは如何、

織ざるものをオルガンと云ふが如し。

乗らざるものを海苔とは如何、

裂けざるものを酒と云ふが如し。

見ても水とは如何、

折らざるに氷と云ふが如し。

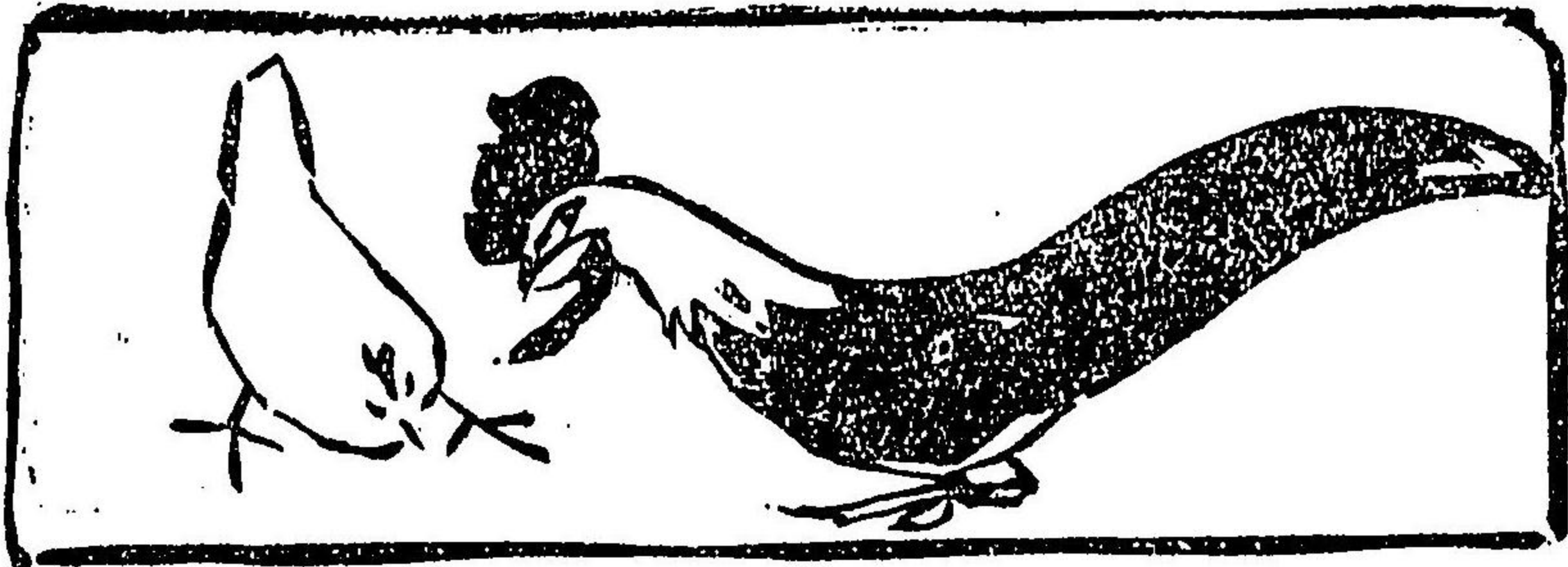
大きく爲ても商賣とは如何、



損をしても得意様と云ふが如し。

落藪醫者

大藪玄白様と云ふは日本一の馬鹿先生、その馬鹿先生がハヤラン縣へタ〜郡コトワ
ラン村大字ヨウミンと云ふ處に住居致して。崩れ玄關、破れ障子、破れ疊、破れ蒲團、
破れ机と云ふ構へ、先生は毎日々々欠伸と退屈ばかり、も一つおまけに貧乏カラケツ
と云ふ様な譯で、藥九層倍の商賣も十層倍の借金に七も首も廻らず、晝寐々々の閑暇
に鼻糞を捻つて丸薬となし、馬の小便を壘に詰めて水薬を造り。豚の糞丸とか蚤の足
とか、珍薬とか妙薬とか、イヤ利とか利かぬとか、性體の知れぬものを列べて御客
を待て居たが、トント病人らしい者は一人は恐か半人も來ぬので、先生大に落膽をし
て「ハテこの時候不順の折りから只の一人も病人が無いは不思議千萬、ヤン心配で溜
らん、今に借金取が來るわい、肝心の病人より此方が餘程苦しうてならん、南無肺病
神、南無疱疹神、南無ベスト神、南無コレラ神、南無風邪神、其外一切の疫病神様何
卒諸々の病を流行らせ病人を多くして、我等を助け給へ救ひ給へ」と一生懸命に祈つ



抱腹百話

て居ると漸うたつた一人「先生御免」と這入つて来たのが風尾引藏と云ふ男。先生好い御客到来と喜びながら態と迷惑そうな顔をして「イヤモウ近頃は忙がしくて實に困つて居るのだ」引藏「はい恐れ入りますが何卒御診察を…」先「断つても病人が大勢つかへて盡く診て居ると云ふ譯には行かぬのじや」引「御尤て御座います何卒」先「そんなら診てやるがなア、しかし他の醫者に診て貰へと云つても此の玄白でなければ不可ぬと云つて澤山押かけて来るのじや、急かぬ病なら明日にして貰ひたい」引「先生私の病は大變せきまますので」先「急くならば只今診てやるが一體何處が不快い」引「はい有難うドツもせきまますので」先「急くのは分つて居る、何處が如何云ふ具合は不快いのだ」引「はい矢張りせきまますので」先「イヤ分らん奴じや、乃公がこれ程忙がしくて氣を急いで居るのに、早く云はないと診てやる事が出来ないぞ」引「イヤ先生こそ分らん人でありませんか、風邪を引いたので大相咽喉が苦しくつて咳ますので、エヘンエヘン々々」と苦し相に咳込むので、先生もやつと氣がつき「この大藪玄白多年苦心研究の結果、病氣の源因は皆痰より起ると云ふ事を發見した。これは不肖の名譽のみならず日本醫術界の一大名譽、一大進歩である。又患者の幸福である、則ち其



抱腹百話

の病氣の源因たる痰を取れば如何なる病氣も忽ち癒るのである」と戸棚から小さい刷毛の様な物を取り出し、引藏の口を大きに開いてグツと押入ると溜らない引「あ痛たく先生如何して…」と云ふ内に物が云へなくなる。先生構はず療治をして、やがて咽喉の掃除が済んでスツカリ痰が取れました。其痰がおよそ一斗ばかりもあつたので、先生も引藏も「これはく痰斗(澤山)」と吃驚してしまふた。そこへ又「先生頼みます」と云つて来たのは歳まだ二十を超えぬ色白、身材は高からず低からず、艶ある毛髮に純金の根懸、帯は緞子に中綿の秩父を着て、派手で静かて海棠の雨を含んで水滴るやうな女。先生思はず目をトロリとさせて、タマにこんな美人も来るから貧乏醫者もなか／＼廣められん。こう云ふ別嬪の手を早く握つて見たいものだ、と待かねて「御脈を拜見」と云ふを女「あの先生、妾が不快いのは御座りません」と云はれて先生開いた口が閉がらず女「實は家のお父さんが近頃大變氣が短かくなりました困つて居ります、何卒先生の妙薬を以て癒して頂きたう御座ります」と聞いて先生又々失望しながら先「宜しいそれは餘まり痰が多く溜つたからであります。世間のヘボ醫者などは痲だとか癩だとか吐して居るが、私の考へは矢張り痰に違ひない。その證據に



抱腹百話

は氣の短かいのを痰氣(たんき)と云ひますから」とと藥の調合にかゝると又一人「先生診て戴きたう」と來たのは大兵肥満な病氣も何もなかり相な男「私は貧乏病にかゝつて實に難儀致して居ります、何卒先生の御力をもつて癒し下さい」先生一寸髭を捻つて「貧乏病の養生は甚だ六ヶ敷い、實はこの玄白も貧乏病で年中困つて居るのだ。しかし酒と賭博と女郎買を廢めて、節儉をして一生懸命に勉強すれば屹度癒る。それに蕩樂は毒だ」男「ヒエーそんな六ヶ敷い養生はトテモ出來ません、何卒藥を以て癒して下さい」先「困つた奴じやないか、勉強と辛棒が第一の妙藥だ」男「私にはその辛棒と云ふものが無い代りに、貧棒と云ふ大きな棒が腹の中へ出來て居るから、邪魔になつて働けません」先「それは矢張り痰が固つたのだ」と藥の調合にかゝる、それから後へ來る病人もく皆痰から起つたのだと云て藥をやる、先生今日は何時にない大繁昌で大喜び、この處へ門前俄かに騒しくなつて來て「馬鹿醫者奴、藪醫者奴、筒醫者奴」と罵りながら大勢飛込んで來て「伴の眼病を痰から起つたとは何たる噫言だ」と一人が怒鳴ると又一人が「己の親爺が腦病であつたのを痰だと吐して、間違つた療治をして居たからトゥ〜死んでしまふた、親爺の敵だ覺悟しろ」と大刀を振廻す、玄



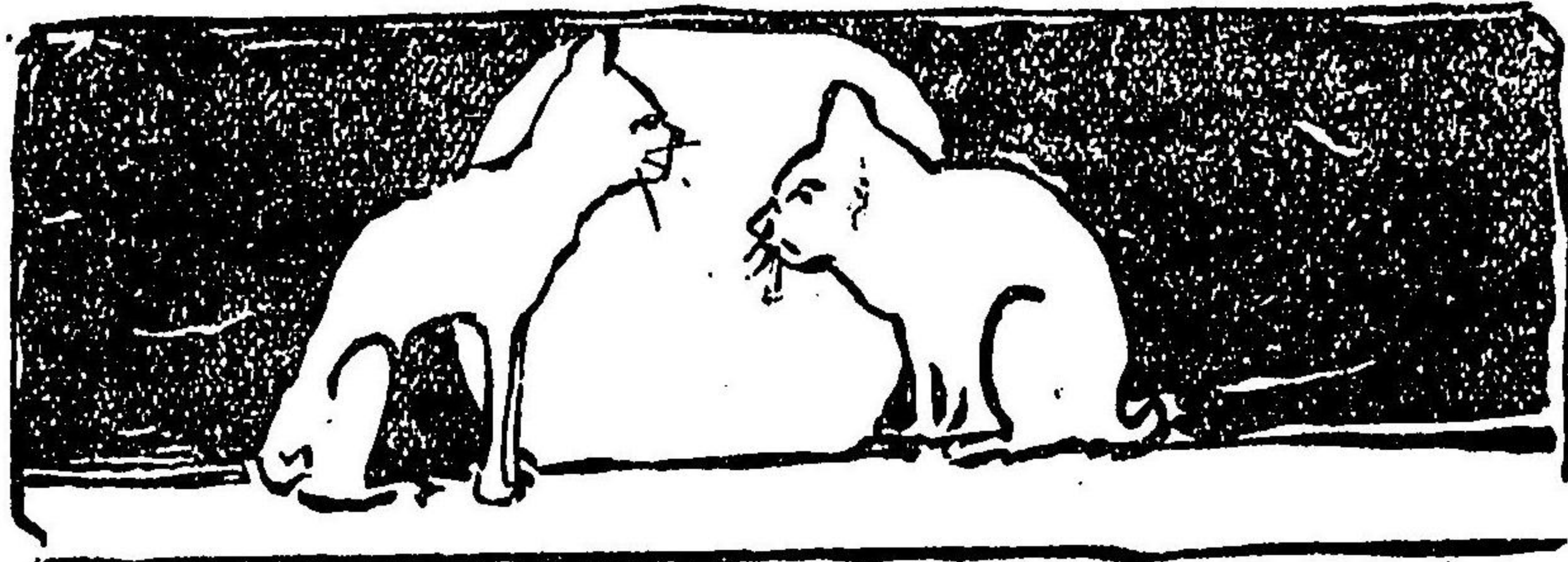
抱腹百話

白青くなつて顔へ上り「何卒生命だけは御助け下さい」と泣くと、四方より「そんなら今日限り廢業すればよし、さもなければ殺人犯で警察へ突き出すぞ」と取巻いての責込み、その處へ又一人が飛込んで來て「僕が負傷をしたのまで痰と云つて馬鹿にしやがる」と顔色かへて怒るのを玄白抜からぬ顔で「はい、それも矢張り油斷(痰)から起つたのであります」。

金の世の中

○小僧に

- 一 錢やれば、戴く。
- 二 錢やれば、あの人は好いお方と褒める。
- 三 錢やれば、焼芋買に走る。
- 四 錢やれば、菓子を買ふ。
- 五 錢やれば、雀躍して辻粉屋へ飛込まんとして、コレ〜貯金に入れて置かぬかと、旦那に叱られる。



抱腹百話

○下女に

六錢やると、難有うと云ふ。

七錢やると、毎座難有う御座いますと云ふ。

八錢やると、額を疊に摺付けて禮を云ふ。

九錢やると、三拜九拜する。

十錢やると、履物まで直して叮嚀に送り迎へまでする。

○お酌に

十錢やれば、難有うと戴く。

二十錢やれば、風呂の加減を問ひに来る。

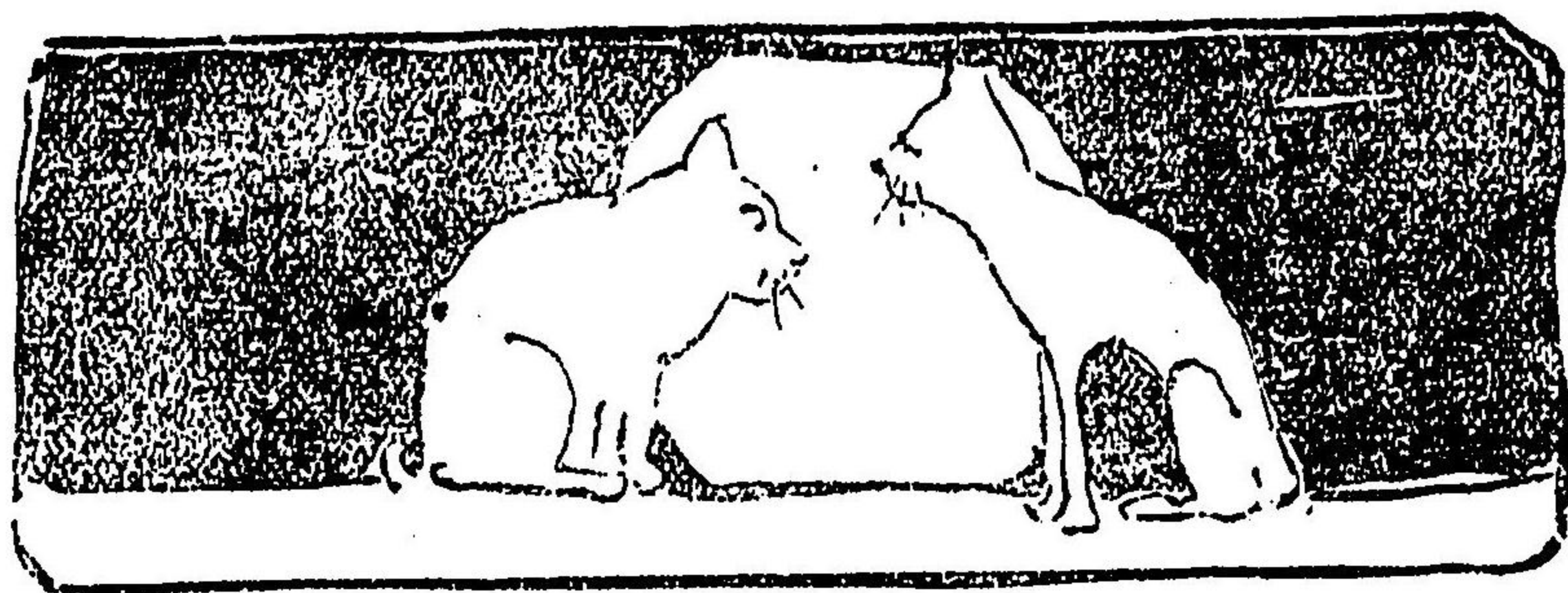
三十錢やれば、煙草まで吸ひ付て呉れる。

四十錢やれば、雪隠へ行つて洗つた手まで拭に来る。

五十錢やれば、氣を利かして枕元へ酔醒の水まで汲んで来て置く。

○娼妓に

六十錢やると、難有うと云ふ。



抱腹百話

七十錢やると、嘘にもせよ惚れたと云ふ。

八十錢やると、空涙にもせよ嬉しいと泣く。

九十錢やると、眞實でないにもせよ別れるのが悲しいと云ふ。

一回やると、夫婦約束する。

○藝妓に

一回やれば、たゞ難有うと云ふ。

二回やれば、少し叮嚀に難有うと云ふ。

三回やれば、誠に難有うと云ふ。

四回やれば、氣の利いた唄でも歌ふて見せる。

五回やれば、膝を枕に寝かす。

○妾に

六回やると、旦那は眞實に御慈悲深いと嬉しか。

七回やると、何時よりズーツと愛想が好くなる。

八回やると、最一ツ又愛想が好くなる。



抱腹百話

九圓やると、勿體ない涙をこぼして嬉ぶ。
十圓やると、一つ咳けば背を撫で、二つ咳けば灰吹を持つて来る。

○交際費を

六十圓使へば、紳士になれる。
七十圓使へば、名譽職になれる。
八十圓使へば、人望家になれる。
九十圓使へば、會社の重役になれる。
百圓使へば、社長になれる。

○お金が

百圓で、新婚旅行が出来る。
二百圓で、藝妓を請け出される。
三百圓で、妾宅が出来る。
四百圓で、噴水付の庭園が出来る。
五百圓で、別荘が出来る。



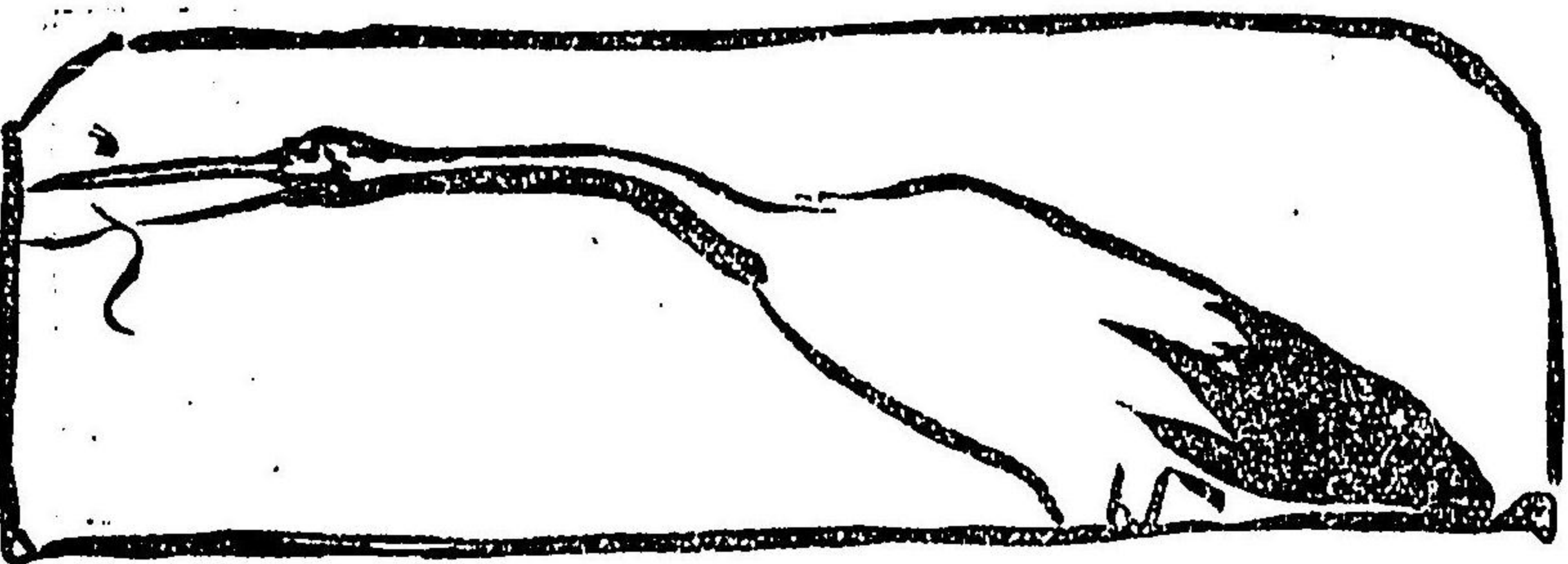
抱腹百話

○もしも僕に

六百圓あれば、代議士になれるであらう。
七百萬あれば、議長になれるであらう。
八百圓あれば、知事になれるであらう。
九百萬あれば、次官になれるであらう。
五千圓あれば、大臣になれるであらう。
一萬圓あれば、總理大臣になれるであらう。
百萬圓あれば、空前絶後の大學者大英雄兼大政治家大經濟家大美術家大發明家大文豪
になつてしまふ。

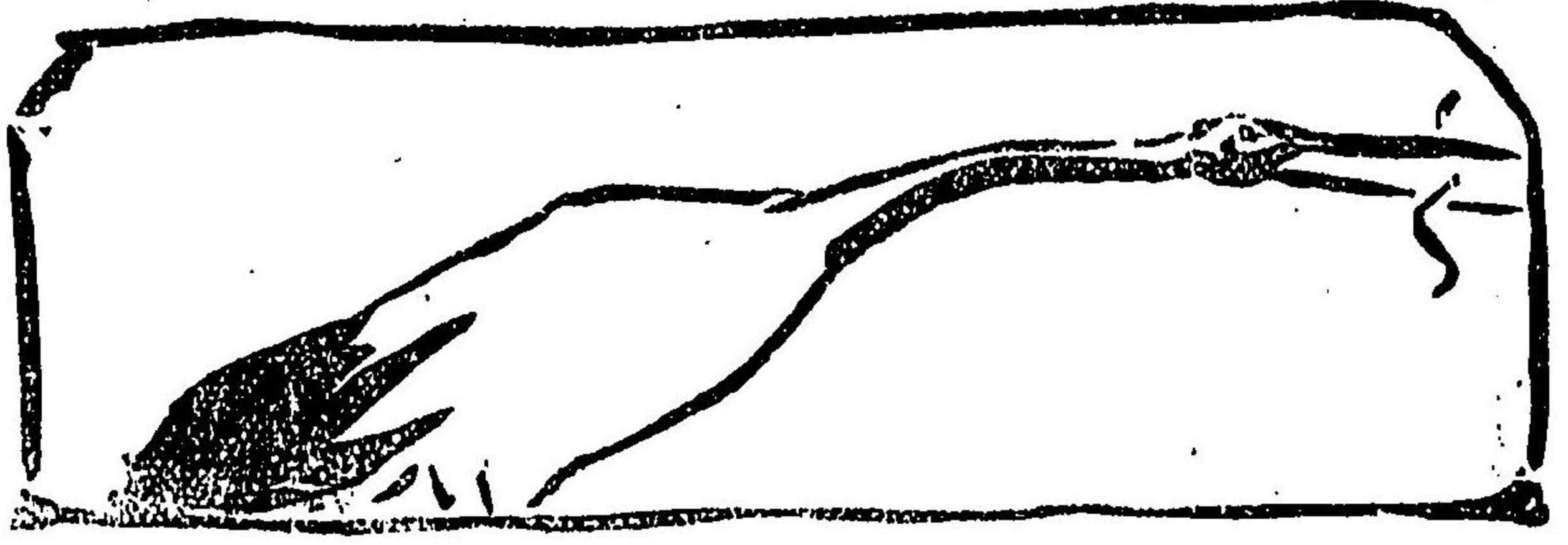
笑餅夫婦

エ、餅夫婦と云ふ仇名をもちました餅好き餅狂氣がありまして、亭主杵助に世話する者があつてお白と云ふ女房をもちました、その見合の時に牡丹餅を出したら、一人が百、一人が九十九食べまして、お前百まで私は九十九までと媒妁人を吃驚させ、



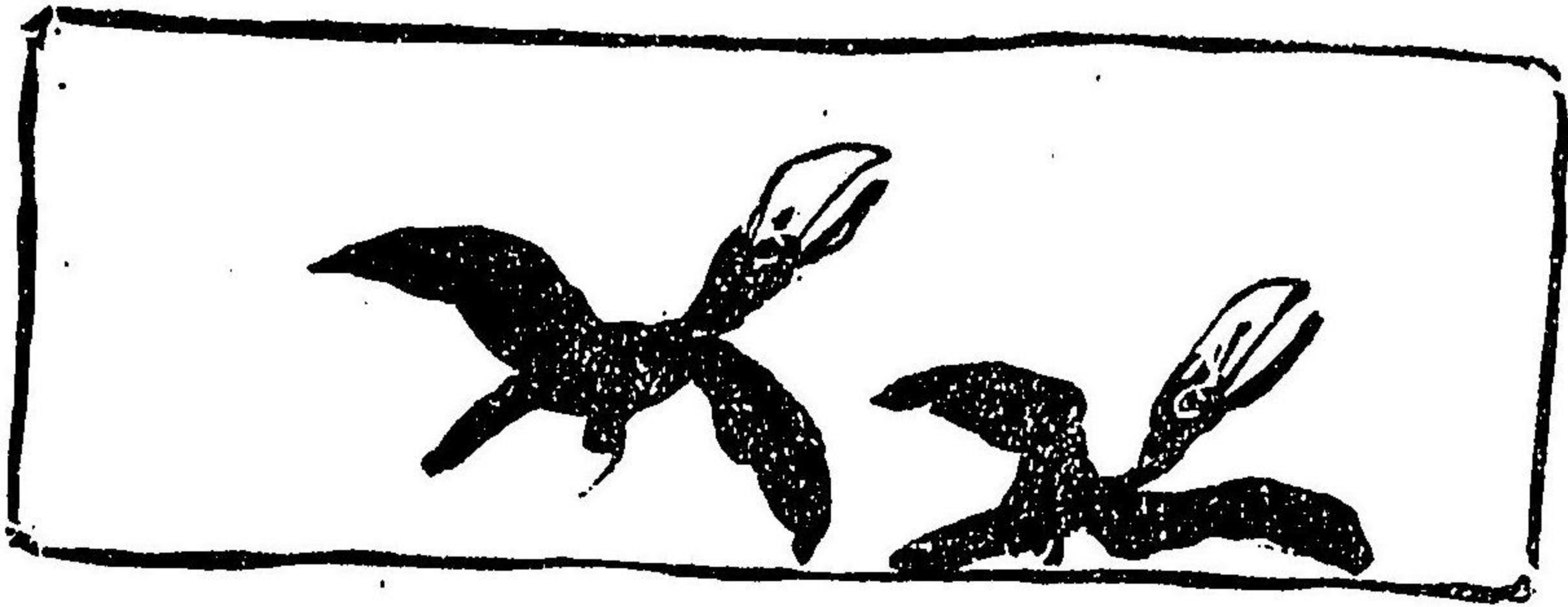
抱腹百話

祝言の配り物から御馳走から何から何まで餅盡し、それ故夫婦の中も至て善哉で御座ります、嫉妬のつけ焼のと云ふ様な事はありません、花婿の男前が錦餅なら花嫁の綴が羽二重餅のやうであります、今に鶴の子餅のやうな赤ン坊でも出来ましたら、千代八千代目出度大福餅であります。然るに二人とも打揃ての餅好、餅を食ねば病氣が出る餅の顔を見ねば堪らんと云ふので、とうとう餅屋を始めました甲斐、オイ／＼あゝんころ餅を呉れる夫、へい／＼只今拵へて居ります一寸お待下さい乙女、コリヤ／＼最前から待て居るのに早くおはぎを呉れないか夫、それも暫く御待を願ひますどうも濟みません丙女、エ、馬鹿に仕やがる團子が出来たのか出来ないのか、もう半日ばかりになるじまないか」と何時お客様が来ても餅一つもありません、餅が出来るともう呉りません、先づ亭主が加減見に一ツ摘んでやりつける、女房も一ツ、夫婦でモ一ツモ一ツと皆まで食てしまひ、出来ても／＼又食てしまひお客の口へ一ツも入らない、如何に辛抱強い客でも開いた口が塞らず皆呆れて歸つてしまひます、そこで商賣の資本まで忽ち食ひ込んでしまひ、サア雑煮も斯にもならぬと亭主は思案に首をひねり餅、女房は心配で質の無い汁粉のやうにあんじるてあります、それでもまだ餅の事は忘れ



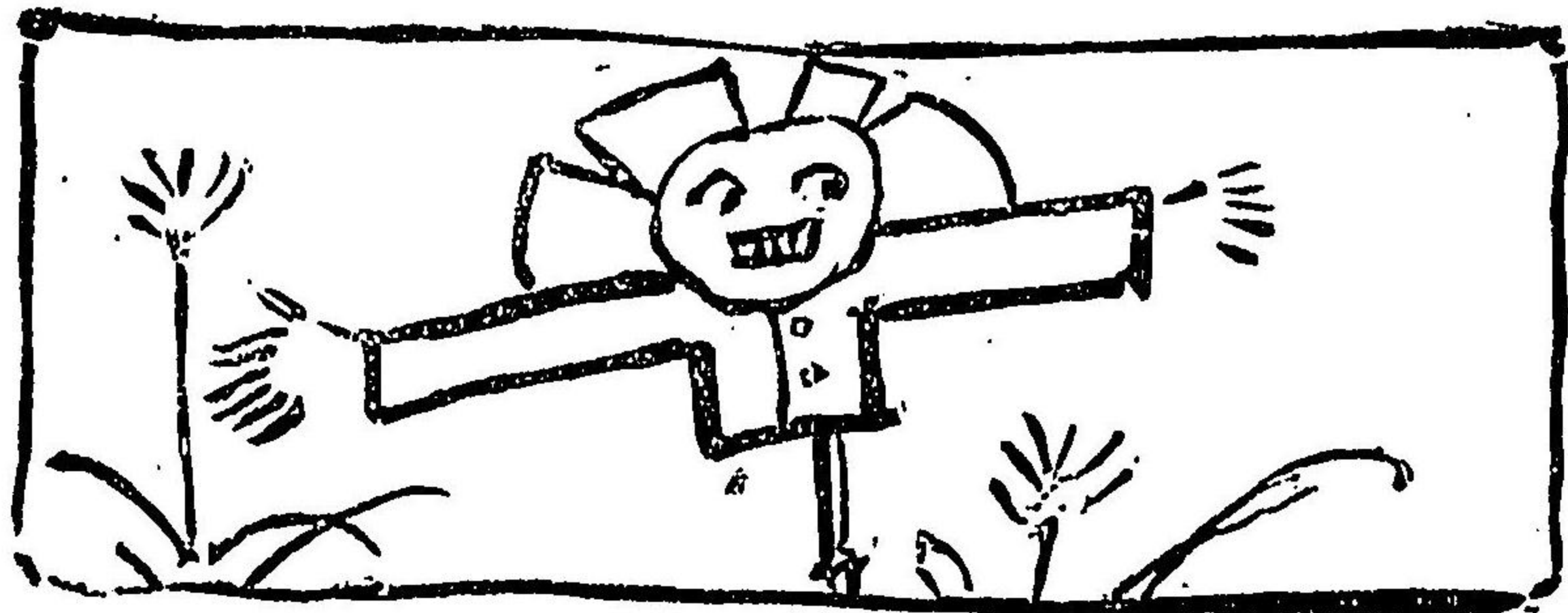
抱腹百話

られません亭主、あ、餅を食ひたい女房、妾も食ひたい亭主、食ひたい／＼もう堪らん女房、妾も堪らん、何か質に入れても早く食べたい亭主、お前が其氣なら一ツ乃公が一生の頼みがある、聞いて呉れるか女房、はい餅が食られるなら何んな事でも亭主、聞いて呉れるか難有い、屹度聞いて呉れるのだな女房、はい亭主、お前の帯を質に入れて餅を食べたいのじゃ女房、へエ……アノ妾の帯を質に入れて……亭主、サア聞いて呉れたのだから早く、女房、それより貴郎の羽織を質に入れて亭主、馬鹿吐すな、たつた一枚より外に無い羽織を質に入れて、人の中へ着て行くものがあるかい女房、妾もたつた一筋の帯でありませんか、人の中へ着て行くものが外にありますか亭主、イヤお前の亭主が羽織も無いと人に云はれたらお前が可愛相だから女房、イエ貴郎の女房が帯が無いと人に笑はれたら、第一貴郎の面目にかゝりますからお氣の毒ですから」と押問答の最中に丁度隣家から赤ん坊の生れた祝ひに大きな餠餅を配つて来ました、夫婦は夢かとはかり大嬉び大勇み、喧嘩は何處へやら押方付てしまひ、大急ぎで粗板へ餅を乗せ庖丁當てる間も遅しと待かねて一切頬張て亭主、あ、苦しい／＼除まり急いだものだから咽喉へ詰つて息が出来ぬ、あ、術ない背を撫て呉れ女房、妾も息が切れそうであ、苦しい」と二人が負



抱腹百話

けず劣らず食急いで居るとたつた一切が残りました、そこで亭主「お前が何時も夫を大切にする」と云て居るが眞實であらうな女房「はい眞實ですとも、嘘と坊主の天窓を結ぶた事はありませぬ亭主」ヨシヨシ「それ程夫を大切に思つて居るお前なら、定めてこの残つた餅も乃公に食べさすつもりであらう女房」イエイエ貴郎が何時も女房を可愛がつてやると被仰るがそりや眞實ですか亭主「何てお前に嘘を云ふものか女房」はい、それ程まで妾を可愛がつて下さるのが眞實なら、其餅を妾に……亭主「馬鹿な、お前の方から先に乃公を大切にするのじゃ、そうすると又乃公がお前を可愛がつてやるのじゃ女房」イエ、貴郎から先づ妾を可愛がつて下さらねば、貴郎を大切にすることは出来ません」と一切の餅を兩方が引張つて居ります、其内に亭主の杵助女房のお饒舌で半分間も黙つて居られぬのを幸ひに考へ付いて亭主「いつそ二人で無言の競べ事をして勝つた方が餅を食う事にして、一寸でも先に一聲でも出した方を負にしやう」と云ひ出すと又女房も亭主の始終キヨロキとして一分間も静かに落付いて居られぬのを知て居るから女房「貴郎、じつと動かぬ競べ事をして少處でも動いた方を負に致しませう亭主」イヤ無言の競べ事をしやう女房「イエ動かぬ競べ事を爲しやう」とトウ／＼無言でそして身



抱腹百話

體を少しも動かさぬ競べ事の勝負にかかりました、真中へ一切の餅を置いて二人向ひ合ふたまま一生懸命に白眼合ふて居た、互に負けてはならん動いてはならん喋舌てはならんと、二分過ても五分過ても十分二十分一時間二時間過つても、グツとも云はずキユツとも動かぬ、とうとう日が暮れて夜が更けてまだ勝負が付ません、其處へ又盜賊が床の下へ忍んで夫婦の寝入るのを今か／＼と待て居ります、夫婦の者は盜賊の這入つた事も氣付かず夢中になつて居る、盜賊の方でも根負をして怖わ／＼ながら首を出して見ると、人形を祭つた様に一寸も動かない、ハテ不思議人形にしては餘まり好く出来過ぎて居る……しかし人形でなければ……と何う考へても分らぬ、これは一つ試しに見やうかと恐る／＼座敷へ上り込み、一足近寄つては見直し二足寄つては又見直しました、何も好く出来て居りまりかドウヤラ人形らしいのでやつと案心を致して、ソロソロと箆筒を打明け亭主の羽織と女房の帯を脊負ひ込み、また外に何か持て行く物はないかと彼方此方と見廻したがもう何一つ無いので大に失望しながら「この盗人形奴に欺されて長い間待つて居たのが馬鹿々々しい、こんな物で何も取らずに歸る盗賊様じゃないわい」と亭主の頭をボンと打く、打かれて亭主腹は立てども動いては負



抱腹百話

とジツと怵へて居る、此度は女房の顔へツツと痰を吐きかける、女房口惜しくてならんが聲を出しては負と此も又辛抱をして居る、盗賊がフト見れば真中に一切の餅が置である「ア、腹が減法減つて来たヲツト此處に餅がある」と二人が一生懸命になつて勝負をして居る餅を取て食べる、それ食はれてはと流石の夫婦も仰天し、盗賊々々と金切聲で騒ぎ出しましたので、盗賊も吃驚敗亡倒れて腰を打つた處へ隣近所の若者四人飛込んで来ましたので、難なく取押へられ警察へ引渡されやうと爲ましたので盗賊も一生懸命に萬願御情をもつて御許し下さい、その代り御望み次第如何なる事でも致して謝りますから」と平伏低頭しましたので、夫婦勘辨はならぬが望み次第とあれば餅を一口搗いて呉れれば承知をするが、それが出来ねば警察へ突出すのじや盗賊へいゝ御許し下さるなら早速、しかし餅と名が付けば何んな餅でも宜しう御座りますか夫婦何んな餅でもない、早く食ひたいのじや盗賊へい難有う只今夫婦何を爲て居るのじや、早く盗賊モシモシそう殿しく御催促なくとも、もう最前に搗てある筈です夫婦「オヤ何處に」とウロウロと捜して居る間に盗賊は「最前人形かと思つて居つたのに人間であつたから吃驚仰天した時に尻餅を搗て置きました」と云捨て、羽織帯

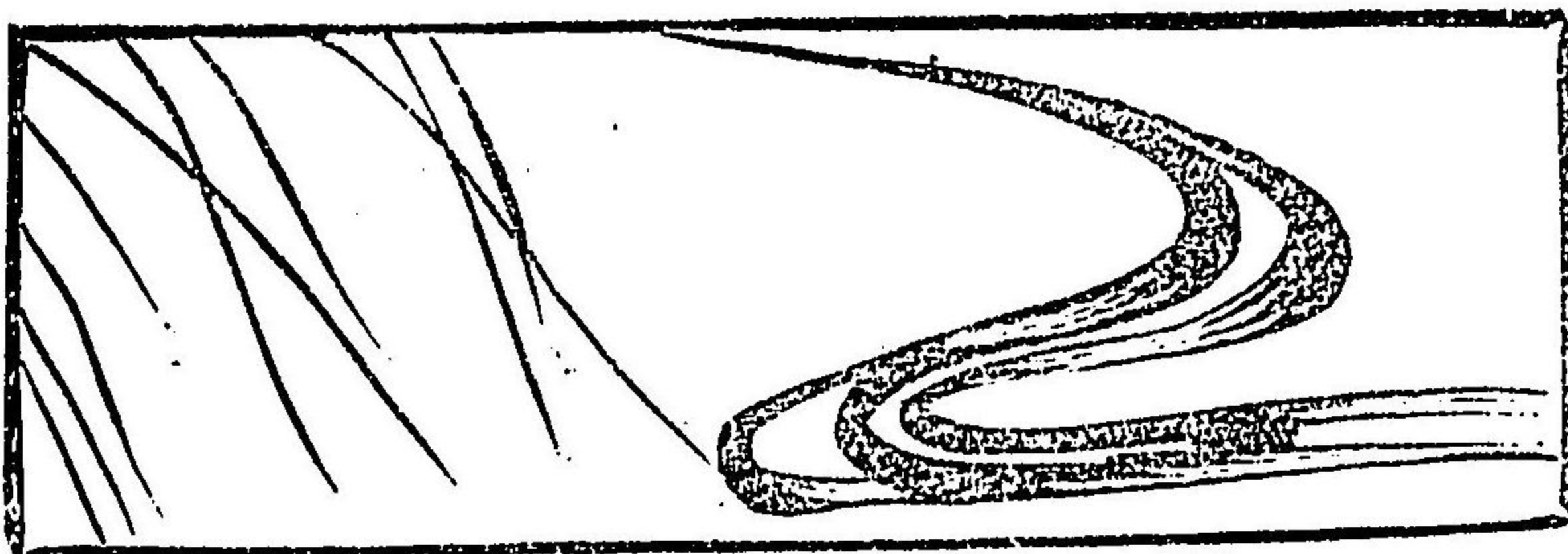


抱腹百話

を脊負つたまゝ、一目散に逃げてしまひました。

當世藝妓内幕數へ歌

- 一ツトセ 一人二人を當にせず、金のあるのを欺し込み、金のないのは糟の客。
- 二ツトセ 二人世帯を持ちましょと、世辭で丸めて嘘ついて。うまく轉ばす口車。
- 三ツトセ 見るも嫌なる客の顔、お金の義理で三味弾いて、氣嫌取るのが辛いこと。
- 四ツトセ 他に好たる人あれど、泣て見せれば眞實にし、一人嬉ぶ馬鹿野郎。
- 五ツトセ いつも身請の話すりや、あげたりさげたり焦したり、主は妾を釣瓶繩。
- 六ツトセ 無理なお客の註文に、妾やほの字とれの字なり、あとの一字は金次第。
- 七ツトセ 長し短かしの客を、亭主にしよと思案すりや、惚れた男に金がない。
- 八ツトセ やがて身財もしまひ頃、こゝらあたりが見切時、お金が出来たらまたお出で。
- 九ツトセ こゝが手管のかけ處、腕によりかけ絞りと、後に用ない野暮な客。
- 十ツトセ とをと茲處まで欺したが、これから先は家藏も、客の身財は妾がもの。



抱 腹 百 話

地獄八景歌

死出山火車

昔より作りし大工なけれども

自づと作り自づと乗り行く

閻魔廳多忙

作り來た亡者の罪の多ければ

閻魔の帳に付處なし

賽河原夜雨

父母が賽の河原に子を思ふ

夜毎涙の雨をふりける

鏡前照惡

閻王がクワツと睨みし淨玻璃の

鏡にうつる罪恐ろしき



抱 腹 百 話

青鬼舌抜

嘘吐いた亡者の舌を引抜けど

嘘の根盡さぬこそうたてけれ

血池苦患

大惡の苦患も深き血の池に

浮ぶ瀬もなき罪の報ひ哉

針山重刑

重惡のものづとなせる針の山

針より多き罪の數かつ

無間地獄釜責

極惡の煮ても焼ても食へぬ奴は

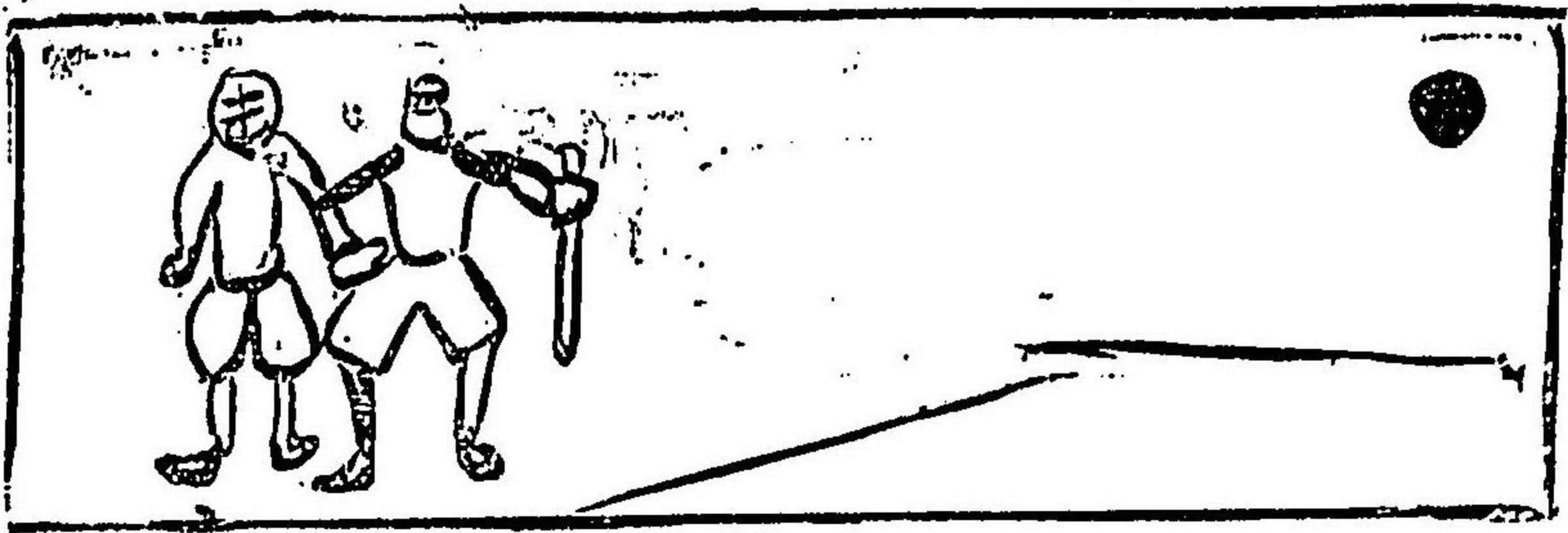
無間地獄の釜に落けり

貧乏人の一晝夜



抱腹百話

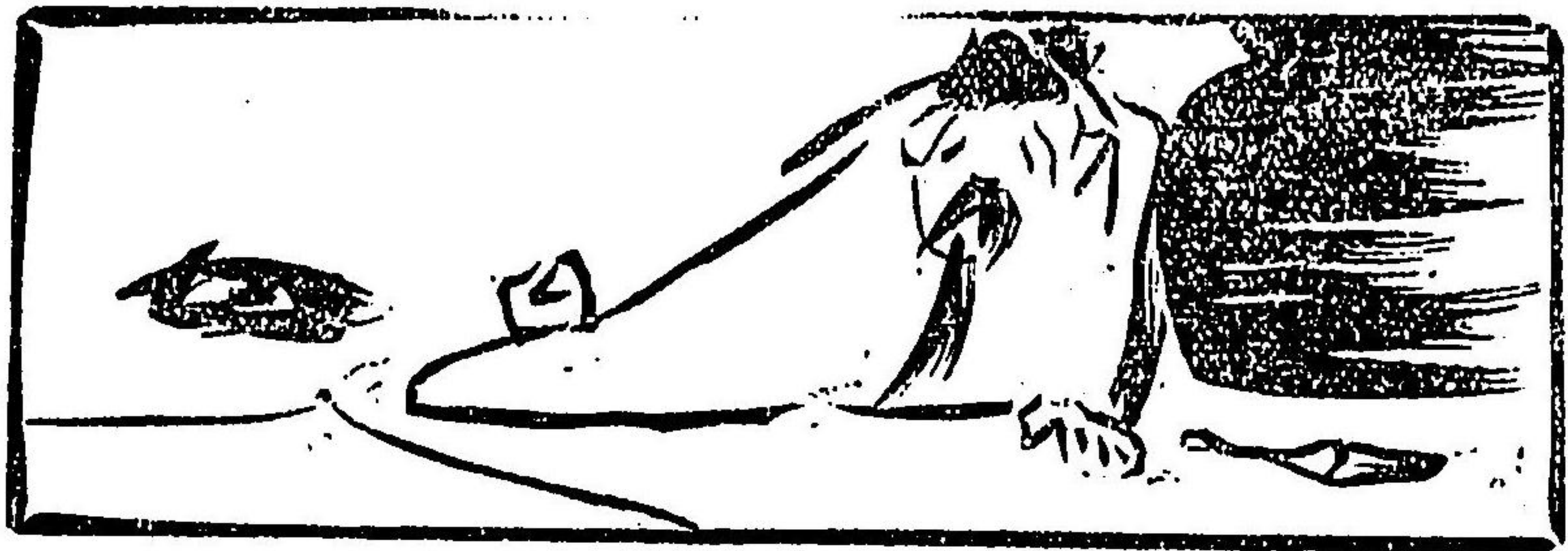
- 午前一時 草臥て前後も知らずに寝て居る。
- 同 二時 夢さめて不幸福を歎く。
- 同 三時 仕方が無いから又寝る。
- 同 四時 ギャア〜と子供の泣聲に眼が覚める。
- 同 五時 煎餅蒲團を引張り合ふて寒さに顔ひ上る。
(但し夏ならば蚊張なして其上に蚤に責られる)
- 同 六時 粥をす〜つて飢を凌ぐ。
- 同 七時 一服を爲やうにも煙草が無い。
- 同 八時 借金取が来る。
- 同 九時 家主から立退を迫られる。
- 同 十時 米屋から催促が来る。
- 同 十一時 薪屋へ走れば以後は現金でなければ買らぬと云ふ。
- 同 十二時 漸く麥飯に目差の御馳走を食ふ。
- 午後一時 槌を持つて仕事にかゝればトツタモタラントツタモタランと云ふ音がする。



抱腹百話

- 同 二時 税金を納めぬので役人が處分しに来た。
- 同 三時 高利貸が恐ろしい顔をして這入つて来たので狼狽へる。
- 同 四時 飲みたい酒一滴も飲まれぬのは何の因果と思はず涙をこぼす。
- 同 五時 又思ひ直して働いて見たが矢張り思ふ事が皆外れる。
- 同 六時 脊中に負ふた子が飢じそうに泣く。
- 同 七時 芋を買ふて来て夕飯の代りにする。
- 同 八時 ランプを點さうとすれば油が無い。
- 同 九時 女房は内て細い針仕事を爲る。
- 同 十時 亭主は大道に露店を出して一生懸命に客を引く。
- 同 十一時 待つても〜何一ツ買れぬので泣く〜歸る。
- 同 十二時 ア〜〜と云ながら寝る。

思惑調へ



抱腹百話

○亭主の思惑

あゝ家の女房は氣が利かんで困る。己がこれ程精出して働いて居るのに何んとも思はぬ。折々はテト酒でも飲み、吉原へも行つて遊んでこいと云つて呉れても好さうなもの。

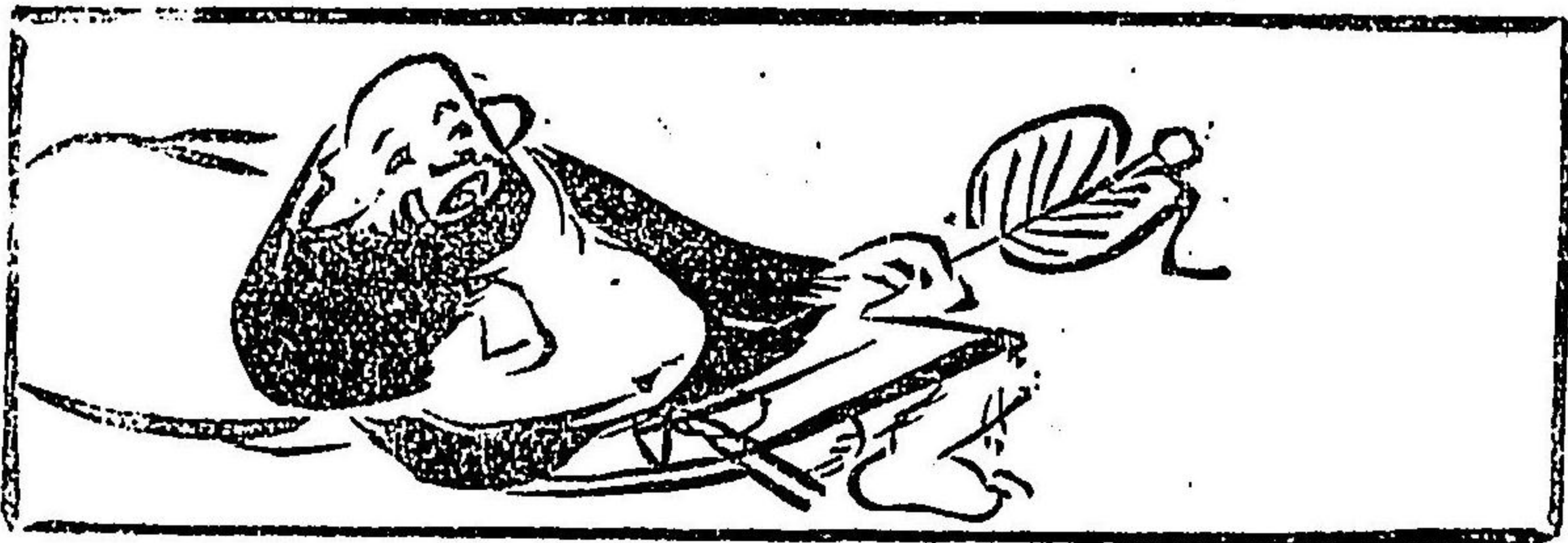
○女房の思惑

あゝ家の亭主にも眞實に困つたもの、も少し家業に精出して、酒も止めて、賭博も止めて、女郎買も止めて、折々は妾に美味いものを食はせて、芝居へてもやつて呉れても好さうなもの。

○役人の思惑

あゝ氣の利かん奴じやないか、其方に魚心あれば此方に水心あり、兎角規則と云ふものは表面はなか／＼六ヶ敷いもの、それを裏へ廻つて出すものを出すと……エ、まだ分らぬか届け物じや……また分らぬか袖の下の事じや……これでも分らぬかエ、畜生奴。

○出願人の思惑



抱腹百話

あゝ養馬鹿役人の杓子規矩にも困つたもの、分り切つた事を何の彼のと六ヶ敷い事吐して七面倒臭い事を繰返し、知れ切つた事をして月給を貰ふて居る、月給盗賊と上長官に云つてやるぞ。

○病人の思惑

急病ですから早く来いと云つてやつたのに牛の糞へ火を付けたやうに愚圖々々して居やがる、大方又下手碁に凝り過ぎて肝心の商賣を忘れて居るのであらう、救濟者め符醫者奴、誰か行つて早く引摺つて来い。

○醫者の思惑

エッヘン何時も診察料も拂はず薬代も拂はず、捨て、置いて又かなぬ時の神頼みか、馬鹿々々しいからもう御免を蒙るとしやう、以後は現金ではなければ脈を診ることも御断りだ。

○婆さんの思惑

南無阿彌陀佛々々々々々、妾のやうな大善人が死んだら必ず極樂へ往生が出来る、和尚さんお前さんのやうな生臭坊主に拜まれたらそれこそ大變……反つて地獄に落